

トカラ語 B の『Avadāna 写本』断片について

荻原 裕敏

キーワード: トカラ語 B 『Avadāna 写本』 *«Jyotiṣka-avadāna»* *«Sāraṇa»*

要旨

本稿では文字やサイズなどといった断片の外形的特徴や言語特徴から同一の写本に属していたと推定されるドイツ所蔵の一群のトカラ語 B 断片を扱う。この写本のタイトルは現存していないが、筆者の研究によれば、これらの断片は本縁部に属する物語を伝えているため、本稿ではこの写本を『Avadāna 写本』と称する。ここでは特にこれまで未公表であった THT1165・THT1166・THT1249・THT1285・THT1507・THT1548・THT1680・THT1681・THT2976・THT2981・THT3054を中心に、これらの断片の転写と和訳を提示すると同時に、梵文並びに漢訳仏典を利用して断片の比定を行う。これらは[a] THT1165 + THT1548 及び THT1166 + THT2976、[b] THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 及び THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 という四葉の folio に還元でき、[a]の物語は*«Jyotiṣka-avadāna»*に、[b]の物語は漢訳『大莊嚴論經』第 65 章・『雜寶藏經』第 24 章「娑羅那比丘為惡生王所苦惱緣」及び藏文*«Karmaśataka»*第 89 話*«Saraṇa»*に比定されるが、文体から見てこれらの物語に基づいたトカラ仏教の側の adaptation であると判断される。また、現在までのところ、筆者によって再構された『Avadāna 写本』は他言語中に一致する文献が確認されないため、トカラ仏教の側で独自に編纂されたか、或いは現在は失われた Avadāna 集成に基づいたものと考えられる。

目次

1. THT1165 + THT1548 及び THT1166 + THT2976 recto について
 2. THT1166 + THT2976 verso 及び THT1556 について
 3. THT1253 + THT3056, THT1551, THT1683, THT3124 について
 4. THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 及び THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 について
 5. THT1168 + THT3034 について
 6. 『Avadāna 写本』に属すると見られるその他の断片について
 7. 『Avadāna 写本』に反映される言語について
 8. 『Avadāna 写本』の部派帰属について
 9. 『Avadāna 写本』より窺えるトカラ仏教における仏典受容について
 10. 結論
- 参考文献
- Tocharian B index

動詞表

Plates

0. 導入-トカラ語 B の『Avadāna 写本』について

現在筆者は、所謂トカラ仏教がどのようにインドに由来する仏教を受容したか、またどのような仏典が彼らに知られていたか、そしてその部派帰属は何であったかと言った仏教史的な問題に主な関心があり、このような観点からトカラ語仏典の体系的研究を行っているが、本稿ではその成果の一部について報告する。

筆者は、ドイツ所蔵トカラ語 B 断片中に筆跡やサイズと言った外形的特徴だけでなく言語特徴にも共通点が確認される一群の断片が存在している事に気付き調査を行ってきた。その結果、内容が確認できるものについて見れば、これらの断片は比喻譚や本生譚といった本縁部の物語を伝えており、本来これらは同一の写本に属していたと推定されるべきであるという結論に至った。ただ残念ながら、この写本の題名は現存していないため、本稿ではこの写本を『Avadāna 写本』と称する事とする。

最初に、これらの断片が同一の写本、即ち筆者が『Avadāna 写本』と称する写本に属すると判断した根拠を示したい。比較的大きな断片の場合は断片そのものの外形的特徴を利用する事ができるだけでなく、内容もある程度参考にする事ができるが、全ての断片についてこの二点を利用できるとは限らない。特にトカラ語文献の場合、その大部分は非常に小さい断片であるため、『Avadāna 写本』への帰属を確定する事が困難である。これらの状況に鑑みて、筆者は断片の外形的特徴の内、以下の点に注目して判断した。

[A]: 使用されている *Brāhmī* 文字

[B]: 断片に見られる罫線と行間

前者の *Brāhmī* 文字とは書写に使用されている文字の類似を意味しているが、後者の断片に見られる罫線と行間については若干の説明を必要とする。筆者が確認した範囲内では、トカラ語断片で使用される罫線は、そこに書写されるべき *Brāhmī* 文字の母音記号を除いた基字の書き出しを一定にするために書かれている事が多い。しかしながら、本稿で扱っている断片については、罫線と *Brāhmī* 文字の基字の書き出しの間にある程度の余白があり、罫線は基字の上部に付される<>や母音記号または *Anusvāra* の位置を一定にするために利用されている。ただし、このような罫線の利用は他の断片でも確認されるため、ここでは同時に行間の幅として罫線と罫線の間が約 1.5cm である点も利用した¹。

¹ ドイツ所蔵断片 THT184 (= B184) は、ここで指摘した罫線の使用法や行間だけでなく、書写に使用されている *Brāhmī* 文字もほぼ同一のタイプに属しているが、内容から見て別の写本に属する可能性が高い。このような断片が存在している以上、筆者がここで採用した方法は確実な判断を下す基準とは言えないが、一定程度の判断材料としては利用可能であると考えられる。そのため、以下に紹介する全ての断片が『Avadāna 写本』に帰属していると確定できるわけではない点に注意されたい。ただ、このような断片の数は非常に少ないため、ここで示した特徴を持つ断片は基本的に『Avadāna 写本』に帰属すると推定されそうである。

以下には、このような基準に基づいてドイツ所蔵トカラ語断片から筆者が『Avadāna 写本』に属すると判断した断片のリストを紹介する。なお、以下のリストでは現在の所蔵番号である THT の番号に従って配列している。また、発見場所に関する記載が見られる断片については、その記載についても注記しておく。

『Avadāna 写本』断片リスト²

THT409 (MQ284)³
 THT1126, THT1165 (MQ138), THT1166, THT1167, THT1168⁴
 THT1245, THT1249, THT1250, THT1253, THT1285
 THT1507, THT1513, THT1548 (MQ138), THT1551, THT1554, THT1556
 THT1611 (MQ23), THT1652.frg.2, THT1680, THT1681, THT1683
 THT2976, THT2981.frg.1, frg.6, frg.7, THT2995, THT2996, THT2998, THT2999
 THT3034, THT3035, THT3052, THT3053, THT3054, THT3056, THT3083, THT3091
 THT3110, THT3112, THT3124, THT3128
 THT3208, THT3237

このリストから窺えるように、『Avadāna 写本』に属すると推定される断片は、ドイツ所蔵トカラ語断片中に 44 点確認される⁵。また、その内の四断片には発見場所として MQ の記載があり、この記載に従えば、これらの断片は *Kizil* で入手された事になる。これらの断片が *Kizil* で発見された事は、この写本で使用されているトカラ語 B の言語特徴を位置づける上で非常に重要な点である⁶。

上に述べた断片の帰属を判断する際に利用した基準として、筆者は使用されている *Brāhmī* 文字の類型を挙げておいた。現在までのところ、トカラ語文献の書写に使用される *Brāhmī* 文字に関する体系的な研究は Tamai (2011) のみであるため、本稿では玉井氏によって設定された枠組みを利用する。『Avadāna 写本』に属すると判断される断片の殆どはこれまで未公表であるが、先に触れたように THT409 は既に *TochSprR(B) II* で Nr. 409 として転写が公表されているだけでなく、先に挙げた Tamai (op.cit.) でも研究対象となっている。玉井氏の枠組みに拠れば、この THT409 は II-1 即ち標準的なトカラ語 B の *Brāhmī* 文字で書写されているという。筆者はトカラ語文献の *Brāhmī* 文字について体系的に研究した事がないため、ここではこの結論を紹介するに留める。

² 本稿で扱うこれらの断片は、現在ベルリン国立図書館に所蔵されている (Depositem der BERLIN-BRANDENBURGISCHE AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN in der STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN - Preussischer Kulturbesitz Orientabteilung)。

³ *TochSprR(B) II*: 274 で Nr. 409 として出版されている。

⁴ この断片は Malzahn (2007c: 242) で転写と英訳が出版されている。

⁵ 『Avadāna 写本』に属すると見られる断片は、THT409 を除いて特定の番号に集中している事がリストから窺える。筆者は *TochSprR(B)* で出版された断片と残りの断片の分類の基準についての知識がないため確実な事は言えないが、単なる偶然とは思われない。

⁶ 『Avadāna 写本』に反映されるトカラ語 B の言語特徴については、以下の各断片についての紹介及び本稿第七節を参照されたい。

本稿では以上のような特徴を示す『Avadāna 写本』の全断片を研究対象とするが、特に中心となるものは、これまで個別の語形の引用に留まっていた THT1165・THT1166・THT1249・THT1285・THT1507・THT1548・THT1680・THT1681・THT2976・THT2981・THT3054 である。これらの断片はいずれも folio の一部分を残すのみであるが、筆者の研究によると、これらの断片は [a] THT1165 + THT1548 及び THT1166 + THT2976、[b] THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 及び THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 という二つの比喩譚に属する四葉の folio に還元でき、[a]の物語は『Jyotiṣka-avadāna』に、[b]の物語は漢訳『大莊嚴論經』第 65 章・『雜寶藏經』第 24 章「娑羅那比丘為惡生王所苦惱緣」及び藏文『Karmaśataka』第 89 話『Sarana』に比定される。また、これらの断片の分析を通して『Avadāna 写本』に反映されるトカラ語 B の言語特徴や比定された物語から推定される写本の部派帰属及び『Avadāna 写本』から窺えるトカラ仏教における仏典受容の問題についても言及する。

1. THT1165 + THT1548 及び THT1166 + THT2976 recto について

ここでは、『Avadāna 写本』に含まれる断片の内、THT1165 + THT1548 及び THT1166 + THT2976 recto について検討する。これらの断片は二葉の folio に還元する事ができる。この接合により上記の断片の内容を『Jyotiṣka-avadāna』に比定する事が可能となっただけでなく、THT1165 に収められている一断片を除いて不明であった表裏を確定する事ができた。残念ながら、復元された二葉の folio は連続するものではなく、物語の中間と結末に相当する部分であるため物語全体を回収する事はできず、トカラ語 B の『Jyotiṣka-avadāna』が本来どの程度の長さであったのかを推定する事はできない⁷。

1-1. THT1165 + THT1548 の転写と和訳

THT1165 には三つの断片が、THT1548 には二つの断片が納められているが、THT1165 に収められている一つの断片を除いて発見場所について T III MQ 138 との記載があり、Kizil で発見されたものと推定される。これらの断片については個々の論文で個別の語形が引用されるに留まっており、これまでこれら五断片の相互の関係については研究された事がない。筆者の研究によれば、この五断片は直接接合するだけでなく、欠けている部分はあるものの、一葉のほぼ完全な folio を復元する事が可能である。復元された folio のサイズは縦が約 8.1cm、横が約 48.5cm である。なお、THT1165 に収められた一つの断片には folio の番号として <43> が付されている事が確認できる。以下に提示する転写はこれら五断片を接合したものであり⁸、接合した結果については図 1 を参照されたい⁹。

⁷ Schmidt (1983: 275-277) によると、ドイツ所蔵断片 Mainz 655,5 (= THT3602) には『Jyotiṣka-avadāna』に比定される記述が見られるとされているが、この断片を扱った Malzahn (2007b: 271-273) では、この解釈は採られていない。

⁸ 本稿で採用した転写方法は以下の通りである。なお、以下の各節では個々の断片の転写を提示する際に transliteration を用いる場合を除いて、原則的にトカラ語の形式は transcription で引用する。

[]: 破損している箇所

(): 筆者によって推定された箇所

///: 写本の破損箇所

[転写]

a

- 1 mātene^[a] [kwri] - - - - - [k]. .k. ñai yāmo(r)[m]e(m) jotiṣ[k]eṃ -
 - - (eñksa)t[e]^[b] makte yolm[e](mem^[c] up)[pā]l\ tumpa tas[e]m(a)[n](e) - - -
 - - - - (o)[r](o)tsts(e) tāka akṣār\ aklyilñene nau-
- 2 miye - - - - - O tāka cwi śāmñe [ñ](ā)kc(i)y(e) kare pākri
 tāka śariye stāṇsa ṛaṅkormem ñi ..ā - - - - - latte^[d] † sū ṣaṇḍ\
 yārponṭaṣṣe oko
- 3 yumāne mḡ[m](cuṣ)k(e ṣai) [† all](o)[k](v) pr(e)- O ściyaine cwi jotiṣki pāceṛ\
 subhādre osta ṣm[e]ñca orocce tekine kārpa - - - - .n. [saṃ]tkentasa
 skaināmane mā ṣp\ yāta^[e]
- 4 kau^[a]\ ertsi paṣ^[f]\ s[ruk](a) || tumem su- O bhādri osta ṣmeñcantse
 srukormem walo bimbasāre cau jotiṣkem kālyṣkem śpāl[m](em) [o]sta ṣmeñcai
 yama[ṣ](a)te snai keṣ\ māka ṣpa wai-
- 5 peccesse ekaññe [wsā]n[e] † cwi waipeccesa snai keṣ\ yātsenmasa
 kṛyorttañ^[a]\ karyor yatsi auntsante † asaṣṣai wraṣṣai y[t]ā(r)isa waipṭār\
 preke [po]sṭam maitar\ || kantsakarṣamne^[f] || tā-

b

- 1 w [n]o preṣyaine campā[y]^[d]\ [ri]n[e] pernauntsai † alleḡ\ brāhmaṇe mḡskāṭar
 su snait[s] = attsaiḡ\ † sū śano klāte makte ostamem † tāwāmpa ṣesa
 plontomane cew [pre]k(e) † 1 || tumem sā_u\ cwī brāhm(a)ne-
- 2 ntse śana śp[ā]lmem [k](r)e(ñt)\ kalpāṣ\ nau- O [t]ṣaṣke [nan]āskarmem^[g]
 wakicepi epastiyepi wapāṃntisantse wasa † palkamom l(ya)[kw](a)[m]^[h] k[e]neḡ\
 waw[ā]pārmem^[i] k[r]enṭ(v) werempa y[ai]rorm(e)m
- 3 cwi (ṣa)ñ^[a]\ [p]e(tsañtse^[j]) brā[hm](a)[n](entse wa)[s]a O tumem weṣṣamṇ[e]ṣ\
 paṣ\ twe cwī śpālmem kenekantse vastrapariḡ[a]kem pūto pe[p]r(utku) [tu]
 (pi)t[ō]sa peplyanke † kwri tu pūtoṣa kṛnā-
- 4 ntr^[k] k(artse) - - - - - O tane naun[t]aintsa (pacca)[p](a) † tane
 riye ksa mā neṣam orponḡ\ mā neṣam † tum(em) - - - - - .s. paṣ\
 omte peplyanke † || brāhma-
- 5 ne we[ṣṣa](m) - - - - - || tumem br(ā)[h]maṇe k(ārpa) - - - - -^[l]
 (ke)ne[k] cau † kār[p](a) k(e)neḡam[tse] pito yām[t](s)i yā(tka) - - - - -

-: 欠けている akṣara

.: akṣara の欠けている子音若しくは母音

=: sandhi

⁹ 本稿では断片の接合に際して IDP で公開されている写真を利用した。接合した写真を公開する事を快く承諾頂いた Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften には心よりお礼申し上げる。

- - - - [k]enek\ o[t]\ palkormem † yaltse it^[m]

[注釈]

- [a]: 文脈から考えて、この部分は *Subhadra* が炎の中にいる *Jyotiṣka* を取り上げなかった場面に对应すると推定される。筆者の推定が正しいなら、この部分は (ka)mātene と再建され、なおかつ否定辞の mā が先行していたと考えられる。
- [b]: この箇所は、仏陀に指示された *Jīvaka* が *Jyotiṣka* を炎の中から取り上げる場面である。ここでは、梵文《*Divyāvadāna*》: *tena nirviśaṅkena citāṃ vigāhya gṛhītaḥ*. (Vaidya 1959a: 167.10) を参考に *jotiṣ[k]em (puwarne eṅksa)t[e]* と再建する。
- [c]: *Jīvaka* が *Jyotiṣka* を取り上げる様子を譬えた部分である。意味から考えて奪格ではなく処格 *yolme(ne)* を再建し、「池の中の蓮を取り上げるかのように」とする事も可能である。
- [d]: この *akṣara* を <nte> と解釈する可能性も完全には否定されない。
- [e]: この語形は初出であり、Malzahn (2010: 785) には登録されていないが、語根 *yāt-* ‘be capable’ の三人称単数・過去形・能動態である。
- [f]: この韻文の韻律の名称である *kantsakarṣaṃne* は *kantsakarṣaṃ** の処格であり、トカラ語 A にも同じく処格の *kantsakarṣaṃ* が在証されており、Carling (2009: 99) では 4×12 音節の詩形とされている。一方、トカラ語 B 文献においては、*TochSprR(B) II*: 189 で出版された B298 が、この韻律を確定する唯一の資料であり、それに対する解説では 12/12/13/13 の詩形であるとされている。総じて断片が多いトカラ語文献では資料上の制約から韻律の確定は困難である場合が多いが、B298 は Kizil 石窟の壁面に書かれており、ドイツ探検隊によって撮影された写真に基づいて転写が出版された。幸いにして、筆者は 2011 年 8 月に新疆龟兹研究院で開催された学会に参加した際、この韻文が残された石窟を調査する機会を得た。調査の結果、B298 の最後の部分は *nreyentane* ではなく *nreyntane* とすべきである事が明らかになった。このため、この韻律は 12/12/13/12 と訂正されることになる。ここで THT1165 + THT1548a5-b1 の詩形に注目すると、12/12/10/12 となっている事に気付く。最終的な結論を導くには別の資料が必要であるが、筆者はトカラ語 B のこの韻律もトカラ語 A と同様 12/12/12/12 と再建されるべきであり、トカラ語 B 文献には偶然第 3 *pāda* の部分に誤りが生じた用例のみが知られているのではないかと考えている。
- [g]: この形式は Malzahn (op.cit.: 680) には登録されていないが、梵文《*Divyāvadāna*》: *tayā vīthīm gatvā karpāsaḥ krītaḥ. taṃ parikarmayitvā ślakṣṇaṃ sūtraṃ kartitam*. (op.cit.: 170.32) 及び『根本説一切有部毘奈耶雜事』「買取劫貝燃成細縷。」(T.24, no. 1451, 214a9) を参考にすると、Malzahn (2003) によって指摘された動詞語根 *nāsk-* ‘to spin’ の absolutive であると確定される。この形式に基づけば、語根 *nāsk-* の過去分詞は *nanāskau** と再建され、在証されている願望法の形式も考慮に入れると、過去形第 1 類に分類される。
- [h]: これまでに知られているトカラ語 B の語彙と文脈を考慮に入れると、この部分に推定される *l(ya)[kw](a)[m]* は、*lyakwaṃṇe* ‘brilliant, shining (?)’ (Adams 1999: 565) の書き誤り

と考えられる。対応する梵文《Divyāvadāna》及び『根本説一切有部毘奈耶雜事』では織りあがった疊の描写としてこのような語は見られないが、《Jyotiṣka-avadāna》の異訳である『佛説光明童子因緣經』にはバラモンの妻が疊について「今此白氈。上妙細軟。價直千金。」(T.14, no. 549, 860b09-10) と述べているだけでなく、先に注[g]で引用した箇所にはこの疊の原料に対して *ślakṣṇa-* ‘slippery, smooth, polished’ (MW: 1103) という形容詞が見られる事から、この推定は支持されよう¹⁰。

- [i]: この形式は Malzahn (op.cit.: 865) には登録されていないが、語根 *wāp-* ‘to weave’ の absolutive である¹¹。
- [j]: ここは、バラモンの妻が自身で仕立てた疊を夫であるバラモンに与える場面である。断片に残存している部分と文字数に基づいてトカラ語 B の「夫」を表す *pets* の属格を再建した。なお、この語の単数斜格形及び属格形はこれまで知られていないため、ここでは *TEB I*: 131-132 の記述を参考に推定した¹²。
- [k]: この形式も Malzahn (op.cit.: 577) には登録されていないが、語根 *kāry-* ‘to buy’ の三人称複数・接続法・中動態の形式である。
- [l]: 前後の文脈から考えて、欠けている部分には目的に相当する語が推定される。ここでは、語根 *plānk-* ‘to sell’ の infinitive の *plyamssi* を再建しておく。
- [m]: この部分は、梵文《Divyāvadāna》: *tena tasya kārṣāṇasahasraṃ dattam.* (op.cit.: 172.05) 及び『根本説一切有部毘奈耶雜事』「總取千錢。」(op.cit.: 214b22-23) に対応する部分であり、*Jyotiṣka* が疊を 1000 *denarius* で購入する場面に対応すると推定される。この推定が正しいなら、この部分には *tinār* の複数通格形である *tinārntasa* 或いは *tinārāntasa* が再建されよう。

[和訳]

a

- 1 彼 (= *Subhadra*) は彼 (= *Jyotiṣka*) を取り上げなかった。もし ... 。彼は ... してから、(炎の中にいる) *Jyotiṣka* をつかみました。そして、あたかも池から蓮を取り上げるかのよう^[a]に取り上げました。... 彼は大きくなりました。文字の勉強において、宝 ...
- 2 ... でした。彼には人間と神の威厳が現れました。上の宮殿に登ってから ... 。彼は自らの善行の熟した果実のような
- 3 王子でした。或る時、その *Jyotiṣka* の父親の *Subhadra* 長者が大病に罹りました。... 種々

¹⁰ トカラ語 B の *lyakwaññe* は hapax であるため、Adams (op.cit.) は主に語根 *lāk-* ‘to see, look’ との関係からこの語の意味を推定している。THT1165 + THT1548b2 では形容詞 *pālkamo* ‘luminous’ が先行している事から、この二つの形容詞は hendiadys のように似たような意味領域に属していたと推定される。

¹¹ この形式の目的語であるトカラ語 B の *kenek* は、Carling (2009: 98) にあるようにトカラ語 A の *kanak* がウイグル語の *böz* ‘Baumwollstoff’ に対応する事から ‘cotton cloth’ を意味するとされるが、ここでは梵文《Divyāvadāna》の *yamālī* ‘a kind of dress consisting of two garments’ (BHSD: 445a) に対応している。しかしながら、この対応はトカラ語 B の *kenek* がこのような意味を有していた事によるものではなく、漢訳仏典が「疊・氈」に対応させているのと同様の措置であると解釈したい。

¹² トカラ語 B の *pets* の唯一の在証例として知られてきた B275b4 の斜格形とされる *petso* は Pinault (2010: 36) によって否定されたが、Schmidt (2010: 847) にはこの語の主格形が在証されている。

の薬によって努力していましたが、

- 4 立ち上がる事ができず、亡くなってしまいました。|| それから *Subhadra* 長者の死後、
Bimbisāra 王はその *Jyotiṣka* 少年を特別な長者にしました^[b]。そして限りない程多くの
5 財産を彼に与えました。彼の限りない何千もの財産を用いて、商人達は商売を始めまし
た。彼らはそれぞれ適切な時期に乾いた道や湿った道を行きました^[c]。|| *Kaṃsakarṣaṇa*
の韻律で ||

b

- 1 さて、その時輝かしき *Campā* の街に^[d]、或るバラモンがいました。彼は非常に貧しかった。
彼は同じような家から妻を娶りました^[e]。その時、彼は彼女と一緒にいて幸せでし
た^[f]。|| それから、そのバラモンの妻は
2 非常に素晴らしい綿を糸に紡いでから^[g]、優れた技術を持った機織職人に与えました^[h]。
光輝く素晴らしい壘を織って、良い香りと一緒に浸してから^[i]、
3 自らの夫であるバラモンに与えました。そして彼女は彼に言います。あなたはその素晴
らしい壘の鑑定家達の下に行きなさい^[j]。価格が満たされたら^[k]、その価格で売ちなさい。
もし人々がその価格で
4 買うのならば、それで宜しい。... その場合、通りで宣言しなさい^[l]。ここには全く街も
なく市場もない^[m]。それから ... に行きなさい。そこで売ちなさい。|| バラモンは
5 言います。... それからバラモンはその壘を売りに行きました。そこで (*Jyotiṣka* は) ...
壘を見てから、(バラモンの下に) 赴き壘の販売を行うように命じました^[n]。1000
denarius で

[注釈]

- [a]: トカラ語 B の *mākte ... tumpa tasemane* は初出であり、Thomas (1968) 及び Pinault (1988: 186) には指摘されていない用法であるが、比喩を表す構文であると理解される。また、この後には *kaṃātene* を再建する事ができるかも知れない。
- [b]: この部分に対応する記述は梵文及び漢訳には見られないため具体的な意味は不明であるが、梵文及び漢訳には *Bimbisāra* 王が *Jyotiṣka* を非常に大切にしていた様子が描写されている。そのため、この部分は *Bimbisāra* 王の *Jyotiṣka* に対する寵愛を表しているものと考えられる。なお、この後に続く *Bimbisāra* 王が *Jyotiṣka* に多額の財産を与えたとする記述は、その他の言語によるパラレルには見られない。
- [c]: この部分に対応する記述も梵文及び漢訳には見られない。形容詞 *asaṣṣai* 及び *wraṣṣai* は共に後続する *ytārisa* を修飾しており、後者の *wraṣṣai* は *war* ‘water’ から派生した形容詞である¹³。前者の *asaṣṣai* は *hapax* であり意味の確定は困難であるが、文脈から見て *wraṣṣe** の反対の概念を指す形容詞であると推定される。この推定が正しいなら、*asaṣṣe**

¹³ 形容詞 *wraṣṣe** は Thomas (1977: 113) で指摘されているが、Thomas が扱っている断片には語幹の部分が僅かに残存しているに過ぎない。そのため、指摘されている限り、この形容詞の完全に残っている例としてはこの断片が初出である。

の語幹として想定される *ās** は「砂」或いは「砂漠」の意味であり、動詞語根 *ās-* ‘to dry (out)’ から派生した名詞であろうと考えられる¹⁴。また、ここに在証される *preke postām* は管見の限り初出であるが、梵語 *anukālam* ‘opportunely, occasionally’ (MW: 31a) に対応する語として解釈した。

- [d]: 梵文及び漢訳から、この街の名称は *Campā* である事は確かであるが、トカラ語 B の物語では *campāy rine* となっており、推定される梵語とは一致しない。恐らく梵語 *campā-* の処格である *campāyām* の語幹の分析の誤りに起因していると推定される。
- [e]: この箇所は梵文《*Divyāvadāna*》: *tena sadṛśāt kulāt kalatram ānītam*. (Vaidya 1959a: 170.30) に対応している。トカラ語 B の *śano kāl-* はこれまで指摘されていないが、この対応から「妻を娶る」という意味であると理解される。また、梵文 *sadrśāt kulāt* に対応するトカラ語 B が *mākte ostamem* となっている点は注目される点である。通常、トカラ語 B の *mākte* は梵語の *yathā* や *iva* と同様に比喩を表す接続詞として使用されるが¹⁵、ここでは梵語 *sadrśa-* ‘like, similar to’ (MW: 1140a) の訳語として使用されているだけでなく、*mākte-ost* 「同じような家」という compound を形成していると見られる。
- [f]: この部分も梵文及び漢訳には見られない。トカラ語 B の *plantomane* は語根 *plānt-* ‘to rejoice, be glad’ の現在中動分詞であり、この *pāda* は定動詞を欠いた文となっている。
- [g]: トカラ語 B の *kalpās* は初出であるが、ここでは斜格形である事が文脈から明らかである。この語は梵文《*Divyāvadāna*》(op.cit.: 172.32) では *karpāsa-* ‘Baumwolle’ (SWTF I: 27a) に対応している事から「綿」を指していたと推定される¹⁶。また、ここに在証される *nautsāske* は初出であるが、梵文《*Divyāvadāna*》: *tayā vīthīm gatvā karpāsaḥ kṛitah. tam parikarmayitvā ślakṣṇam sūtram kartitam*. (op.cit.: 170.32) 及び『根本説一切有部毘奈耶雜事』「買取劫貝撚成細縷。」(T.24, no. 1451, 214a9) を参考に「糸」という意味を推定した¹⁷。
- [h]: この部分は梵文《*Divyāvadāna*》: *śobhanena kuvindena kārṣāṇasahasramūlyā yamalī vāyitā*. (op.cit.: 171.01) に対応しており、トカラ語 B の *wapāmntsa* は *kuvinda-* ‘weaver’ (MW: 296c) に相当している。トカラ語 B の接尾辞 *-ntsa* は、従来 *-ttsa* とされてきたが、Schmidt (2001a: 20-21) により *-ntsa* と訂正された。ここでは、この接尾辞が *Anusvāra* を伴って現れているため、Schmidt による訂正が妥当なものであった事が裏付けられる。
- [i]: この部分も梵文及び漢訳には見られない。現在までに知られているトカラ語 B の知識に基づけば、*yairormem* は動詞語根 *wār-* ‘to practice’ の absolutive である。しかしながら、

¹⁴ 形容詞 *asaṣṣe** の語幹は名詞の斜格であるため *ās** の主格を確定する事は困難であるが、ここでは *ās** としておく。また、この *ās** は Schmidt (1997: 246) で指摘された「山羊」を意味する *ās* とは別の語である。

¹⁵ この用法については Thomas (1968) を参照。

¹⁶ トカラ語 B には「綿」を指す語として、既に *kampās** が知られているが、この語形は、Skt. *karpāsa-* と意味領域が近く、かつ Skt. *kambala-* ‘Wollgewand’ (SWTF I: 20b) の借用語である *kampāl** ‘mantle, cloak’ との contamination によるものとされている (Adams 1999: 141)。THT1165 + THT1548b2 に在証される *kalpās* は、Skt. *karpāsa-* の Prākṛit 語形として推定される **kappāsa-* を梵語形に戻す際に生じた誤りに基づく語形と推定される。なお、トカラ語 A に在証される *kappās* については Pinault (2008: 220-221) を参照。

¹⁷ この語は語根 *nāsk-* ‘to spin’ と同様に PIE の **sneh-* ‘spinnen’ (LIV²: 571-572) から派生した名詞に接尾辞 *-ske* が付されたものと推定される。なお、この語根から派生される名詞については IEW: 973 を参照。

この意味はこの文脈では妥当とは言えない。この形式について、筆者は梵文《*Divyāvadāna*》: *grhapatir gandhakāṣṭhair bhaktaṃ sādhayitum ārabdhaḥ. sugandhatailenaca vastrāṇi ūmayitvā khādyakāny ullādayitum.* (op.cit.: 176.27-28) 及び『根本説一切有部毘奈耶雜事』「使用家内梅檀香木。以將炊爨。復以香油塗其疊布。用煮餅食。」(op.cit.: 216b20-21) を参考にする事が可能であると考え。この部分は *Jyotiṣka* の過去物語であり、疊と *Jyotiṣka* との関係を説明した部分である。そのため、*Jyotiṣka* が入手した疊にも同様の因縁があったものと推定する事が可能であろう。筆者の推定が正しいならば、この *yairormem* は梵語 *ūmayati* ‘makes wet, sprinkles’ (*BHSD*: 254b) の absolute である *ūmayitvā* に対応していると解釈される。以上の推定に基づき、ここでは *yairormem* をトカラ語 A の *yār-* ‘to bathe’ に対応する、これまで指摘された事のないトカラ語 B の語根 *yār-* ‘to bathe’ (causative) の absolute であると推定したい。

- [j]: 上に提示した和訳では、トカラ語 B の本文に従い「その素晴らしい疊の鑑定家達の下に行きなさい」と訳したが、この箇所の意味は「その素晴らしい疊を持って鑑定家達の下に行きなさい」という意味であると推定される。ここで「鑑定家達」とトカラ語 B の *vastrapariṣakem* は hapax であるが *vastrapariṣake** の複数或いは単数斜格形であり、梵語 *vastra-pariṣaka-* ‘prover, examiner of cloth’ に由来する。ここでは文脈を考慮し複数形として解釈した。
- [k]: ここでは断片に残存している文字と文脈から語根 *prutk-* ‘to fill up’ の過去分詞を再建した。この部分は「こちらの望む価格が提示されれば」と解釈される。
- [l]: ここでは断片に残っている文字と文脈から語根 *tāp-* ‘to proclaim’ の二人称単数・命令法の形式を再建した。梵文《*Divyāvadāna*》には *yadi kaścit yācati, kārṣāṇasahasreṇa dātavyā, no ced apattanaṃ ghoṣayitvā anyatra gantavyam iti.* (op.cit.: 171.02) とあり、梵語 *ghoṣa-* ‘Verkündigung, Erklärung’ (*SWTF I*: 204b) の denominative の absolute に相当していると推定される。
- [m]: ここで「市場」と和訳したトカラ語 B の *orpoṅk* 及びトカラ語 A の *orpoṅk* については、Carling (2009: 92-93) を参照。ここでは、トカラ語 B の *tane riye ksa mā nesām orpoṅk mā nesām* の内、*riye ksa mā nesām* が先の注[l]で引用した箇所の *apattana-* ‘no (proper) city’ (*BHSD*: 43b) に対応している。
- [n]: この箇所は断片の欠落が多いため前後の関係の把握が困難となっているが、ここでは疊の販売を諦めたバラモンの声を耳にした *Jyotiṣka* が、バラモンの下に赴き疊を見せてもらうように求めた場面に相当していると推定した。梵文《*Divyāvadāna*》: *sa kathayati ānaya, paśyāmaḥ* (op.cit.: 171.27) 及び『根本説一切有部毘奈耶雜事』「報言將來試為觀察。」(op.cit.: 214b12) に相当する。

1-2. THT1166 + THT2976 recto の転写と和訳

THT1166 及び THT2976 は共に folio の中間に位置していた断片であるため、これまで表裏が不明であったが、内容比定に伴い表裏を確定する事が可能となった。これらの二断片は

直接接合するが、folio の左端が含まれておらず folio の番号が確定できないため、前節で検討した THT1165 + THT1548 との間にどれだけの欠落があったのかを推定する事は困難である。接合の結果復元した folio のサイズは縦が約 8.2cm、横が約 14.4m である。THT1165 + THT1548 の横幅である約 47.5cm に基づけば、THT1166 + THT2976 の接合によって回収された部分は、この folio 全体の三割弱に相当しており、残りの六割強を欠いた状態である事が推定できる。以下の転写も二断片を接合したものであり、接合の結果については図 2 を参照されたい。

また内容について言及すると、THT1166 + THT2976 は《Jyotiṣka-avadāna》の結末の部分に相当する。即ち a4 には「Jyotiṣka による Avadāna が終わった」と記されており、この箇所での物語が終わり、以下には別の物語が続いている事が窺える。《Jyotiṣka-avadāna》に続く物語については次節で扱う事とし、本節では THT1166 + THT2976 の recto のみを紹介する。

[転写]

a

- 1 /// – šireṃ reki cirkā[wam](e)^[a] ñ(i)ś₁ cwī yāmorn̄tse pāke – ///
- 2 /// [o]t₁ tā_u preścīyaine anaṅgaṇe osta šmeñca ///
- 3 /// [o]k[o]sa ette cmīlq₁ ompak₁ tam yāknesa yāta[l](ñ)[e] ///
- 4 /// [ye]ṃne || jotiṣ[k]e[n]tsa^[b] apadāṃ āra † k_ulobhakem [ś](.)t^[c] ///
- 5 /// – [k](.)[ā] – korañña patriweca^[d] yā .i ///

[注釈]

- [a]: トカラ語 B の *cirkāwame* は、Malzahn (2010: 657) には登録されていないが、語根 *tār̄k-* ‘to dismiss, emit’ の一人称単数・過去形に代名詞接辞が付加された形式である。ここには Peyrot (2008: 55-57) に指摘されている -ā- > -i- という音変化が見られることから、Late Tocharian B の語形を反映していると見られる。また先行する *šireṃ* も、Peyrot (op.cit.: 70-71) にあるように、*šcīre* ‘hard, harsh’ の Late Tocharian B の形式である¹⁸。
- [b]: この箇所には裏面の一部が付着しているが、写真では <tsa> に母音記号は付されていないと判断される。
- [c]: この箇所の読みは不確実である。仮に [ś] と読むことができるのならば、*k_ulobhakemś* として、梵語 *kulopaka-* (BHSD: 133) の借用語 *k_ulobhake* ‘belonging to a family, family associate’ の向格と見做す事も可能である。また、《Jyotiṣka-avadāna》の末尾に続く文である事を考慮に入れて、THT1166 + THT2976a1 に在証される *šīre* ‘hard, harsh’ を推定する事も可能かも知れない。なお、*k_ulobhakem* 或いは *k_ulobhakemś* のどちらであっても、形態論上は単数形と複数形が同一形式であり、且つ文脈が不明である以上、この点に

¹⁸ この二つの語形は Peyrot (op.cit.: 223-224) には指摘されておらず、従って、この二断片の分類も為されていない。なお、筆者は Peyrot (op.cit.) で提示されている Late Tocharian B と Colloquial Tocharian B の二つを区別しない立場で議論を進めている点に注意されたい。

についての判断は困難である。

- [d]: トカラ語 B の *korāñña* は hapax であるだけでなく先行する部分が判然とせず、また前後の文脈が不明なため意味を確定できないが、この区切り方が正しいならば、*koḥ* ‘ten million’ の variant である *kor* か或いは *kor* ‘throat’ を語幹とした形容詞の女性形単数・主格の形式である。一方、後続する部分についても語の区切れが不明確であるが、ここでは暫定的に *patriweca* を一つの語としておく。ただ、この形式も hapax であるだけでなく、現時点では意味を推定するに足る根拠を欠いているため、この箇所の意味の推定は控えたい。

[和訳]

a

- 1 /// 私は彼らに対して厳しい言葉を発しました。私はその行いの報い ...^[a] ///
- 2 /// その時、*Anaṅgaṇa* 長者 ///
- 3 /// 結果によって、彼は生まれまらだろう。そこで、そのような能力 ///
- 4 /// 彼に ... 。 || *Jyotiṣka* による *Avadāna* が終わった。親しき友人 (達) ... ///
- 5 /// ... ///

[注釈]

- [a]: 通常「報い」を表す語は *oko* ‘fruit, result’ であり、トカラ語 B の *pāke* は ‘part, portion, share’ を意味し「報い」を意味する用例は管見の限り知られていないが、梵文《*Divyāvadāna*》: *kharā vāg niścāritā, tasya karmaṇo vipākena* (Vaidya 1959a: 179.02) に対応していることから、この解釈は支持されよう。ただし、この断片で在証された「報い」を意味するトカラ語 B の *pāke* は、既知のトカラ語 B の *pāke* とは別の語である可能性が高い¹⁹。

1-3. THT1165 + THT1548 及び THT1166 + THT2976 のパラレルとの比較

本節では、先に解釈を施したトカラ語 B の《*Jyotiṣka-avadāna*》のパラレルとの比較を行う。この物語のパラレルは梵文・漢訳・チベット語に見られるが、ここではトカラ語 B 断片との比較に有効なもののみを利用する²⁰。

¹⁹ ここで「報い」と和訳した *pāke* が借用語であれば、梵語の *pāka*- ‘cooking, result’ (MW: 613c-614a) の借用語である可能性を指摘する事ができるが、通常トカラ語 B に見られる梵語由来の *a*-語幹名詞は、事物を表す場合語末の母音が脱落した形式で借用されるため問題が残る。一方、梵語の *pāka*-が語根 *pac-* ‘to cook, ripen’ (MW: 575a) から派生したのと同様に、トカラ語 B の *pāke* を語根 *pāk-* ‘to cook, let ripen’ から派生した名詞と見做す事も可能であろう。ただ、「報い」を表す *pāke* は他に在証されていないだけでなく、THT1572a3 には /// *pepekwa oko(nta)* /// 「熟した果実」という用例があり、語根 *pāk-* と *oko* との密接な関係を想起させるため、ここでは「報い」を表す *pāke* については可能性を指摘するに止め、今後確実な用例が指摘されるのを待ちたい。

²⁰ 《*Jyotiṣka-avadāna*》は Schøyen Collection 中にも存在が確認されているが、《*Divyāvadāna*》所収のものとはほぼ同一であり、また比較可能な部分がほとんどなく、特にトカラ語 B の断片が扱っている *Jyotiṣka* が入手した疊の由来に関する記述を欠いているため、本稿では比較の対象としない。この Schøyen Collection 中の断片については Baums (2003) を参照されたい。一方、漢訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻 17 (T.24, no. 1448, 83c12-84b20) などに見られる物語は、上にパラレルとして引用したものとは異なる系統に属しているため

[梵文]

«Divyāvadāna» 第 19 章 «Jyotiṣkāvadāna»: Vaidya (1959a: 162-179)

«Bodhisattvāvadānakalpalatā» 第 9 章: Vaidya (1959b I: 78-84)²¹

[漢訳]

『根本説一切有部毘奈耶雜事』 卷 2-3 (T.24, no. 1451, 210c8-217b19)²²

『佛説光明童子因縁經』 (T.14, no. 549, 854b20-865a14)

以下、上記のパラレルを引用するが、この物語は非常に長いため全文を引用する事は避け、トカラ語 B 断片の理解に資する部分のみを引用する。また、引用に際しては、先に扱った二葉のトカラ語 B 断片に対応する部分ごとに分割し、さらにトカラ語 B 断片に関する箇所は bold 体 (漢訳仏典は下線) で示す事とする。

[梵文]

«Divyāvadāna»²³

[THT1165 + THT1548]

*tatra bhagavān subhadraṃ grhapatim āmantrayate, grhapate, grhāṇa kumāram. sa nirgranthānām mukhaṃ avalokitum ārabdhaḥ. te kathayanti, grhapate, yadi prajvalitām etāṃ citāṃ pravekṣyasi, sarveṇa sarvaṃ na bhaviṣyasīti. sa na pratigrhṇāti. **tatra bhagavān jīvakaṃ kumārabhūtam āmantrayate grhāṇa, jīvaka, kumārakam iti. sa saṃlakṣayati asthānam anavakāśo bhagavān mām asthāne niyokṣyati. grhṇāmīti. tena nirviśaṅkena citāṃ vigāhya grhītaḥ.***

vigāhataḥ tasya jinājñayā citāṃ pratigrhṇataś cāgnigataṃ kumārakam |

jinaprabhāvān mahato hutāśanaḥ kṣaṇena jāto himapaṅkaśīlalaḥ || 12 ||

*tato jīvakaṃ kumārabhūtam idam avocet, jīvaka, māsi kṣata upahato veti. sa kathayati rājakule 'haṃ, bhadanta, jāto rājakule vṛddhaḥ. nābhijñāmi gośīrśacandanasyāpīdrśaṃ śaityaṃ yad bhagavatā adhiṣṭhitāyās citāyāḥ. **tatra bhagavān subhadraṃ grhapatim āmantrayate grhāṇedānīm, grhapate, kumāram iti. sa mithyādarśanavihataḥ. tathāpi na saṃpratipadyate. nirgranthānām eva mukhaṃ vyavalokayati. te kathayanti, grhapate, ayaṃ sattvo 'īva mandabhāgyo yo hi nāma sarvabhakṣeṇāpy agninā na dagdhaḥ. kiṃ bahunā. yady evaṃ grhaṃ praveśyasi,***

本稿では扱わない。なお、Hinüber (1979: 343-344) が«Jyotiṣka-avadāna»に比定している Gilgit 写本 No. 13 (1484-1485) については Baums (2003: 287, fl.2) を参照。

²¹ «Bodhisattvāvadānakalpalatā»の第 9 章«Jyotiṣkāvadāna»では、トカラ語 B の断片が扱っている Jyotiṣka が入手した壘の由来に関する記述を欠いているが、以下ではトカラ語 B の物語との比較に供するため、THT1165 + THT1548 に対応する箇所のみ引用する。

²² 根本説一切有部の律蔵には蔵文訳が存在しているが、本稿では根本説一切有部の律蔵も含めて、梵文のテキストが得られる場合は梵文のみを利用し蔵文訳は引用しない。

²³ 梵文«Divyāvadāna»所収の«Jyotiṣka-avadāna»については Baums (op.cit.: 290) で Schøyen Collection 中の断片に基づいて一부분本文の修正が提出されているが、トカラ語 B 断片の解釈には影響しないため本稿ではこの修正を反映していない点をお断りしておく。

nīyatām. te gr̥ham utsādayad bhaviṣyasi, tvaṃ ca prāṇair viyujyasa iti. nāsti ātmasamaṃ premeti. tenāsau na pratigrhītaḥ. tatra bhagavān rājānaṃ bimbisāraṃ āmantayate gr̥hāṇa, maharaja, kumāraṃ iti. tena sasambhramaṇa hastau prasārya gr̥hītaḥ. tataḥ samantato nirīkṣya kathayati, bhagavan, kiṃ bhavatu asya dāraḥ kasya jyotiṣka iti nāmeti. bhagavān āha, mahārāja, yasmād ayaṃ dārako jyotirmadhyāḥ labdhah, tasmād bhavatu dāraḥ kasya jyotiṣka iti nāmeti. tasya jyotiṣka iti nāmadheyam vyavasthāpitam. tato bhagavatā tasya janakāyasyāśayānuṣayam dhātum prakṛtiṃ ca jñātvā tādṛṣī dharmadeśanā kṛtā, yam śrutvā bahubhiḥ sattvaśatair mahān viśeṣo 'dhigataḥ. kaiścic chrotāpattiḥ phalaṃ sākṣāt kṛtam, kaiścit sakṛdāgāmiphalaṃ, kaiścid anāgāmiphalaṃ, kaiścit sarvakleśaprahāṇād arhattvaṃ sākṣātkṛtam, kaiścid uṣmagatāni kuśalamūlāny utpādītāni, kaiścin mūrdhānaḥ, kaiścit mṛdumadhyāḥ kṣāntayaḥ, kaiścic chrāvakabodhau cittāny utpādītāni, kaiścit pratyekabodhau, kaiścid anuttarāyām samyak sambodhau, kaiścic charaṇagamanāni, kaiścic chikṣāpadāni. yad bhūyasā sā parṣadbuddhanimnā dharmapravaṇā saṃghapragbhārā vyavasthitā. jyotiṣko dārako rājāṇa bimbisāreṇa aśībhīyo dhātṛibhyo 'nupradatto dvābhyām aṃsadhātṛibhyām dvābhyām kṣīradhātṛibhyām dvābhyām maladhātṛibhyām dvābhyām krīḍanikābhyām dhātṛibhyām. so 'ṣṭhābhīr dhātṛibhīr unnīyate vardhate kṣīreṇa dadhnā navaṇīlena sarpiṣā sarpimaṇḍena anyaiś cottaptottaptair upakaraṇaviśeṣaiḥ. āśu vardhate hradastham iva paṅkajam.

tasya mātulaḥ paṇyam ādāya deśāntaraṃ gataḥ. tena śrutam yathā mama bhaginī sattvavatī saṃvṛtā. sā bhagavatā vyākṛtā putraṃ janayiṣyati, kulam uddyoyiṣyati, divyamānuṣiṃ śriyaṃ pratyanubhaviṣyati, mama śāsane pravrajya sarvakleśaprahāṇād arhattvaṃ sākṣātkariṣyati. sa paṇyam visarjayitvā pratipaṇyam ādāya rājagṛham āgataḥ. tena śrutam yathā sā asmākaṃ bhaginī kālagateti. śrutvā ca punaḥ saṃlakṣayati bhagavatā asau vyākṛtā putraṃ janayiṣyati, kulam uddyotayiṣyati, divyaṃ mānuṣiṃ śriyaṃ pratyanubhaviṣyati, mama śāsane pravrajya sarvakleśaprahāṇād arhattvaṃ sākṣātkariṣyati. mā haiva tad bhagavato bhāṣitaṃ vitathaṃ syāt. tena tiraḥprāṭiveśyāḥ pṛṣṭāḥ śrutam mayā asmākaṃ bhaginī sattvavatī saṃvṛtā. sā bhagavatā vyākṛtā putraṃ janayiṣyati, kulam uddyotayiṣyati, divyamānuṣiṃ śriyaṃ pratyanubhaviṣyati, mama śāsane pravrajya sarvakleśaprahāṇād arhattvaṃ sākṣātkariṣyati. śrutvā vayaṃ parituṣṭāḥ. sā ca śrīyate mṛtā kālagateti. mā haiva bhagavato bhāṣitaṃ vitathaṃ syād iti. te gāthāḥ bhāṣante

sacandratāraṃ prapatedihāmbaraṃ mahī saśailā savanā nabho vrajet

mahodadhīnāṃ udakaṃ kṣayaṃ vrajen maharṣayaḥ syur na mṛṣābhīdhāyinaḥ || 13 ||

na bhagavato bhāṣitaṃ vitatham. kathaṃ bhagavato bhāṣitaṃ vitathaṃ bhaviṣyati. kiṃ tu tena svāmīnāpi asau tathā tathā upakrāntā, yathā kālagatā. sa dārako maharddhiko mahānubhāvaḥ. agnīnā na dagdhah. adyāpi rājakule saṃvardhata iti. sa subhadrasya gr̥hapateḥ sakāṣaṃ gatvā kathayati na yuktaṃ, gr̥hapate, tvayā kṛtam. kiṃ kṛtam. asmākaṃ sattvavatī bhaginī tvayā nirgranthavigrāhitena tathā tathā upakrāntā, yathā kālagatā. sa dārako maharddhiko mahānubhāvaḥ. agnīnāpi na dagdhah. adyāpi rājakule saṃvardhate. tad gatam etat. yadi tāvat kumāraṃ ānayasī, ity evaṃ kuśalam. no ced vayaṃ tvam jñātimadhyād utkṣipāmaḥ. salokānāṃ [sālohitānāṃ?] saṃkāraṃ pātayāmaḥ, rathyāvīthicatvaraśṛṅgātakesu cāvaraṇaṃ niścārayāmaḥ

asmākaṃ bhaginī subhadreṇa grhapatinā praghātītā. strīghātako 'yam. na kenacid ābhāṣitavyam iti. rājakule ca te 'nartham kārayāma iti. sa śrutvā vyathitaḥ. yathaiṣa paribhāṣate, nūnam evaṃ karomīti viditvā rājñah pādayor nipatya kathayati, deva, mama jñātaya evaṃ paribhāṣante yadi tāvat kumāram ānayasīty evaṃ kuśalam, no ced ānayasa, vayaṃ tvāṃ jñātimadhyād utkṣipāmaḥ, saṃkāraṃ pātayāmaḥ, rathyāvīthīcatvaraśṛṅgāṭakeṣu cāvaraṇaṃ niścārayāmaḥ asmākaṃ bhaginī subhadreṇa grhapatinā praghātītā. strīghātako 'yam. na kenacid ābhāṣitavyam iti. rājakule ca te 'nartham kārayāma iti. tad arhasi jyotiṣkaṃ kumāraṃ dātum iti. rājā kathayati, grhapate, na mayā tvatsakāśāt jyotiṣkaḥ kumāro grhītaḥ, kiṃ tu bhagavatā mama nyastaḥ. yadi tvam kumāreṇārthī, bhagavatsakāśaṃ gaccheti. sa bhagavatsakāśaṃ gataḥ. pādayor nipatya kathayati, bhagavan, mama jñātaya evaṃ paribhāṣante yadi tāvat kumāram ānayasīty evaṃ kuśalam. no ced ānayasa, vayaṃ tvāṃ jñātimadhyād utkṣipāmaḥ, saṃkāraṃ pātayāmaḥ, rathyāvīthīcatvaraśṛṅgāṭakeṣu cāvaraṇaṃ niścārayāmaḥ. asmākaṃ bhaginī subhadreṇa grhapatinā praghātītā. strīghātako 'yam. na kenacid ābhāṣitavya iti. rājakule cānartham kārayāma iti. tad arhasi jyotiṣkaṃ kumāraṃ dāpayitum iti. bhagavān saṃlakṣayati yadi subhadro jyotiṣkaṃ kumāraṃ na labhate, sthānam etad vidyate yad uṣṇaṃ rudhiraṃ chardayitvā kālaṃ kariṣyati. iti viditvā āyusmantam ānandam āmantrayate gaccha, ānanda, rājānaṃ bimbisāraṃ madvacanenārogyaya, evaṃ ca vada anuprayaccha, mahārāja, subhadrasya grhapater jyotiṣkaṃ kumāram. yadi subhadro grhapatir jyotiṣkaṃ kumāraṃ na labhate, sthānam etad vidyate yad uṣṇaṃ śonitaṃ chardayitvā kālaṃ kariṣyatīti. evaṃ bhadantety āyusmān ānando bhagavataḥ pratiśrutyā yena rājā bimbisāras tenopasaṃskrāntaḥ. upasaṃkramya rājānaṃ bimbisāraṃ etad avocat bhagavāns te, mahārāja, ārogyayati, kathayati ca anuprayaccha, mahārāja, subhadrasya grhapater jyotiṣkaṃ kumāram. yadi subhadro grhapatir jyotiṣkaṃ kumāraṃ na labhate, sthānam etad vidyate yat subhadro grhapatir uṣṇaṃ śonitaṃ chardayitvā kālaṃ kariṣyati. rājā kathayati vande, bhadantānanda, buddhaṃ bhagavantam. yathā bhagavān ājñāpayati tathā kariṣye. ārogyam ity uktā āyusmān ānandaḥ prakrāntaḥ. rājā bimbisāraḥ kathayati, grhapate, mayā ayaṃ kumāraḥ saṃvardhitaḥ. priyaś ca me manāpaś ca. samayato 'haṃ muñcāmi, yadi māṃ divase divase triṣkālaṃ darśanāyopasaṃkrāmātīti. sa kathayati, deva, upasaṃkramiṣyati. ko 'nya upasaṃkramitavya iti. sa rājñā sarvālaṃkāravibhūṣitaṃ kṛtvā hastiskandha āropya visarjitaḥ.

ācaritam etal lokasya na tāvat putrasya nāma prajñāyate yāvat pitā jīvati. yāvad apareṇa samayena subhadro grhapatiḥ kālagataḥ. jyotiṣkaḥ kumāraḥ svagrhe pratiṣṭhitaḥ. sa buddhe 'bhiprasanno dharme saṃghe 'bhiprasannaḥ. buddhaṃ śaraṇaṃ gato dharmam saṃghaṃ śaraṇaṃ gataḥ. tena yasmin pradeśe tena subhadreṇa patnī āghātītā, tasmin pradeśe vihāraṃ kārayitvā sarvopakaraṇasampūrṇaś cāturdiśāryabhikṣusaṃghāya niryātitaḥ. tathā sthavirair api sūtrānta upanibaddham bhagavān rājagrhe viharati mṛditakuṣike dāva iti. subhadrasya grhapateḥ pauraṣeyā ye paṇyam ādāya deśāntaraṃ gataḥ, taiḥ śrutam subhadro grhapatiḥ kālagataḥ. jyotiṣkaḥ kumāraḥ svagrhe pratiṣṭhitaḥ. sa buddhe 'bhiprasanno dharme saṃghe 'bhiprasanno buddhaṃ śaraṇaṃ gato dharmam saṃghaṃ śaraṇaṃ gata iti. teṣāṃ ca goṣīṣacandanamayam

pātram saṃpannam. tais tad ratnānāṃ pūrayitvā jyotiṣkasya grhapateḥ prābhṛtam anupreṣitam. tena tad dīrgha stambhe āropya sthāpitam. ghaṇḍāvaghoṣaṇaṃ kārītam nedaṃ kenacit viṣṭayā vā sītayā vā karkaṭakena vā grhītavyam. ya etac chramaṇo vā brāhmaṇo vā maharddhiko vā mahānubhāvah ṛddhyā grhṇāti, tasyedaṃ yathāsukham iti. tīrthyāḥ kalyam evotthāya tīrthyasparśanaṃ gacchanti. tais tad dṛṣṭam. dṛṣṭvā ca punar jyotiṣkasya grhapateḥ kathayanti, grhapate, kim etad iti. tena teṣāṃ vistareṇārocitam. te kathayanti, grhapate, tvam śramaṇasākyaputreṣv abhiprasannaḥ. te evaṃ grahīṣyanti uktvā prakrāntāḥ. yāvat sthāvirasthāvirā bhikṣavo rājagṛhaṃ piṇḍāya praviṣṭāḥ. tair dṛṣṭvā tair api jyotiṣko grhapatiḥ prṣṭaḥ kim etad iti. tena tathaiva vistareṇa samākhyātam. te kathayanti, grhapate, kiṃ pātramātrasyārthāyātmanāṃ saṃprakāśayāmaḥ. uktaṃ bhagavatā pracchannakalyāṇair vo bhikṣavo vihartavyaṃ dhūtapāpair ity uktvā prakrāntāḥ. yāvad āyusmān daśabalāḥ kāśyapaḥ tam anuprāptaḥ. sa prcchati, grhapate, kim etad iti. tena yathāvṛttam ārocitam. āyusmān daśabalakāśyapaḥ saṃlakṣayati yena mayā anādikālopacitam kleśagaṇaṃ vāntaṃ tyaktaṃ charditaṃ pratiniṣṭam, taṃ mām grhapatis tīrthikasādhāraṇayā ṛddhyā āhvayati. tad asya manorathaṃ pūrayāmi. tena gajabhujasadṛṣaṃ bāhum abhiprasārya tat pātram grhītam. sa tad grhītva vihāraṃ gato bhikṣubhir ucyate, sthāvira, kutas tava goṣīṣacandanamayaṃ pātram iti. tena yathāvṛttam ārocitam. bhikṣavaḥ kathayanti, sthāvira, kalpate tava pātramātrasyārthāya ṛddhiṃ vidarśayitum iti. kathayati, āyusmantaḥ, kalpatu vā mā vā. kṛtam idānīm. kiṃ kriyatām iti. etat prakaraṇaṃ bhikṣavo bhagavata ārocayanti. bhagavān āha na bhikṣuḥ āgārikasya purastāt ṛddhir vidarśayitavyā. darśayati, sātisāro bhavati. api tu catvāri pātrāṇi suvarṇamayāṃ rūpyamayāṃ vaiḍūryamayāṃ sphaṭikamayāṃ. aparāṇy api catvāri pātrāṇi rītimayaṃ tāmramayaṃ kaṃsamayaṃ abhramayaṃ ca. tatra yāni pūrvakāṇi catvāri pātrāṇi, etāny anupasthāpitāni nopasthāpayitavyāni, upasthāpitāni visarjayitavyāni. yāni paścimāṇi catvāri pātrāṇi, etāny anupasthāpitāni nopasthāpayitavyāni, upasthāpitāni tu bhāṣajyaśaravaparibhogena paribhoktavyāni. api tv adhiṣṭāni te dve pātre āyasaṃ mṛṇmayam. yāvad apareṇa samayena jyotiṣkasya grhapater divyamānuṣṭ śrīḥ prādurbhūtā. antarā ca rājagṛhaṃ antarā ca campāṃ atrāntare śulkaśālā. tasyāṃ śulkaśālīkaḥ kālagataḥ. sa vyālayakṣeṣūpapannaḥ. tena putrāṇāṃ svapnadarśanaṃ dattam, putrāḥ, yūyam etasmin sthāne yakṣasthānaṃ kārayata. tatra ca ghaṇṭāṃ baddhvā lambayata yaḥ kaścit paṇyam aśulkayitvā gamiṣyati, sā ghaṇṭā tāvad viraviṣyati yāvad asau nivartya śulkaṃ dāpayitavyam iti (yiṣyati?). tais taṃ svapnaṃ saṃbandhibāndhavānāṃ nivedya divasatīhimuhūrtena tasmin pradeśe yakṣasthānaṃ kārītam. tatra ca ghaṇṭā baddhvā lambitā.

campāyām anyatamo brāhmaṇaḥ. tena sadṛśūt kulāt kalatram ānītam. sā brāhmaṇī saṃlakṣayati ayaṃ brāhmaṇo yais tair upāyair dhanopārjanaṃ karoti. ahaṃ bhakṣayāmi. na mama pratirūpaṃ yad aham akarmikā tiṣṭheyam iti. tayā vīthīṃ gatvā karpāsaḥ kṛtaḥ. taṃ parikarmayitvā ślakṣaṇaṃ sūtraṃ kartitam. śobhanena kuvindena kārṣṇapaṇasahasramūlyā yamalt vāyitā. tayā brāhmaṇa uktaḥ, brāhmaṇa, asyā yamalyāḥ kārṣṇapaṇasahasraṃ mūlyam. grhītva vīthīṃ gaccha. yadi kaścit yācati, kārṣṇapaṇasahasreṇa dātavyā, no ced apattanaṃ ghoṣayitvā

anyatra gantavyam iti. sa tām grhītvā vīthīm gataḥ. na kaścīt kārṣāpaṇasahasreṇa grhaṇāti.
so 'pattanaṃ ghoṣayitvā tām yamalīm chatradaṇḍe prakṣipyā sārthena sārdaṃ rājagrhaṃ
saṃprasthito yāvad anupūrveṇa śulkaśālām anuprāptaḥ. śulkāśālikena sārthaḥ śulkitāḥ. sa śulkaṃ
dattvā saṃprasthitaḥ. ghaṇṭā raṭitum ārabdhā. śaulkikāḥ kathayanti, bhavantaḥ, yatheyam ghaṇṭā
raṇati, nūnaṃ sārtho na nipuṇaṃ śulkitāḥ. bhūyaḥ śulkayāma iti. tair asau sārthaḥ punaḥ
pratinivartya śulkitāḥ. nāsti kiṃcid aśulkitam. ghaṇṭā raṭaty eva. tair asau sārtho bhūyaḥ
pratinivartya pratyavekṣitaḥ. nāsty eva kiṃcit. sārthikā avadhyātum ārabdhāḥ kim yūyam asmān
bhūṣitukāmā yena bhūyo bhūyaḥ pratinivartayadhvam iti. tair asau dvidhā kṛtvā muktaḥ. yeṣāṃ
madhye sa brāhmaṇo nāsti, te 'ikrāntāḥ. anyeṣāṃ gacchatām sā ghaṇṭā tathaiva raṭitum ārabdhā.
tais te punaḥ pratyavekṣitāḥ. evaṃ tāvat dvidhā kṛtāḥ, yāvat sa caiko brāhmaṇo 'vasthita iti. sa tair
grhītaḥ. sa kathayati pratyavekṣata yadi mama kiṃcid asīti. taiḥ sarvataḥ pratyavekṣya muktaḥ. sā
ghaṇṭā raṭaty eva. tair asau brāhmaṇaḥ pratinivartyoktaḥ bho, brāhmaṇa, kathaya, naiva śulkaṃ
dāpayāmaḥ. kiṃ tu devasyaiva sānnidhyaṃ jñātaṃ bhavaṣīti. kathayati satyaṃ na dāpayatha. na
dāpayāmaḥ. tena cchatradaṇḍād apanīya sā yamalī darśitā. te paraṃ vismayam āpannāḥ,
bhavantaḥ, īdrśam api devasya sānnidhyam iti. tais tata ekaṃ vastram uddhātva devaḥ prāvṛtaḥ.
brāhmaṇaḥ kathayati yūyaṃ kathayatha śulkaṃ na dāpayāma iti. idānīm sarvasvam apaharatha iti.
te kathayanti, brāhmaṇa, nāsmābhir grhītaḥ. api devasyaitat sānnidhyam iti kṛtvā asmābhiḥ
prāvṛtaḥ. grhītvā gaccheti. sa taṃ punar grhītvā punaś chatraṇāḍikāyāṃ prakṣipyā prakrāntaḥ.
anupūrveṇa rājagrhaṃ anuprāptaḥ. sa vīthyaṃ prasāryāvasthitaḥ. tatrāpi tām na kaścīt
kārṣāpaṇasahasreṇa yācate. sa rājagrhaṃ apy apattanaṃ ghoṣayitum ārabdhāḥ. jyotiṣkaś ca
kumāro rājakulān niṣkramya hastiskandhābhir ūḍho vīthīm adhyena svagrhaṃ gacchati. tena
śrutam. sa kathayati, bhavantaḥ, kim arthaṃ brāhmaṇo 'pattanaṃ ghoṣayati. śabdayatainam.
prcchāma iti. sa taiḥ śabditaḥ. jyotiṣkeṇoktaḥ bho, brāhmaṇa, kim arthaṃ tvam apattanaṃ
ghoṣayasi. grhapate, asyā yamalyāḥ kārṣāpaṇasahasraṃ mūlyam. na ca kaścīd yācata iti. sa
kathayati ānaya, paśyāmaḥ. tenopadarśitū. jyotiṣkaḥ kathayati asty etad eva. kiṃ tu atraikaṃ
vastram paribhuktakam. ekaṃ aparibhuktakam. yad aparibhuktam, asya pañcakārṣāpaṇaśatāni
mūlyam. yat tu paribhuktakam, asyārdhatīṣyāni. brāhmaṇaḥ kathayati kim etad evaṃ bhaviṣyati.
jyotiṣkaḥ kathayati, brāhmaṇa, tava pratyakṣīkaromi. paśyati. tenāsau aparibhukta uparivihāyasā
ksiptaḥ. vitānaṃ kṛtvā avasthitaḥ. paribhuktaḥ kṣiptaḥ. kṣiptamātraka eva patitaḥ. brāhmaṇo drṣṭvā
paraṃ vismayam āpannāḥ. kathayati, grhapate, maharddhikas tvam mahānubhāva iti. jyotiṣkaḥ
kathayati, brāhmaṇa, punaḥ paśyainam yo 'sau aparibhuktaka iti, sa kaṇṭakavāṭasyopariṣṭāt
ksipto 'sajjamāno gataḥ. so 'nyaḥ kṣiptaḥ kaṇṭake lagnaḥ. sa brāhmaṇo bhūyasyā mātrayā
abhiprasannaḥ kathayati, grhapate, maharddhikas tvam mahānubhāvaḥ. yat tavābhipretaṃ tat
prayacchati. sa kathayati, brāhmaṇa, atithis tvam. tavaiva pūjā kṛtā bhavati. sahasram eva
prayacchāmīti. tena tasya kārṣāpaṇasahasraṃ dattam.

(Vaidya 1959a: 167.06-172.05)

[THT1166 + THT2976]

atha vipaśyī samyaksambuddho 'naṅgaṇaṃ grhapatim dharmyayā kathayā saṃdarśayati samādāpayati samuttejayati saṃpraharṣayati. anekaparyāyeṇa dharmyayā kathayā saṃdarśya samuttejya saṃpraharṣya prakrāntaḥ. evaṃ bandhumatā rājñā bhojitaḥ. eṣa eva grantho vistareṇa kartavyaḥ. ma kvacid bhaktottarikayā parājayati. tato bandhumān rājā kare kapolaṃ dattvā cintāparo vyavasthitaḥ. amātyāḥ kathayanti, deva, kasmāt tvaṃ kare kapolaṃ dattvā cintāparas tiṣṭhasīti. sa kathayati, bhavantaḥ, katham ahaṃ na cintāparas tiṣṭhāmi yo 'haṃ mama viṣayanivāsinam kuṭumbinam na śaknami bhaktottarikayā parājayitum. te kathayanti, deva, tasya grhapatēḥ kāṣṭhaṃ nāsti. kāṣṭhavikrayo vidhāryatām iti. rājñā ghaṇṭāvaghoṣaṇaṃ kāritam. bhavantaḥ, na kenacit madviṣayanivāsinā kāṣṭhaṃ vikretavyam. yo vikrīṇīte, tena madviṣaye na vastavyam iti. anaṅgaṇo grhapatir gandhakāṣṭhair bhaktaṃ sādhayitum ārabdhaḥ. sugandhatailena ca vastrāṇi śīmayitvā khūḍyakūṇy ullāḍayitum. surabhiṇā gandhena sarvā bandhumatī nagarī sphuṭā saṃvṛttā. bandhumān rājā prcchati, bhavantaḥ, kuta eṣa manojñagandha iti. tair vistareṇa samākhyātam. sa kathayati ahaṃ apy evaṃ karomi. kiṃ mama vibhavo nāstīti. amātyāḥ kathayanti, deva, kasyārthe evaṃ kriyate. ayaṃ grhapatir aputro nacirāt kālāṃ kariṣyati. devasyaiva sarvaṃ santasvāpateyaṃ bhaviṣyati. kāṣṭhavikrayo 'nujñāsyatām iti. tena kāṣṭhavikrayo 'nujñātaḥ. anaṅgaṇena grhapatinā śrutam rājñā kāṣṭhavikrayo 'nujñāta iti. tena cittam pradāsyā kharā vāg niścūrītā tūvan me bhaktakāṣṭham asti, yenāham enaṃ sahāmātyaṃ citām āropya dharmāpayāmīti. rājā kare kapolaṃ dattvā cintāparo vyavasthitaḥ. amātyāḥ kathayanti, deva, kim arthaṃ kare kapolaṃ dattvā cintāparas tiṣṭhasīti. tena vistareṇa samākhyātam. te kathayanti, deva, alaṃ viśādena. vayaṃ tathā kariṣyāmo yathā devas cānaṅgaṇaṃ grhapatim parājayatīti. tair aparasmin divase bandhumatī rājadhānī apagatapāṣāṇaśarkarakathalyā vyavasthāpitā candanavāripariśiktā surabhidhūpaghaṇikopanibanddhā āmuktapaṭṭadāmakalāpā ucchritadhvajapatākā nānāpuṣpāvakīrṇā nandanavanodiyānasadrśā. tatpratispardhaśobhāvibhūṣito maṇḍavāṣaḥ kāritaḥ. tasmin nānāratnavibhūṣitāsanavasanasampannaśobhāsanaprajñaptiḥ kāritā. mṛduviśadasurabhiḡgandhasampanno vividhabhaktavyaṅjanasahito divyasudhāmanojñasamkāśas trailokyaguroranurūpa āhāra upasamanvāhṛtaḥ. tato bandhumato rājñā niveditam, deva, īdṛśī nagaraśobhā īdṛśāś cāhāraḥ. prāmodyam utpādayeti. bandhumān rājā drṣtvā paraṃ vismayam āpannaḥ. tato vismayāvarjitacittasamītatir vipaśyinaḥ samyaksambuddhasya dūtena kālāṃ ārocayati samaye, bhadanta, sajjaṃ bhaktaṃ yasyedānīm bhagavān kālāṃ manyata iti. atha vipaśyī samyaksambuddhaḥ pūrvāhṇe nivāsyā pātracīvaram ādāya bhikṣugaṇaparivṛto bhikṣusamghapuraskṛto yena bandhumato rājño bhaktābhisāras tenopasaṃkrāntaḥ. upasaṃkramya purastād bhikṣusamghasya prajñapta evāsane niṣaṇṇaḥ. bandhumato rājño maṅgalyābhīṣeko hastināgo vipaśyinaḥ samyaksambuddhasya śataśalākāṃ chatram upari mūrdhno dhārayati, avaśiṣṭā hastināgā bhikṣūṇām. bandhumato rājño 'gramahiṣī vipaśyinaṃ samyaksambuddhaṃ sauvarṇena maṇivālavyajanena vijayati, avaśiṣṭā antaḥpurikā avaśiṣṭānām bhikṣūṇām. anaṅgaṇena grhapatinā avacarakaḥ puruṣaḥ preṣitaḥ gaccha bhoḥ, puruṣa, paśya kīdṛśenāhāreṇa bandhumān rājā buddhapramukhaṃ bhikṣusamghaṃ bhojayatīti. sa gatas tām vibhūtiṃ drṣtvā

vismayāvarjitamanās tatraivāvasthitaḥ. evaṃ dvitīyaḥ, tṛtīyaḥ preṣitaḥ. so 'pi tatraiva gatvā avasthitaḥ. tato 'naṅgaṇo grhapatiḥ svayam eva gataḥ. so 'pi tām vibhūtiṃ dr̥ṣṣvā paraṃ viśādam āpannaḥ saṃlakṣayati śakyam anyat sampādayitum. kiṃ tu hastinām antaḥpurasya ca kuto mama vibhavaḥ. iti viditvā niveśanam gato dauvārikaṃ puruṣam āmantrayate bhoḥ, puruṣa, yadi kaścīd yācanaka āgacchati, sa yat prārthayate tad dātavyam, no tu praveśaḥ. ity uktvā śokāgāraṃ praviśya avasthitaḥ. śakrasya devendrasyādhistāt jñānadarśanam pravartate. sa saṃlakṣayati ye kecil loke dakṣiṇīyāḥ, vipaśyī samyaksambuddhas teṣāṃ agrāḥ, dānapatīnām apy anaṅgaṇo grhapatiḥ. sāhāyām asya kalpayitavyam. iti viditvā kauśiko brāhmaṇaveśam abhinirmāya yenānaṅgaṇasya grhapater niveśanam tenopasaṃkrāntaḥ. upasaṃkramya dauvārikaṃ puruṣam āmantrayate gaccha bhoḥ, puruṣa, anaṅgaṇasya grhapateḥ kathaya kauśikagotro brāhmaṇo dvāre tiṣṭhati bhavantam draṣṭukāma iti. sa kathayati, brāhmaṇa, grhapatinā ahaṃ sthāpitaḥ yaḥ kaścīd yācanaka āgacchati, sa yat prārthayate, tad dātavyam na tu praveśa iti. yena te prayojanam tad grhītvā gaccha. kiṃ te grhapatinā dr̥ṣṭeneti. sa kathayati bhoḥ, puruṣa, na mama kenacit prayojanam. ahaṃ grhapatiṃ eva draṣṭukāmaḥ. gacchati. tenānaṅgaṇasya grhapater gatvā niveditam, ārya, kauśikasagotro brāhmaṇo dvāre tiṣṭhati āryam draṣṭukāma iti. sa kathayati gaccha bhoḥ, puruṣa, yena tasya prayojanam tat prayaccha. kiṃ tenātra praviṣṭeneti. sa kathayati, ārya, ukto mayā evaṃ kathayati nāhaṃ kiṃcit prārthayāmi, api tu grhapatiṃ eva draṣṭukāma iti. sa kathayati bhoḥ, puruṣa yady evam, praveśaya. sa tena praveśitaḥ. brāhmaṇaḥ kathayati kasmāt tvaṃ, grhapate, kare kapolaṃ cintāparas tiṣṭhasīti. sa grhapatir gāthāṃ bhāṣate

na tasya kathayec chokaṃ yaḥ śokān na pramocayet |

tasmai tu kathayec chokaṃ yaḥ śokāt saṃpramocayet || 16 || iti |

śakraḥ kathayati, grhapate, kas tava śokaḥ. kathaya, ahaṃ te śokāt pramocayāmīti. tena vistareṇa samākhyātam. atha śakro devendraḥ kauśikabrāhmaṇarūpam antardhāpya svarūpeṇa sthitvā kathayati, grhapate, viśvakarmā te devaputraḥ sāhāyām kalpayiṣyatiṣṭi uktvā prakrāntaḥ. atha śakro devendro devāṃs trāyastriṃśān gatvā viśvakarmāṇaṃ devaputram āmantrayate gaccha, viśvakarman, anaṅgaṇasya grhapateḥ sāhāyām kalpaya. paraṃ bhadram tava kauśiketi viśvakarmanā devaputreṇa śakrasya devendrasya pratiśrutya āgataḥ. prativiśiṣṭatarā nagaraśobhā nirmītā, divyo maṇḍalavāto divyāsanaprajñaptir divya āhāraḥ samanvāhṛtaḥ. airāvaṇo nāgarājo vipaśyinaḥ samyaksambuddhasya śataśalākāṃ chatram upari mūrdhno dhārayati, avaśiṣṭā nāgā avaśiṣṭānāṃ bhikṣūṇāṃ. śacī devakanyā vipaśyinaṃ samyaksambuddhaṃ sauvarṇṇena maṇivālavayajanena vījayati, avaśiṣṭā apsaraso bhikṣūṇ. bandhumatā rājñā avacarakāḥ puruṣaḥ preṣitaḥ gaccha bhoḥ, puruṣa, kiḍrśenāhāreṇānaṅgaṇo grhapatiḥ buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃghaṃ tarpayati. sa puruṣas tatra gatas tām vibhūtiṃ dr̥ṣṣvā tatraiva avasthitaḥ. tenāmātyaḥ preṣitaḥ. so 'pi tatraivāvasthitaḥ. kumāraḥ preṣitaḥ. so 'pi tatraivāvasthitaḥ. tato bandhumān rājā svayam eva tad dvāraṃ gatvā avasthitaḥ. vipaśyī samyaksambuddhaḥ kathayati, grhapate, bandhumān rājā dr̥ṣṭasatyāḥ. tasyāntike tvayā kharavākkarma niścāritam. sa eva dvāre tiṣṭhati. gaccha kṣamayeti. tenāsau nirgatya kṣamita uktaś ca, mahārāja, praviśa svahastena

pariveśaṇaṃ kuru. sa praviśataḥ. paśyati divyāṃ vibhūtim. dṛṣṭvā ca paraṃ vismayam āpannaḥ kathayati, grhapate, tvam evaiko 'rhasi dine dine buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃghaṃ bhojayitum na vāyam iti. athānaṅgaṇo grhapatir vipaśyinaṃ samyaksaṃbuddhaṃ anayā vibhūtyā traimāsyam praṇītenāhāreṇa saṃtarpya pādayor nīpatya praṇidhānaṃ kartum ārabdhaḥ yaṃ mayā evaṃvidhe sadbhūtaḥ kārā kṛtā, anenāhaṃ kuśalamūlena ādhye mahādhaṇe mahābhoge kule jāyeyam, divyamānuṣiṃ śrīyaṃ pratyanubhaveyam, evaṃvidhānaṃ dharmāṇāṃ lābhī syāṃ, evaṃvidhaṃ eva śāstāraṃ āragayeyaṃ mā virāgayeyam iti.

kiṃ manyadhve bhikṣavo yo 'sau anaṅgaṇo nāma grhapatih, eṣa evāsau jyotiṣkaḥ kulaputras tena kālāna tena samayena. yad anena bandhumato rājño dṛṣṭasatyasyūntike kharā vāg niścūrītā, tasya karmaṇo vipākena pañcaśatāni samāṭṛkaś citāyāṃ āropya dharmāpitah. yāvad etarhi api citāṃ āropya dharmāpitah. yad vipaśyini tathāgate kārāṃ kṛtvā praṇidhānaṃ kṛtam, tasya karmaṇo vipākena ādhye mahādhaṇe mahābhoge kule jātah. divyamānuṣi śrīḥ prādurbhūtā. mama śāsane pravrajya sarvakleśaprahāṇād arhattvaṃ sākṣātkṛtam. ahaṃ anena vipaśyinaṃ samyaksaṃbuddhaṃ sārddhaṃ samajavaḥ samabalaḥ samadhuraḥ samasāmānyaprāptaḥ śāstā āragito na virāgitaḥ. iti hi bhikṣava ekāntakṣṇāṇāṃ karmaṇāṃ ekāntakṣṇo vipākaḥ, ekāntaśuklāṇāṃ ekāntaśuklaḥ, vyatimiśrāṇāṃ vyatimiśraḥ. tasmāt tarhi bhikṣava ekāntakṣṇāni karmāṇy apāsyā vyatimiśrāṇi ca, ekāntaśukleṣv eva karmasvābhogaḥ karaṇīyah. ity evaṃ vo bhikṣavaḥ śikṣitavyam.

(Vaidya 1959a: 176.18-179.10)

«Bodhisattvāvadānakalpalatā»

[THT1165 + THT1548]

*tatas taṃ saṃbhramāvṛddhagatiḥ sugataśāsanāt |
kumārabhṛtyo jagrāha jīvakākhyah kumārakam ||
jināvalokanenaiva bālakagrahaṇakṣaṇe |
abhūc citānalas tasya haricandanaśītalah ||
jīvantam jvalanān muktaṃ ruciraṃ vikṣya dāraṇam |
vailakṣyena kṣapaṇakāḥ kṣaṇaṃ tasthur mṛtā iva ||
tataḥ subhadraṃ bhagavān sarvabhūtahite rataḥ |
babhāṣe vismayodbhṛantaṃ putro 'yaṃ grhyatām iti ||
sa tu dolākulamatiḥ kiṃ karomīti saṃśayāt |
kṣapanānāṃ mukhāny eva śikṣāyai kṣaṇam aikṣata ||
te taṃ ūcur na bālo 'yaṃ grāhyaḥ śmāśānavahnijah |
yatrayaṃ tiṣṭhati vyaktaṃ na bhavaty eva tadgrhaṃ ||
iti teṣāṃ girā mūrkhah sa jagrāha na taṃ yadā |
tadā kṣitipatir bālam ādāde jinaśāsanāt ||
jyotirmadhyād avāptasya jyotiṣkasadṛśatviṣaḥ |
jyotiṣka iti nāmāsyā cakāra bhagavān svayam ||*

tasya pravardhamānasya bhūpālabhavane śiṣoḥ |
deśāntaragataḥ kāle mātulaḥ samupāyayau ||
sa viditvā svasur vṛttaṁ nidhanaṁ putrajanmani |
kopāt subhadram abhyetya kampamānaḥ samabhyadhāt ||
mūrkhā kṣapaṇabhaktena tadgirā hatayoṣitā |
tvayā tyaktasvaputreṇa kiṁ nāma sukṛtā kṛtam ||
niścetanāḥ svabhāvena paramantrasamutthitāḥ |
sahanto 'pi vinighnanti vetālā iva durjanāḥ ||
adhunaiva na grhṇāsi yadi rājagṛhāt sutam |
tat te strīvadham udghuṣya kārayāmy arthanigraham ||
ity uktas tena tadbhūtyā sa bhūpatigrhāt sutam |
ānināya cirān muktam akāmena mahābhujā ||
tataḥ subhadre kālena kālasya vaśam āgate |
abhūn nidhir vibhūtinām jyotiṣko 'rka iva tviṣām ||
arthikalpadrumaḥ prāya śāṃpadaṁ divyamānuṣīm |
sa buddhadharmasamgheṣu śaraṇyeṣv akaron matim ||
tad bhaktyupanataṁ divyaratnasamcayam adbhuṭam |
pradadau bhikṣusamghebhyaḥ puṇyaratnārjanodyataḥ ||
tasya devanikāyebhyaḥ sāsācaryā vividharddhayaḥ |
svayam evāyayur veśma mahodadhim ivāpagāḥ ||
tṛṇe ratne ca samadhīr bhavagān api tadgrhe |
cakre tadanurodhena ratnapātraparigraham ||
sa divyavastrayugalaṁ yaśasām upamāḥṣamam |
prāpa puṇyapaṇakṛtāṁ nijaṁ grhaṁ ivāmālam ||

(Vaidya: 1959b I: 80.01-81.08)

[漢訳]

『根本説一切有部毘奈耶雜事』

[THT1165 + THT1548]

「爾時大師告善賢長者曰。汝可抱取火中孩子。長者猶尚觀外道面。露形報曰。仁今入火形命俱失。彼聞生怖不敢取兒。世尊復命侍縛迦。汝可火中抱取孩子。侍縛迦便生念曰。世尊不應非處非時使我為也。我今宜可取此孩兒。以無畏心。便於火內抱出孩子。是時諸天說伽他曰。

佛教令彼入火中 抱取孩兒無所畏

由佛威神自在力 能令猛焰變清池

爾時世尊告侍縛迦曰。汝向入火身無傷損。生瘡痂耶。白言世尊。我於王宮生王宮養。曾以牛頭栴檀香摩觸身體。未如今日身受清涼。佛告善賢長者。汝今可取孩子將歸。是時長者惡見壞心。仍不起信。還復迴身觀外道面。邪黨諸人同時報曰。長者此兒極是薄福。粟性兇

暴。火能食一切。此不燒者。明知定是可惡堅癭罪苦眾生。目驗共觀更無勞說。若將至舍必見災危。汝之性命定當殞歿。人間愛重無過己身。聞有災殃遂不收採。爾時世尊告影勝王曰。王今宜可取此孩兒。王遂驚忙舒手承取。周迴顧盼請世尊曰。此兒當與作何名字。佛告大王。此兒從火中得。可號火生。佛觀大眾。隨眠意樂稱機說法。時彼眾中有無量萬億眾生。得殊勝行。或得預流果一來不還。或復出家。即斷諸惑得阿羅漢果。或得煖頂忍善根。或發聲聞菩提心。或發獨覺菩提心。或發無上菩提心。或歸依三寶。或受禁戒深起信心。時影勝大王。即以孩子令八養母而供給之。廣如餘說。

時火生童子大舅。先將財物貿易他方。聞妹有娠心生歡喜。世尊與記當必生男。光隆家族。廣說如上。乃至得果。遂即易己財貨。更收餘物歸王舍城。聞妹已死便作是念。世尊授記生男得果。豈虛妄耶。顧問隣人我妹懷胎。蒙佛授記宿懷歡喜。今聞身死乖本希望。寧容世尊言非是實。隣人報曰然。佛大師言無虛妄。但由彼聲用外道言。枉殺令死。所生孩子有大威神。處炎火中身無傷損。今時長養。現在王宮。舅聞是語往善賢長者處。相問訊已。報言長者汝為非理。答曰我何所作。汝用外道惡見人言。我妹有娠枉殺令死。所生孩子有大威神處炎火中身無燒損。今時長養現在王宮。此事既爾且不須說。若將兒來我當容恕。若不爾者我當總集所有鄉親。擯斥於汝。以籌置地數汝無知。於街衢處唱汝惡響。我妹無過善賢枉殺。害女人者不應共語。於法官處以罪相刑。長者聞已生大憂苦。便作是念。如說苦詞必不相放。便詣影勝王所禮足。白言大王。具說前事。乃至以罪相刑。唯願垂恩放出童子。王曰。我不從汝得童子來。是佛世尊親授於我。汝若須者可往問佛。長者即便往詣佛所。禮雙足已白言。世尊。我有親屬苦相責及。廣說其語。乃至以罪相刑。願佛慈悲與我童子。世尊念曰。若此長者不得兒者。便嘔熱血以取命終。遂告具壽阿難陀曰。汝今可往影勝王處。并將長者。汝傳我語願王無病。報言大王。可還長者火生童子。若彼長者不得童子。必嘔熱血以取命終。是時尊者阿難陀。具傳佛教詣王白知。王言尊者。為我畔睇世尊足下。如佛所教我當奉行。時阿難陀。願王無病辭之而去。王告長者曰。我承佛教養此童子。情甚憐愛。共作要期然後放出。日別三時來見我者隨意將去。長者答曰。不敢違命。時王即便令著上衣具服瓔珞。載以香象送至其家。人間常事若父在者子名不彰。後長者死。火生童子自知家務。於三寶所深起敬心。便於其父害母之地。造立僧房。受用資具無不充足。施與四方一切僧眾。名曰睪腹林。是故經云。佛在王舍城住睪腹林時善賢長者。曾遣商人他方興易。彼聞長者今已身亡。火生童子代知家業。於三寶所敬心彌著。商人多獲牛頭栴檀上妙之鉢。便持一鉢盛滿珍寶。遣使送與火生。彼既得已置高幢上。宣令普告。若有諸人。不用梯墮而取此鉢。或是沙門婆羅門。有大威力神通自在。而取得者。我以此鉢施與其人。時諸外道晨朝起已。出行澡浴。見高幢已告長者曰。此是何物。長者即便具告其事。外道答曰。長者比來敬釋迦子。彼當取耶言訖辭去。時有眾多耆宿苾芻。入城乞食見彼高幢。咸問長者此是何物。彼便具答。苾芻報曰。我豈為鉢自顯己能。如佛所言殺善彰惡是出家行。捨之而去。時具壽十力迦攝波。從此而過。亦問長者此是何物。彼還具答。于時尊者便作是念。我從無始生死已來。所有長養煩惱怨家。我已變吐悉皆棄捨。我今宜可受彼長者普請因緣。滿其所願。即便舒手如香象鼻。至彼幢標取栴檀鉢。持還住處苾芻見問。尊者何處得此牛頭栴檀殊勝鉢來。彼便具以其事告諸苾芻。諸苾芻答曰。尊者豈可為斯木鉢現神通耶報言具壽。合與不合我已作訖。今欲如何。

諸苾芻以緣白佛。佛言。苾芻不應於俗人前現其神力。若顯現者得越法罪。然鉢有四種。金銀琉璃頗梨所成。復有四鉢。所謂鍮石赤銅白銅諸木。前之四鉢。若先無者不應輒受。若先有者應須捨棄。後之四種。若先無者即不應畜。若先有者應作藥盂隨時受用。合守持鉢。有其二種。謂鐵及瓦如是應知。

後於異時火生童子。人天妙相悉皆出現。從占波城乃至王舍。於此中間有輸稅處。稅官身死生藥叉中。遂於夜夢告其子曰。我身死後生藥叉中。可於某處稅物之所。為我營葺藥叉神堂。於其門前懸一鈴鐸。若有諸人持物過時。不輸稅者鈴便震響。即喚令迴取直放去。其子他日於諸親族說其夜夢共觀要處。安置神堂外懸鈴鐸。時占波城有婆羅門妻。遂作是念。此婆羅門隨處經紀。所獲財物我常食用。端拱而坐不事生業。是所不應遂往市中。買取劫貝燃成細縷。於織師處令其好織。直千金錢既得一雙疊已。報其夫曰。此之白疊直千金錢。可往市中賣取其價。若有買者善。若無人問。報曰市上無人更向餘處。其夫持去市中賣之。言索千錢竟無酬價。便即唱言市無人物。即以其疊。內於傘柄竹箒之中。共諸商旅詣王舍城。漸至神堂藥叉稅處。與諸人眾同輸稅已。既欲登途懸鈴響發。稅官聞已共相告曰。鈴既發響稅物未周。宜更審觀無令脫漏。更迴商旅子細搜求。遍察貨財無不稅者。遂放商人。鈴還發響。復更觀察詳審再三。商人怪之各生嫌恨。報稅官曰。汝欲劫我方便攔留。是時稅官分彼商人以為兩。處於一朋中無婆羅門者無聲放去。彼一朋去。鈴還作聲。復分二朋如是去留。商人皆盡唯婆羅門一人獨住。稅官執捉不許前行。婆羅門曰。察我緣身有物隨取彼遍搜已無物放行。鈴更發聲復還捉住。報言婆羅門。汝縱有財我不取分。應為實語勿誑靈祇。我欲表知神明是聖。婆羅門曰。言不虛者我當實報。於傘柄中抽出雙疊。稅官見已驚歎希奇。善哉大神記不虛妄。時彼稅官取其一疊。開與神披。婆羅門曰。君等明言不取稅直。今看形勢總欲奪將。報言勿怖我不取物。欲表大神言無虛妄。暫將一疊用報神恩。即還汝去。彼既受已內傘箒中。隨路而去。漸至王舍城向大市中。舒張其疊索千金錢。竟無一人來共酬直。便於市中唱言無市。時火生童子從王宮出。乘大象入市中欲歸本宅。聞唱令聲問其何故。唱言無市。喚來我問。婆羅門至。問言何故云城無市。婆羅門言。我有雙疊價直千錢。竟無一人共相酬酢。報言將來試為觀察。彼便呈現。火生報曰。一疊是新一疊曾著。曾著者酬二百五十。其未著者酬五百錢。疊主報曰。何意如此。並未曾用。火生曰。令汝自觀驗知虛實。將未用者開擲空中。如蓋而住徐徐而下。次擲用者即速墮地。疊主見已心生希有。報言長者。仁有大智神叡超群。火生童子復更報曰。其未用者置棘刺上不入而過。其曾用者被針網住。如言有實。時婆羅門更生希有。報言長者聰明智識。實未曾有隨所酬直。取疊將歸。火生報曰。仁是客行。聊申供養無勞減價。總取千錢。」

(T.24, no. 1451, 212c16-214b23)

[THT1166 + THT2976]

「爾時世尊為彼長者。說微妙法示教利喜。稱機法已從座而去。時彼國王次當設供。便即營辦種種供養廣如前說。乃至從座而去。如是更番設妙供養。竟無優劣。時彼國王見是事已。以手支頰懷憂而住。時諸大臣見王憂色白言。提婆何故憂悵。答言今我寧得不憂。於我國內寄住之客。設供佛僧我不能勝。故懷憂耳。大臣白言。天分長者家內無樵買而作食。販柴人等皆勿聽賣。蒸薪既乏辦食無緣。王便宣令。我國中人勿賣柴草。若有犯者當出我國。時彼

長者至設食日求柴不得。便用家內栴檀香木。以將炊爨。復以香油塗其疊布。用煮餅食。由是香氣遍滿城中。王怪問曰。何故今日香氣氤氳異於常日。從何而至。諸人以事具白於王。王言我今可無此事。大臣諫曰。王今何故作如斯事。長者家中更無子息。身死之後物並入官。得作如斯隨情費用。王今宜可還令賣薪。即便許賣。長者聞王許賣薪草。生忿怒心出惡語曰。隨我家中現有香木。令王并母一處梵燒。次於他日王故懷憂。諸臣重問王同前答。臣曰願勿懷憂我作方便。令彼設供不及大王。王設供日。諸臣即便於其城內。除去瓦礫掃拭街衢。遍灑香湯燒香普馥。幢幡綵蓋處處皆懸。散以名花無不充布。莊嚴可愛如歡喜園。次造食堂宏壯雅麗。復安食座眾寶嚴儀。於其座上覆以綵綵。塗香末香在處塗拭。上饌細軟如天甘露。種種滋味超世珍羞。敬奉佛僧盡心供養。時諸大臣共白王曰。我等隨力共作如是。嚴飾城隍辦其盛饌。王今宜可發起歡心。王自親觀極生希有。即命使者詣世尊處。白言食辦願佛知時。佛及大眾各持衣鉢。至彼王宮詣設食處。就座而坐。其王遂令灌頂大象。持百支傘蓋佛世尊。自餘諸象各持一蓋。以蓋苾芻。國大夫人親持寶扇。為佛招涼。自餘內人扇苾芻眾。王及大臣親持供養。奉佛及僧廣如上說。時天分長者遂告家人曰。汝今可詣王設供處。竊觀飲食龜細如何。使者既至觀其盛饌。遂乃忘歸。第二第三使皆不返。是時長者親自往觀。見彼盛設深歎希有。便作是念。此諸妙供力辦可成。象及宮人我何能得。作是念已便還本居。告守門人曰。汝若見有乞人來至。須者皆與勿令輒入。長者入室懷憂而住。時天帝釋。常以天眼觀察世間。見天分長者室內懷憂。察知彼心便作是念。世間福田佛為第一。作大施主天分為先。我今宜應共彼相助。即自化作婆羅門像。至長者門。告守門人曰。汝今宜往白大長者。有僮尸迦種大婆羅門。今在門外須欲相見。門人告曰。長者令我禁守其門。見有乞人。須者皆與勿令輒入。必有須者隨意將去。何勞要見長者之身。彼人報曰。我無所求。然有要緣須見長者。使者遂入白言。外有僮尸迦種大婆羅門。云無所求須見長者。長者報曰。可語彼人。若有所求隨意將去。何須強欲見我身耶。白言大家如所教言。我已報訖。彼云我有要緣須見長者。告門人曰。若如是者可使入來。門人引入。時婆羅門。既見長者懷憂而住。問言長者。何緣以手支頰似帶憂容。長者聞已說伽他曰。

若人能解憂 斯人可共語

如其憂不解 共語欲何為

時天帝釋問言。長者有何憂事。我有方便能為解除。長者即便具說前事。時天帝釋即復本形。告言長者。我令上巧妙天來相借助。作是語已隱形而去。時天帝釋既至天宮。告巧妙天曰。汝今可往瞻部洲中。與天分長者共相借助。答曰善哉。時巧妙天即於明日。至彼城中隨情變化。莊嚴衢路奇巧超絕。種種莊飾倍勝於王。食堂坐具妙成天巧。所有飲食並是天厨。令大象王持百支傘蓋毘鉢尸佛。其餘諸象持蓋苾芻。舍之天女手執金扇為佛招涼。自餘天女扇苾芻眾。時彼國王遣一使者竊往觀察。看長者供養其狀如何。其使往觀見其奇異。遂便忘返。復遣大臣還同前往。後令太子亦復不來。王怪其事即便自往至彼門所。爾時世尊遙見王已。告長者曰。此是國王已見真諦。汝於彼所出僞惡言。今在門外汝往求謝。長者遂出求謝於王。白言大王。今請暫入自手供養。王即入見上妙天厨。極生希有。告長者曰。仁今宜可於日日中供佛僧眾。非我所望。時彼長者。既作如是奇妙盛饌供佛僧已。頂禮佛足而發願言。我今供養最上福田。願此勝因我於來世。常得生在大富貴家。珍財豐足受天妙相。獲殊勝法出離

蓋纏。如是大師我當承事心無有厭。汝等苾芻勿生異念。往時天分長者即火生是。由於彼王出龜惡語。以梅檀火母子同燒。由彼業力。於五百生中與母同處被火所燒。乃至今時同燒一處。由於毘鉢尸佛作上供養又復發願。由彼業力。常得生在大富貴家。財寶豐盈。天諸妙相自然而出。於我法中出家修行。斷盡諸惑得阿羅漢果。汝等苾芻我與毘鉢尸佛。神通道力悉皆平等。若於我所。供養承事生殷重心。必獲勝果如是應知。若純黑業得純黑報等。廣如上說。」
(T.24, no. 1451, 216b09-217b18)

『佛說光明童子因緣經』

[THT1165 + THT1548]

爾時世尊即告善賢長者言。長者。汝今收此童子。護持養育。時外道尼乾陀。竊觀長者面相已。謂言。長者。焚尸火中。忽出童子。於一切事。皆不吉祥。汝今不應收歸養育。時善賢長者。即不肯受。是時佛告壽命童子言。汝宜收此童子護持養育。時壽命童子。先審思已。後白佛言。於我舍中。無處容受。設得此子。非我所宜。時善賢妻。焚燒已竟。以佛光明威神力故。火自息滅。於剎那間。天降細雪。自然清冷。收置餘薪。淨其焚地。是時火中。出者童子。安然而住。于是世尊普告壽命童子等言。汝等有正信者。勿學外道邪異誑亂。當住正念。壽命童子白佛言。世尊。我於王族生。亦於王族老。我身清淨。猶如牛頭妙栴旃香。等無有異。我實不知外道邪異誑亂等事。是時世尊。又復告彼善賢長者言。今此童子。是汝之子。汝可收歸護持養育。彼善賢長者。邪見堅固。不行正道。即時又復竊觀外道尼乾陀面。彼外道言。善賢長者。汝宜審思。今此童子。火中遺殘。大不吉祥。雖火不燒。而相豈善。汝若收歸。決定令汝家族破壞。又復於汝命不相益。及於汝身為多損惱。凡所欲事。不得和合。深自籌量。無宜後悔。長者聞外道言已。復不肯受。

爾時世尊即謂頻婆娑羅王言。大王。汝今收此童子。王宮養育。時頻婆娑羅王。受佛教勅。即速起身曲躬伸手取其童子。普遍觀瞻已。即白佛言。我依佛勅。收歸王宮。然此童子。作何名字。願佛世尊。善為安立。佛言。大王。今此童子。從火中得。應為立名號火光明。爾時世尊。於大眾中。以此童子。付授頻婆娑羅王已。即時觀察審知頻婆娑羅王。及諸會眾。若體若性。心所樂欲。如其所應。廣為說法。是諸會眾。得聞法已。中有多百人。發起最上清淨正信。有證須陀洹果者。有證斯陀含果者。有證阿那含果者。有證阿羅漢果者。有能進發煖位善根者。有能進發頂位善根者。有能進發忍位善根者。有發聲聞菩提心者。有發緣覺菩提心者。有發阿耨多羅三藐三菩提心者。有發歸依攝受心者。有於學句起攝受心者。如是會眾。以佛功德及正法力。眾和合事。隨其所應。咸得利益。爾時頻婆娑羅王。即離佛會。將此童子。還復王宮。是時大王。召八宮嬪。以為八母。二為養母。使令恩養。二為乳母。使令乳哺。二為淨母。使令灌浣。二為戲母。使令伴習戲玩。如是王勅八母。付其童子。自乳哺中。至於成長。或乳或食。及餘所須。於晝夜中。撫摩恩育。無令闕失。後漸長成。如清淨池一蓮秀出。愛護存惜。其義亦然。乃至後時。光明童子。有一舅氏。久持財物。出外商販。漸歷歲年。未由還復。忽於一時。外聞人說。我妹懷妊。佛為記說。定當生男。其後生已。家族富盛。最上吉祥。現於人中受天勝福。乃至最後。於我法中出家學道。斷諸煩惱。證阿羅漢。時彼舅氏。聞此語已。即速聚收商販財物。涉遠齎持。還歸自舍。既至舍中。知

妹已歿。悲號啼泣。審自思惟。外先所聞佛記我妹定當生男。乃至斷諸煩惱。證阿羅漢。今妹既歿。佛虛設言。豈佛世尊亦妄說邪。作是念已。即往隣家。詢問其故。謂隣人言。我出外方商販始還。先聞人說。我妹懷妊。佛為記言。定當生男。其後生已。家族富盛。最上吉祥。現於人中受天勝福。乃至最後。於我法中出家學道。斷諸煩惱。證阿羅漢。我聞是說。歡喜而歸。泊至家中。妹已亡歿。佛所設言。豈非虛妄。是時隣人。即謂舅氏。說伽陀曰。

星月可處地 山石可飛空

大海可令枯 佛語誠無妄

時彼隣人說伽陀已。復謂舅氏言。世尊所說。實無虛妄。汝妹亡歿。然有其因。以善賢長者信外道言造殺害業。由殺因緣汝妹亡歿。光明童子有大威力。火不能燒蓮華中出。而今在彼頻婆娑羅王宮中養育。是時隣人。具以前事。告其舅氏。

時彼舅氏。聞此語已。即還家中。謂善賢長者言。長者所為。不依理法。以何事故。我妹致終。然我審知我妹懷妊。汝設計謀。不全生產。汝以邪見。信受外道。起殺因緣。殺害我妹。光明童子有大威力。火不能燒。蓮華中出。今在王宮。此實非理。汝可速詣王宮於今日中取童子歸。斯為甚善。若不然者。我必與汝作不和合。我即當持白灰。於街巷路陌四衢道中。乃至隨處。遍散其地。普令地白。使人驚異。我當唱言。善賢長者。殺害女人。我妹先因此人壞命。光明童子。今在王宮。王亦今時作無義利。我於隨處。必作此說。汝自籌量。無貽後恥。爾時善賢長者。聞此語已。心生憂惱。作是思惟。如舅氏說。將非實邪。若實然者。我必懷慚。作是思惟已。即詣王宮。既至王所。跪拜伸敬。具以前事而白王言。大王。我尚輕小。王最勝上。若不與其童子。恐謗於王願王今時與此童子。王言。長者。我本無心取此童子。是佛世尊。付授於我。若非佛勅。我豈取邪。汝若欲取此童子者。今自宜應往詣佛所。具陳斯意。是時善賢長者。即出王宮。往詣佛所。到已白佛言。我有親屬。從外來歸彼謂我言。光明童子。今在王宮。於今日中。速令取歸斯為甚善。若不然者。彼不和合。乃至當於四衢道中。唱言善賢殺害女人。我妹先因此人壞命。光明童子。今在王宮王亦今時作無義利。我以是事。適詣王宮。取彼童子。王言。先因佛令收養。故我來此。願佛令王還我童子。爾時世尊知是事已。觀其善賢長者。今時若不得此童子。苦惱逼心。無有是處。定當嘔血而趣命終。佛大慈悲。為作救護。即告尊者阿難言。阿難。汝可往詣頻婆娑羅王宮。如我辭曰。佛問大王得無病不。今有一事。當聽佛言。善賢長者。來取光明童子。王今宜應速當授與。善賢長者。若不得此童子。苦惱逼心。無有是處。定當嘔血而趣命終。王悉是事。應如佛言。是時尊者阿難承佛聖旨。即時往詣頻婆娑羅王宮。到已見王。如佛辭曰。佛問大王得無病不。今有一事。宜聽佛言。善賢長者。來取光明童子。善賢若不得此童子。苦惱逼心。無有是處。定當嘔血而趣命終。大王應悉是事。宜速付授。爾時頻婆娑羅王。受佛勅已。即作是言。大德尊者。迴至佛所。願傳我語。頻婆娑羅王。稽首世尊足下。致敬問訊世尊。如佛教勅。我已聽受。是時尊者阿難即出王宮。迴至佛所。具如王言。白佛世尊。時頻婆娑羅王。即速宣召善賢長者。到已謂言。善賢。今此童子。久在宮中。護持養育。八母看侍。乳哺依時。我心愛憐。過甚親子。今雖佛勅還付於汝。然汝亦當體我心意。日日三時。汝自將來。我欲觀視。善賢長者。敬受王命。即白王言。我受王勅。敢不遵承。日日三時。將詣王所。是時頻婆娑羅王。即以眾寶妙莊嚴具。鉸飾大象。令光明童子乘此寶象。別勅臣佐。

而令伴送至長者舍。而後長者。日日三時。送至王宮。王親觀視。光明童子。凡所施作。皆如理法。乃至後時。其父善賢。趣命終已。光明童子。即為家主。既嗣家業。轉復精進。信佛。信法。信苾芻眾。歸佛。歸法。歸苾芻眾。其父善賢長者。於此方處。先造殺業。光明長者。今為其父。修營福事。乃於自舍。常時備辦。四事豐足。承事供給四方苾芻。乃至將來結集世尊正法藏者。上首耆年。諸大聲聞。亦常供給所須供養。光明長者。於王舍城。修如是等。種種福事。悉為其父。而作利益。爾時有一商客。是彼善賢長者。先同商販。故舊伴侶。久在外方。商販未還。素念此人不造善業。又復聞知今已亡歿。子名光明。嗣為家主。其光明長者。信佛。信法。信苾芻眾。歸依三寶。如理所作。時彼商客。聞是事已。傷念善賢。慶快光明長者。即以上妙牛頭旃檀之香。造一大鉢。滿盛眾寶。遠從外方。遣人持來。遺彼光明長者。以為信記。又令來人傳如是言。所願長時記念不忘。是時光明長者。即以呪句。而加護之。其呪所謂。

計那唧呬吒夜嚩(一句)室吒夜嚩(二)羯哩迦吒計那嚩(三)乞哩係怛咩(四)。

說此呪已。復作是言。如是寶鉢。若沙門。若婆羅門。若大威力諸神通者。當受此鉢。如應得樂。如是加持已。即持此鉢。出王舍城。先於路左。立一大柱。綵繪莊飾。上復懸鈴。置鉢於下。永為標記。是時有諸外道。如彼常法。於明旦時。詣河洗浴。經由路次。見此寶鉢。即時問彼光明長者言。長者。汝安此鉢。當何所用。光明長者。具以元因告諸外道。彼外道言。諸有清淨沙門釋子。堪受此鉢。餘無力能而堪受者。外道言已。隨處而散。乃至後有耆年大德諸苾芻眾。入王舍城。持鉢乞食。亦於路左。見此寶鉢。即乃問彼光明長者言。汝安此鉢。當何所用。光明長者。亦以元因。廣如前答。諸苾芻言。長者。今此寶鉢。非我等受。當持奉佛。即能增長善利。滅諸罪垢。時諸苾芻如是言已。隨處而散。

爾時尊者。十力迦葉。遊行到彼置寶鉢所。見是事已。即詣光明長者舍。問長者言。汝置寶鉢於其路左。當何所用。光明長者。即以前緣。具白尊者。是時十力迦葉。作是思惟。我聞善賢長者信重外道先造殺業。光明長者。今於此地為作福事。我今不應棄此鉢去。宜現神力。令光明長者。圓滿志願。作是思惟已即以神力。舒其右手。譬如壯士屈伸臂頃。取其寶鉢。持還所止。時諸苾芻。見十力迦葉持寶鉢來。咸共白言。尊者。汝於何處。而得此鉢。十力迦葉。具以前事。告諸苾芻。時諸苾芻又復白言。尊者。汝為此鉢故。所現神力。如法儀不。十力迦葉言。諸苾芻。設如法儀。不如法儀。我已施作。今復云何。時諸苾芻。具以其事。即共白佛。佛告諸苾芻言。若非時處。及無義利。不應輒現神力等相。所現非宜。必生過失。爾時世尊。即以神力。化出四鉢。一金。二銀。三吠瑠璃。四頗胝迦。化此四已。又化四鉢。一鍤石。二赤銅三白銅。四木。如是化已。將前四鉢。次第安布。將後四鉢。亦復安布。一一鉢中。滿盛上好可食香藥。送置一處。令苾芻眾所應受者隨意而取。於後佛攝神力。鉢亦不現。乃至後時。光明長者。天中勝福。吉祥相現。殊異等事。時時自出。是時王舍城。瞻波國。二界中間。有標記柱。彩繪莊飾。下有二鉢。一鐵。二瓦。是鉢先加持已。安置於此二界。不遠有一稅場。諸商販者。輸納王物。有一守稅人。諸子眷屬。財帛具足。然不修善。於稅場所。而忽命終。作大惡夜叉。亦在彼方。守護稅場。諸子一夜夢夜叉言。可於彼地標記柱上懸一大鈴。凡諸商人。經此稅場。若有稅物隱而不納。其鈴自動。守稅人知。即速追集。重復搜檢。獲所稅已。而乃放去。諸子得夢。至明旦時。即與親屬。往稅場

側。尋見其柱。乃依所夢。懸鈴於上。爾時瞻波國中。有一居家婆羅門。名曼鞞怛謨。營貿為業。忽於一時。與自妻室。同在一處。妻謂夫言。我今共汝營謀家業。滋彼財穀。以備所須。豈可安然都無營作。汝今宜應往市肆中。買氈華藥極妙好者。我當為汝織成白氈。持出貿易。豈無利耶。時婆羅門。如其妻言。買得持歸。妻乃設以機織之具。次第敷置。緝織其氈。是藥細軟。妙好無比。布以經緯。緻密細均。如是勤力。織成其氈。即謂夫言。今此白氈。上妙細軟。價直千金。汝可持出外。若有人酬千金價。當可授與。其或價直不滿千金。汝應隨處。可出輕言。是處無人而能辯識此妙細氈。唱是言已。即當持往他處貿易。爾時曼鞞怛謨婆羅門。具如妻言。持此細氈。入市貿易。竟無有人酬千金者。憶妻所說。乃唱是言。瞻波大城。無有一人識此細氈。言已持歸。與妻同議。此既無人酬是價直。宜往他國。必有識者。更相告已。時婆羅門。復將一段曾所著者。同前新氈。置傘柄中。隨商人眾。隱覆而行。漸出本國。適王舍城。經彼二界所有稅場。是諸商人。既至彼已。置隨行物。聚集一處。時守稅人。次第搜檢。彼諸商人。即各以其所應稅物。輸納於王。眾中唯有曼鞞怛謨婆羅門。隱覆先置柄中白氈。而不輸納。獨在一面。是時稅場之側。先所安立標記之柱。其所置鈴。自然作聲。彼守稅人。即知眾中有隱稅者。乃謂商主言。今此柱上鈴自作聲。非風吹動。非人搖擊。我已審知。汝此眾中。豈非有人隱覆稅物不輸納邪。時守稅人。即速呼集。重復搜檢。於此眾中。不見一人有其稅物隱不納者。時諸商人。互相知悉無稅物已。咸欲前進。鈴又作聲。如是數四。累細檢覆。無隱稅者。商主乃謂守稅人言我此眾中。無隱稅者。必是他眾私隱前去。作是言已。眾共僉議。謂是此一婆羅門。隱覆稅物。乃至最後。彼守稅人。於曼鞞怛謨婆羅門處。執而不捨。堅求其稅。時婆羅門言。汝今何故而相謀執。汝已顯見我實無物。若有少物隱不納者。罄我所有。悉以輸稅。作是言已。鈴又作聲。時守稅人。祇於此婆羅門處。委細搜檢。乃謂彼言。咄婆羅門。汝今何故。堅隱稅物。而不肯納。汝今聞此鈴聲頻震。是事希有。汝今當知。此柱之下。必有天神。而作加護。汝宜輸物無自貽咎。婆羅門言。天神加力。我信是實。言已於傘柄中。出其白氈。示守稅人。作如是言。此即是我所隱稅物。汝宜收之。時守稅人。受此氈已。謂婆羅門言。既不輸王。非我所受。迴奉天神。言已持氈掛於柱上。復謂婆羅門言。我已掛氈。奉彼天神。汝或欲者。當自取之。時婆羅門。即取其氈。而乃前進。於一靜處。亦復如前安傘柄內。隱覆而行。漸次入於王捨城中。時婆羅門。顯張其氈。貨於市肆。冀望有人酬千金價。如是周行。竟無有人酬千金者。時婆羅門。作是唱言。王舍大城。無人辯識此妙細氈。唱是言時。光明長者。乘以寶象。方從王宮。還歸自舍。適聞此語。而忽驚愕。即時暫住。謂婆羅門言。汝今何故於此城中。出輕易語。彼婆羅門。即時無答。光明長者言。汝宜具說此事元因。婆羅門言。我從本國。持此二段上妙細氈。而來貿易。若人酬我千金價者。我即與之。我已周行。無人酬價。光明長者言。汝可持來。我暫觀視。時婆羅門。即隨長者。至於舍中。乃展其氈。示於長者。長者見已。即能辯識。乃謂婆羅門言。今此二氈。一新一故。故者酬汝五百金錢。婆羅門言。長者所酬。其價未當。光明長者言。我今現見。此是故物。浣濯乃新。長者即時將此故氈。於重樓上。自空投下。其氈體重。即速墜地。光明長者。復謂婆羅門言。餘一新氈。我欲觀視。時婆羅門。即取新氈。持授長者。長者觀已。亦復如前。向空投下。其氈體輕。良久徐徐方乃墜地。彼婆羅門。即生信重。乃作是言。光明長者有大威力。今此細氈。若新若故。我悉奉汝。不取

其價。汝當受之。長者答言。我家巨富。汝歷艱辛。安可無名受汝此物。我今各與汝千金錢。
齧我二髻。」
 (T14, no. 549, 857c17-861a20)

[THT1166 + THT2976]

「爾時毘婆尸佛。為積財長者。如其所應。宣說法要。示教利喜。長者得聞法已。心大歡喜。頂禮佛足。積財長者。如是供養已。佛出其舍。爾時滿度摩王。尚於宮中。營辦飲食。求勝長者。乃謂侍臣言。我此宮中。眷屬嬪御。而甚廣大。何人善為營造勝上殊妙飲食。而能勝彼積財長者。侍臣白言。大王但當禁止諸賣薪者。而彼長者自不能辦供佛之膳。王如其言。即令禁止。若固賣者。不應住我國中。時積財長者。聞有教勅禁賣薪者。心生忿恚。即作是言。今我舍中。自有香木。何須彼薪以焚身邪。是時長者。舍中先燃香木。及以香油。營造飲食。是香普薰彼大城中。滿度摩王。聞是香已。問侍臣言。今此妙香。從何所來。侍臣白言。此是積財長者。燃以香木。營造飲食。是彼餘香。來至於此。王聞是語。知佛已赴長者所請。轉復愁惱。謂侍臣言。今我宮中。何無香木。侍臣白言。市無香木。其何能得。大王當知。彼積財長者。家雖巨富。而無子息。一旦終歿。必無繼嗣。凡彼所有。悉歸於王。時滿度摩王。雖聞是語。亦復不悅。臣白王言。大王且止愁惱。王當別日請佛供養。如王所欲。我悉能令勝彼長者。爾時臣佐作是言已。即於滿度摩底城中。悉令除去一切沙礫不淨等物。以旃檀香水。灑令清淨列淨水瓶。焚諸妙香。以真珠寶。交錯垂布。立諸幢幡。散種種華。猶如天中歡喜之園。等無有異。清淨莊嚴。眾寶具足。敷置種種妙寶之座。營辦廣大。細軟甘美。種種上味。清淨飲食色香具足。如天蘇陀悅意上味。如是飲食。所應供養三界中尊。既安布已。時諸臣佐。俱白王言。今此大城。內外清淨。種種莊嚴。上味飲食。悉已成辦。願王請佛。飯食供養。時滿度摩王。見是事已。心生歡喜。即遣使者。詣毘婆尸佛所。而白佛言。飯食已辦。食時亦至。願佛降赴。今正是時。爾時毘婆尸佛。與苾芻眾。食時著衣。執持應器。詣滿度摩王宮。受其供養。到已佛先洗足。處於最上妙好之座。諸苾芻眾亦各洗足。次第而坐。時滿度摩王。即持寶吉祥瓶。自佛已降。遍行淨水。以佛神力故。有吉祥龍。自然住空。持百傘蓋。覆佛世尊。及苾芻頂。王第一妃。執其珠金眾寶莊嚴上妙寶扇侍立佛側。餘諸宮嬪。亦執寶扇。侍苾芻側。時滿度摩王。前禮佛足。禮已即持上味飲食。躬奉世尊。然後各各。奉諸苾芻爾時積財長者。知佛亦赴滿度摩王所請。即時遣人。潛詣王宮。觀其敷設莊嚴飲食等事所作何若。是人至彼。具見殊勝。食止不還。如是累遣人去。亦復不還。最後長者即亦自往。至王宮已。備見莊嚴供養等事。乃自思惟。今王宮中。如是敷設。不知何人而能辦作。我家何故無能此者作是念已。還歸自舍。謂守庫人言。汝可取諸金寶置於門首。有來求者。隨意當與。勿須引入。我不能見。時積財長者。作是念已。即入舍中。寂止一處。楮頤不悅。是時帝釋天主。以淨天眼。見是事已。乃作是念。今此界中。積財長者。布施供養毘婆尸佛。是為上首施主。彼心淨信。我宜變身助其營造。作是念已。隱帝釋天主身。現婆羅門相。詣積財長者所。到彼舍已。謂守門人言。汝可入告長者言。有僑尸迦族婆羅門。今在門外。欲見長者。守門人曰。長者有言。凡有來者。不應引入。或有所求。隨意當給。汝婆羅門。若有所欲。宜自持去。何故須求見長者耶。婆羅門言。我於諸物。都無希取。然今但欲求見長者。汝宜為我速入通達。時守門人。即入白言。有一僑尸迦族婆

羅門。今在門外。欲見長者。長者告言。汝可謂彼婆羅門曰。若有所求。自當持去。何故須欲求見我耶。時守門人。即出具告。婆羅門復言我無所求。唯欲與彼長者相見。時守門人。再白長者。於是長者。許其相見。婆羅門入已。白長者言。汝今何故楮頤不悅。有何憂愁。爾時長者。說伽陀曰。

我不說憂事 說亦不能脱

若令我得脱 我即為汝說

時婆羅門言。汝但具說憂愁所因我必為汝善解其事。時積財長者。具說所因已。彼帝釋天主即攝婆羅門相。還復本身。謂長者言。我是帝釋天主。我今當遣毘首羯磨天子。來助於汝。營辦勝上飲食供佛。作是語已。隱復天宮。即勅毘首羯磨天子言。汝往積財長者舍。潛助營辦供佛之事。不亦善乎。時彼天子。奉帝釋命。潛助長者。乃以神力。即變大城。悉令清淨。如天境界。敷設種種上妙珍寶嚴飾之具。天諸寶座。天妙飲食。皆悉具足。有愛囉嚩努龍王。自然住空持白傘蓋。覆於佛頂。餘吉祥龍。各持傘蓋。覆諸苾芻頂。有天童女。執金寶莊嚴最上寶扇。侍立佛側。餘諸天女。各執寶扇。侍苾芻側。時積財長者。即持種種上味飲食。躬自奉上佛及苾芻。時滿度摩王。即謂使者言。汝可潛詣積財長者舍。觀其敷設莊嚴飲食其事何若。使者奉命。即潛詣彼。具見莊嚴殊異等事。見已忘還。復遣近臣去。亦不還。遣大子去。亦復不還。乃至最後王自詣彼。潛立門側。爾時毘婆尸佛。知王在外。即謂長者言。汝先因滿度摩王。發不善語業。斯為罪咎。其王今在汝舍門外。汝可速出悔謝其過。長者即出。見其王已。悔過自責。迎王前入。王入舍已。具見種種天妙莊嚴及飲食等。見已悉忘前事。乃謂長者言。汝所供佛。勝上若此。如能日日如是供養佛及苾芻。斯無等比。時積財長者。起清淨心。前禮佛足。發是願言。願我以此。如實布施佛及苾芻。所作善根。當生獲得大富自在。一切具足。所生之處。得於人中現受天福。不起多食。具離貪行。願如今日。得善法利。值佛正法。歸佛出家。發是願已。毘婆尸佛。及苾芻眾。即住長者舍。安居三月。爾時釋迦牟尼佛。告諸苾芻言。於汝意云何。爾時毘婆尸佛法中。積財長者。豈異人乎。今光明苾芻是也。彼時於滿度摩王所。出不善語業。由是因故。果報無失。於五百生中。與母同其火焚。乃至今生。亦復如是。然於毘婆尸佛所。先種善根。及發大願。今已成熟。為大富長者。一切具足。現於人中。受天勝福。所作善利。乃至威力等事。與彼毘婆尸佛時。等無有異。而今最後於我法中。出家學道。斷諸煩惱。證阿羅漢。諸苾芻。以是因緣。汝等當知。一切眾生。若造一黑業因。決定當受一黑業報。若造一白業因。決定當受一白業報。是故諸苾芻。若黑業因。若白業因。一一果報。決定無失。當知皆是自分所作。汝等諸苾芻。應如是修學。」

(T14, no. 549, 863c03-865a12)

上に引用した三種類のパラレルは基本的に同一の物語を伝えているが、物語の詳細な部分についてはいくつかの点で相違が見られる。この内、トカラ語 B 断片と最も一致する内容を持つのは梵文《*Divyāvadāna*》と『根本説一切有部毘奈耶雜事』であると言える²⁴。現在までのところ、西域北道将来の梵語写本には《*Jyotiṣka-avadāna*》の断片は知られていないた

²⁴ 漢訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』では、梵文の主人公の名前である *Anaṅga* が「天分」と訳されており梵文とは一致しない。

め、ここで比定したトカラ語 B 断片はこの比喻譚の伝播とこの地域における受容について考察する上で貴重な資料であると言える²⁵。また、梵文《Divyāvadāna》と『根本説一切有部毘奈耶雜事』の部派帰属は共に広義の説一切有部に属しており、他のトカラ語仏典と同様、有部との関係を示している。

一方、トカラ語 B の《Jyotiṣka-avadāna》断片とこれらのパラレルを比較すると、トカラ語 B 断片は内容が非常に簡略化されたものとなっている事が窺える。この点については、トカラ仏教における仏典受容の問題と関連しているため全ての断片の解釈を終えてから検討する事とするが、ここでは、《Bodhisattvāvadānakalpalatā》をトカラ語 B 断片と比較する事で窺えるトカラ語 B 断片の特徴を確認する。先に見たように、トカラ語 B 断片では、*Jyotiṣka* が入手した壘の由来についてバラモンとその妻とのやり取りやその後の経過を語っており、この点に全く言及しない《Bodhisattvāvadānakalpalatā》とは対照的であるが、逆にトカラ語 B 断片は《Bodhisattvāvadānakalpalatā》の伝える *Jyotiṣka* の仏陀への帰依について全く言及されない。これらの点から、トカラ語 B の《Jyotiṣka-avadāna》は《Bodhisattvāvadānakalpalatā》とは異なった方針を持っていた事が推測される²⁶。

2. THT1166 + THT2976 verso 及び THT1556 について

前節で言及したように、THT1166 + THT2976 の verso には《Jyotiṣka-avadāna》とは異なる物語が語られている。筆者の研究によれば、この物語は《Śroṇakoṭijivīmśa-avadāna》に比定される。残念ながら、このトカラ語断片に完全に一致するパラレルは確定できていないため、本稿では断片の内容理解に貢献する文献を引用するに止める。これらについては後に触れる事とするが、これらの文献を参考にとすると THT1556 は THT1166 + THT2976 verso と同一の物語を伝えているだけでなく、THT1166 + THT2976 に続く folio であった可能性を指摘する事ができる。そのため、本節ではこれらの三断片を扱う事とする。

2-1. THT1166 + THT2976 verso の転写と和訳

ここでは、まず THT1166 + THT2976 verso を紹介する。この二断片を接合した上でのサイズについては既に紹介したので、ここでは繰り返さない。また接合した写真については、図 2 を参照されたい。

²⁵ ガンダーラ地域からは《Jyotiṣka-avadāna》をテーマにしたレリーフが発見されている。このレリーフについては、Härtel (1981) を参照。なお、同論文の 101 頁で言及されている《Jyotiṣka-avadāna》を描いた壁画が見られるとされる *Kiriś* 石窟は現在の森木賽姆石窟の第 42 窟に相当し、写真は『中国新疆壁画全集 第五卷 森木賽姆・克孜爾杂哈』の図版六十に掲載されている。また『克孜爾石窟内容總録』298 頁によれば、同じく *Kucha* の *Kizil* 石窟の第 8 窟及び第 101 窟にも《Jyotiṣka-avadāna》を描いた壁画が存在する。なお、第 8 窟の壁画は『中国新疆壁画全集 第二卷 克孜爾』の図版百八十九を参照。これらの壁画と本稿で扱っているトカラ語断片から、この物語がトカラ仏教の中心地である *Kucha* 地域に広く流布していた事が知られる。特に *Kizil* 石窟にこの物語をテーマとする壁画が確認される点は、本稿で扱っている『Avadāna 写本』が *Kizil* 石窟で発見されたと見られる点を考慮に入れると、大変興味深いと言える。

²⁶ 物語の全体が残っていないため、具体的にどのような方針によってトカラ語 B の物語が作成されたかを確定する事はできないが、*Jyotiṣka* が入手した壘は過去物語と現在物語を結びつけるものであるため、現在物語と過去物語の因果関係を重視した可能性を指摘する事ができよう。

[転写]

b

- 1 /// (m̥)sk(ī)[l̥ar] v[e]ṇuvaṃ saṅkrāṃne † tāw no ///
- 2 /// u(e)^[a] ṣertwentsa pātar\ lāṇnt\ tsuwai tsuwai lantuṇṇe - ///
- 3 /// (ri)[ye r]ājagriṣ\ kalyimiñña † tāw no rīne potalake ñe(m̥) ///
- 4 /// ostameṃ śano klāte^[b] sū tāwāmpa yśelmeṣṣa[n](a) ///
- 5 /// alloḱ\ preṣyai(n)e (p)er[n]e_u\ caramabhavike [o](sta ṣmeñca) ///

[注釈]

- [a]: 筆者が推定するように u(e)と再建できるならば、この部分には *devadatte* を推定する事が可能と思われる。この場合、*devadatte ṣertwentsa* は「Devadatta の煽動によって」と compound として解釈される。またこの文の主語は *Ajātaśatru* であり、後続する *lānt pātār* 「父である王」は *Bimbisāra* を指すと考えられる。
- [b]: 前節で検討した THT1165 + THT1548b1 と梵文《*Saṅghabhedavastu*》: *tena sadṛśāt kulāt kalatram ānītam* (Gnoli 1978: 134.05-06) との対応を考慮に入れると、先行する部分には *mākte* ‘as, so’ が推定される。

[和訳]

b

- 1 /// (仏陀) は *Veṇuvana* の僧院にいました。その (時)^[a] ///
- 2 /// ... の煽動によって父である王に王権を ... ///
- 3 /// ... *Rājagṛha* に隣接した街 ...^[b]。さて、その街に *Potalaka* という名前の ///
- 4 /// 彼は ... の家から妻を娶りました。彼は彼女と性の^[c] ///
- 5 /// ある時、*Caramabhavika* という徳のある長者^[d] ///

[注釈]

- [a]: 代名詞の語形と文脈から、ここには *preściya* ~ *preściyo* ‘time, occasion’ の処格 *preścīyaine* 或いは *preṣyaine* が再建される。
- [b]: ここに在証されるトカラ語 B の *kālyimiññe** は Adams (1999: 176) では *TochSprR(B) I*: 110 に従い ‘bordering, regional (?)’ とされている。筆者はこの部分に *riye* ‘city’ を推定したが、これは最も内容が近い『根本説一切有部毘奈耶破僧事』の記述に基づいている。即ち、この物語の主人公の *Śroṇakoṭivimśa* は *Campā* という街で生まれているが、この街は *Bimbisāra* 王の支配する *Magadha* 国に属しており、*Magadha* 国の首都は *Rājagṛha* である点に拠る。この推定が正しいなら、*TochSprR(B) I* によって提出された *kālyimiññe** の語義を裏付ける事が可能である。なお、この語については Broomhead (1962 II: 71) も参照。
- [c]: この箇所は、梵文《*Saṅghabhedavastu*》: *tena sadṛśāt kulāt kalatram ānītam. sa tayā sārđham*

krīḍati ramate paricārayati. (Gnoli 1978: 134.05-06) に対応するトカラ語 B の表現である。
[d]: 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』などのパラレルには、この長者は登場しない。恐らく、
既存の物語とは系統が異なっているものと推定される。

2-2. THT1556 の転写と和訳

次に THT1556 を紹介する。この断片はあまり状態が良くないが、folio の右端を残しており、サイズは縦が約 8.2cm、横は約 21cm である。残された部分からは *Śroṇakoṭivimśa* の誕生と彼が *Bimbisāra* 王の下に赴く場面及び *Bimbisāra* 王が仏陀を訪れる場面が描写されているものと推定される。

[転写]

a

- 1 */// (osta) šme[n̄ca](nts)[e p]ete † lantameṃ āś[ɿ]ṽ yaššāte šaṇḍ[ɿ] riś[ɿ]^[a] kl[ā]nka
|| m̄akt[e]*
- 2 */// (o)[s](ta) šmeñca [śa]maiške(m)^[b] lyelyakormem orotstsai katkauñai tetanm̄aššu^[c]
† ista^[d]*
- 3 */// (ysā)[šš](a)na ti[n]ā[r]nta sam̄kentse yātkane || su śamaiške^[b] lalam̄ške
olya(p)[o]ts[e]*
- 4 */// – w[ai]pec[c]etsts[e] śroṇakoṭivimśe te man̄[ɿ] ñem̄[ɿ] [tem](tsa)[t]e || o^[e]*
- 5 */// [r].ā [ñ]. namalakkana^[f] † tuk taisa – ///*

b

- 1 */// [r̄ak]ts(a)nma r̄akšiyem̄ne^[g] tusa [c]e [s]. y. ///*
- 2 */// – kekenuwa ārwer yamaššiyem̄(n)[e] (†) [om n]o [a]ll[ok̄]₁ p(r)e^[h]*
- 3 */// .e [l]e[ne] (še)[šša]lu^[i] šai arisa kaum̄ pañākte lkātsi veṇuvam̄n(e) yai
[man̄](t̄)₁ šaṇḍ[ɿ]*
- 4 */// .k(a)nt(i)mpa pepakšoś[ɿ] yuś[ɿ] ñem̄[ɿ] śwātsi walo klāšši † l(y)āka śarīy(e)*
- 5 */// (ajāta)[śa]tru mcušk[e] e[m̄]twece piṇḍipāltsa lām̄nt[ɿ] wark̄ṣāltsa karš[š]a
[tom̄] – .[e s]. [w].*

[注釈]

- [a]: トカラ語 B の *riye* ‘city’ の斜格 *ri* に付された向格語尾が *-ś* として現れている。既に言及したように、この音変化は Peyrot (2008: 70-71) で指摘されている Late Tocharian B の特徴の一つである。
- [b]: トカラ語 B の *śamaiške* ‘boy’ が *śamaiške* として現れている。Peyrot (op.cit.: 54-55) に指摘されるように、硬口蓋子音の直前で *-a-* > *-ai-* という音変化は Late Tocharian B の特徴と見做される。なお、Peyrot (op.cit.: 224) には THT1556 に在証される *śamaiške* に関する言及は見られない。

- [c]: この語形は語根 *tām-* ‘to beget’ の過去分詞である。なお、Malzahn (2010: 653-654) には、過去分詞の女性形が引用されている。
- [d]: ここには恐らくトカラ語 B の *istak* ‘suddenly’ が再建される。
- [e]: ここには *om no allok preścīyaine* 「さて、またある時」が推定されるかも知れない。
- [f]: この部分の語の区切れは不明確である。
- [g]: Malzahn (op.cit.: 814) には登録されていないが、この語形は語根 *rāk-* ‘to cover, extend’ の三人称複数・未完了・能動態である。なお、ここに在証される *rāktsanma rāk-* は筆者が把握している範囲内では初出であるが、*figura etymologica* であると解釈される。
- [h]: トカラ語 B の *preścīya-preścīyo* ‘time, occasion’ の処格 *preścīyaine/preśyaine* が推定される。
- [i]: この語形も Malzahn (op.cit.: 941-942) には登録されていないが、語根 *sāl-* ‘to throw’ の過去分詞・男性単数形である。

[和訳]

a

- 1 /// 長者に与えよ。彼は王に暇乞いをして^[a]、自らの街に向かいました。|| どのように
- 2 /// 長者は少年を見て、大いなる喜びを引き起こしました。すぐに
- 3 /// 彼は葉の金銭を彼に命じました。その少年は柔らかく、非常に
- 4 /// ... 財産を持った *Śronakoṭivimśa*—このような名前が生まれました。...
- 5 /// ... 。その事はそのように ... ///

b

- 1 /// 彼らは覆いました。それによって、その息子^[b] ... ///
- 2 /// ... を備えて、彼^[c] ... 準備していました。さて、またある時
- 3 /// ... に投げ下ろしました^[d]。彼は毎日仏陀に会うために *Veṇuvana* に行きました。そのように自らの
- 4 /// 王は *kanit*^[e] と共に煮させた *yūṣa* (= スープ) という名前の食べ物を持って行きました。彼は上の^[f] ... を見ました。
- 5 /// *Ajātaśatru* 王子は遠くから稍で力を入れて王を襲いました^[g]。...

[注釈]

- [a]: 文脈から考えて、この部分に「頭」が来る事は想定しにくいですが、トカラ語 B のコーパス中 *ās* という語形は、*āsce* ‘head’ の単数斜格 *āsc* の Late Tocharian B の語形しか知られていない。ここでは『根本説一切有部毘奈耶破僧事』「寶徳長者既啟王已即還本城。」(T.24, no. 1450, 184c10-11) 及び梵文《*Saṅghabhedavastu*》: *potalako grhapatih rājānaṃ bimbisāram avalokya campām āgataḥ*. (Gnoli 1978: 135.02-03) を参考にして、トカラ語 B の *ās yāsk-* を「暇乞いをする」を指す成句であるとしておく。
- [b]: 残存している部分には *ce s. y.* とあり、恐らく *soy* ‘son’ の単数斜格 *soy* 或いは属格 *seyi* が推定されるものと思われる。

- [c]: ここで暫定的に「彼」と和訳したのは、*yamaṣṣiyemne* に見られる代名詞接辞である。先行する部分が欠けているため、文脈を確定できない。
- [d]: この部分は文脈が不明なため正確に解釈できない。
- [e]: トカラ語 B の *kanti* は‘bread’という訳語が与えられてきたが、正確な意味は確定できないため、和訳文中ではトカラ語 B の形式を採用した。
- [f]: 後続する文脈を確定できないため、この箇所の推定は困難であるが、ここではトカラ語 B の *śariye** ‘over-, upper’を推定しておく。
- [g]: ここで「稍で」と訳したトカラ語 B の *piṇḍipāltsa* は *piṇḍipāl* の通格である。この語はトカラ語 B では初出であるが、梵語の *bhīṇḍipāla*- ‘a kind of missile weapon, one-pointed dirt’ (BHS: 409), ‘a short javelin or arrow thrown for the hand or shot through a tube’ (MW: 757c *bhīṇḍipāla*-) の借用語である²⁷。なお、この記述は『根本説一切有部毘奈耶破僧事』「阿闍世王在於中道。以擲稍刺頻毘娑羅王打破粥鉢。」(op.cit.: 184c24-25) と一致している。

2-3. THT1166 + THT2976 verso 及び THT1556 のパラレルについて

先に触れたように、上に和訳を与えた THT1166 + THT2976 verso 及び THT1556 に完全に一致するパラレルを筆者はまだ見出していないが、当該の断片に見られる *Śronakoṭivimśa* に関する物語については、梵文献や漢訳仏典に類似した部分を見出す事ができる。筆者が確認した範囲内では関連する物語を持つパラレルは以下の通りであり、これらに基づいて、この物語を《*Śronakoṭivimśa-avadāna*》に比定する事が可能であると考えられる。

[漢訳]²⁸

『根本説一切有部毘奈耶破僧事』 卷 16-17 (T.24, no. 1450, 184b26-187c17)

『彌沙塞部和醯五分律』 卷 21 (T.22, no. 1421, 145a13-146b15)

『四分律』 卷 38 (T.22, no. 1428, 843b12-845a28)

『摩訶僧祇律』 卷 31 (T.22, no. 1425, 481a2-482a10)

[梵文]

《*Saṅghabhedavastu*》: Gnoli (1978: 134-149)

《*Bodhisattvāvadānakalpalatā*》 第 27 章: Vaidya (1959b I: 196-199)²⁹

SHT1029: Waldschmidt (1972)

ここでは、上に列挙したパラレルの内、最も内容の近い『根本説一切有部毘奈耶破僧事』

²⁷ A264a1 及び A318a1 に在証される形式からトカラ語 A では *bhīṇḍipāl** と再建される形式が知られている。

²⁸ 『十誦律』 卷 25 にも *Śronakoṭivimśa* に関する記載が見られるが、*Śronakoṭivimśa* が *Bimbisāra* 王の下に赴く部分が欠いており、THT1556 とは比較できない。

²⁹ 梵文《*Bodhisattvāvadānakalpalatā*》所収の《*Śronakoṭivimśa-avadāna*》も《*Saṅghabhedavastu*》に語られる物語と基本的には同系統であるが、トカラ語断片に見られる *Ajātaśatru* による襲撃に言及していないため、ここでは比較の対象とはしない。

及びその梵文である《Saṅghabhedavastu》を参考として挙げておく。なお、THT1166 + THT2976 verso 及び THT1556 の理解に資する部分は bold 体 (漢訳仏典は下線) で示している。

《Saṅghabhedavastu》

buddho bhagavān viharati veṇuvane kalandakanivāpe. tena khalu samayena campāyāṃ potalako nāma grhapatiḥ prativasati, ādhyo mahādhano mahābhogo vistīrṇaviśālāparigraho vaiśravaṇadhanasamudito vaiśravaṇa<dhana>pratispardhī. tena sadṛśāt kulāt kalatram ānīlam. sa tayā sārđhaṃ kṛḍāti ramate paricārayati. tasya kṛdato ramamāṇasya paricārayataḥ kālāntareṇa patnī āpannasattvā saṃvṛttā. sā upasthīyate śīte śītopakaraṇaiḥ, uṣṇe uṣṇopakaraṇaiḥ, vaidyaprajñaptair āhāraiḥ, nātītikṭaiḥ, nātyamlaiḥ nātilavaṇaiḥ, nātimadhuraiḥ, nātikaḥkaiḥ, nātikaṣāyāiḥ, tiktāmlalavaṇamadhurakaṣāyāvivarjitaiḥ. hārārdhahāravibhūṣitaḡātrī apsaraḥ iva nandane vane vicāriṇī, mañcān mañcaṃ pīḥāt pīḥam anavatarantī adharimām bhūmim. na cāsyāḥ kiṃcid amanojñāṃ śabdaśravaṇaṃ yāvad garbhasya paripākāya.

*tena khalu samayena potalako grhapatiḥ rājagṛhaṃ gataḥ kenacid eva karaṇīyena. sā c<āṣṭānām vā> navānām <vā> māsānām atyayāt śravaṇe nakṣatre prasūtā. dārako jātaḥ, abhirūpo, darśanīyaḥ, prāsādikāḥ. tasya pādatalayor adhasāt caturāṅgulaṃmātrāṇi romāṇi suvarṇavarṇavarṇāni jātāni. yāvat potalakasya grhapateḥ svamanuṣyaḥ tvaritatvaritaṃ rājagṛhaṃ gataḥ. potalakasya grhapateḥ kathayati: grhapate diṣṭyā vardhase, putras te jātaḥ iti. sa prīṭisaumanasyajātaḥ bhūyaḥ prcchati kiṃ kathayasi. grhapate putras te jātaḥ. punaḥ prcchati kiṃ kathayasi iti. atha tasya puruṣasyaitad abhavat kim ayam grhapatir bhūyo bhūyaḥ prcchati. mā māṃ pralāpayitukāmaḥ iti viditvā tūṣṇim avasthitaḥ. grhapatiḥ kathayati: bhoḥ puruṣa kṣūṇas tvam. yadi tvayā śatam api <vārān> vān niścāritābhaviṣyat, mayāpi tava <mukhaṃ> suvarṇasya pūritam abhaviṣyat iti. tataḥ potalakena grhapatinā tasya puruṣasya trīn vārān suvarṇena mukhaṃ *pūritam. koṣṭhāḡarikasya ca sandiṣṭam dārakasyāvālehiḡāmūlyam viṃśatihiraṇyakoḡir dehi iti.*

potalako grhapatiḥ prīṭamanāḥ rājñāḥ sakāśam upasaṅkrāntaḥ deva putro me jātaḥ iti. rājā kathayati: śobhanam eva. dadāmy ahaṃ tasya campāyāṃ sādḡhāraṇaṃ saptahastikam dānīyam iti. potalako grhapatiḥ rājñāṃ bimbisūram avalokya campām āgataḥ. tato grhapater jñātayaḥ trīṇi saptakāṇy ekaviṃśatīdivasān jātasya jātimahaṃ kṛtvā nāmadheyam vyavasthāpayanti kim bhavatu dārakasya nāma iti. anye kathayanti: ayam dārakaḥ śravaṇanakṣatre jātaḥ. pītrā cāsyā janmani viṃśatihiraṇyakoḡyaḥ avālehiḡāmūlyam dattāḥ. tasmād bhavatu dārakasya śroṇaḥ koṣṭivīṃśa iti nāma. tasya śroṇaḥ koṣṭivīṃśa iti nāmadheyam vyavasthāpitam. śroṇaḥ koṣṭivīṃśo dārakaḥ aṣṭābhyo dhātṛībhyo 'nupradattaḥ, dvābhyām aṃsadhātṛībhyām, dvābhyām kṣīradhātṛībhyām, dvābhyām maladhātṛībhyām, <dvābhyām> kṛḍānikābhyām dhātṛībhyām. so 'ṣṭābhir dhātṛībhir unnīyate vardhyate, kṣīreṇa, dadhnā, navaṇītena, sarpiṣā, sarpimaṇḡena. anyaiḥ cottaptottaptair upakaraṇaviṣeṣair āśu vardhate hradastham iva paṅkajam. yadā mahān saṃvṛttas tadā lipyām upanyasta<ḥ> saṅkhyāyām, gaṇayāyām, mudrāyām, uddhāre, nyāse, nikṣepe, vastuparīkṣāyām, vastraparīkṣāyām, ratnaparīkṣāyām, dāruparīkṣāyām, hastiparīkṣāyām, āśvaparīkṣāyām,

kumārāparīkṣāyām <kumāriparīkṣāyām>. so 'ṣṭāsu parīkṣāsu udghāṭako, vācakaḥ, paṇḍitaḥ, paṭupracāraḥ saṃvṛtitaḥ. tasya puṇyamaheśākhyatām śrutvā samānakulīnair bahubhir dārikā dattāḥ. tasya pitrā trīṇi vāsagr̥hāṇi māpitāni, haimantikam, graiṣmikam, vārṣikam. trīṇi udyānāni māpitāni, haimantikam, graiṣmikam, vārṣikam. trīṇi antaḥpurāṇi vyavasthāpitāni, jyaiṣṭham, madhyam, kaṇīyasam. sa upariprāsādatalagato niṣpuruṣeṇa tūryeṇa krīḍati, ramate, paricārayati. tasya dine dine pañcaśatikāḥ pāko bhojanārthaṃ sādhyate.

devadattena ajātaśatruḥ kumāro viprasthāpyate: kumāra sarveṣāṃ rājñām yadā śirasi palitam jātam bhavati, tadā jyeṣṭham kumāram rājyaiśvaryādhipatyē pratiṣṭhāpya pravrajanti. bhavataḥ pituḥ keśās trītiyaṃ varṇāntaram gatāḥ. tathāpi kāmēśv adhyavasita eva nopaśamam gacchati iti. ajātaśatruḥ kathayati: kim asya karomi iti. devadattaḥ kathayati parākramasva iti. kāmārthinām nāsti kiñcid akaraṇīyam. yāvad rājā bimbisāro bhagavato gṛhṭapṭasya maṇḍam pātukāmasya maṇḍam adhiṣṭhāya veṇuvanaṃ saṃprasthitaḥ. ajātaśatruḥ dṛṣṭaḥ. tena kanakaḥ kṣiptaḥ. rājā śabde kṛtāvi, tena tasya maṇḍasthālī bhagnā. rājā tata eva pratinivṛttaḥ. (Gnoli 1978: 134-136)

『根本説一切有部毘奈耶破僧事』

「爾時世尊。在王舍城竹林園中。時有瞻波城長者。名曰寶德。多饒財寶受用豐足。娶妻未久便即有娠。其夫遂與盛陳供侍。廣說如餘。後時長者往王舍城。月滿之後。於女星月更誕一男。形貌端嚴人所希見。於其足下毛長四指。同黃金色。即令使人疾詣王舍城報長者曰。生一男也。長者問曰。說何語。使人曰。長者生男。如是之間皆云長者生男。時使人曰。何須多問。更不言答。長者云。汝今何不百度而說此語。我今還與百過滿口黃金。汝三度說與三口金。令使却迴報守庫人。與二十俱胝財寶。與男每日食。長者即向王所白大王言。我生一男。時王報言。我以瞻波城并七頭端正寶莊好象。並與汝男。寶德長者既啟王已即還本城。經三七日眷屬來會。既是女星月生應與號曰女星。付八孀母。二人與乳。二人常抱。二人洗衣。二人共戲。種種飲食用為養飼。漸漸長大如蓮在水。其男如是年既長大即令入學。曆數別寶伎能皆悉明達。諸人將女競至求婚。其父與男修三種房室園林。謂春夏冬三時。隨用為立三種宮人。所謂上中下。其人每在上宮遊戲快樂。日用五百兩黃金作食。與男令食。爾時提婆達多。惡諫阿闍世王。汝父頭白變黃。不厭女戲種種食飲。爾今長大。不與爾位得日未期。阿闍世王問言。今欲若為。提婆達多答言。須存過人事。凡所求事無種不作。當為如來服酥。父王持粥欲往竹林至如來所。阿闍世王在於中道。以擲稍刺頻毘娑羅王打破粥鉢。其王却歸。」

(T.24, no. 1450, 184b26-184c25)

なお、上に挙げた『根本説一切有部毘奈耶破僧事』と THT1166 + THT2976 verso 及び THT1556 ではいくつか相違点が認められるが、それは以下のように纏める事ができる。

[1]: THT1166 + THT2976b5 に見られる長者 *Caramabhavika*

[2]: THT1556a3 に見られる「菓」

[3]: THT1556b2-5 の叙述の順序

上に挙げた相違点は現時点で確認しているパラレルと完全には一致しないが、興味深いのは[3]である。THT1556b2-5 の部分は状態が良くないため文脈を完全には復元できないが、恐らくは *Śroṇakoṭivimśa* が *Bimbisāra* 王の下に赴き、その後 *Bimbisāra* 王は毎日仏陀の下に赴くが、その途次 *Ajātaśatru* が父である *Bimbisāra* 王を襲うという事ではないだろうか。この推定が正しいならば、上に引用した『根本説一切有部毘奈耶破僧事』が *Ajātaśatru* の *Bimbisāra* 王に対する襲撃を *Śroṇakoṭivimśa* の拝謁の前に言及する点だけでなく、*Bimbisāra* 王への拝謁の際に *Śroṇakoṭivimśa* のために衣服で地面を覆うという記述が存在しない点で異なっている事になる³⁰。ここで注目されるのは、後者の *Śroṇakoṭivimśa* が *Bimbisāra* 王の下へ赴く際に衣服で地面を覆うという記述が『彌沙塞部和醯五分律』・『四分律』・『摩訶僧祇律』といった律文献に確認される点である。以下には、参考として『彌沙塞部和醯五分律』の関連部分を引用する³¹。

『彌沙塞部和醯五分律』

「佛在王舍城。爾時瓶沙王摩竭鰲伽二國。有四萬二千聚落。彼諸豪傑無有不信佛法僧者。唯除瞻婆城中有長者子名首樓那。其人大富有二十億錢時人號曰首樓那二十億。是人生便受樂手脚柔軟足下生毛。瓶沙王作是念。我界內唯有二十億。未信佛法。我當云何令彼信樂。我若自往當大驚怖。若呼召之必生疑畏。正當通命瞻婆城中六十家諸豪傑觀王子婚因此相見誨以道法。念已即便呼之。時諸親族皆白王言。二十億未曾履地。足下生毛如人頂髮。不堪恭到。願王特賜停此一人。王言。可乘象馬車輿。答言。其身極軟亦不堪之。王言。今王子婚必宜相見。聽汝親族盡自致方。親族共議。唯當鑿渠通船日行數里乃可不勞。恭王命耳。便共以此致之到王舍城。親族白王。二十億今始得至。願聽如家法。王言家法云何。答言以衣敷地行上昇之。王言可爾。即勅為敷。又為敷細軟衣為座令坐其上。」

(T.22, no. 1421, 145a13-b02)

以上に検討した結果を纏めると、THT1166 + THT2976 verso 及び THT1556 に語られている *«Śroṇakoṭivimśa-avadāna»* は『根本説一切有部毘奈耶破僧事』のものに非常に近いが、異なる部派の律文献と一致する内容も存在しており、異なる系統の物語であると考えられる。この点から考えて、西域北道には既知のものとは異なった *«Śroṇakoṭivimśa-avadāna»* が流布しており、有部内部にいくつかの異なる伝承が存在していた可能性を示していると見做す事ができよう³²。

³⁰ 梵文と漢訳の『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(Gnoli 1978: 140.18-28; T.24, no. 1450, 186b09-09) 及び *«Bodhisattvāvadānakalpalatā»* 第27章 *«Śroṇakoṭivimśāvadāna»* (Vaidya 1959b I: 198.15-20) では、*Śroṇakoṭivimśa* が *Bimbisāra* 王とともに仏陀に会いに行く際に衣服で地面を覆ったとする。

³¹ 『四分律』卷38「願王聽以衣敷地。王言。聽以衣敷地。時長者子守龍那。即以衣敷地。」(T.22, no. 1428, 843b22-23) 及び『摩訶僧祇律』卷31「童子柔弱以衣褥敷地臨上而來。」(T.22, no. 1425, 481b17-18) も参照。

³² トカラ仏教の側で『根本説一切有部毘奈耶破僧事』の物語を改変した可能性も否定されない。

ここで、「*Jyotiṣka-avadāna*」と「*Śronakoṭivimśa-avadāna*」が連続して書かれている理由について検討したい。ただし、筆者が『Avadāna 写本』に比定した断片中、物語の終わりと最初が連続しているものはこの部分だけであるため、検討の結果が必ずしも『Avadāna 写本』全体の構成の原則と一致するわけではない点をお断りしておく。筆者は「*Jyotiṣka-avadāna*」と「*Śronakoṭivimśa-avadāna*」を結びつける誘因として、前世における *Vipaśyin* 仏への奉仕を挙げたい。即ち、*Vipaśyin* 仏が *Bandhumatī* 国に赴いた際、*Jyotiṣka* は前世に *Anaṅga* 長者として、また *Śronakoṭivimśa* は貧しいバラモンの子供として *Vipaśyin* 仏への奉仕を行っている³³。この共通点がこの二つの物語が連続して書かれている誘因として指摘されるものと考えられる³⁴。

3. THT1253 + THT3056, THT1551, THT1683, THT3124 について

ここでは同一のテーマに関すると推定される断片を紹介する。この内の三断片については残存部分が紐穴の左側のみであるが、共通して見られる表現と二断片に残された folio の番号から、写本中のほぼ連続する folio であったと推定する事が可能である。最初に内容の比定に成功した断片である THT1253 + THT3056 を紹介する。

3-1. THT1253 + THT3056 について

3-1-1. THT1253 + THT3056 の転写と和訳

THT1253 及び THT3056 も共に状態の良くない断片であるが、残存している部分に見られる人名と内容から「*Dhanika-avadāna*」に比定される。また、この二断片は同一の folio に属していた可能性が高いため二断片を接合した転写を示す。断片のサイズは、THT1253 が縦 7.8cm・横 10.5cm であり、THT3056 が縦 2.1cm・横 4.9cm である。この二断片を接合した結果は図 3 を参照されたい。

THT1253 + THT3056

a

- 1 - [l]^[a] (mā)kt(e) n[e]śa[m] śāśa(r)n(e ak)[l]y(i)[l]ñ(e) ///
- 2 - [l].^[b] st[e po] (y)somo vaiśālyi[s]še - O ///
- 3 ka s[o]y śp^a cwī śana santse^[c] śleḥ śta^[d] O ///
- 4 - [yā]mornis = oko wārpnantrā † tse mi ra^[e] O ///
- 5 - (m)ā (tn)[e] waipṭesa [ś]auśalle ste cau wānt(a)ren[e]^[f] mā dha[n]ik(e)[m]
m. ///

b

- 1 (śwā)[s]s(i) [ś](auśam)^[g] [†] te keklyau[s](o)[rmem] - k_utakar^[h] ñe[m] klavissu

³³ *Anaṅga* 長者については Vaidya (1959a: 175.3-178.32) を、また *Śronakoṭivimśa* の過去物語については Gnoli (1978: 147-148) を参照。

³⁴ また *Jyotiṣka* と *Śronakoṭivimśa* が共に *Bimbisāra* 王と関係がある点も見逃す事はできないように思われる。

- v[aiśāly](i) ///*
 2 - *ñ(ēṃ) klav[i]ssu dhanikentse pelai- O (kne) ///*
 3 *ñī ñem klavisu śesa sāṅkampa a O ///*
 4 - - † *(tu)[m](e)ṃ vaiśāliṣi l[i] -^[i] O ///*
 5 - - *..[m] .[i] rī tane .ā - [m]e ///*

[注釈]

- [a]: この行は後に紹介する THT1551b2 と THT1683b4 の内容と同一であるため、先行する語として指示代名詞の中性主格形 *tū* が再建される。ここでは、この断片に葉数がないものの、この句を共有している事から上記二断片と同一のテーマに属する事が窺える。
- [b]: この部分には a5 と同様に *śausalle* が推定される可能性を指摘する事ができる。
- [c]: この箇所の語の区切れは不明確であるが、ここでは暫定的に *cwī śana santse* とする。ただし、最後の *santse* については *sandhi* の可能性もあり、この区切り方で正しいか否かを決定する事はできない。
- [d]: 後続する部分が欠けているため確定する事はできないが、この物語では *Dhanika* と彼の妻及び息子とその嫁が仏陀を四日続けて招待したという事が語られているため、トカラ語 B の *śarte* ‘fourth’ の斜格である *śarce* が再建されるかも知れない。
- [e]: 語の区切れが不明確であるため、この部分の解釈も困難である。なお、<ra>には *Virāma* が付されている。
- [f]: THT1253 と THT3056 の間には直接接合せず、間に若干の欠落が存在する。
- [g]: 前後の文脈から、*Dhanika* が仏陀と僧伽を自宅に招待した部分に相当すると考えられる。
- [h]: 最初の *akṣara* が確定できないため、この部分の解釈は確定できない。ただ梵文を参照すると、トカラ語 B の *k_utakar* は梵語の *kūṭāgāra-sālā*- ‘name of a hall or house near *Vaiśālī* where the Buddha often stayed’ (BHSD: 190a) の前分と関係づけられるかも知れない。
- [i]: *Dhanika* とその家族が仏陀を四日続けて招待したため、その他の *Vaiśālī* の人々が機会を得られないという状況に相当すると思われる。残存している部分からは、トカラ語 B に知られている *lipār* ‘remainder’ という語が最も近いが、ここにこの語が再建されるか否かは確実ではない。或いはこれまで知られていない語根 *lip-* ‘to remain’ から派生した名詞が推定されるかも知れない。

[和訳]

a

- 1 /// 聖典の中の教え ... は如何なるものであろうか。///
 2 /// ... 全ての *Vaiśālī* の ... ///
 3 /// ... 息子と彼の妻は ... ///
 4 /// 彼らは行いの結果を享受します。... ///
 5 /// ここで個別に呼ばれるべきではない。この事について *Dhanika* を ... しない。///

b

- 1 /// 食事に招待します。その事を聞いて ... 世尊は *Vaiśālī* ... ///
- 2 /// 世尊は *Dhanika* に法を ///
- 3 /// 私によって世尊が僧伽と共に ///
- 4 /// ... それから *Vaiśālī* の (残りの) ///
- 5 /// ... この街 ... ///

3-1-2. THT1253 + THT3056 のパラレルとの比較

ここでは先に解釈を施した THT1253 + THT3056 のパラレルを紹介する。既に言及したように、筆者の調査では当該の二断片は「*Dhanika-avadāna*」に比定される。「*Dhanika-avadāna*」のパラレルとしては以下のものを指摘する事ができる。

[梵文]

«*Bhaiṣajyavastu*»: Dutt (1984: 224-234)³⁵

«*Bodhisattvāvadānakalpalatā*» 第 90 章: Vaidya (1959b II: 516-517)³⁶

以下では THT1253 + THT3056 の内容理解に資する部分のみを引用し、また関係箇所を bold 体によって示す。

«*Bhaiṣajyavastu*»

atha bhagavān vṛjīṣu janapadeṣu cārikāṃ caran vaiśālīm anuprāpto vaiśālyāṃ viharati markaṭahradatīre kūṭāgūraśālāyām. aśrauṣur vaiśālakā brāhmaṇagṛhapatayo bhagavān vṛjīṣu janapadeṣu cārikāṃ caran vaiśālīm anuprāpto vaiśālyāṃ viharati markaṭahradatīre kūṭāgūraśālāyām iti. śrutvā ca punar ekadhye sannipatyā kathayati. bhavantāḥ śrūyate bhagavān vṛjīṣu janapadeṣu cārikāṃ caran vaiśālīm anuprāpto vaiśālyāṃ viharati markaṭahradatīre kūṭāgūraśālāyām iti. yady asmākam ekaiko bhagavantam upanimantrya bhojayiṣyati bhagavān viprakramiṣyati. anye 'vakāśaṃ na lapsyante. tat kriyākāraṃ vyavasthāpayāmo yathā gaṇa eva sambhāya bhagavantāṃ bhojayati na tv ekapuruṣa iti. te kriyākāraṃ kṛtvā vyavasthitāḥ.

tena khalu samayena vaiśālyāṃ catvāro mahāpuṇyāḥ prativasanti. dhaniko dhanikapatnī dhanikaputro dhanikasnuṣā ca. teṣāṃ divyamānuṣyaśrīr gṛhe prādurbhūtā. tair asau kriyākāro na śrutaḥ. aśrauṣīt dhaniko gṛhapatir bhagavān vṛjīṣu janapadeṣu³⁷ cārikāṃ caran vaiśālīm anuprāpto vaiśālyāṃ viharati markaṭahradatīre kūṭāgūraśālāyām iti. śrutvā ca punar vaiśālyā niṣkramya yena bhagavāṃs tenopasaṃkrāntāḥ. pūrvavad yāvat saṃpraharṣya tūṣṇīm. atha

³⁵ この部分是对应する義浄訳『根本説一切有部毘奈耶藥事』では欠けているが、藏文訳には対応箇所が見られる。この点については、Panglung (1981: 57-58) を参照。

³⁶ «*Bodhisattvāvadānakalpalatā*» 第 90 章「*Dhanika-avadāna*」は基本的には根本説一切有部のものと同系統のため、ここでは引用を控える。

³⁷ Dutt (op.cit.: 225) では *janapade* とするが、ここでは *janapadeṣu* と改めた。

dhaniko gr̥hapatir utthāyāsanaḍ ekūṃsam uttarāsaṃgaṃ kṛtvā yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇamayya bhagavantam idam avocat. adhivāsayaṭu bhagavān me śvo 'ntargr̥he bhaktena sārddhaṃ bhikṣusaṃgheneti. adhivāsayaṭi bhagavān dhanikasya gr̥he tūṣṇīṃbhāvena. atha dhaniko gr̥hapatir bhagavatas tūṣṇīṃbhāvenādhivāsanaṃ viditvā bhagavataḥ pādau śirasā vanditvā bhagavato 'ntikāt prakrāntaḥ.

atha vaiśālakā brāhmaṇagr̥hapatayo yena bhagavāṃs tenopasaṃkrāntāḥ. pūrvavad yāvat adhivāsayaṭu asmākaṃ bhagavān śvo 'ntargr̥he bhaktena sārddhaṃ bhikṣusaṃgheneti. bhagavān āha. nimantrito 'smi vāsiṣṭhās tat prathamataṛaṃ dhanikena gr̥hapatineti. te kathayanti. bhavanto dhanikena gr̥hapatinā gaṇasya kriyākāro 'tikrānta ity apare kathayanti. kim asau vyatikramiṣyati. na tena kriyākāraḥ śrutaḥ. puruṣaḥ śvo bhojayaṭu. vayaṃ paraśvo bhojayiṣyāma iti.

athāyusmān ānandaḥ kālyam evotthāya pātracivaram ādāya yena dhanikasya gr̥hapter niveśanaṃ tenopasaṃkrāntaḥ. upasaṃkramya pūrveṇa nagaradvāreṇa praviṣṭaḥ. yāvat paśyati nāsanaprajñaptiṃ na bhaktaṃ sajjikṛtam. tato dhanikaṃ gr̥hapatim idam avocat. gr̥haptere tvam buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃgham upanimantryālpotsukaḥ sthita iti. sa kathayati. kim āryānandaivam kathayasi gr̥haptere nāsanaprajñaptiṃ paśyāmi nāpy āhāraṃ sajjikṛtam. ārya katareṇa tvam dvāreṇa praviṣṭaḥ. gr̥haptere pūrveṇa nagaradvāreṇa. ārya dakṣiṇena praviṣa. sa dakṣiṇena praviṣṭo yāvat paśyati divyām āsanaprajñaptiṃ kṛtāṃ divyaṃ cāhāram upanvāhṛtam. dr̥ṣṭvā ca punaḥ paraṃ vismayam āpannaḥ. atha dhaniko gr̥hapatir bhagavato dūtena kālam ārocayaṭi. samayo bhadanta sajjaṃ bhaktaṃ. apy edānīṃ pūrvavad bhagavantaṃ bhuktavantaṃ viditvā dhautahastam apanīṭapātraṃ nīcataram āsanaṃ gr̥hitvā bhagavataḥ purastān niṣaṇṇo dharmasravaṇāya.

atha dhanikapatnī utthāyāsanaḍ yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇamayya bhagavantam idam avocat. adhivāsayaṭu me bhagavān śvo 'ntargr̥he bhaktena sārddhaṃ bhikṣusaṃgheneti. adhivāsayaṭi bhagavān dhanikapatnyā tūṣṇīṃbhāvena. adhivāsya ca dhanikasya gr̥haptere dharmadeśanaṃ kṛtvotthāyāsanaḍ prakrāntaḥ. dhanikapatnyāpi bhojanaṃ sajjikṛtam. athāyusmān ānandaḥ kālyam evotthāya pātracivaram ādāya yena dhanikasya gr̥haptere niveśanaṃ tenopasaṃkrāntaḥ. upasaṃkramya dakṣiṇena dvāreṇa praviṣṭaḥ. nāsanaprajñaptiṃ paśyati nāpy āhāraṃ sajjikṛtam. dr̥ṣṭvā ca punar dhanikapatnīm idam avocat. gr̥hapatipatnī buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃgham upanimantrya kimartham ity alpotsukā tiṣṭhasīti nāsanaprajñaptiṃ nāpy āhāraṃ sajjikṛtam. ārya katareṇa tvam dvāreṇa praviṣṭaḥ. dakṣiṇena. ārya pūrveṇa dvāreṇa praviṣa. sa pūrveṇa praviṣṭaḥ. yāvat paśyati śobhanām āsanaprajñaptiṃ prañītaṃ cāhāram upanvāhṛtam. dr̥ṣṭvā ca punaḥ paraṃ vismayam āpannaḥ. tato dhanikapatnī bhagavato dūtena kālam ārocayaṭi. samayo bhadanta sajjaṃ bhaktaṃ yasyedānīṃ bhagavān kālaṃ manyata iti. pūrvavad yāvat dhautahastam apanīṭapātraṃ nīcataram āsanaṃ gr̥hitvā purastān niṣaṇṇo dharmasravaṇāya.

atha dhanikaputraḥ utthāyāsanaḍ ekūṃsam uttarāsaṃgaṃ kṛtvā yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇamayya bhagavantam idam avocat. adhivāsayaṭu bhagavān śvo 'ntargr̥he bhaktena sārddhaṃ

bhikṣusaṃgheneti. adhivāsayaṭi bhagavān dhanikaputrasya tūṣṇībhāvena. atha bhagavān dhanikapatnyā dharmadeśanāṃ kṛtvā prakrāntaḥ. dhanikaputrenāpi śucinā praṇītaṃ khādānīyabhojanīyaṃ samudānītaṃ. athāyusmān ānandaḥ kālyam evotthāya pātracīvaram ādāya yena dhanikasya grhapater niveśanaṃ tenopasaṃkrāntaḥ. upasaṃkramya dakṣiṇena dvāreṇa praviṣṭaḥ. nāsanaprajñaptiṃ paśyati nāpy āhāraṃ sajjikṛtaṃ. drṣṭvā ca punar dhanikaputram idam avocat. grhapatiputra tvam buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃgham upanimantrya kim alpotsukas tiṣṭhasīti. sa kathayati. ārya kim evaṃ kathayasi. na paśyāmy āsanaprajñaptiṃ nāpy āhāraṃ sajjikṛtaṃ. ārya katareṇa tvam dvāreṇa praviṣṭaḥ. dakṣiṇena. ārya paścimena praviśa. yāvad asau praviṣṭaḥ. yāvat paśyati śobhanāṃ āsanaprajñaptiṃ praṇītaṃ cāhāram upanvāhṛtaṃ. drṣṭvā ca punaḥ paraṃ vismayam āpannaḥ. tato dhanikaputro bhagavato dūtena kālam ārocayati. samayo bhadanta sajjam bhaktaṃ yasyedānīṃ bhagavān kālaṃ manyata iti pūrvavad yāvad dhautahastam apañṭapātraṃ nīcataram āsanaṃ grhītvā bhagavataḥ purastān niṣaṇṇo dharmasṛvaṇāya.

atha dhanikasnuṣā utthāyāsanaḥ yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇamayya bhagavantam idam avocat. adhivāsayaṭu me bhagavān śvo 'ntargrhe bhaktena sārdaṃ bhikṣusaṃgheneti. adhivāsayaṭi bhagavān. dhanikaputrasya dharmadeśanāṃ kṛtvā prakrāntaḥ.

atha vaiśālakā brāhmaṇagrhapatayo yena bhagavāṃs tenopasaṃkrāntāḥ. upasaṃkramya bhagavataḥ pādaḥ śirasā vanditvaikānte niṣaṇṇaḥ. ekāntaniṣaṇṇān vaiśālakān brāhmaṇagrhapatīn bhagavān dharmayā kathayā yāvat samādāpya samuttejya saṃpraharsya tūṣṇīm. atha vaiśālakā brāhmaṇagrhapatayaḥ utthāyāsanaḥ ekāṃsam uttarāsaṃgaṃ kṛtvā yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇamayya bhagavantam idam avocat. adhivāsayaṭu bhagavān tv asmākaṃ śvo 'ntargrhe bhaktena sārdaṃ bhikṣusaṃgheneti. bhagavān āha. nimantrito 'smi vāsiṣṭhāḥ tat prathamatarāṃ dhanikasnuṣayeti. tato vaiśālīkā brāhmaṇagrhapatayaḥ kṣubdhāḥ kathayanti. bhavantaḥ kiṃ dhanikasyaikasya dhanam asti yena buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃghaṃ pratidināṃ bhojayati vayam avakāśaṃ na labhāmahe. katham atra pratipattavyam iti. apare kathayanti. yadā buddhapramukho bhikṣusaṃgho bhuktvā prakrāmati tadāsyā grhād ekaikāṃ śilāṃ udveṣṭayāma iti.

athāyusmān ānandaḥ kālyam evotthāya pātracīvaram ādāya yena grhapater niveśanaṃ tenopasaṃkrāntaḥ. upasaṃkramya paścimena dvāreṇa praviṣṭaḥ. paśyati nāsanaprajñaptiṃ nāpy āhāraṃ upanvāhṛtaṃ. drṣṭvā ca punar dhanikasnuṣāṃ idam avocat. dhanikasnuṣe buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃgham upanimantrya kiṃ tvam alpotsukā tiṣṭhasīti. sā kathayati. maivaṃ kathayasi. na paśyāmi āsanaprajñaptiṃ nāpy āhāraṃ sajjikṛtaṃ. ārya katareṇa tvam dvāreṇa praviṣṭaḥ. paścimena. ārya uttareṇa praviśa. sa uttareṇa dvāreṇa praviṣṭaḥ. yāvat paśyati divyāṃ āsanaprajñaptiṃ kṛtāṃ divyaṃ cāhāram upanvāhṛtaṃ. drṣṭvā ca punaḥ paraṃ vismayam āpannaḥ. tato dhanikasnuṣā bhagavato dūtena kālam ārocayati. samayo bhadanta sajjam bhaktaṃ yasyedānīṃ pūrvavad yāvat purastād bhikṣusaṃghaya prajñapta evāsane niṣaṇṇaḥ.

atha vaiśālakā brāhmaṇagrhapatayaḥ sarve saṃbhūya dhanikasya grhadvāre sthitāḥ. dhanikaṃ grhapatim idam avocan. grhapate vaiśālako gaṇaḥ kṣuṇṇo dvāre tiṣṭhati. gaccha kṣamayainam. mā

te anarthaṃ kariṣyati. sa nirgatya kṣamāpayitum ārabdhaḥ. te kathayanti. grhapate kiṃ tavaivaikasya dhanam asti yena tvaṃ pratidivasam buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃghaṃ bhojayasi vayam avakāśaṃ na labhāmahe iti. sa kathayati. bhavanto na mayā gaṇasya kriyākāraḥ śrutaḥ. tad arhati gaṇaḥ kṣantum iti. apare kathayanti. bhavantaḥ pradhānapuruṣo 'yaṃ kṣamyatām asyeti. taiḥ kṣāntam. sa kathayati. yady evaṃ praviśata. te grhaṃ praviśāḥ. paśyanti śobhanāṃ āsanaprajñaptiṃ kṛtāṃ praṇītaṃ cāhāraṃ samanvāhṛtam. dr̥ṣṭvā ca punaḥ paraṃ vismayam āpannāḥ kathayanti. grhapate tvam evaiko 'rhasi buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃghaṃ bhojayitum na vayam iti. sa teṣāṃ ratnān anuprayacchati. te na pratigrhṇanti. bhagavatābhīhitāḥ. pratigrhṇādhvaṃ durlabhāny etāni ratnānīti. tair grhīṭāni. yena ca yādṛśaṃ grhītaṃ tasya tādṛśam eva varṇāvabhāsaḥ saṃvṛttaḥ. tato dhanikasnuṣā sukhaṇiṣaṇṇaṃ buddhapramukhaṃ bhikṣusaṃghaṃ viditvā śucinā praṇītena khādanīyabhojanīyena pūrvavad yāvad dhautahastam apanīṭapātraṃ nīcataram āsanaṃ grhītvā bhagavataḥ purastāt niṣaṇṇo dharmaśravaṇīya.

tato bhagavatā dhanikasya dhanikapatnayā dhanikaputrasya dhanikasnuṣyāś cāśayānuśayaṃ dhātum prakṛtiṃ ca viditvā caturāryasatyasaṃprativedhikī dharmadeśanā kṛtā. yāṃ śrutvā dhanikena dhanikapatnyā dhanikaputreṇa dhanikasnuṣayā ca viṃśatīśikharaṃ samudgataṃ satkāyadr̥ṣṭīśailaṃ jñānavajreṇa bhītvā srotaāpattiphalaṃ sākṣātkṛtam. te dr̥ṣṭasatyās trir udānam udānayanti pūrvavad yāvat. abhikrāntā vayam bhagavantaṃ śaraṇaṃ gacchāmo dhamaṃ ca bhikṣusaṃghaṃ ca. upāsakāś cāsmān dhārayantu yāvajjīvaṃ prāṇopetaṃ śaraṇagatam abhiprasannāḥ. atha bhagavān dhanikaṃ dhanikapatnīm dhanikaputraṃ dhanikasnuṣāṃ ca dharmayā kathayā saṃdarśya samādāpya samuttejya saṃpraharṣyothāyāsanāt prakrāntaḥ.

(Dutt 1984: 224-234)

上に引用したパラレルとの比較と THT1551b2 及び THT1683b4 に共通する当該断片 a1 に見られる記述から、THT1253 + THT3056 は《Dhanika-avadāna》の冒頭部分に相当する事が推定される。また、当該断片は紐穴から右側の部分を欠いているため確定はできないが、この断片には Dhanika が仏陀を招待した際に、彼の妻が仏陀に翌日の招待を懇願する部分するまでが語られているものと推定される。

3-2. THT1551, THT1683, THT3124 の転写

前節で触れたように、THT1551b2 及び THT1683b4 には THT1253a1 と同様の表現が確認される事から、これら三断片は共通するテーマの下に語られた物語であると考えられる。THT1253 は《Dhanika-avadāna》に比定される事が明らかであるが、残念ながら残りの断片については内容の比定に至っていない。

THT1551^[a]

h: 8.1cm × w: 15.9cm

a

- 1 *ste* † — — — [ñ]. *ce* *poyšimñe* *eksa* [l]. —^[b] ///
 2 *camelne* *ś[le]* *l[ā]ntaṃ* *auki* *ta-* *o* *t.* [k].^[c] ///
 3 *plyeṃsa* *ram* *no* *skwaṣṣe* *iprerne* † *o* *snai* ///
 4 *teṃ* *arhanteṃñe* *perneṃ*^[d] *kaḷpāre* † *o* [ā] ///
 5 *ersante* † *tuk* *māka* *po* *sā_u* *wertsīy[ai]* *tar[ya]* ///
 b

- 1 *rtse* *yāmormem* *asāmmem* *tsaṅka* *šaṅ^d* *maṣkelye* ///
 2 || *tū* *maḱte* *neṣṣaṃ* *śāstārne* *aklyi-* *o* *lñ(e)* ///
 3 *oko* *pelaikne* † *klyauṣa* † *kaune* *wi^[e]* *o* *ša[m]ā* ///
 4 *rwāne* *se* *p.* — *ccem*^[f] *[a]rkwina* *aśī* *o* — — ///
 5 *a[l]l[o]*(k₁) *preśc*(i)yaine *cau* *saṅkrāmne* *wī* ///

[注釈]

- [a]: 公開されている写真は断片の表裏が反対であるため、ここでは、正しい順序に直した転写を提示する。また、断片には葉数として<187>という数字が見える。
 [b]: 文脈から *lāk-* ‘to see’ の変化形が推定される。
 [c]: 正確な語形を確定する事は不可能であるが、ここには語根 *nes-* ‘to be’ の過去分詞 *tatākau* が推定されるものと考えられる。
 [d]: トカラ語 B の *perne* ‘glory, worth’ の斜格は *perne* であるが、ここでは恐らく先行する語に引きずられて *Anusvāra* が付されたのではないだろうか。
 [e]: この箇所の語の区切れは不明確である。仮に *wi* *ṣamāni* 「二人の僧侶」と再建されるならば、*kaune* は *kau(m)ne* 「日中、昼間」と見做す事ができるかも知れない。
 [f]: トカラ語 B の *arkwina* に先行する部分の語の区切れは不明確である。仮に *rwāne* が一つの語として解釈されるなら、語根 *ru-* ‘to pull out’ の三人称単数・過去形に三人称単数の代名詞接辞が付加されたものと解釈する余地があるが、前後の文脈は把握できない。

THT1683^[a]

h: 8.2cm × w: 14.2cm

a

- 1 *te* *maṅ₁* *yaknesa* *su* *śreṣṭh[i]* ///
 2 *ṣ* *pelaiknene* *ostameṃ* *lac^d* *po* *o* ///
 3 *kurpelle* *su* *yarm₁* *mā* *tarkoy^d* *o* ///
 4 *kurpelle* † *su* *sāṅk₁* *po* *krentaund^[b]* *o* ///
 5 *ntsa* *maṣḱassi* † *te* *maṅ₁* *yaknesa* *plāskaṃ* *ma[k](t)[e]* ///

b

- 1 *kallaṃ* *śaḱ₁* *tmane* *cmelane* *cwi* *āyormem* *ok[o]* ///
 2 *tusāksa* *skainālle* *sārne* *prucca* *o* ///

- 3 *ntar*₁ || *šanmīrskamntsa dṛṣṭānt*^[c] *āra † O* ||
 4 *tū makte neṣam [ś]āstane ak[ly]t*^[d] *O* ||
 5 *yai osta šmeñca[nts]e .o* ||

[注釈]

[a]: この断片には葉数として<190>と付されている事が確認される。この葉数から、この断片は<187>という葉数が付された THT1551 に後続する断片であった事が推定される。

[b]: <na>には *Virāma* が付されている。

[c]: トカラ語 B の *dṛṣṭānt* は Adams (1999) では登録されていないが、同書の *pūrnnikadrṣṭānt* (op.cit.: 392) の項目に登録されている。Adams の辞書にはこの語に対する解釈は為されていないが、この語は梵語 *dṛṣṭānta*-‘example, paragon, allegory’ (MW: 491c-492a) の借用語である³⁸。興味深い事に *Kizil* で発見された梵文《*Kalpanāmaṇḍitikā*》の章末の colophon には書名として *kalpanāmaṇḍitikāyām dṛṣṭāntapaṃktyām* とあり、同様に *dṛṣṭānta*-が確認されるだけでなく³⁹、前述の *pūrnnikadrṣṭānt* が確認される断片 B342 は *Jātaka* に分類されている。この点からも、このトカラ語 B 写本の内容が比喩譚を中心としたものであった事が窺えよう。

[d]: THT1551b2 に基づいて、ここには *aklyi(lne)* が再建される。

以下に紹介する THT3124 は、前節及び本節で紹介している三断片との関係を示す直接の根拠は確認されないが、断片中に THT1863 で二度現れている *kurpelle* という語が見られるため、暫定的にここに配列する。

THT3124

h: 8.2cm × w: 5.7cm

- | | |
|---|--|
| <p>a</p> <p>1 [k]l. [ya] - </p> <p>2 [r](\ s)[u] brāhmaṇe tā </p> <p>3 lñ(e)[śś]e yāmoṛ\ - </p> <p>4 [k]. ñc^a\ śale [ś]\ [t]we </p> <p>5 (ku)rpell[e] s[t](e) twe [ś]rau </p> | <p>b</p> <p>1 pratin[t]a [y]amaske </p> <p>2 [ce] ñem\ lakle .[ā] </p> <p>3 yasar\ sekwe - </p> <p>4 [y]ai inte^[a] ke - </p> <p>5 [raṃ ṣa] .ā </p> |
|---|--|

[注釈]

[a]: トカラ語 B の *inte* ‘if’は Peyrot (2007: 172) で指摘されるように、Late Tocharian B の断片に現れる語形である。

³⁸ この *pūrnnikadrṣṭānt* に見える人名を *TochSprR(B) II: 223* では *Pūrnikā* とするが、筆写はこの語を梵語の複合語と見做し、主人公の人名を *Pūrnikā*-とすべきではないかと考えている。もしこの推定が正しいなら、この物語は『賢愚經』卷六「富那奇緣品」(T.04, no. 202, 393c01-397a23) に比定される可能性がある。

³⁹ *SHT I: 14-15* を参照。

4. THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 及び THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 について

ここでは、THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 及び THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 を扱う。これらの断片はそれぞれ二葉の folio に還元する事ができるが、内容は漢訳『大莊嚴論經』とその梵語写本である《*Kalpanāmaṇḍitikā*》や漢訳『雜寶藏經』及び藏文《*Karmaśataka*》に見える物語であり、『雜寶藏經』では「娑羅那比丘為惡生王所苦惱緣」という題名が付されている⁴⁰。

4-1. THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 の転写と和訳

ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1507 及び THT1680 は表裏共に五行ずつ書かれた断片であり、断片の上下は完全に残っているが、THT1285・THT2981.frg.1・THT3054 は前者に比してより小さい断片である。この内 THT1507 は紐穴周辺に相当する部分であるが、左端の部分を欠いているため folio の番号は判断できない。ただ、次節で扱う THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 の folio の番号が<287>となっており、また内容はその直前の状況を描写していると考えられる事から、これらの断片は本来二葉の連続する folio であり、THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 の folio の番号は<286>であったと推定される。なお、これらの断片には発見場所を特定する出がかりは残されていない。

これらの五断片は同一の folio に属し、THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 及び THT1285 + THT3054 というように直接接合するが、先に検討した《*Jyotiṣka-avadāna*》に比定される THT1165 + THT1548 のサイズを参考にすると、この二つの部分の間には約 8.3cm の欠落が存在すると推定される。また次節で検討する THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 が folio の左端を残しており、このサイズを考慮に入れると、当該の folio はさらに左に 2-3 akṣara 程欠いていると推定される。接合された THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 の部分のサイズは縦が約 8.1cm・横は約 31cm、一方 THT1285 + THT3054 は縦が約 4.9cm・横は約 13cm である。なお、これら五断片を接合した結果については図 4 を参照されたい。

[転写]

a

- 1 /// - tai ste śamāññentse yakne pi(n)[t]w[ā]l_l yalle katsāntse (pals)k(o)^[a] aiṣle
|| nano ṣapa walo ysals[o]n[ai]^[b] /// || mane śauṣṣaṃ k_{se} tane rai †
is(ta)[k]_l eneñni p_a^[c]
- 2 (lkormem) keñisa^[d] lmoṣ_l weskem O saswa po [t](a)n(e) nesem_l † wal[o]
weṣṣaṃ k_{ce} lkāścerne p[e] /// || [ss]. ste enmelyaṣṣa[na] śakāta-
- 3 (ntsa kā)[l]ps(a)^[e] ṣarkamem plaṇsone ākl_a- O (sk)[au](ne)^[f] ṣ_l lānte

⁴⁰ この物語と同様に王によって虐待される物語は『賢愚經』卷二「麻提波梨品」(T.04, no. 202, 359c08-360b07)にも見られる。

- kercyemne am[p]lākutte mā yänmašle || [t].^[6] || || [e]nsa[t]e wässa(nma) ||*
 4 *|| - me šarāk₁ šänmyarne auntsa- O ntene = [y]m(a)šš[i]^[h] lalaṃškai kekteš^a₁ kharcurššana šakātanta rā[s]k(are) ||*
 5 *|| .[ā]škāšsu^[i] ra snai onolme [r](a) kentsa klāya om [n]o klaina lānte paineš₁ kaklāyauwa weskeṃ [s](a)swa snai traṅko ||*
 b
 1 *|| .k. me^[i] mā š nai to₁ kauštane^[k] † aušap₁ walo treme[m]n(e) kakkārpau snai keš₁ ścīrona rekaunasa cau taršask(e)mane^[i] weššam pl. ||*
 2 *|| [a](r)s(e)ntrā^[m] 1 || tumem sārane šamā- O ne wāssan[m]a aummene ceccalo(r)mem totka š₁ šaulatse k(e)r[cy]em[n](m)em l(ac^a) ||*
 3 *|| (ono)[lm]i^[n] māka ysape kraupāntene O (p)[r](eksem)ne k₁se sai se snai karuṃ wnol(m)e se cisa maiyya pal[ā](te) || || (em)p(e)lye pradyote ||*
 4 *|| (la)laṃškem lānti soysa mai- O yya pal[ā](t)e † tumem su eṃške [t]o₁ saṅkrāmne šaṅ^[a]₁ .[p].^[o] || || (ar)[h](ā)nteš₁ šem₁ sorrom₁ painene kl(ā-) (ya) - ^[p] [pā]tarš ram no š₁suwerške cau la[k](le) p[o] traṅcāneš₁ || ^[q] - [a]šanike makā ykne cau pelaiṅnes(a) || || k₁ mā karrāte [ta]karške nessi † (c)[au]š₁ weña sa-^[r]*

[注釈]

- [a]: 対応するテキストに関連する記述がないだけでなく、この部分が破損しているため、正確に推定する事は困難であるが、ここでは暫定的に *palsko* ‘mind, spirit’ を推定した。
- [b]: ここでは暫定的に *ysals[o]n[ai]* としたが、*ysals[au]n[ai]* である可能性も排除されない。ただし、この部分は語の区切れが不明確なため解釈できない。
- [c]: この部分に在証されるトカラ語 B の *eneñni* は初出であるが、a2 に見られるこの文の動詞が *weskeṃ* であると考えられる事から複数主格形であると推定される。そして、この語形に対応する単数形として *enem* ‘within, herein’ から派生した形容詞 *eneñne** を設定する事が可能であろう⁴¹。また、この語に続く語としては、前後の文脈とパラレルを参考に語根 *pālk-* ‘to see’ の絶対分詞である *pālkormem* を推定した。
- [d]: この形式は Peyrot (2008: 90-91) で指摘されているように、トカラ語 B の *keni* ‘knees’ の通格 *kenisa* の Late Tocharian B の形式である。また、当該断片 b4 に確認される *walo* ‘king’ の単数属格 *lānti* も Late Tocharian B の形式である⁴²。
- [e]: この部分は B88a2 を参考に再建した。なお、*kālpša* が在証される B88a2 の解釈について

⁴¹ トカラ語 B の *parna* ‘outside’ から派生した形容詞 *pārñāñne* ‘external’ を参照。

⁴² この音変化については Peyrot (op.cit.: 97-98) を参照。また、Peyrot (op.cit.: 224) では、この二つの語形に基づいて THT1507 を Late Tocharian B の段階を反映する断片としている。なお Peyrot (op.cit.: 224) は、この断片と接合する THT1680 について断片に反映される言語特徴に関する記述を与えていないが、興味深い事に THT1680a5 には Classical Tocharian B の単数属格形である *lānte* が在証され、この写本を書写した者の言語は純粋な Classical Tocharian B ではなく、より言語変化の進んだものであったと推定される。このような言語特徴は、次節で検討する THT1249 + THT1681 + THT2981.frq.6 についても確認される。

は、Pinault (2004: 259-260) を参照⁴³。

- [f]: 紐穴の右側には母音<au>の一部が残存しているのが確認できる。この母音と先行する部分に基づいて欠けている部分を再建した。なお、この語形は現在までのところ指摘された事がない形式であるが、筆者の解釈は以下の和訳及び注釈を参照されたい。
- [g]: 文脈から考えて、ここには *tumem* ‘then’ 或いは *tane* ‘here’ が再建される可能性が高い。
- [h]: この部分は二断片が接合する位置にあり、解読にやや困難があるが、<ss>の上部左端には左に流れる母音記号の一部が確認される。また<ym>の上部は欠落しているため、母音を確定する事は困難であるが、ここでは文脈を考慮して [y]m(a)ss[i] と解読した。
- [i]: この部分は、過去形第 IV 類に属し、かつ-sk-で終わる動詞語根の過去分詞・男性単数主格である事は明らかであるが、文脈に相応しい語根を確定する事ができない。
- [j]: 以下の和訳で示すように後続する文が命令文であるため、この部分も命令文である可能性を指摘する事ができる。仮にこの推定が正しいならば、-me は代名詞接辞複数形として解釈できるが、先行する文脈が不明なため語根を推定する事ができない。
- [k]: この形式も hapax である。これまでに知られている語彙を参考にすると、この部分を *kau* *š* *tane* と区切り、後半を接続詞 *š* ‘and’ に *tane* ‘here’ が続いていると見做す考えもあり得るが、この場合先行する *kau* の意味を解釈できないため、このように解釈する事は妥当ではない。そのため、筆者はこの部分を一つの語形として解釈する。
- [l]: この断片では<ta>と<na>はかなり明確に区別されている事から、この部分の読みは、これまでに知られているトカラ語 B の動詞から *nārs-* ‘to urge’ の現在中動分詞として想定される *narsāskemane* ではなく、*tarsāskemane* と読まざるを得ない。また文脈からも、この動詞を *nārs-* ‘to urge’ と解釈する事は、やや不自然と思われる。
- [m]: 残存部分と文脈から、Malzahn (2010: 525-526) には登録されていないが、ここには語根 *ār-* ‘to leave, give up, abandon’ の三人称複数・現在形を推定する事が可能である。
- [n]: 同じ行に見られる *wnolme* から、この部分は韻文で書かれていると推定される。ただ、韻律を判断する事ができないため、ここでは *onolmi* という語形を再建しておく⁴⁴。
- [o]: 残存している部分と文脈から、ここには *pādhyāye* の主格及び呼格以外の形式が推定されるが、後続する文脈を確定できないため、この名詞がどの格を取っていたかを確定する事はできない。
- [p]: 前後の文脈から *šañ* ‘own’ が推定される。
- [q]: 二断片の間には 2 *akṣara* 分の欠落が確認される。最初の *akṣara* の上の部分が若干残存しているのみであり、確実に再建する事は困難であるが、ここでは b2 を参考に *tumem* ‘then’ を再建しておく。ただ、a3 と同様に似たような機能を持つ *tane* ‘here’ が再建され

⁴³ ここでは Pinault (op.cit.) に従い *kālp* を ‘Behandlung’ と解釈したが、この語の語源である梵語の *kalpa-* の語義について Apte (1957: 548a) に記載されている ‘strength, vigour’ を指すと考え、B88a2: *tane ñake uttari śamaś(k)entse kālpsa painemem ette kloyomane* を梵語の genitive absolute に対応する構文と見做し、後続する主文の動作主ともなる *uttari śamaś(k)entse* と *kālpsa* の間に修飾関係を認めず「ここで今 Uttara 少年はその力によって両足から下に崩れて」と解釈する事も可能かも知れない。ただ、この場合 *kloyomane* が属格となっていない点が難点となる。なお、トカラ語の genitive absolute については、TEB I: 83 を参照。

⁴⁴ 韻律の音節数の制限が一音節少ない場合は *wnolmi* が再建される。

る可能性も完全には排除されない。

[r]: この *akṣara* は次節で検討する THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 recto に続くが、残念ながら完全には残っておらず、ligature の下の部分の <wa> が残っているのみである。ここでは、虐待された *Sāraṇa* が *Pradyota* 王に対する復讐の念を語る部分である事を考慮し、トカラ語 B の *sakwä* ‘happiness’ を推定した。

以下には当該 folio の和訳を提示する。注釈で指摘したようにここには、これまでトカラ語研究で指摘された事がない hapax が複数含まれており、これらを正確に解釈する事は困難であるため、より確実な解釈は今後の研究の進展に俟ちたい。

a

- 1 /// ... である。僧侶たるに相応しい方法で布施に赴き、腹の (思い) が与えられなければならない。|| また、王は ... /// /// ... しながら、彼は呼びます。ここにいるのは一体誰なのか。宮廷内の者達は、すぐに (それを見て)
- 2 跪き言います。王よ、私達は皆ここにおります。王は言います。お前達は彼の ... 何を見ているのか^[a]。/// /// ... である。お前達は ... の棒によって^[b]
- 3 彼を背中から吊るしなさい。私は彼に教えてやる^[c]。王の宮殿に許可なく入るべきではない^[d]。そして /// /// 彼は衣服を掴んだ。///
- 4 /// ... 彼の側近達は彼の内衣を縛り、彼の柔らかい体を *Kharjūra* の木の棒で激しく (叩き) 始めました^[e]。
- 5 /// ... したように^[f]、また息が絶えたように^[g]、彼は地面に倒れました。そこで女性達は王の足元にひれ伏して言います。王よ、彼に罪はありません。///

b

- 1 /// ... 。彼をそれ程までに殴り倒さないで下さい^[h]。王はさらに怒りに陥り、限りなく激しい言葉で彼を罵りながら言います^[i]。... ///
- 2 /// 彼らは (*Sāraṇa* を) 置き去りにします。1 || それから、僧侶の *Sāraṇa* は悲惨な状況の中^[j]、衣服を持ち上げて、そして命からがら王宮から出て行きました^[k]。///
- 3 /// 人々がたくさん彼の近くに集まりました。(そして) 彼に尋ねます。一体誰なのか。この慈悲のない人は。あなたに対して力を誇示する者は。/// /// 恐ろしい *Pradyota* ///
- 4 /// 彼は穏やかな王の息子に対して力を誇示しました。それから彼は寺院にいる自分の師 ... まで /// /// 彼は阿羅漢の所に赴き彼の両足の下に倒れました。
- 5 そして、彼 (= *Sāraṇa*) は (自分の) 父親に対して子供がするように、この苦しみを全て彼に嘆きました。|| (それから) 尊者は多くの方法で彼を法によって /// /// 彼 (= 尊者) は信仰を抱かない事を非難しました^[l]。彼 (= *Sāraṇa*) は彼に言いました。

[注釈]

- [a]: この箇所は、*Pradyota* 王が *Sāraṇa* 王子の下に赴いた宮女達に尋ねている部分である。漢訳のパラレルには王と宮女達との間の会話は描写されていないため、王の発言を直接推定する事は難しいが、ここでは、『大莊嚴論經』「雖著鮮白衣。不如口辯說。千女圍邊坐。愛敬其容貌。」(T.04, no. 201, 323c19-20) という、宮女達が *Sāraṇa* 王子と一緒にいる場面に遭遇した王が詠んだ詩節と「娑羅那比丘盛年出家極為端正，爾時宮人見彼比丘年既少壯容貌殊特，生希有想，而作是言。佛法之中乃有是人出家學道。即邊坐。」(T.04, no. 201, 323c12-215) という記述を参考にする事が可能と思われる。即ち、これらの記述から宮女達は *Sāraṇa* 王子の容姿に魅せられて彼の下に赴いた事が窺える。これらの点を参考にすると、後続する語としては *peñiyo* ‘splendor’ 或いは *perne* ‘worth, glory’ や *pernerñe* ‘splendor, glory’ が推定されるが、この語に続く文脈を確実に推定できないため、どの格を取っていたのかを推定する事は困難である。
- [b]: この箇所に見られる *enmelyaṣṣana* は *enmelya** ‘a spieces of plant?’ (Adams 1999: 87) から派生した形容詞の女性形複数であり、後続する部分から *Pradyota* 王の部下達が手にしていた道具を形容しているが、この形容詞の意味を確定する事はできない。この部分は *Pradyota* 王の *Sāraṇa* 王子に対する虐待が始まる部分に相当する⁴⁵。
- [c]: 転写の際に推定した *āklāskaune* は、語根 *ākl-* ‘to teach’ (causative) の一人単数・現在形・能動態に代名詞接辞・三人称単数が付加されたものである。なお、この形式は Malzahn (2010: 520-521) には登録されていないが、同一の変化に属する動詞のアクセントから判断して妥当であると考えられる。また、このような推定は蔵文《*Karmaśataka*》: ‘*di mkhan po dan slob dpon gyis ma bslabs kyis nas ‘di bslab par bya’o śham nas* (D:a24b2) によって裏付けられる。
- [d]: 梵文《*Kalpanāmaṇḍitīkā*》及び漢訳『大莊嚴論經』『雜寶藏經』には *Sāraṇa* 王子が *Pradyota* 王の王宮に入るという記述は見られないが、蔵文《*Karmaśataka*》には *rgyal po gtum po rab snañ gi pho brañ gi chab sgor phyin nas chab sgo ba rñams med pa’i skabs su de rgyal po’i pho brañ gi nañ du soñ nas* (D:a24a1) とあり、*Sāraṇa* 王子が *Pradyota* 王の王宮に入るという記述が見られる (Feer 1901: 439-440)⁴⁶。
- [e]: この箇所は『大莊嚴論經』「即勅左右執此比丘，剝脫衣服唯留內衣，以棘刺杖用打比丘。」(op.cit.: 323c26-27) に対応する場面である。この二断片の破損している箇所に見られる語について、筆者は接合の結果を基に *auntsantene* = *ymaṣṣi* とした。この部分は、*auntsantene* と *aymaṣṣi* の二語から成っており、前者の語末母音と後者の語頭母音が *sandhi* で結ばれていると解釈する。後者の *aymaṣṣi* は Classical Tocharian B の *añmaṣṣi* の Late Tocharian B の語形である⁴⁷。この語は *añmaṣṣe* ‘personal’ の複数主格形であり、前後

⁴⁵ 注 43 で指摘したように、トカラ語 B の *kālp* が ‘vigour, strength’ を指すならば、この部分は「お前達は ... の棒によって力をいれて彼を背中から吊るしなさい。」と解釈される。

⁴⁶ 飯淵 (1995) によれば、蔵文《*Karmaśataka*》は根本説一切有部の伝承を踏まえたものとされており、この部分の記述の一致はトカラ語 B の物語の来源を考える上で重要である。なお、『Avadāna 写本』の部派帰属の問題については本稿第八節で取り上げる。

⁴⁷ この形容詞の語幹に見られる音変化については Peyrot (2008: 159-160) を参照。

の文の主語となっている。筆者はこの語を先に引用した『大莊嚴論經』「左右」に、また梵文《*Kalpanāmaṇḍitikā*》: */// varṣavara nirmaṇḍa kām̐cu(kīya) ///* (Lüders 1926: 183 [1979: 301])⁴⁸ 及び蔵文《*Karmaśataka*》: *zham rin pa rnam̐s-bos te | de lcag gis zhen par bzhus te btañ no* (D:a24b2-3) に見える *zham rin pa* ‘personal attendant, a private secretary’ (Das: 1067b) に対応する語と考え「側近」という和訳を与えた。なお、*auntsantene* は *au-n-* ‘to begin’ の三人称複数・過去形に三人称単数の代名詞接辞が付加された語形であるが、この後に続く形式としては『大莊嚴論經』「以棘刺杖用打比丘。」及び先に引用した蔵文《*Karmaśataka*》に見える *bzhus* (< *gzhu ba* ‘to strike, lash’ Das: 1081b) を参考にすると、*pyāk-* ‘to beat’ の不定詞 *pyāktsi* が再建されると考えられる。

トカラ語 B の *śārāk* は Adams (1999: 622) では ‘overgarment’ という訳が与えられている。Adams はこの語が在証される断片の記載を欠いているが、恐らくはこの断片に由来するものと推定される。この語は *TEB II*: 146 ではトカラ語 A の *śārak* と同源語として扱われているが、このトカラ語 A の語は Sieg (1944: 26, Anm.5) 以来、トカラ語 B の *śār* ‘over’ 及び *śariye** ‘over, upper’ と関係づけられ、‘overgarment’ という訳語が与えられてきた。しかしながら、先に引用した『大莊嚴論經』の「內衣」や、梵文《*Kalpanāmaṇḍitikā*》: *pratinivāsana-mātraprāvaraṇaḥ* (Lüders: op.cit.) に対応しているため、‘overgarment’ ではなく「內衣」(Skt. *pratinivāsana-* ‘undergarment’ *BHSD*: 363b) という訳語を与えた。なお、トカラ語 A の *śārak* が在証される部分には他言語による支持が得られていないため、‘overgarment’ という訳語が適切か否かという点について検討の余地があり、筆者の推定に従いトカラ語 A の *śārak* 及びトカラ語 B の *śārāk* の解釈は訂正される必要がある⁴⁹。

この部分に在証される *kharcuṣṣana* は語幹 *kharcuṣ* に形容詞派生の接尾辞 *-ṣṣe* が付加された形容詞の女性形・複数である。語幹の *kharcuṣ* は hapax であるが、梵語 *kharijūra-* ‘Phoenix sylvestris, the wild date tree’ (*MW*: 337c) の借用語である。また、この語に続く *śakātantaśa* は *śakāto** ‘stick, club’ の複数通格形であるが、この語の複数形はこれまでに在証された事がなかった⁵⁰。なお、この語に対応する語として、蔵文《*Karmaśataka*》には *lcag* ‘whip, rod, switch, stick’ (Das: 396) が見られる。

[f]: 転写に対する注釈で触れたように、この部分の語根を確定する事はできないが、後続する文脈から、王からの虐待を受けた *Sāraṇa* 王子が地面に倒れる際の描写であると判断される。

[g]: この箇所は、『大莊嚴論經』「尊者娑羅那受是搥打遺命無幾，悶絕蹙地」(op.cit.: 324a02-03) に対応している。筆者が把握している範囲内では *snai onolme* という表現は初出であるが、対応する漢訳から「息がない = 息絶えた」と訳す事ができよう。Adams (1999: 115)

⁴⁸ この部分について、Lüders は *kām̐cu(k)* としているが、ここでは漢訳を参考に *kām̐cu(kīya)* とした。

⁴⁹ Bailey (1950: 389-391) は、トカラ語 A の *śārak* は梵語 *śāṅka-* ‘piece of cloth, garment’ のガンダーラ語形として推定される **śāṅga-* に由来し「內衣」を意味していたとする解釈を提示している。このガンダーラ語形は漢訳仏典では「舎勒」と音写される一方で「內衣」という語義が与えられており、漢語の中古音の対応から考えてトカラ語 A の *śārak* 及びトカラ語 B の *śārāk* の原語に相当する語を音写したものと見て差し支えない。ここで筆者が提示した解釈は上記の Bailey の推定を裏付けるものと言える。

⁵⁰ このタイプの名詞の形態論に関しては、Winter (1989 [2005: 356-365]) を参照。

に指摘されるように、これまでに知られているトカラ語 B 文献では *onolme* は‘living being’指し、梵語 *nr-*, *jantu-*, *prāṇin-*, *pudgala-*, *jana-*と言った複数の語の訳語として使用されているが、印欧語比較言語学の観点からの研究では、この語は**h₂enhi-* ‘atmen’ (LIV²: 267-268) に由来し、梵語 *prāṇa-* ‘breath, living being’の calque とされている⁵¹。これらの点から考えて、トカラ語 B の *snai onolme* は梵語 *a-prāṇa-* ‘no breath’ (MW: 59b) の calque として形成されたと推定される。なお、対応する梵文《*Kalpanāmaṇḍitikā*》断片では *tatas sa mandaprāṇāvaśeṣo muktaḥ* (Lüders: op.cit.) とあり、トカラ語 B の *snai onolme* は梵語 *mandaprāṇāvaśeṣa-* ‘かすかに息を残して」に対応している。

- [h]: この行は a5 に続く場面ではあるが、対応する漢訳及び梵文とは順序が前後反対になっている。転写に対する注釈で述べたように、この箇所は *kaustane* と一つの語形として解釈すべきである。漢訳『大莊嚴論經』では「時宮人等涕泣白王。彼尊者無有罪過，云何過打乃至如是。」(op.cit.: 323c27-29) となっている事から、この語形は、語根 *kau-* ‘to kill’の現在形・二人称単数・能動態の**kaust* に代名詞接辞・三人称単数形 of the *-ne* が付加されたものと解釈できる。なお、この二つの語の間にある *-a-* は、子音連続を回避するために挿入された anaptyxis の母音であり、**kaust-ā-ne* > *kaustāne* という音変化の結果成立した語形であると考えられる。また、この箇所では現在形と否定辞の *mā* が使用されている事から禁止表現として解釈される。動詞の現在形と否定辞の *mā* で表される禁止表現については Thomas (1958: 294-303) 及び *TEB I*: 178 を参照されたい。
- [i]: この部分は、『大莊嚴論經』「王聞是語倍增瞋忿過甚。」(op.cit.: 323c29-324a01) 及び梵文《*Kalpanāmaṇḍitikā*》: *tataḥ pradyoto = bhiniveśanāt = suṣṭhutarā(m) [t]ā[li]ta(vān)* (Lüders: op.cit.) に対応するが、トカラ語 B の *snai keś ścirona rekaunasa cau tarsāskemane* に対応すると見られる部分はこれらのパラレルには見られない。この文に見られる *tarsāskemane* は動詞の現在中動分詞であるが、ここでは筆者はこれまでに知られていないトカラ語 B の動詞語根を設定すべきであると考え。そして、前後の文脈から考えて「罵る」と言う意味を推定しておく。この語根であるが、ドイツ所蔵断片 THT2237b4 には */// eršukim tar[sā]ssiš kramtsi[š] ///* とあり、この語根の infinitive の語形が確認される。この infinitive の語形は、この語根の接続法が第 IX 類或いは第 XI 類に属する事を示唆する。この二つの用例から語根 *tār-* 或いは *tārs-* が設定されるが、*tār-* であれば現在形第 XI 類に、また *tārs-* であれば現在形第 IX 類に分類される。ここでは、語根の意味と現在形・接続法の対応から考えて、語根 *tārs-* を設定し第 IX 類に属しているとしておく⁵²。
- [j]: この箇所に在証される *aummene* は、トカラ語 B の *aume* ‘misery’の処格であり、子音の gemination を伴って表記されたものと考えられる。語中での子音の gemination は、それ程頻繁に見られるものではないが、ドイツ所蔵断片 THT3439a1 には */// (pe)laikneṣse naummiye ///* という例が確認されており、*naumiye* ‘jewel’の *-m-* に gemination が見られる

⁵¹ Pinault (2008: 434-436) 及び Adams (op.cit.) を参照。

⁵² この二つの用例は共に当該の語根の causative に分類されるアクセントを示している。また、ここで提出した意味が正しいならば、PIE の **ter-* ‘sprechen’ (LIV²: 630-631) と関係づけられる可能性が指摘される。

事から、この解釈は支持されよう。

[k]: ここではトカラ語 B の *totka śaulatse* を「命からがら」と和訳した。後者の *śaulatse* は初出であるが、*śaul* ‘life’に所有を表す接尾辞 *-tse* が付加された形式である。

[l]: この場面は、恐らく *Pradyota* 王に虐待された事に怒りを抱いている *Sāraṇa* 王子を *Kātyāyana* が批判している箇所に対応すると推定される。この推定が正しいならば、この部分は『大莊嚴論經』「尊者迦旃延知娑羅那其心忿恚，而告之言。出家之法不護己身，為滅心苦。即說偈言。汝身既苦厄。云何生怨。莫起瞋恚鞭。狂心用自傷。」(op.cit.: 324b01-04) に対応する。

4-2. THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 の転写と和訳

ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1249 及び THT1681 は、表裏共に 5 行ずつ書かれた断片であり、断片の上下は完全に残っている。THT1681 は folio の左端の部分に相当し、紐穴の右側の部分まで残存している。また、裏には<287>という folio の番号が確認される。一方、THT1249 は残存部分から見て folio の中間に位置していたものであると判断できる。この二断片と比較して、THT2981.frg.6 は 3 akṣara のみを残す小断片である。これらの断片にも発見場所を特定する出がかりは残されていない。

この三断片は直接接合するが、接合の結果復元された folio の残存部分のサイズは縦が約 8.1cm、横は約 30.5cm で、左端から約 12.7cm の位置に紐穴が穿たれている。なお、接合の結果については図 5 を参照されたい。

[転写]

a

- 1 (k)[w](ā) m[ā] ś\ nesalle † ṇake ṇ[i]ś\ p. - - - - -
(tse)[ṇ]k(e)maṛ\^[a] śtwarā ykne retekempa pr(a)dyonem^[b] ///
- 2 ntse nakanma akṣāne wer sanuṇ- O (ñe) - (we)[t](a) nraine oko māka
rano enāskemane sā(ṛaṇem) ///
- 3 ṇkeḷ\ nraiṣṣana pwārasa tschema- O [r\ m](ā n)r(aine) k(l)autkomar\ koś\ cwī
tentse parki mā yāmmaṛ\ || ///
- 4 weṣṣaṇneś\ kr,i mā ra tsa klau- O tkalle tākaḷ\ paintsa ś\ tane
sabraḥmacārinta^[c] wāṣmoṇ(ts) ///
- 5 pās^[f]\ wṣiyau paintsa k,se tākaṇ † tumem kaunantse yaipormem orkamo tāka
kātyāyane cau ṣaṇ^[d]\ lem(ne) ///

b

- 1 pālskonta pālskanamane pradyote lānt[e] nkelñe † aṣanīke ṣpane cirkāne^[d]
saksartse^[e] kly(a)ntsa † ṣpane lkā[tsi] ///
- 2 mai ṇake pradyote lānta ānte O āntempa wetane maṇkāwa † pradyote
eṇsateñ^[f]\ po nau[n](t)[ai] ///

- 3 *ne aṣanike „pādhyāye wrattsai O [l](ya)[m](a w)[e](s)[ṣa](m)^[f] p[ai]nene
kloyomar\ śaulaṣṣai proskaine pak[ā] ///*
- 4 *sa āksa † rmermane^[g] kātyāya- O (ne) – – (ṣpa)[n](e) soṃṣka se starś^[h]
|| sārane weṣṣam sasw(a) ///*
- 5 *– yamaṣṣawa parccauk[k]e^[i] [t](a)[k]ā[w](a) – – – – – ṇ^d || om no
kātyāyane weñā(n)[e] ///*

[注釈]

- [a]: Malzahn (2010: 983) には登録されていないが、前後の文脈から語根 *tsānk-* ‘to (a)rise’ の一人称単数・現在形の *tseṅkemar* が推定される。
- [b]: ここには *pr(a)dyotem* が期待されるが、本稿で検討している『Avadāna 写本』では単独で書かれる <ta> と <na> の区別は明瞭であり、明らかに *pr(a)dyonem* と解説すべきである。
- [c]: ここに見られる *sabrahmacārīnta* は初出であるが、この語は *sabrahmacārī** の複数斜格形であり、梵語 *sabrahmacārīn-* ‘a fellow-student’ (MW: 1151a) の借用語である。
- [d]: この語形は Malzahn (op.cit.: 657) には登録されていないが、語根 *tār-* ‘to dismiss, emit’ の三人称単数・過去能動形に代名詞接辞が付されたものである。Krause (1952: 248) 及び Malzahn (op.cit.) にあるように、この語根の三人称単数・過去能動形は *carka* であり、代名詞接辞が付加された形式としては *cārkāc* (B239a6) が知られている。当該断片に在証される *cirkāne* は、**cārkāne* の第一音節の /ā/ が硬口蓋子音である /c/ の後で変化したものである。この音変化は Peyrot (2007: 55-57) に指摘されているように Late Tocharian B の特徴である。なお、当該断片に在証される *starś* (b4) も Late Tocharian B の特徴を示している⁵³。
- [e]: この形式は hapax であるため、このような形式の語の認定が確実であるか否かについては今後の研究に俟たねばならないが、ここでは、文脈から見て *sa-ksa-rtse* という連続の解釈に際して、*sak* をトカラ語 B の *sakw* ‘fortune, happiness’ とは解釈しない。恐らく、*-tse* は所有を表す形容詞接辞であり、語幹を *sāksār** とする方が妥当と思われる。
- [f]: この部分は『大莊嚴論經』「於其中路見迦旃延執持衣鉢入城乞食，涕泣墮淚，向於和上，而説 … 求哀和上舉聲大哭。我今歸依和上。」(T.04, no. 201, 326a14-16, a24-25)・『雜寶藏經』「其時和上，應念知心，執錫持鉢，欲行乞食，於其前現 … 答和上言。今若救濟弟子之命，更不敢。」(T.04, no. 203, 459b25-26, b28-29) 及び藏文《Karmaśataka》: *des bltas na rmi lam ñid na tshe dan ldan pa kātyāyana'i bu gron khyer gyen du rgyal na bsod sñoms byed cin 'dug pa mthon nas des kus biab ste* (D:a25a4-5) に対応する場面であり、この対応

⁵³ この音変化については、Peyrot (2008: 77-78) を参照。なお、Peyrot (op.cit.: 223-224) では、当該断片が反映する言語段階について記載がないが、上で指摘した形式からは、当該断片は Classical Tocharian B を基本としつつも、Late Tocharian B の特徴が混入したものと判断できる。この点については、前節で検討した THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.fig.1 + THT3054 と同様の状況を示しており、恐らく書写に当たった者の言語は純粋な Classical Tocharian B ではなく、より言語変化の進んだものであったとする筆者の推定を支持する。

と残存している部分に基づいてトカラ語 B 本文を再建した。

- [g]: この部分の語の区切れも判然としない。この *rme-rma-ne* を現在知られているトカラ語 B の文法に照らせば、*rmer* は *ramer* ‘quickly, suddenly’ の韻文に見られる形式とする事が可能かも知れないが、この場合、後続する *mane* の解釈が困難となる。この部分を複数の語として解釈する事は困難なため、ここでは *rmermane* を一つの語として解釈する。
- [h]: この語形は Peyrot (op.cit.: 77-78) で指摘されている絶対語末における *c > ś* の音変化を示しており、Late Tocharian B の特徴と見做す事ができる。
- [i]: この部分の語の区切れも確定不能である。トカラ語 B には *cau* は代名詞の斜格として、また *ke* は強意の小辞として在証されているが、後続する *takāwa* と結びつけると、このような解釈は困難と思われるため、*parccaukke* という形式を設定する方が妥当であろう。ただ、トカラ語 B の語彙としては *-cc-*や *-kk-* という子音の gemination やそれが連続して現れる事はやや不自然であり、子音の同化の可能性が指摘されるが、現在までのところ、この *parccaukke* という形式は hapax であり、正確な解釈を与える事は困難である。筆者の暫定的な解釈については、以下に挙げる和訳を参照されたい。

図 5 に示したように当該の三断片は直接接合するが、紐穴の周辺に相当する部分は回収できていない。これらの欠けている部分、特に a5 及び b5 は欠落が比較的大きいため、トカラ語 B の本文を再建する事は困難である。以下には THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 の和訳を提示するが、当該断片に関してもこれまでトカラ語研究で指摘された事がない hapax が複数含まれており、ここで提示したこれらの語に対する解釈の妥当性については、今後の研究の進展に俟ちたい。

a

- 1 幸福であるべきではない。今、私は ... 起ち上がり、四種類の軍隊と共に *Pradyota* 王を ... するつもりです。///
- 2 彼 (= *Kātyāyana*) は ... の誤りを彼 (= *Sāraṇa*) に語りました。また、憎しみ、敵意、(憎悪)^[a]、戦い、地獄における報い、多くの事を教えながら *Sāraṇa* を ///
- 3 (しかし)、私は彼にその報い^[b]を行わない限り、今、地獄の炎によって私は燃えているとしても、地獄に落ちる事はないだろう。///
- 4 彼は彼 (= *Sāraṇa*) に言いました。もしあなたが、この同学の仲間達や友人達の足元に戻らないのであれば、///
- 5 もし私が足元から離れるとして^[c]、何が起ころうか。それから、太陽が沈んで夜になりました。*Kātyāyana* は彼を自分の住居 (に) ///

b

- 1 心を... *Pradyota* 王が滅亡する事を考えながら ... 。尊者は彼 (= *Sāraṇa*) を眠りに導きました。彼は夢を見つつ眠りました^[d]。夢を見る事 ///
- 2 私は ... 。今、*Pradyota* 王の前線との戦いで私は敗北した^[e]。*Pradyota* 王は私を捕えた。

全ての道^[a] ///

- 3 ... 尊者である師は (彼に) 向かい合っていました。(Sāraṇa は) 言います。私は両足に赴きます。命の危険に際して ... ///
- 4 ... 彼は目覚めた。満足しつつ^[a]、Kātyāyana は (言います)^[b]。息子よ。それはあなたの夢です。Sāraṇa は言います。尊者よ。///
- 5 私は ... をしました。私は道に外れていました^[a]。私 (?) ... 。そこで、Kātyāyana は彼に言います。///

[注釈]

[a]: この箇所はかなり簡略化されているが、Kātyāyana が Sāraṇa を説得する場面、即ち『大莊嚴論經』「時彼和上説是偈已，而語之言。汝於今者宜捨瞋忿惱害之心，設欲惱他，當聽我說。一切世間悉皆燒惱，云何方欲惱害眾生。一切眾生皆屬死王，我及於汝并彼國王不久當死，汝今何故欲殺怨家。一切有生皆歸於死，何須汝害。生必有死無有疑難，如似日出必當滅沒，體性是死，何須加害。汝設害彼有何利樂。汝名持戒，欲加毀人，於未來世必得重報受苦無量。此報亦爾何須加毀。彼王毀汝，汝起大瞋，瞋恚之法現在大苦，於未來世復獲苦報，先當害瞋，云何傷彼。若於剎那起瞋恚者逼惱身心，我今為汝說如是法，當聽是喻。如指然火欲以燒他，未能害彼自受苦惱。瞋恚亦爾，欲害他人自受楚毒，身如乾薪瞋恚如火，未能燒他，自身焦然。徒起瞋心欲害於彼，或能不能，自害之事決定成就。」(T.04, no. 201, 325b03-19) 及び藏文《Karmaśataka》: *gnas britan gyis smras pa | bu khro ba 'i dbaṅ du ma 'gro shig | bcom ldan 'das kyis rab du byun bas ni | 'jig rten gyi chos brgyad de | rñed pa dan | ma rñed pa dan | grags pa dan | grags pa ma yin pa dan | bstod pa dan | smad pa dan | bde ba dan | sdug bśnal ba thams cad bzod par bya'o zhes ma gsuṅs sam zhes byas te* (D:a24b6-7) に対応する。このような対応を考慮に入れるならば、欠けている部分には、Kātyāyana が Sāraṇa に説いた内容に相当する語が再建されると推定される。なお、上の和訳ではトカラ語 B の *rser* 'hate' を再建しているが、推定される音節数によっては類似した意味を持つ *śconolśconiye* の斜格 *śconai* が再建される可能性も完全には排除しない⁵⁴。

[b]: トカラ語 B の *parki* は現在までに知られている用例が非常に少ないだけでなく、文脈も理解が困難という事もあり意味が確定できていない語である。この語について、Adams (1999: 358) は語根 *pār-* 'to arise' と関係づけ 'advantage' と解釈しているが、この文脈では 'advantage' という意味は適切ではないように思われる。この部分は、Pradyota 王に虐待された Sāraṇa が彼に対して復讐を宣言する場面であり、*parki* もこの文脈の中で意味が推定されるべきである。この用例とその他の用例に基づいて、筆者は「報い」という意味を設定しておく⁵⁵。

⁵⁴ トカラ語 B の *śconolśconiye* は伝統的に 'enmity' の意味で解釈されてきたが、正しくは 'hateful state, hateful behavior' と解釈される。この点については Ogihara (forthc.a) を参照されたい。

⁵⁵ 現在までに知られている用例は 90b5, 255b4, H 150.125 (= IOL Toch 277) a3 の三例である。この三例の内、

- [c]: 先行する部分を欠いているため、和訳では暫定的な解釈を提示するに止めた。
- [d]: 前節で述べたように、ここでは *saksartse* を語幹 *sāksār** に所有を表す接尾辞の *-tse* が付された形容詞として解釈した。この部分は、『大莊嚴論經』「時迦旃延以神足力令其重眠，夢向本國，捨戒還家居於王位，集於四兵往向巴樹提。」(op.cit.: 326a8-10)・『雜寶藏經』「於其夜半，尊者迦旃延便為現夢，使娑羅那自見己身，罷道歸家，父王已崩，即紹王位，大集四兵，伐惡生王。」(T.04, no. 203, 459b19-21) 及び藏文《Karmaśataka》: *tshe dan ldan pa kātyāyana'i bus de bzlog pa'i phyir des byin gyis brlabs te | ci nas de ñal ba'i rmi lam du des bslab pa phul te* (D:a25a2) に対応している。この対応を考慮すると、この語に後続する *klyantsa* が語根 *klānts-* 'to sleep' の三人称単数・過去形である事から、この語は「夢を見つつ」という意味で解釈が可能であると思われる。筆者の解釈が成立するのなら、*sāksār** は「夢」を意味していたと推定される。
- [e]: この部分は『大莊嚴論經』「時巴樹提亦集四兵共其鬪戰，娑羅那軍悉皆破壞，擒娑羅那拘執將去」(op.cit.: 326a10-11)・『雜寶藏經』「既至彼國，列陣共戰，為彼所敗，兵眾破喪，身被囚執。」(op.cit.: 459b21-22) 及び藏文《Karmaśataka》: *de thos ma thag tu des dpuñ gi tshogs yan lag bzhi go bskon nas | rgyal po gtum po rab snañ gi yul du dmag dran pa las | rgyal po gtum po rab snañ gis de'i gyul pham par byas te | thub par byas nas | rgyab kyis phyogs par byas te | gson por bzuñ nas gsod du btañ ste | de nas gshed ma'i mi rnams kyis khrid de gsod pa'i sar phyin du ñe ba dan* (D:a25a3-4) に対応する。この行の最初に見られる *mai* は、一人称単数・過去中動態語尾であると考えられる。また、*ñake* は「今」を表しており、このような前後関係から見れば、*pradyote lāntā ānte āntempa wetane mānkāwa* は、一つの文を構成していると考えべきである。この文の動詞 *mānkāwa* は、自動詞の語根 *mānk-* 'to deprived of, suffer the loss of' の一人称単数・過去形であるため、先行する *pradyote lāntā ānte* はこの文の主語や目的語とは考えられない。筆者は、この部分を書写する際に書き誤りがあったものと推定する。即ち、本来の文は *pradyote lāntā āntempa wetane mānkāwa* 「Pradyota 王の前線との戦いで私は敗北した」となっていたが、紐穴の部分にかかった際、誤って *ānte* を二度書写したものと考えられる⁵⁶。
- [f]: 残存している部分から *nauntai* と解説し、これを *naunto** 'street' の単数・斜格形とする事は可能であるが、恐らく処格などの二次的格の形式が再建され则认为られる。ただし、先行する *po* 'all' との関係が不明だけでなく、複数・斜格形 *nauntaim* の二次的格

90b5 は */// (r)ekauna kauṃ parki aksaune mā śwātsi* とあり、Broomhead (1962 II: 168) や Adams (1999: 210) 及び Schmidt (2001b: 320) は 'sunrise' と解釈するが、筆者はこの部分の読みを */// (r)[e] kau[n](a) kauṃ parki aksaune mā śwātsi* と訂正し、*kauna kauṃ* をトカラ語 A の *kom kom* 'day by day' に対応する複合語であり、この *kauna kauṃ* に見られる *-a-* を TEB I: 117 で指摘されている複合語の結合母音と解釈したい。なお、トカラ語 B140a2 には *kaun kaun* が既に在証されている。また、H 150.125 (= IOL Toch 277) a3 には */// sa parki yā ///* とあり、この断片と同様に *parki yām-* という用法で使用されているものと推定される。この二例が斜格で使用されているのに対して、B225b4 は *ma cpi nesām [pā]rki* とあり、主格形が確認される。この部分は解釈が難しい韻文の一節であるが、筆者は「彼にはその報がない」と解釈しておく。なお、筆者の提示した意味が正しいならば、この語は PIE の **perk-* 'an-, auffüllen' (LIV²: 476) と関係づけられる可能性がある。

⁵⁶ ここでは *pradyote lāntā ānte* を複合語として解釈したが、*pradyote lānt(e) ānte* と見做し *walo* 'king' の属格である *lānte* の書き誤りの可能性も考慮に入れるべきかも知れない。

の形式が再建される可能性も残されているため、確定はできない。

- [g]: 転写に対する注釈で指摘したように、ここでは *rmermane* を一つの語形として解釈する。トカラ語 B の文法に照らして、最後の *mane* は動詞の現在中動分詞の語尾であると推定されるが、先行する *rmer* は、そのままでは動詞語幹と見做す事はできない。ここでは、本来は **rme-ma-me* となっていた部分を、書写の際誤って二番目の *akṣara* にも <v> を付加したのではないかと推定したい。この推定が成立するならば、**rmemane* は、現在形第二類に属する語根 *rām-* の現在中動分詞と考える事ができる。現在までのところ、トカラ語 B 文献には語根 *rām-* ‘to bend, bow’ が知られているが、この語根は現在形第 VI 類に属しているため、この語根とは別の語根であると推定される。Malzahn (2010: 818-819) には、*rām-* ‘to bend, bow’ とは別の語根として、正確な意味は不明とした上で *rām-* を設定しているが、この語根の定動詞形として知られている唯一の形式である *rāmtār* は、現在形第 II 類の語形と見做しても矛盾しない。恐らく **rmemane* は、後者の *rām-* の現在中動分詞であろう。当該断片も含めて、現在知られているこの語根の用例から意味を確定する事は困難であるが、暫定的に「満足して」という解釈を提示しておく。
- [h]: 直接接合する部分を参考にすると、この箇所には 4~5 *akṣara* 欠けているものと推定される。この部分は『大莊嚴論經』「迦梅延言。汝不罷道，我以神力故現夢耳。」(op.cit.: 326b04-b05) 及び藏文《*Karmaśataka*》: *bu khyod kyis rmi lam mthoñ bar zad kyis ma 'jigs shig* (D:a25a6) に対応しているものと推定され、この対応を前提にして欠けている部分を補うと、*kātyāya(ne weṣṣām śpa)[n](e) soṃśka se starś* 「*Kātyāyana* は言います。息子よ。それはあなたの夢です。」という文が期待される。
- [i]: 先に指摘したように、この語は hapax である。トカラ語 B の *takāwa* は *nes-* ‘to be’ の一人称単数・過去形である事から、この部分は *Pradyota* 王に復讐を試み敗北する夢を見た *Sāraṇa* が、*Kātyāyana* に後悔の念を語る場面に対応すると考えられる。ここでは、『大莊嚴論經』「願和上解我違和上語。言我本愚癡欲捨佛禁，聽我出家」(op.cit.: 326a26-27) を参考にして、「道に外れた、誤った」という意味を推定した⁵⁷。また、*yamaṣṣawa* に先行する語としては *parki* が推定されるかも知れない。

4-3. THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 及び THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 のパラレルとの比較

筆者の研究によれば、当該断片のパラレルとして以下のものを指摘する事ができる。

[漢訳]⁵⁸

『大莊嚴論經』卷 12 第 65 章 (T.04, no. 201, 323c4-326b13)⁵⁹

⁵⁷ 筆者の提示した解釈が正しいなら、この語の後半の *ccauckke* は、梵語 *caukṣa-* ‘pure, clean’ (MW: 403a) の *Prākṛit* の語形に対応し、全体としては **pari-caukṣa-* に由来していたのではないだろうか。

⁵⁸ この物語は、世親の『唯識二十論』中の「論曰。如由鬼等意念勢力。令他有情失念得夢。或著魅等變異事成。具神通者意念勢力。令他夢中見種種事。如大迦多衍那意願勢力。令娑剌摩王等夢見異事。」(T.31, no. 1590, 77a02-05) でも言及されている。

『雜寶藏經』卷2第24章「娑羅那比丘為惡生王所苦惱緣」(T.04, no. 203, 459a21-c23)⁶⁰

[梵文]

SHT21.80 (= «*Kalpanāmaṇḍitīkā*» 写本): Lüders (1926: 182-183 [1979: 300-301])

[藏文]

«*Karmaśataka*» 第 89 話 «*Sarana*» (D:a22b4-26b6)⁶¹, cf. Feer (1901: 439-441)

なお上記のパラレルの内、『大莊嚴論經』所収の物語はかなり長いが、筆者が接合の結果に基づいて回収したトカラ語 B の本文は、首尾を欠いてはいるものの、この物語のほぼ全体に相当するため、以下には物語全体を引用する事とする⁶²。また、下記漢訳仏典の引用中、関連する部分を下線で表示する。物語のあらすじは、主人公の王子娑羅那 (= *Sāraṇa*) が父の死去に際して王位を継承せず出家し⁶³、迦旃延 (= *Kātyāyana*) を師としていたが、ある時巴樹提 (= *Pradyota*) 王の国で、王に虐待され彼に復讐するために信仰を捨て去る事を決意し、それを *Kātyāyana* やその他の僧侶が説得するものの受け入れないため、*Kātyāyana* は *Sāraṇa* の還俗に同意する。しかし、その夜、*Kātyāyana* は神通力によって *Sāraṇa* に *Pradyota* 王との戦いに敗北・捕縛の後処刑される夢を見させる事で復讐の念を放棄させるという内容である。

[漢訳]

『大莊嚴論經』

「我昔曾聞。素毘羅王太子名娑羅那，時王崩背，太子娑羅那不肯紹繼，捨位與弟，詣迦旃延所求索出家。既出家已，隨尊者迦旃延，詣巴樹提王國，在彼林中住止。巴樹提王將諸宮人，往詣彼林中眠息樹下。彼尊者娑羅那乞食迴還坐靜樹下，時諸宮人性好華菓，詣於林中遍行求覓。娑羅那比丘盛年出家極為端正，爾時宮人見彼比丘年既少壯容貌殊特，生希有想，而作是言。佛法之中乃有是人出家學道。即遶邊坐。時巴樹提王既眠寤已，顧瞻宮人及諸左右，盡各四散求覓不得。王即自求所在追尋，見諸宮人遶比丘坐聽其說法，即說偈言。

雖著鮮白衣 不如口辯說

⁵⁹ 仏語訳は Huber (1908: 342-355) を参照。

⁶⁰ 仏語による梗概は Chavannes (1911: 23) を参照。

⁶¹ 既に引用した部分も含めて本稿での引用はデルグ版に基づいており、北京版及びトクパレス写本は参照していない。

⁶² 蔵文 «*Karmaśataka*» に収録されている «*Sarana*» では、この部分は現在物語であり、この後さらに過去物語が続いている。『*Avadāna* 写本』がこの過去物語を含んでいたか否かを判断する事はできないため、ここでは現在物語に対応する部分のみを検討対象とするが、飯淵 (1998: 24-25) では過去物語が他文献から転用される可能性に言及しており、「*Sarana*」の過去物語も必ずしも本来的な要素とは言えない。また、松本 (2001: 資料編 58) に指摘されるように、この物語では *Kātyāyana* ではなく *Kātyāyanaiputra* (Tib. *kātyāyana'i bu*) となっており、その他の版本とは異なっている。なお、この物語の漢訳仏典中におけるパラレルを最初に指摘したのは、管見の限り Lévi (1908: 150) である。

⁶³ 蔵文 «*Karmaśataka*» では、王が在世している間に出家している。

千女圍邊坐 愛敬其容貌

爾時彼王以瞋忿故語比丘言。汝得羅漢耶。答言不得。汝得阿那含耶。答言不得。汝得須陀洹耶。答言不得。汝得初禪二禪乃至四禪耶。答言不得。爾時彼王聞是語已甚大忿怒，語尊者言。汝非離欲人，何緣與此宮人共坐。即勅左右執此比丘，剝脫衣服唯留內衣，以棘刺杖用打比丘。時宮人等涕泣白王。彼尊者無有罪過，云何搗打乃至如是。王聞是語倍增瞋忿，打過甚。爾時尊者，先是王子，身形柔軟不更苦痛，舉體血流，宮人觀之莫不涕淚。尊者娑羅那受是搗打遺命無幾，悶絕壁地，良久乃蘇，身體遍破如狗喇嚙，譬如有人蟒蛇所吸已入於口，實難可免，設還出口取活亦難。娑羅那從難得出亦復如是，張目恐怖又懼更打，舉身血流不能著衣，抱衣而走，四望顧視，猶恐有人復來捉己。同梵行者見是事已，即說偈言。

誰無悲愍心 打毀此比丘
云何出家所 而生勇健想
云何都不忍 生此殘害心
無過橫加害 實是非理人
出家捨榮貴 單獨無勢力
衣鉢以自隨 不畜盈長物
是何殘害人 毀打乃至是

諸同學等扶接捉手，詣尊者迦旃延所，見娑羅那舉聲涕哭，生於厭惡，而說偈言。

如彼閻浮果 赤白青班駁
亦有赤淤處 血流處處出
誰取汝身體 使作如是色

爾時比丘娑羅那，以己身破血流之處指示尊者，即說偈言。

如我無救護 單子乞自活
自省無過患 輕欺故被打
巴樹提自恣 豪貴土地主
起暴縱逸心 惡鞭如注火
用燒毀我身 我既無過惡
橫來見打撲 傷害乃至是

尊者迦旃延知娑羅那其心忿恚，而告之言。出家之法不護己身，為滅心苦。即說偈言。

汝身既苦厄 云何生怨恨
莫起瞋恚鞭 狂心用自傷

娑羅那心生苦惱瞋相外現，如龍鬪時吐舌現光亦如雷電，而說偈言。

和上應當知 瞋慢燒我心
猶如枯乾樹 中空而火起
出家修梵行 已經爾所時
如我於今者 欲還歸其家
憊劣怯弱者 猶不堪是苦
況我能堪忍 如此大苦事

<u>我今欲歸家</u>	<u>還取於王位</u>
<u>集諸象軍眾</u>	<u>覆地皆黑色</u>
瞋恚心熾盛	晝夜無休息
猶如大猛火	焚燒於山野
螢火在中燄	巴樹提亦爾

說是偈已即以三衣與同梵行者，涕泣哽咽禮和上足，辭欲還家，復說偈言。

和上當聽我	懺悔除罪過
我今必向家	心意無願樂
於出家法中	不得滅此怨。」

時彼和上於修多羅義中善能分別最為第一，辭辯樂說亦為第一，而告之言。汝今不應作如斯事。所以者何。此身不堅會歸盡滅，是故汝今不應為身違遠佛法，應當觀察無常不淨。即說偈言。

此身不清淨	九孔恒流污
臭穢甚可惡	乃是眾苦器
是身極鄙陋	癰瘡之所聚
若少根觸時	生於大苦惱
汝意迷著此	殊非智慧理
應捨下劣志	如來所說偈
汝今宜憶持	忿恚瞋惱時，
能自禁制者	猶如以鞅勒
禁制於惡馬	禁制名善乘
不制名放逸	居家名牢繫
出家為解縛	汝既得解脫
返還求枷鎖	牢縛繫閉處
瞋是內怨賊	汝莫隨順瞋
為瞋所禁制	佛以是緣故
讚於多聞者	仙聖中之王
汝當隨彼語	今當憶多聞
莫逐於瞋恚	若以鐵鋸解
身體及支節	佛為富那等
所可宣說者	汝宜念多聞
如是等言語	當憶舍利弗
說五不惱法	汝當善觀察
世間之八法	汝宜深校計
瞋恚之過惡	應當自觀察
出家之標相	心與相相應
為不相應耶	比丘之法者

從他乞自活	云何食信施
而生重瞋恚	他食在腹中
云何生瞋恚	而為於信施
之所消滅耶	汝欲行法者
不應起瞋恚	自言行法人
為眾作法則	而起瞋恚者
是所不應作	瞋忿惱其心
而口出惡言	智人所譏呵
是故不應為	諸有出家者
應當具三事	調順於比丘
忍辱不起瞋	決定持禁戒
實語不妄說	善修於忍辱
不宜生瞋意	沙門種類者
不應出惡言	應著柔和衣
出家所不應	瞋出麤惡語
猶如仙禪坐	抽劍著袍上
比丘器衣服	一切與俗異
瞋忿同白衣	是所未應作
麤言同俗人	云何名比丘
剃髮除飾好	自卑行乞食
作是卑下相	不斷於憍慢
若欲省憍慢	應棄穢惡心
速求於解脫	身如彼射的
有的箭則中	有身眾苦加,
無身則無苦	如似關邇門
擊鼓著其側	有人從遠來
疲極欲睡眠	至門皆打鼓
未曾有休息	此人不得眠
瞋於擊鼓者	彼共多人爭
後思其根本	此本乃是鼓
都非眾人過	即起斫破鼓
乃得安隱眠	比丘身如鼓
為樂故出家	蚊虻蠅毒草
皆能蜚螫人	應常勤精進
遠離於此身	勿得久樂住
應觀其元本	乃是陰界聚
破壞陰界苦	安隱涅槃眠

時彼和上說是偈已，而語之言。汝於今者宜捨瞋忿惱害之心，設欲惱他，當聽我說。一切世間悉皆憊惱，云何方欲惱害眾生。一切眾生皆屬死王，我及於汝并彼國王不久當死，汝今何故欲殺怨家。一切有生皆歸於死，何須汝害。生必有死無有疑難，如似日出必當滅沒，體性是死，何須加害。汝設害彼有何利樂。汝名持戒，欲加毀人，於未來世必得重報受苦無量。此報亦爾何須加毀。彼王毀汝，汝起大瞋，瞋患之法現在大苦，於未來世復獲苦報，先當害瞋，云何傷彼。若於剎那起瞋患者逼惱身心，我今為汝說如是法，當聽是喻。如指然火欲以燒他，未能害彼自受苦惱。瞋患亦爾，欲害他人自受楚毒，身如乾薪瞋患如火，未能燒他，自身焦然。徒起瞋心欲害於彼，或能不能，自害之事決定成就。爾時娑羅那默然而聽和上所說法要，同梵行者咸生歡喜，各相謂言。彼聽和上所說法要必不罷道。娑羅那心懷不忍，高聲而言。無心之人猶不能忍如斯之事，況我有心而能堪任。娑羅那說偈言。

電光流虛空 猶如金馬鞭
虛空無情物 猶出雷音聲
我今是王子 與彼未有異
云何能堪忍 而當不加報

說是偈已，白和上言。所說實爾。然我今者心堅如石滴水不入，我見皮破血流在外，便生瞋患憊慢之心。我不求請，亦非彼奴，亦非庸作，不是彼民，我不作賊，不中陷人，不鬪亂王，為以何過而見加毀。彼居王位謂己有力，我今窮下人各有相，我自乞食坐空林中，橫加毀害。我當使如己之比不敢毀害，我當報是不使安眠。我是善人橫加毀辱，我今報彼當令受苦，過我今日，使凶橫者不敢加惡。作是語已，於和上前長跪白言為我捨戒。爾時同師及諸共學同梵行者，舉聲大哭。汝今云何捨於佛法。或有捉手，或抱持者，五體投地為作禮者，而語之言。汝今慎莫捨於佛法。即說偈言。

云何於眾中 獨自而捨去
退於佛禁戒 云何作是惡
云佛非我師 比丘至汝家
云何不慚愧 汝初受戒時
誓能盡形持 云何無忠信
而欲捨梵行 執鉢持袈裟
乞食以久長 著鎧捉刀杖
方欲入戰陣 王鞭毀汝身
棄捨沙門法 不憶忍辱仙
割截於手足 彼獨是出家
汝非出家耶 彼獨自知法
汝不知法耶 彼極被截削
猶生慈愍心 堅持心不亂
汝今為杖捶 而便失心耶

尊者迦旃延語眾人言。彼心以定，汝等捨去，當為汝治。諸比丘等既去之後，尊者迦旃延摩娑羅那頂，而作是言。汝審去耶。白言和上。我今必去。迦旃延言。汝但一夜在此間宿，

明日可去，莫急捨戒。答言可爾。我今最後用和上語，今夜當於和上邊宿，明日捨戒當還家居，取於王位與巴樹提共相抗衡。和上足邊以草為敷於其上宿，時迦旃延以神足力令其重眠，夢向本國，捨戒還家居於王位，集於四兵往向巴樹提。時巴樹提亦集四兵共其鬪戰，娑羅那軍悉皆破壞，擒娑羅那拘執將去，巴樹提言。此是惡人，可將殺去。於其頸上繫枷羅毘羅鬘，魁脰搖作惡聲，令眾人侍衛器仗圍遶持至塚間。於其中路見迦旃延執持衣鉢入城乞食，涕泣墮淚，向於和上，而說偈言。

不用師長教	瞋患惱濁體
今當至樹下	毀敗於佛法
我今趣死去	眾刀圍遶我
如鹿在囿中	我今亦如是
不見閻浮提	最後見和上
雖復有惡心	故如牛念犢

時彼魁脰所執持刀猶如青蓮，而語之言。此刀斬汝，雖有和上何所能為。求哀和上舉聲大哭。我今歸依和上。即從睡覺驚怖，禮和上足。願和上解我違和上語。言我本愚癡欲捨佛禁，聽我出家，我不報怨亦不用王，所以者何。樂欲味少苦患眾多，怨患過惡我悉證知。我今唯欲得解脫法，我無志定輕躁眾生不善觀察，於諸智者不共語言，為一切眾生所呵罵器。唯願和上度我出家，於苦惱時現悲愍相，我於苦惱中，和上悲愍我。迦旃延言。汝不罷道，我以神力故現夢耳。彼猶不信。和上右臂出光，而語之言。汝不罷道，自看汝相。娑羅那歡喜作是言。嗚呼善哉知識。以善方便開解於我，我有過失以夢支持。佛說善知識者梵行全體，此言實爾。誰有得解脫不依善知識。唯有癡者不依善友，云何而能得於解脫。尊者迦旃延拔濟娑羅那巴樹提瞋患之毒藥消滅無遺餘，是故有智者應近善知識。」

『雜寶藏經』

「昔優填王子，名曰娑羅那，心樂佛法，出家學道，頭陀苦行，山林樹下，坐禪繫念。時惡生王，將諸姝女，巡行遊觀，至於此林，頓駕憩息，即便睡眠。諸姝女等，以王眠故，即共遊戲，於一樹下，見有比丘坐禪念定，往至其所，禮敬問訊。爾時比丘為其說法。王後尋覺，求覓姝女，遙見樹下，有一比丘，顏貌端正，其年壯美，諸姝女等，在前聽法，即往問言。汝得阿羅漢不。答言不得。得阿那含不。答言不得。得斯陀含不。答言不得。得須陀洹不。答言不得。得不淨觀不。答言不得。王便大瞋，作是言曰。汝都無所得，云何以此生死凡夫，與諸姝女，共一處坐。即捉搦打，遍身傷壞。諸姝女言此比丘無過。王轉增瞋患，又見被打，皆啼哭懊惱，王倍瞋劇。

是時比丘，心自念言。過去諸佛，能忍辱故，獲無上道。又復過去忍辱仙人，被他刖耳鼻手足，猶尚能忍。況我今日，身形固完而當不忍。如此思惟，默然忍受。被打已竟，舉體疼痛，轉轉增劇，不堪其苦，復作是念。我若在俗，是國王子，當紹王位，兵眾勢力，不減彼王。今日以我出家單獨，便見欺打。深生懊惱，即欲罷道還歸於家，即向和上迦旃延所，辭欲還俗。和上答言。汝今身體新打疼痛，且待明日，小住止息，然後乃去。時娑羅那，受教即宿。於其夜半，尊者迦旃延便為現夢，使娑羅那自見己身，罷道歸家，父王已崩，即紹王

位，大集四兵，伐惡生王。既至彼國，列陣共戰，為彼所敗，兵眾破喪，身被囚執。時惡生王得娑羅那已，遣人持刀，將欲殺去。時娑羅那極大怖畏，即生心念。願見和上，雖為他殺，不以為恨。其時和上，應念知心，執錫持鉢，欲行乞食，於其前現，而語之言。子我常種種為汝說法，鬪諍求勝，終不可得。不用我教，知可如何。答和上言。今若救濟弟子之命，更不敢。爾時迦旃延，為娑羅那語王人言。願小停住，聽我啟王救其生命。作是語已，便向王所。其後王人，不肯待住，遂將殺去。臨欲下刀，心中驚怖，失聲而覺。覺即具以所夢見事，往白和上。

和上答言。生死鬪戰，都無有勝。所以者何。夫鬪戰法，以殘他為勝，殘害之道，現在愚情，用快其意，將來之世，墮於三塗，受苦無量。若其不如為他所害，喪失己身，殃延眾庶，增他重罪，令陷地獄，更相殘殺，冤家不息，輪轉五道，無有終竟，反覆尋之，何補身瘡拷楚之痛。汝今欲離生死怖懼鞭打痛者，當自觀身以息怨謗。所以者何。是身者眾苦之本，飢渴寒熱，生老病死，蚊虻毒獸之所侵害。如是諸怨，眾多無量，汝不能報，何獨欲報惡生王也。欲滅怨者，當滅煩惱。煩惱之怨，害無量身。世怨雖重，正害一身。煩惱之怨，害善法身。世怨雖酷，正害有漏臭穢之身。由是觀之，怨害之起，煩惱為根。汝今不伐煩惱之賊，云何乃欲伐惡生王也。如是種種為其說法。

時娑羅那聞此語已，心開意解，獲須陀洹。深樂大法，倍加精進，未久行道，得阿羅漢。」

[藏文]

«Karmaśataka»

las brgya tham pa | bam po ñi śu dgu ba | sarana zhes bya ba ni | gleñ gzhi rgyal po'i khab na bzhugs te | de'i tshe yul gyen du rgyal zhes bye ba na ni | rgyal po rab snañ zhes bya ba rgyal po byed do | yul dpa' rab ces bya ban ni | rgyal po 'char ka zhes bya ba rgyal po byed de | de gñis phan tshun mi 'thun par gyur pas | dus dus su skye bo phal po che kha 'dog par byed do | de nas gañ gi tshe tshe dan ldan pa kātyāyana'i bus ñon moñs pa thams cad sbañs te | dgra bcom pa ñiñ mñon sum du byas pa de'i tshe | des bsams pa bcom ldan 'das ni bdag gi sdug bsñal dan | yid mi bde ba mañ po sel ba yin | bde ba dan yid bde ba rnam pa dum bsgrub pa yin | sdig pa mi dge ba'i chos rnam pa dum sel ba yin | dge ba'i chos rnam pa dum bsgrub pa yin la | dge ba'i bshes gñen sañs rgyas bcom ldan 'das la brten te | rus ba'i ri las ni brgyal khrag dan | mchi ma'i rgya mtsho ni bskams na | bcom ldan 'das de'i bka' drin bdag gis ci ltar bsab par bya sñam mo | de nas yañ bsams pa sañs rgyas bcom ldan 'das | 'jig rten du 'byuñ bkañ yañ ruñ ba de dag thams cad ni | sems can la phan pa'i phyir 'byuñ ba kho na ra zad kyis | ma la bdag gis kyañ sems can la phan par bya'o sñam mo | de nas de sems pa la zhugs te | bdag gis 'dul bar bya ba 'ga' lta ci yod sñam pa dan | des ba ltas na yul dpa' rab ces bya ba na gnas ba'i skye bo mañ bo rnams ltag par bdag gis gdul bar bya ba yin par mthoñ nas | bcom ldan 'das ga la ba der soñ ste phyin nas | bcom ldan 'das kyi zhabs la mgo bos phyag 'tshal te | bla gos phrag pa gcig du gzar nas | bcom ldan 'das ga la ba de logs su thal mo sbyar ba btud nas | bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to | btsun pa bdag ljoñs rgyu zhiñ mchi bar 'tshal lo | bcom ldan 'das kyis bka' stsal ba | kātyāyana'i bu khyod soñ la bdag brgal nas gzhan

sgrol shig | bdag grol nas gzhan grol bar gyis shig | bdag dbugs phyuñ nas gzhan dbugs phyuñ shig |
 bdag yoñs su mya ñan las 'das nas | gzhan yoñs su mya ñan las zlos shig | de nas tshe dan ldan pa
 kätāyāna'i bus | bcom ldan 'das kyi zhabs la mgo bos phyag 'tshal te | 'khor lña brgya dan ljoñs
 rgyu zhiñ soñ ño | de nas de mthar gyis rgyu zhiñ soñ soñ ba las | yul gyen du rgyal du phyin de | de
 der phyin nas rgyal po gtum po rab snañ sañs rgyas kyi bstan pa la zhugs par byas so | yul dpa' rab
 du soñ nas | rgyal po 'char ka dad pa phun sum tshogs pa la gnas par byas so | skye bo phal po che
 yañ bcom ldan 'das kyi bstan pa la dad par byas so | de nas phyi zhig na yul dpa' rab kyi rgyal
 po 'char ka'i btsun mo la bu chags nas | de zla ba dgu 'am bcu lon ba dan | bu gzugs bzañ zhiñ bltan
 sdug la mdzes pa zhig btsas te | de'i btsas ston rgyas par byas nas | miñ sarana zhes btags so | de nas
 khye 'u sarana 'o ma dan | zho dan | mar dan | zhun mar dan mar gyi ñiñ gus bskyed bsriñs te |
 mtsho'i nañ gi padma bzhin du sku drag par gyur to | de nas de gañ gi tshe cher skyes ba de'i tshe |
 khye 'u de yi ge slob tu bcug ste | rgyal rigs sthyi bo nas dbañ bskur ba'i rgyal po rnams kyi bzo'i
 gnas dan | las kyi gnas tha dan pa 'di lta ste | glañ po che zhon pa dan | rta zhon pa dan | mtshon cha
 bcañ pa dan | 'phoñ dan | mdun du bsnur ba dan | phyir ba bsnur ba dan | gyul las thar bar bya ba
 dan | lcags kyus gzun ba dan | zhags pas gzun ba dan | mda' bo che 'phañ ba dan | rdo rje rtse gcig
 pa 'phañ ba dan | mtshon rce gcig ba gdab pa dan | 'khor lo 'phañ ba dan | gcad pa dan | gsheg pa
 dan | lag pas gzun ba dan | rkañ pa'i stabs dan | mgo bo bskyab pa dan | rkyañ mar 'phog pa dan |
 sgra grag par 'phog ba dan | gnad du 'phog ba dan | gdon mi za bar 'phog bar bya | ba dan | tshabs
 cher gtañ ba rnams kyañ bslabs nas gnas lña la byañ bar gyur to | de nas phyi zhig na gzhon nu
 sarana tshe dan ldan pa kätāyāna'i bu las brien nas | bcom ldan 'das kyi bstan pa la dad ba rñed
 de | skyabs su 'gro ba dan bslab pa'i gzhi rnams blañs so | de nas des bltas na pha chos dan chos ma
 yin pas rgyal po byed pa mthoñ ño | de nas des bsams pa | yab noñs pa'i 'og tu ni bdag rgyal sar 'jug
 par 'oñs te | bdag la rgyal srid mi dgos kyis | bcom ldan 'das kyi bstan pa la rab tu byuñ la chu bo
 rnams las brgal bar bya ba dan | sbyor ba rnams las 'da' bar bya ba'i phyir | brtson pa dan | bsgrub
 pa dan | 'bad par bya 'o sñam nas yab yum la gsol te | tshe dan ldan pa kätāyāna'i bu'i thad du rab
 tu byuñ ste | bsñen par rdzogs so | de nas tshe dan ldan pa kätāyāna'i bus bsams pa | yul 'di nas
 bkar dgos so sñam nas | de khrid de yul gyen du rgyal du soñ nas de na 'khrod do | de nas phyi zhig
 na tshe dan ldan pa sarana sña dro chos gos dan | sham thabs gyon te | lhuñ bzed thogs nas groñ
 khyer gyen du rgyal du bsod sñoms la soñ ño | de yañ spyod yul rgyus mi shes la lam po che dan srañ
 gi rgyus la mi mkhas pa zhig ste | de mthar gyis bsod sñoms rgyu zhiñ soñ soñ ba las | rgyal po gtum
 po rab snañ gi pho brañ gi chab sgor phyin nas chab sgo ba rnams med pa'i skabs su de rgyal po'i
 pho brañ gi nañ du soñ nas | de rgyal po'i btsun mo rnams kyis mthoñ na | gzugs bzañ zhiñ blta na
 sdug la mdzeste | lus kyi sha rgyas par 'dug go | de nas de mthoñ ma thag tu de dag de la shin tu dga'
 bar gyur te | de dag gis bsams pa | dge sloñ 'di 'di ltar gzugs bzañ zhiñ mdzes la na gzhon la | tshañs
 par spyod pa la yañ gnas so sñam mo | de nas de dag dga' bar gyur bas de'i stan bshams te 'dug tu
 bcug nas | bza' ba dan bca' ba gtsañ ma bzañ bo mañ pos tshim par byas nas | tshe dan ldan pa
 sarana bskor te chos mñan pa'i phyir guñ la bzhag go | de nas de de na 'dug pa'i skabs su rgyal po

gtum po rab snañ btsun mo'i 'khor du 'oñs so | btsun mo rnams kyi lugs kyis na gañ gi tshe | rgyal po
 btsun mo'i 'khor du 'oñ ba de'i tshe | lañs te bsur 'gro ba yin na de rnams chos ñan pa las 'dun ches
 nas ldan ba dañ bsu ba yañ ma byas so | de nas rgyal po gtum po rab snañ gis bsams pa | ma la bdag
 btsun mo rnams kyis ma bsu ba 'di ci las gyur sñam nas | rgyal pos de 'phrigs te | khros pa zhin du
 btsun mo'i 'khor du soñ ño | de der soñ ste bltas na tshe dañ ldan pa sarana btsun mo rnams kyis
 bskor ba mthoñ nas | rgyal po de lhag par yañ khro ba'i kun nas dkris pa skyes te | de khros nas
 bsams pa | dge sloñ gis ña'i chuñ ma mthoñ gis med do sñam mo | de nas des bsam pa | re
 zhiḡ 'di 'dod chags dañ bral ba yin nam | 'on te 'dod chags dañ ma bral ba yin brtag par bya'o
 sñam ste | de nas tshe dañ ldan pa sarana la smras pa | ci khyod dgra bcom pa yin nam | des smras
 pa | rgyal po chen po ma yin no | rgyal pos smras pa | ci khyod phyir mi 'oñ ba dañ | lan cig
 phyir 'oñ ba dañ rgyun du zhugs pa thob pa yin nam | 'du shes med 'du shes med min skye mched
 dañ | ci yañ med pa'i skye mched dañ | rnam shes mtha'yas skye mched dañ | nam mkha'mtha'yas
 skye mched thob pa yin nam | bsam gtan bzhi pa dañ | gsum pa dañ | gñis pa dañ | bsam gtan dañ po
 thob pa yin nam | des smras pa rgyal po chen po ma yin no | de nas rgyal pos bsams pa | dge
 sloñ 'di 'dod chags dañ bral ba ma yin la | 'di mkhan po dañ slob dpon gyis ma bslabs kyis ñas 'di
 bslab par bya'o sñam nas | zham riñ pa rnams bos te | de lcag gis zhen par bzhus te btañ ño | de nas
 de lcag gis bzhus pas bags bral nas khros te bsams pa bdag mñes par dus ñan pa'i rgyal po gtum
 po 'dis brdeggs kyis | bdag pha'i yul du soñ la pha'i yul du 'dug ste | dpuñ gi tshogs yan lag bzhi go
 bskon te soñ la | dus ñan pa'i rgyal po gtum po 'di | rdul bton te btañ ño sñam nas | tshe dañ ldan pa
 kātyāyana'i bu ga la 'dug pa der soñ ste phyin nas | tshe dañ ldan pa kātyāyana'i bu'i rkañ pa la
 phyag 'tshal te | smras pa | mkhan po bdag ma noñs par dus ñan pa'i rgyal po gtum po des | bdag
 mñes par brdeggs pas na bdag pha ma'i yul du mchis te | der mchis nas dpuñ gi tshogs yan lag bzhi
 go bskon te mchis la | dus ñan pa'i rgyal po gtum po de rdul bton te btañ gis | bslab pa'i gzhi rnams
 bzhes su gsol | gnas britan gyis smras pa | bu khro ba'i dbañ du ma 'gro shig | bcom ldan 'das kyis
 rab du byuñ bas ni | 'jig rten gyi chos brgyad de | rñed pa dañ | ma rñed pa dañ | grags pa dañ |
 grags pa ma yin pa dañ | bstod pa dañ | smad pa dañ | bde ba dañ | sdug bsñal ba thams cad bzod
 par bya'o zhes ma gsuñs sam zhes byas te | gnas britan des de la lan mañ du bkag kyañ dgag ma nus
 nas | tshe dañ ldan pa kātyāyana'i bus de la smras pa | bu de ltar khyod 'gro 'dod na da ltar ni nam
 sros su ñe ste | lam na señ ge dañ | stag dañ | gzig dañ | dred mo rnams kyi 'jigs pa yod kyis do nub
 kyi tshe la 'dir 'dug la nañ par soñ shig ches byas so | de nas des smras pa | mkhan pos ci skad bka'
 stsal ba ña zhen 'tshal lo zhes byas nas | gnas britan de de dañ gnas khañ gcig tu ñal te | tshe dañ
 ldan pa kātyāyana'i bus de bzlog pa'i phyir des byin gyis brlabs te | ci nas de ñal ba'i rmi lam du
 des bslab pa phul te | pha'i yul du soñ nas phas de'i rgyal srid la dbañ byed du bcug ste | dpuñ gi
 tshogs yan lag bzhi byin nas 'di skad ces bsgo ste | khyod kyis thog ma kho nar las su bya ba ni dgra
 tshar gcod par gyis shig | ces byas nas | de thos ma thag tu des dpuñ gi tshogs yan lag bzhi go bskon
 nas | rgyal po gtum po rab snañ gi yul du dmag drañs pa las | rgyal po gtum po rab snañ gis de'i
 gyul pham par byas te | thub par byas nas | rgyab kyis phyogs par byas te | gson por bzuñ nas gsod

*du btañ ste | de nas gshed ma'i mi rnams kyis khrid de gsod pa'i sar phyin du ñe ba dañ | des bltas
 na rmi lam ñid na tshe dañ ldan pa kātyāyana'i bu groñ khyer gyen du rgyal na bsod sñoms byed
 ciñ 'dug pa mthoñ nas des kus btab ste | mkhan po bdag gi skyabs mdzad du gsol | bdag la dka' ba
 mdzad pa dañ | srog phañs pa sbyin par mdzad du gsol | zhes zer zhiñ 'dug pa rmi lam mthoñ bar
 byin gyis brlabs so | de nas de des skrag nas sad kyañ rmi lam la yañ dag pa tsam du 'dzin ciñ de
 bzhin du rdol nas | tshe dañ ldan pa kātyāyana'i bus de la smras pa | bu khyod kyis rmi lam mthoñ
 bar zad kyis ma 'jigs shig | de nas de thos ma thag tu sarana dga' bar gyur nas sems pa la zhugs te |
 sarana zhes bya ba de ni ña ñid yin zhiñ 'dug la | bdag gis ni sems can gcig la yañ 'tshe ba ma byas
 na | da bdag khro ba'i dbañ du soñ ste | rmi lam du yañ skye bo mañ po de sñed bsad kyis | don du
 gñer ba 'di lta bu bdag gis | btañ ño sñam mo | de nas gnas brtan gyis de'i yid skyo bar gyur par rig
 nas | de dañ 'thun pa'i chos bstan te | des na saranas stan de ñid la 'dug bzhin du ñon moñs pa thams
 cad sbañs te | dgra bcom pa ñid mñon sum du byas so | de nas rgyal po gtum po rab snañ gis bdag
 gis dge sloñ lcag gis bzhus pa gañ yin pa de | rgyal po 'char ka'i bu yin no zhes thos nas | de'i thad
 du soñ ste rkañ pa la phyag 'shal nas bzod pa gsol te | de ñid las brten nas tshe dañ ldan pa
 kātyāyana'i bu zhag btun gyi bar du bshos la spyān drañs so | de nas phyi zhig na tshe dañ ldan pa
 kātyāyana'i bus bsams pa | rñed pa dañ bkur sti skyes kyis bcad dgos so sñam nas | tshe dañ ldan pa
 sarana dañ lhan cig tu rgyal po'i khab tu soñ ño |*

(D:a22b4-25b3)

上に引用したパラレルとの比較により、THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 +
 THT3054 及び THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 が、これらの物語に対応する事が窺え
 る。また、先に扱った《Jyotiṣka-avadāna》の断片と同様に対応するパラレルとトカラ語 B
 の物語を比較すると、後者は非常に簡略化されている点に気付く。ここで問題となるの
 は、本稿で検討しているトカラ語 B による物語が梵語などのインド語原典をそのまま翻
 訳したものであるか否かという点である。この点については、『Avadāna 写本』に属する
 と見られるその他の断片の紹介をした後に検討する事としたい。

5. THT1168 + THT3034 について

5-1. THT1168 + THT3034 の転写と和訳

既に触れたように、THT1168 は Malzahn (2007c: 242) で既に転写と英訳が出版されている。
 ただし、Malzahn 論文では指摘されていないが、この断片は THT3034 と直接接合する。こ
 の接合の結果、この folio は表裏共に 5 行ずつ書かれていた事が明らかになっただけでなく、
 Malzahn によって提出された転写を部分的に訂正する事が可能となった。二断片を接合した
 サイズは縦が約 8cm、横は約 19.5cm である。また、Malzahn 論文では断片の比定は為され
 ていないが、筆者の研究によれば、この断片は《Avadānaśataka》の第 7 章である《Padmañ》と
 いう題名の比喩譚に比定される。二断片を接合した結果については図 6 を参照されたい。

[転写]

a

- 1 /// - k[sa] werpiṣkatstse eṇwe maṇiye ṣai † tumem alloḡ₁ preṣciyaine cwī
w[e]r[p]i(ś)[k](accepi)^[a] ///
- 2 /// (up)pā₁ katkemanē mautāne^[b] alloḡna ṣ₁ snai keṣ₁ pyapyaim kakā^[c] ///
- 3 /// [y](e)nme(n)e (c)[e] (pārnāññ)[e]pi eṇwentse^[d] wrattsai^[e] ṣem₁ ly(ā)ka tā_u₁
up(p)ā₁^[f] ///
- 4 /// [a]nāthapiṇḍike osta ṣmeṇcantse teri^[g] ṣai [k]au ///
- 5 /// (u)[pp]ā₁ karnāmar₁ pañākte - ///

b

- 1 /// - ṣṣa(m) ṇiṣ₁ tem karnāts[i] pkām[ai]^[h] ///
- 2 /// [ys](ā)ṣṣana tinā[r]ntasa karnāskemar₁ne^[i] † te maṇṇt₁ ///
- 3 /// snai [w]. .n. - - .[k]. .[s]. (cā)mpamo śaḡ₁ tmane ysāṣṣana tināṛanta ///
- 4 /// (pāls)k(a)[n](a)[m] ate toḡ₁ se anāthapiṇḍike śpālmem eṇwe kwamts₁ [kə]lp. ///
- 5 /// [pā] kete pelkiṇ^[j] ṇāssa^[i] uppā₁ ṇaskem po ṇāssa^[i] sanai tinā₁[r]s(a)
[up](pāl)^[a] ///

[注釈]

- [a]: 最後の部分は当該断片のこの部分が、表裏反対となっている部分であり、ここではその部分を元の状態に戻した転写を与えている。
- [b]: この語形は hapax であるが、文脈から考えて動詞の三人称単数・過去形に代名詞接辞-ne が付されたものと見る事ができる。この部分は前後の文脈が明らかでないが、次節で挙げるパラレルに記述されるように、Prasenajit 王が「天神」或いは「仏陀」に花を捧げる部分に対応するならば、この動詞は「捧げる」を意味していたと推定される⁶⁴。
- [c]: 正確な語形は推定不能であるが、ここには語根 pār- 'to carry' の過去分詞が再建されるものと考えられる。
- [d]: この部分は、梵文《Avadānaśataka》: tīrthikopāsakena ca dṛṣṭaḥ [prṣṭha]ś ca (Vaidya: 1958: 18.11) 及び漢訳『撰集百緣經』「路値外道即問之曰」(T.04, no. 200, 206a11) に基づいて推定した。
- [e]: 通常トカラ語 B の wrattsai が動詞と共に使用される場合、副詞 wrattsai に支配される名詞は斜格を取るが、ここでは属格となっている。荻原・慶 (forthc.) で指摘したように、トカラ語 B の世俗文書には wrattsai が名詞として使用される例が確認されており、ここでも名詞として使用されているものと考えられる。
- [f]: 代名詞が女性形であることから、ここには pyāpyo 'flower' の斜格 pyāpyai が後続していたものと推定される。
- [g]: この部分には teri 'manner, way' が確認されることから、Peyrot (2008: 161-162) に指摘され

⁶⁴ 梵文《Avadānaśataka》(Vaidya 1958: 18.5-9) 及び漢訳『撰集百緣經』(T.04, no. 200, 206a4-10) を参照。

るように、Late Tocharian B の特徴を示していると言える。

[h]: この語形は Malzahn (2010: 702) には登録されていないが、語根 *pāk-* ‘to intend’ の一人称単数・過去形・中動態の形式である。

[i]: Malzahn (2010: 577) には登録されていないが、この語形は *käry-* ‘to buy’ の一人称単数・現在形・中動態に代名詞接辞が付された形式である。

[j]: Malzahn (2007c: 241-244) では、この語形はトカラ語 B の *ñāssō** ‘share, portion’ の斜格と見做されているが、この解釈には問題がある。まず、Malzahn が主格として設定する *ñāssō** であるが、この語形は hapax であり、既に指摘されているように B547a2 に *ñāssō* として在証される。この断片には書き誤りが若干見られると Malzahn は指摘するものの、実際には書き誤りと認定できる部分は極めて少ない。トカラ語 B の部分の母音に限って見れば、Late Tocharian B の特徴である *au > o* (cf. Peyrot op.cit.: 53-54) という二重母音の単母音化が三例確認される点、及び B547a1 に在証される *onāsträ* は通常 *aunasträ* が期待される（語幹の母音が -ä- ではなく -a-）という二点が所謂 Classical Tocharian B と異なるのみである。そのため、当該断片に在証される *ñāssō* を *ñāssō* と解釈し、それを THT1168 に二例確認される *ñāssa* と関連付ける議論には疑問が残る。また、Malzahn 論文には言及されていないが、トカラ語 B には *figura etymologica* として *ñyāssa ñāsk-* ‘to seek with desire, to seek eagerly’ という表現が二例 (B231b1, B286a4) 確認されており、THT1168b5 にも同様の表現が使用されている。これらの理由から、*ñāssa* を hapax である *ñāssō* に基づいて再建した *ñāssō** の斜格と理解するよりも、*ñyās* ‘desire, demand’ の通格と解釈し、*ñyāssa ñāsk-* という表現として理解する方が妥当であると考えられる⁶⁵。

[和訳]

a

- 1 /// ある守園人の男で、(王に) 仕える人がいました。それから或る時、この守園人の ///
- 2 /// 喜びつつ蓮の花を彼に捧げました (?). そして、その他の無数の花を選び ///
- 3 /// 門のところでこの外道の男の前に来ました。彼はその蓮の花を見ました。///
- 4 /// *Anāthapiṇḍika* 長者には ... の方法がありました。///
- 5 /// 蓮の花を買い仏陀を ... ///

b

- 1 /// (彼は) ... します。私はそれを買うつもりでした。///
- 2 /// 金貨の *denarius* で私はそれを購入します。そのように ///
- 3 /// ... なく ... 可能な ... 10 万 *denarius* 金貨 ///

⁶⁵ この解釈は Malzahn (op.cit.: fl. 22) で言語特徴と文脈の両面から否定されている。しかしながら、言語特徴については、THT1168 は単純な Classical Tocharian B ではなく、Late Tocharian B への変化を示している筆記者の手になる事が『Avadāna 写本』に属する他の断片から明らかであり、*ñāssa* を *ñyās* の通格とする理解を否定する根拠にはならない。Malzahn (op.cit.: 239) では言及されていないが、実際には *Kucha* で発見されたとされる B231b1 に在証される *ñyāssa* は、同一断片の b3 では *ñāssa* と表記されている。また、*ñāssa* を *ñyās* の通格とする理解は文脈からも否定されているが、THT1168 の内容比定に成功していないため、確実な根拠たり得ない。なお、筆者のような解釈は既に Peyrot (op.cit.: 63-64, fl. 61) で提示されている。

- 4 /// 彼 (= 守園人) は考えます。この優れた人物である *Anāthapiṇḍika* は、このように高価でも頑なに (?) 得ようとしている^[a]。///
- 5 /// ... 誰のために彼らは (一輪の) 蓮の花を熱心に望んでいるのだろうか。彼らは共に、その願望によって 1 denarius で蓮の花を ... ///

[注釈]

[a]: この行は、漢訳『撰集百緣經』「時賣花人，聞是語已，密懷歡喜，作是念言。須達長者安詳審諦而不卒暴，乃於今日，為此一花，共償價數乃至百千兩金，齎持欲去。」(T.04, no. 200, 206a21-24) に対応すると見られる。現在までのところ、トカラ語 B の *kwaṃts* ‘firm’ は、この形式としては *kwāntsa-palsko* という複合語の前分としてのみ知られている⁶⁶。ここでは対応する漢訳を参考に和訳した。同様に、この語に後続する語は語根 *kālp-* ‘to obtain’ の現在語幹に由来する形式であると推定される。

5-2. THT1168 + THT3034 のパラレルについて

上では THT1168 + THT3034 の転写並びに和訳を紹介した。既に述べたように、この二断片は以下の比喩譚に比定される。

[漢訳]

『撰集百緣經』卷 1 「王家守池人花散佛緣」(T.04, no. 200, 205c29-206b12)

[梵文]

«*Avadānaśataka*» 第 7 章 «*Padmaḥ*»: Vaidya (1958: 18-20)

以下、これらの断片のパラレルである «*Avadānaśataka*» 第 7 章 «*Padmaḥ*» 及び漢訳『撰集百緣經』「王家守池人花散佛緣」の該当箇所を引用する。下記の引用においても、トカラ語断片の理解に資する箇所は **bold 体** (漢訳仏典は下線) で示す事とする。

[梵文]

«*Avadānaśataka*»

buddho bhagavān satkṛto gurukṛto mānitaḥ pūjito rājabhī rājamātrair dhanibhiḥ pauraiḥ śreṣṭhibhiḥ sārthavāhair devair nāgair yakṣair asurair garuḍaiḥ kinnarair mahoragair iti devanāgayakṣāsurasuragaruḍakinnaramahoragābhyarcito buddho bhagavān jñāto mahāpuṇyo lābhī cīvarapiṇḍapātaśayanāsanaglānapratyayabhaiṣajyapariṣkāraṇām saśrāvakasamṅghaḥ śrāvastyāṃ viharati sma jetavane 'nāthapiṇḍadasyārāme. yadā bhagavāṃl loke notpanna āsīt, tadā rājā

⁶⁶ Pinault (2008: 445) では *kwaṃts* に対して ‘ferme, solide’ と ‘cher’ の二つの意味を与えている。ただ管見の限り、後者の意味では *kwats* という形式が使用され、*kwaṃts* の用例は見られない。また Adams (1999) はこの二つの形式を異なる語として扱っており、ここでは対応する漢訳も考慮に入れて前者の意味で解釈した。

*prasenajit tīrthikadevatārcaṇaṃ kṛtavān puṣpadhūpagandhamālyavilepanaiḥ. yadā tu bhagavāṃl
loke utpannaḥ, rājā ca prasenajid⁶⁷ daharasūtrodāharaṇena vinīto bhagavacchāsane śraddhāṃ
pratilabdhavān, tadā prītisaumanasyajātas trir bhagavantam upasaṃkramya
dīpadhūpagandhamālyavilepanair abhyarcayati.*

*athānyatama ārāmiko navaṃ padmaṃ ādāya rājñāḥ prasenajito 'rthaṃ śrāvasāṃ praviśati.
tīrthikopāsakena ca dṛṣṭaḥ [pṛṣṭha]ś ca: kim idaṃ padmaṃ vikrīṣye. sa kathayati: āmeti. sa
kretukāmo yāvad anāthapiṇḍado gṛhapatis taṃ pradeśam anuprāptaḥ. tena tasmād dviguṇena
mūlyena vardhitam. tataḥ parasparaṃ vardhamānau yāvac chatasahasraṃ vardhitavantau.
athārāmikasyaitad abhavat: ayam anāthapiṇḍado gṛhapatir acañcalaḥ sthiraśattvaḥ. nūnam atra
kāraṇena bhavitavyam iti. tena saṃśayajātena sa tīrthikābhiprasannaḥ puruṣaḥ pṛṣṭaḥ: kasyārthe
bhavān evaṃ vardhata iti. sa āha: ahaṃ bhagavato nārāyaṇasyārthe iti. anāthapiṇḍada āha: ahaṃ
bhagavato buddhasyārthe iti. ārāmika āha: ka eṣa buddho nāmeti. tato 'nāthapiṇḍadena
vistareṇāsya buddhaguṇā ākhyātāḥ. tata ārāmiko 'nāthapiṇḍadam āha: gṛhapate ahaṃ svayam eva
taṃ bhagavantam abhyarcayiṣya iti.* (Vaidya 1958: 18)

[漢訳]

『撰集百緣經』

「佛在王舍城迦蘭陀竹林。爾時波斯匿王未聞有佛，晝夜六時，齎持香花，奉事天神。佛以出世，得成正覺，將欲教化波斯匿王，故著衣持鉢，往詣王所。時波斯匿王見佛來至，光明晃昱，照曜天地，威儀庠序，人中挺特，心懷歡喜，請命使坐，設諸餽餼。供養訖竟，佛便為王，種種說法，即於佛所，深生信敬，捨事天神，心不奉拜。於是波斯匿王日復三時，齎持香花，供養如來。時送花人，奉王花已，自捉一花，欲詣市肆，路值外道即問之曰。汝齎此花，為欲賣不。答言欲賣。時須達長者復來到邊，復問彼人。汝捉此花，為欲賣不。皆言欲賣。時此二主，各共諍競，倍共償價，遂至百千兩金，故不肯止。時齎花人問外道言。汝買此花，為何所作。外道答言。我用供養那羅延天，以求福祐。次問須達長者。汝買此花，用作何等。須達答言。用供養佛。齎花人言。云何為佛。須達答言。前觀無窮，却觀無極，三界中尊，諸天世人，皆共敬仰。時齎花人，聞是語已，密懷歡喜，作是念言。須達長者安詳審諦而不卒暴，乃於今日，為此一花，共償價數乃至百千兩金，齎持欲去。今者必有大利益事，不計貴賤，必欲得之。時齎花人，即答二主。我華不賣，自欲持去用供養佛。」

(T.04, no. 200, 206a1-206a26)

以上に示した対応から、THT1168 + THT3034 は漢訳『撰集百緣經』「王家守池人花散佛緣」及び梵文《Avadānaśataka》第7章《Padmaḥ》に比定される事が窺えよう。

6. 『Avadāna 写本』に属すると見られるその他の断片について

⁶⁷ Vaidya (op.cit) では *prasejid* とあるが、ここでは *prasenajid* と訂正した。

これまでは、『Avadāna 写本』に属する断片の内、内容の比定に成功した断片を取り上げてきた。ここでは、『Avadāna 写本』に属する残りの断片の紹介を行う。なお、断片の配列は基本的には THT の番号に従うが、関連すると思われる他言語で書かれた文献が見出されたものや接合可能な断片を優先する。また、特に言及しない限り断片の表裏は公開されている写真に従っている。

6-1. THT1554 + THT3112 について

THT1554 + THT3112 は直接接合する断片である。図 7 から窺えるように THT3112 が folio の右端の部分を残しているため、この部分は folio 全体の右端に相当する。物語の確実な比定にはまだ到っていないが、THT1554 には *kaccāp* ‘turtle’や *manarkaisa* 「岸に」、また恐らく *yolo kāryorittau* 「悪い商人」が見られる点から「*Kacchapa-jātaka*」として知られている物語に対応する可能性を指摘する事ができる⁶⁸。なお、「*Kacchapa-jātaka*」の平行について湯山 (1977: 1034 及び 1983: xi-xvi) を参照されたい。二断片を接合したサイズは縦 6.4cm・横 16.3cm である。

[転写]

a

- 1 */// mar\ tumem bodhisatve kaccāp\ nete warḥṣal\ tse -///*
- 2 */// ltuweṣ\ manarkaisa kamem bodhisatve lalā[l]u kektse^[a]*
- 3 */// skemtar\ tu[s]āksa yeṣ\ pāṣṣatañ^[b] []() [o]m (n)o bodhisa^[c]*
- 4 */// ksa o - - c.. yolo ka[ry]o(r)[t](au) - - - - - .[e]*
- 5 [missing]

b

- 1 */// -///*
- 2 */// .s. † cwi [t]. - - -^[d] [r]ṣ(v) vaśirṣṣ. - - - - - [c]. mpy.^[e]*
- 3 */// (bodhi)[s](a)tve weṣṣam k_ace [p]knāṣṣīlar^[f] [y]āmtsi cai [s]. (.)[ṣ]. ñ^a_[g] om*
no
- 4 */// [mā] ṣ\ lalaṣcer\ mā yeṣ\ cimpaly^[h] neṣcer\ [ñi]ṣ\ kautsi*
- 5 */// n. 1\ ente ñiṣ\ pañākṭamñe perne kallau ot\ ye(s)///*

[注釈]

[a]: どの形式かは確定できないが、トカラ語 B の *kektseñe* ‘body’ が推定される。

[b]: Malzahn (op.cit.: 698-699) では、別の断片から代名詞接辞を伴わない形式が引用されているが、これは二人称複数・命令形・中動態の形式である。

⁶⁸ Schmidt (1983: 272-275) には「*Kacchapa-jātaka*」に比定される記述がドイツ所蔵トカラ語 B 断片 Mainz 655.1 (= THT3597) 及び B239 に見られるとされているが、この点については Peyrot (2010: 159) で疑義が提出されている。

- [c]: 恐らくトカラ語 B の *bodhisarve* ‘Bodhisattva’の主格が推定される。
- [d]: ここには<na>と読む事ができる *akṣara* が確認されるが、この *akṣara* の高さが同じ行にある別の *akṣara* と比較してやや高い位置に書かれているため、別の断片がここに付着しているものと考えられる。
- [e]: 語根 *cāmp-* ‘to be able to’の接続法或いは過去形が推定されるかも知れない。
- [f]: Malzahn (op.cit.: 703) では *pāknāṣṣitār* として引用されているが、語中の母音<ɨ>は正確には上の転写に示したように<ɤ>と訂正されるべきである。
- [g]: ここには動詞の三人称複数形に代名詞接辞が付加された形式が推定されるが、具体的な語形を確定する事はできない。
- [h]: Peyrot (op.cit.: 55-57) で言及される硬口蓋子音の前後での *ä > i* という Late Tocharian B の特徴を示している。

[和訳]

a

- 1 /// 私は ... 。それから菩薩である亀は力^{a)} ... ///
- 2 /// 離れて彼らは岸に着きました。菩薩は努力して体 ... ///
- 3 /// 私達は ... 。そのため、あなた達は私を守りなさい。|| そこで菩薩は ///
- 4 /// ... 悪い商人が ... ///
- 5 [欠]

b

- 1 /// ... ///
- 2 /// ... その ... 金剛の ... ///
- 3 /// 菩薩は言います。彼は何をしようとしていたのか。彼らは私を ... 。そこで ///
- 4 /// あなた達は努力しない。あなた達は私を殺す事はできませんでしょう。///
- 5 /// ... 私が仏陀の徳を得たならば、その時にはあなた達 ... ///

[注釈]

- [a]: トカラ語 B の *nete warkṣāl* は hendiadys として使用されている。また、ここでは *bodhisattve* と *kaccāp* を同格の要素として解釈した。

以下にはこの断片に対応すると思われる《*Kaccchapa-jātaka*》のパラレルを引用する。

『雜寶藏經』

「佛在王舍城，提婆達多，心常懷惡，欲害世尊，乃雇五百善射婆羅門，使持弓箭，詣世尊所，挽弓射佛。所射之箭，變成拘物頭華，分陀利華，波頭摩華，優鉢羅華。五百婆羅門，見是神變，皆大怖畏，即捨弓箭，禮佛懺悔，在一面坐。佛為說法，皆得須陀洹道。復白佛言。願聽我等出家學道。佛言善來比丘。鬚髮自落，法服著體，重為說法，得阿羅漢道。

諸比丘白佛言世尊神力，甚為希有。提婆達多，常欲害佛，然佛恒生大慈。

佛言非但今日，於過去時，波羅捺國，有一商主，名不識恩，共五百賈客，入海採寶。得寶還返，到迴淵處，遇水羅刹而捉其船，不能得前。眾商人等，極大驚怖，皆共唱言天神地神，日月諸神，誰能慈愍濟我厄也。有一大龜，背廣一里，心生悲愍，來向船所，負載眾人，即得渡海。時龜小睡，不識恩者，欲以大石打龜頭殺，諸商人言我等蒙龜濟難活命，殺之不祥，不識恩也。不識恩曰我停飢急，誰問爾恩。輒便殺龜，而食其肉。即日夜中，有大群象，蹋殺眾人。爾時大龜，我身是也。爾時不識恩者，提婆達多是。五百商人者，五百婆羅門出家學得道者是。我於往昔，濟彼厄難，今復拔其生死之患。」 (T.04, no. 203, 464b4-28)⁶⁹

6-2. THT2996 + THT2999 について

THT2996 及び THT2999 は状態の良くない断片であるが、直接接合する。両断片を接合した上でのサイズは縦 5.9cm・横 12.3cm である。残存している部分からは folio のどの位置に相当するかの判断はできない。なお、接合した結果については図 8 を参照されたい。

a

1 [missing]

2 ///(a)[p]ts(a)[r](a)^[a]///

3 ///[ñ]ñ(a) gaṇika^[b] .[l]. ^[c] - - - .[y]. - - k(e)ktseñ^a y.///

4 ///† k_u(c)e no alloḱ₁ pr[e]śyaine wnołmi tã_u rī(n)e///

5 ///[ś]imś₁ kaṇmaskem sã_u weña -///

b

1 ///(ś)ś(a)na ok[o]nta enepre šk[i] ye [nt].^[d]///

2 ///k[r](e)[nt](a) lywāwa sã(kr)e tsamtsi † [cau] yāmorsa to[y]^[e]₁///

3 ///- ñ^a₁ .e - - - - - yetwem wã///

4 ///[y]ã///

5 [missing]

[注釈]

[a]: 韻律の名称である *aptsaradarsaṃne* が再建されるかも知れない。

[b]: 梵語の *gaṇikā*- ‘Kurtisane, Hetāre’ (SWTF I: 160a) に由来するトカラ語 B の *gaṇika* の主格であると推定される。

[c]: ここには *kl(y)iye* ‘woman’ が推定されるかも知れない。

[d]: トカラ B の *enepre* に続く部分は語の区切れが確定困難であるが、トカラ語 A に在証される語義不明の *škenuts* の語幹である *ške** に対応するトカラ語 B の語として **škiye* を設定する事ができるかも知れない。

⁶⁹ 仏語による梗概は Chavannes (1911: 29) を参照。

6-3. その他の断片について

ここには、内容比定だけでなく断片相互の関係も確定不能な残りの断片を紹介する。

THT409^[a]

h: 8.1cm × w: 17.2cm

a

- 1 /// .ts. [a]m(i)śkāmñe sey^a | pālskontse skloḥ | proskaisa kḡltsau - ///
- 2 /// [r]..^[b] cau ai- O śai yāmormem etsūwai śemane ///
- 3 /// [tu](m)em^[b] [o-] O sta śmeñca śaṇ^a | pālskalñeṣṣe [l].. ///
- 4 /// (ya-) O kne^[c] weña mā ñiś | aikemaṛ | ///
- 5 /// .em .e^[b] - - masketar | su poyśim[ñe] ///

b

- 1 /// .ḡ^[b] - c. k. a(r)w[ā]rem krentam yakwempa - ///
- 2 /// (po-) O yśi pañākte kḡṣṣim śtwarātsai wertsya^[d] ///
- 3 /// (kuśa)[l](a)mū[l]nt(a) [p](e-) O pekwa^[e] † tumem weñāneś | k_utamem kḡ ///
- 4 /// (pañāk)[t](e)^[b] kḡṣṣimntse po O ākṣa † te weña ñiś | ṇakta [śī]^[f] ///
- 5 /// - [s]pārkālñe po wāntarwa yānmāntṛa || tumem pañā[k]te ///

[注釈]

- [a]: この断片の内容比定は為されていないが、暫定的に *Buddhalegende* に分類されている。
- [b]: これらは *TochSprR(B) II* の転写では読みが与えられていない部分であるが、公開されている写真に基づいて読みを与えておいた。
- [c]: この部分は *TochSprR(B) II* では <k te> と読まれているが、B409b2 及び b4 に見える <kta> との比較から <kne> と解釈する方が妥当であると思われる。
- [d]: *TochSprR(B) II* の脚注 10 には wertsya(ntse) の如く単数属格形を推定しているが、前後の文脈を欠いているおり確実とは言えない。
- [e]: Malzahn (2010: 700) にあるように p[a]pekwa という *TochSprR(B) II* の読みは採用しない。
- [f]: *TochSprR(B) II* では [śī] と短母音に読むが、僅かに残された部分から [śī] のように長母音として解釈すべきである。

THT1126

h: 8.2cm × w: 9.8cm

a

- 1 /// - - [nī] | [ñ]. [d]. [ki] - - - - t[o]rme[m] ///
- 2 /// - [ṣa]māne ke [s]ū g[au]tamamñ[ñ]e [ś](a)kemñe ///
- 3 /// - n(e)mceksa † 3 || taśala ṣp | ///
- 4 /// kl[e]śanma wikaṣṣam ara[ha] ///

- 5 */// – kte wa_l(_v) cwi pelaikne[n]e [w]. ///*
b
1 */// (ša)[m](ā)n[e] eške to_l \ škass uweñ^a \ – ///*
2 */// – erkanmasa kameṃ || v(ai)ś(āli) ///*
3 */// .[s]. [s^a \] mā cai prānken(i)rg †1 || tumeṃ .o ///*
4 */// [ššg]lya ste cau palkormeṃ ñ. [v]. n. – ///*
5 */// – .[e]mññ[ai] – – – .eṃ – – – pa š.(.)e ///*

THT1167

h: 8.2cm × w: 16.1cm

- a
1 */// [ārū]pyāṣṣi ñakti iprerne stmoṣ \ kentsa šāmna .i ///*
2 */// – [l]. .ām ña- O ktem lyakā ///*
3 */// – O lle šai me ///*
4 */// [n]e O tr[e]ñkalñesa^[a] rg[ddhi] ///*
5 */// ^[b][n]ta patākam^[c] tusāksa śale raddhi sa k. ///*
b
1 */// m[au]d[g]alyāyane wārpoṣ \ pañākte karso ///*
2 */// – ś \ O riś^[d] āpatta[r] \ ///*
3 */// ko- O ſanmasa ///*
4 */// (ś)l(e) ñ(a)kt(eṃ) viśva- O karmeṃs^[d] we ///*
5 */// [v](ai)ruḍiṣṣana sphariṣṣana † om no pañākte rg(ddhi) ///*

[注釈]

- [a]: この語形は Malzahn (2010: 674) には登録されていないが、語根 *trenk-* ‘to cling, stick’ の接続法語幹から派生した抽象名詞 (= abstract noun II) である。
[b]: この *akṣara* に先行する部分に文字跡が見えるが、別の断片が表面に張り付いていると推定される。
[c]: この部分の語の区切り方は不明確である。トカラ語 B には *patāk* ‘division of a verse’ という語が知られているが、この語でこの部分を解釈する事はできない。また *tākam* は語根 *nes-* ‘to be’ の接続法の語形と同一であるが、この場合先行する部分の解釈が不能となる。
[d]: ここには向格語尾が *-ś* として現れている。この音変化は Peyrot (2008: 70-71) に指摘されているように、Late Tocharian B の特徴の一つである。

以下に紹介する THT1245 及び THT1250 は共に *aptsar* ‘Apsaras, a celestial nymph’ が確認される事から、同一の物語に属している可能性を指摘する事ができるが、対応する文献が確定できておらず、またこの二断片が同一の folio に属するか否かについても不明である。

[c]: 向格語尾が-ś として現れている。既に言及したように、この音変化は Peyrot (op.cit.: 70-71) で指摘されている Late Tocharian B の特徴の一つである。

THT1250

h: 8.1cm × w: 13.2cm

a

- 1 /// k(e)n[i]s(a) mante klāya n[a] ///
- 2 /// (ap)ts(a)rnta taisa yātante^[a] † ce_[u] .k. ///
- 3 /// p[i]ś yāknesa ploryam t[u]m[e]m sū kauc^a - [l]. ///
- 4 /// na w[e]ñāreneś_[b] iñaktem neś_[c] - ///
- 5 /// (i)st(a)k_[v] ś(a)rsa tseremñent_[r]ñ^(d)_[d] na[n]o p. l. - ///

b

- 1 /// [m]ā [ñ]iś int(e)^[e] lānte waipeccenta kalypiy(a)w(a) ///
- 2 /// lyk. pi sommontse^[f] ks(a) [y]ñaktem ñem_[m] m. - ///
- 3 /// takāne palskone † kwri ñiś_[v] pañā[k](t)[e] ///
- 4 /// (pe)laikne patāk yärmne po - ///
- 5 /// - mem p(l)yatsarñ^a_[g] saim wās(ta) ///

[注釈]

- [a]: Malzahn (2010: 785-786) には登録されていないが、語根 *yāt-* ‘to be (cap)able’ の三人称複数・過去形・中動態の形式である。
- [b]: ここには代名詞接辞に付された向格語尾が-ś として現れている。既に言及したが、この音変化は Peyrot (2008: 70-71) 指摘されているように、Late Tocharian B の特徴の一つである。
- [c]: この箇所に見られる *iñaktem* は、通常 b2 のように *yñaktem* ‘among gods’ と書かれる。また、この語に続く *nes* は語根 *nes-* ‘to be’ の二人称単数・現在形であるが、ここでは語末の子音連続において絶対語末の-*i* が脱落するという Late Tocharian B の音変化を反映した語形である。この音変化については Peyrot (op.cit.: 67) を参照。なお、この語形は Peyrot (op.cit.: 223) では言及されていない。
- [d]: Malzahn (op.cit.: 998) の語根 *isere-ññ-* ‘to deceive’ の項目には代名詞接辞を除いた語形が引用されているが、具体的な在証箇所については言及がない。恐らく同書に言及される *TEB I: 217 §390* が引用している語形は、この断片に由来している可能性が高い。
- [e]: トカラ語 B の *inte* ‘if’ は Peyrot (op.cit.: 172) で指摘されるように、Late Tocharian B の資料に現れる語形である。
- [f]: この語形は *śaumo* ‘person, man’ の単数属格であるが、語幹の-*au*-が-*o*-と単母音化してお

の語末形式については庄垣内 (1978) を参照。

り、Peyrot (op.cit.: 52-54) で指摘される Late Tocharian B の特徴と見做す事ができる。なお、この語形については既に Peyrot (op.cit.: 223) で言及されている。

[g]: Malzahn (op.cit.: 841-842) には別の代名詞接辞が付された形式が登録されているが、語根 *lät-* ‘to let go out’ の二人称単数・命令形・中動態である。

THT1513

h: 8.2cm × w: 12.2cm

a

- 1 /// (šāri)putre e[p](i)[ya](c^d) kl(ā)[t]e suwane
- 2 /// l. [š]k[e] – – [sa]m[p]ānteñ^d yaka šā
- 3 /// – s(ā)_u ñ. [š]ak^[a] wa_l meñamš^[b] kātkañhe
- 4 /// – – [t]. taisa šeyemne tu yparwe pā
- 5 /// k. [e]tte temtsate † lyakāne k[r]e .e^[c] ///

b

- 1 /// s_(v) pikwalañhe tāka olyap(ot)[s]ts(e)
- 2 /// (šāri)putrems^[d] weña ašanika kā šeski ške
- 3 /// [šš]. cai wešam spaktaniki mskentar_l ||
- 4 /// e nauš_l krentauna kakraupau ramer_l ka
- 5 /// s[u] mā walke = piñ[t]e tarya piṭakanta

[注釈]

[a]: この部分の語の区切れは不明確である。

[b]: この語形は *meñe* ‘moon, month’ の複数属格形であり、Peyrot (op.cit.: 84-88) で言及される *ts > s* という Late Tocharian B の特徴を示していると思われる。なお、この語形については既に Peyrot (op.cit.: 85) で言及されている。

[c]: この箇所には *kartse* ‘good’ の男性単数斜格形の *krent* あるいは属格形 *kreñcepi* が推定されるかも知れない。

[d]: 向格語尾が *-s* として現れている。Peyrot (op.cit.: 70-71) で指摘される Late Tocharian B の特徴の一つである。

THT1611

h: 2.6cm × w: 4.8cm

a

- 1 /// – ///
- 2 /// [ñ]i_l ašām nesau † ///
- 3 /// – – ///

b

- 1 /// – ///
- 2 /// cw[i p].^[a] canta kare[p]_(v) y. ///
- 3 /// – .ā .ai ///

[注釈]

[a]: この akṣara の子音は[s]か[p]のどちらであるか判断できない。

THT1652.frg.2

h: 4.4cm × w: 6cm

a

1 /// tr. cem ṣukṭ k(e)[n]ts(a)^[a] cm[e](l)[ñ](e) ///

2 /// – nta karsalñ(e) – [p]. .i ///

3 /// [s].e m. ///

b

1 /// ts. brā ///

2 /// rtse † kr_wi m(ā) [kṣ r].. .[t].^[b] o(ḍ)_v ///

3 /// ..m taisa [tāka]m || ///

[注釈]

[a]: トカラ語 B の *ṣukt kentsa* は *ṣukt kem** の通格であり、梵語 *sapta-bhūmi*- ‘the seven hells’ (MW:

1149c 及び 870c: *rasā-tala-*) に対応するトカラ語の形式であると考えられる。

[b]: 語根 *kārs-* ‘to know’ の三人称複数・過去形の *kārsānte** が推定されるかも知れない。

THT2981.frg.7

h: 2.3cm × w: 2.7cm

a

1 /// .[ñ]. ///

2 /// [n]mimaṛ_v † ///

3 /// .[e] ///

b

1 /// .[ñ]. ///

2 /// (brā)[h]m(a)ne we[ṣṣa](m) ///

3 /// – ///

THT2995

h: 4.2cm × w: 6.5cm

a

1 /// (os)[t](a s)[m](eñ)[c](a) ñ. kt.^[a] ///

2 /// [mā] ñiṣ_v śaiṣṣe samñāṭ_v klu ///

3 /// [n]tau waṭ_v mā tākoy^a_m br. ///

b

1 /// ṣṣ(e)ñca tākaṭ_v ṣarne ñi ///

2 /// [ṣ]ṣ(a) w(e)rtsīyo hi^[b]_m ram^a_v l.. – ///

3 /// [r].. [m]ā ñi [w]ai p(.)e^[c] .e – ///

[注釈]

- [a]: どのような形式であるか確定できないが、ここには *ñakte* ‘god’ が推定される。
 [b]: この部分は恐らく *rohiṇi* ‘the constellation Taurus’ の斜格である *rohiṇim* の書き誤りであると推定される。
 [c]: ここには *waipite* ‘separately, apart’ が推定されるかも知れない。

THT2998

h: 4.7cm × w: 5.9cm

a

- 1 /// – n. k. nta n[o]
 2 /// *tsaṅkausa* [s]āṃ
 3 /// [c]. śaiyā
 4 /// –

b

- 1 /// – r[n]ta śrā^[a]
 2 /// s^[a]([∨]) nervā(ṃ)n[e]
 3 /// (pa)[ñ]ā(kt)e(nts)[e] pe[lai]^[b]

[注釈]

- [a]: 正確な語形は確定できないが、ここには *śrāvasti* が推定される。
 [b]: どのような語形かは確定できないが、ここには *pelaikne* ‘law’ が推定される。

THT3035

h: 3.5cm × w: 5.3cm

a

- 1 /// – ś₁ span[e c](ir)k(ā)n(e)^[a] ///
 2 /// [l](a)k[l]e ñākten[t](s)e ///

b

- 1 /// – nm. ś₁ ost(a) ///
 2 /// pp. ra ś(s)e – .i .e ///
 3 /// [o] ///

[注釈]

- [a]: THT1249 + THT1681b1 + THT2981.frg.6 に基づいて再建した。Late Tocharian B の音変化を経ていない *cārkāne* を再建する事も可能である。

THT3052

h: 2cm × w: 4.7cm

a

- 1 /// [y](a)knesa^[a] kreñc^a₁ n. ///

b

- 1 /// [w](e)śeṃña tsāši[ta](r)^[b] ///

[注釈]

- [a]: この部分が compound であるなら *yāknesa* が再建される。
 [b]: この語形の推定が正しいならば、語根 *tsāk-* ‘to grow’ の三人称単数・願望法の語形とな

る。なお、Malzahn (2010: 974-975) で指摘されているように、トカラ語 A において、この語根の三人称複数・願望法は *tsāsintār* となっている。

THT3053

h: 2.1cm × w: 5.1cm

a

1 /// āyornta † yāmo[r].(.)[e]^[a] ///

b

1 /// ɽ_(v) šamānemts\ māka ///

[注釈]

[a]: 恐らくここには *yāmormem* 或いは *yāmornitse* が推定される。

THT3083

h: 4.3cm × w: 3.5cm

a

1 /// – ylaiñäkte(nt)[s](e) ///

2 /// n. ntse saswa ś. ///

3 /// [l](.)e ..m – ///

b

1 /// – – cc. .[ñ]. ///

2 /// [t]e karstatsi [s]. ///

3 /// .[k]. ñiś\ šar[n]e ///

THT3091

h: 3.5cm × w: 4.7cm

a

1 /// śrāvasti ///

2 /// llāne || su no – ///

b

1 /// (ne)rvāñne ka ś\ pə(ś^h)\ ///

2 /// k. in[t]e^[a] ///

[注釈]

[a]: 既に何度か言及したが、トカラ語 B の *inte* ‘if’は、Peyrot (2007: 172) で指摘されるように Late Tocharian B の文献に現れる語形である。

THT3110

h: 4.3cm × w: 4.9cm

a

1 /// (š)[šə](m) m. ///

2 /// [ñ](a)šša šarn[e] yātka[n](e) ///

3 /// – || makte aiskau ///

b

1 /// r. lyelyak[o]rmem ///

2 /// (kə)ryortañ[ñe]ne || ke – ///

3 /// || – ///

THT3128

h: 2.3cm × w: 4.2cm

a

b

1 /// (po)[yši] tākoy^a nem[c]e ///

2 /// ..[m] ///

1 /// - ///

2 /// ne mā karrāte tu ///

THT3208

h: 3cm × w: 2.6cm

a

1 /// [m]. ///

2 /// s. te mā ca - ///

b

1 /// - ṣṣamai nai [nm]. ///

2 /// re † [ñ]i ///

THT3237

h: 3cm × w: 4.2cm

a

1 /// .m. .[c].^[a] [n]. k. ///

2 /// (aṣa)n[i]ka āna^[b]

3 /// ..[m] - ///

b

1 /// - k(e)[k]ly. (-)^[c]

2 /// .[k]. .w. alyek ca

3 /// - - -

[注釈]

[a]: (osta s)m(eñ)c(a)と再建されるかも知れない。

[b]: 先行する語が呼格であることから、ānande の呼格である ānanda が推定される。

[c]: ここには klyaus- ‘to hear’の過去分詞若しくは absolutive が推定される。

7. 『Avadāna 写本』に反映される言語について

『Avadāna 写本』で使用されている言語については既に個々の断片の分析の際に言及したが、その言語特徴を纏めると、基本的には Peyrot (2008) で Classical Tocharian B と分類される標準的なトカラ語 B が使用されているが、詳細に検討すると Late Tocharian B に分類される言語特徴も散見される。この点から、この写本の筆記者の言語は純粋な Classical Tocharian B ではなく、より変化の進んだ段階のトカラ語 B であったと推定される。

トカラ語 B 断片の内 Kizil で発見された仏典では、Late Tocharian B の特徴が現れる頻度は Turfan で発見された断片程顕著ではない。しかしながら、Kizil で発見されたトカラ語 B の寺院文書も加えて既公表の断片や『Avadāna 写本』の状況を考慮すると、この地域でもトカラ語 B は既に Late Tocharian B の段階へと進んでいたが、仏典書写の際に表面化する事が少なかっただけであると考えられる⁷³。

⁷³ この状況に反して Turfan で発見されたトカラ語 B の仏典では、Late Tocharian B の特徴を示す語形が現れる事が多い。Kizil 発見の断片と Turfan 発見の断片で見られる Late Tocharian B の特徴の出現頻度の差異が、何に起因するのかについて確実な事は言えないが、現時点では筆者は Kizil では Classical Tocharian B の正書法の規範意識が強く働いたのに対して、Turfan では従来の正書法に対する規範意識が崩れていたか、非常に緩くなっていた事が原因ではないかと推定している。ただし、このような状況を齎した歴史的背景などについては今後更なる検討が必要である。

8. 『Avadāna 写本』の部派帰属について

本節では『Avadāna 写本』の部派帰属について検討するが、最初に本稿で明らかにした『Avadāna 写本』の構成を比定された内容と共に下に示す事とする⁷⁴。

[内容若しくは写本での位置が確定できた断片]

- THT1165 + THT1548 [folio <43>], THT1166 + THT2976 recto: *Jyotiṣka-avadāna*
- THT1166 + THT2976 verso, THT1556: *Śroṇakoṭivimśa-avadāna*
- THT1253 + THT3056: *Dhanika-avadāna*
- THT1551 [folio<187>], THT1683 [folio<190>], THT3124 (?): (?)
- THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054: *Sāraṇa*
- THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 [folio <287>]: *Sāraṇa*
- THT1168 + THT3034: *Padmaḥ*
- THT1554 + THT3112: *Kacchapa-jātaka* (?)
- THT2996 + THT2999: (?)

[帰属不明の断片]

THT409, THT1126, THT1167, THT1245, THT1250, THT1513, THT1611, THT1652.frg.2, THT2981.frg.7, THT2995, THT2998, THT3035, THT3052, THT3053, THT3083, THT3091, THT3110, THT3128, THT3208, THT3237

『Avadāna 写本』の構成は以上のようにになっているが、比定された内容に基づいて各話の平行を纏めると以下ようになる。

- Jyotiṣka-avadāna*: «*Divyāvadāna*», «*Kṣudrakavastu*», «*Bodhisattvāvadānakalpalatā*»
- Śroṇakoṭivimśa-avadāna*: «*Saṅghabhedavastu*», «*Bodhisattvāvadānakalpalatā*»
- Dhanika-avadāna*: «*Bhaiṣajyavastu*», «*Bodhisattvāvadānakalpalatā*»
- Sāraṇa*: «*Kalpanāmaṇḍitikā*», «*Karmaśataka*»
- Padmaḥ*: «*Avadānaśataka*»

ここから、この写本に収められた物語が基本的には所謂根本説一切有部の文献と密接に関係している点を窺う事ができよう⁷⁵。

⁷⁴ 以下で示す『Avadāna 写本』の構成は、比定された内容や断片に残された葉数及び他断片との関係も考慮に入れたものである。なお、全く手がかりがない断片は帰属不明とした。

⁷⁵ «*Kalpanāmaṇḍitikā*»については、Lévi (1908: 184) が北伝の阿含經典や根本説一切有部の律藏との関係を指摘している。また、Hiraoka (1991, 1999) は«*Divyāvadāna*»が根本説一切有部の律藏を基にしている点について論証している。なお、Yuyama (1977: 1034 及び 1983: xii) で指摘されているように、「*Kacchapa-jātaka*»は根本説一切有部律にも平行が存在している。

トカラ語仏典中には、荻原 (2011b) で論じたように、他にも「*Avadānaśataka*」の物語が知られているだけでなく⁷⁶、根本説一切有部の文献と関係づけられる經典や物語が散見する⁷⁷。一方でトカラ語律典について見れば大部分は説一切有部と一致するが、根本説一切有部律と一致する断片も数点確認されている⁷⁸。トカラ語仏典の体系的な解明には程遠い現状ではあるが、これらの点を考慮に入れると、トカラ仏教は広義の有部に属していると言える。また、トカラ仏教はある時代の有部の文献を一度に受容したのではなく、各時代においてインドより伝えられた有部系の仏典をその都度受容したというのが実際だったのではないかと考えられる。

9. 『Avadāna 写本』より窺えるトカラ仏教における仏典受容について

これまでに明らかになっている範囲内で見れば、二言語併用文献ではないもので梵文との対応関係がある程度明確であり、かつ梵文原典を忠実に訳したと考えられるトカラ語断片はそれ程多くない。これらは主に阿含經典・律蔵の『戒本』・「*Udānavarga*」・「*Buddhastotra*」・「*Karmavibhaṅga*」などであり、本生譚や比喩譚といったものの多くは散文と韻文が交替する文体で書かれており、物語の描写も文学性に富んでいる⁷⁹。このような例としては、トカラ語 B 仏典の中では比較的長い文脈を回収できる「*Subhāṣitagaveśin-jātaka*」や「*Mahāprabhāsa-avadāna*」⁸⁰などを、またトカラ語 A 仏典では「*Puṇyavanta-jātaka*」や「*Brhaddiyuti-jātaka*」⁸¹などを代表として挙げる事ができる。これらに対応する梵文や漢訳と比較して物語の基本的な進行については簡略化されてはいるものの、梵文や漢訳には見られない潤色された部分も見られ、恐らくはトカラ仏教の側で梵文仏典を基にして作成された可能性を指摘する事ができる⁸²。

⁷⁶ 「*Avadānaśataka*」の部派帰属については Hartmann (1985) 及び出本 (1998) を参照。一方、平岡 (1996) は「*Avadānaśataka*」に大乘的要素の存在が見られる事から、有部への帰属が確定的ではない点を指摘している。大乘經典と説一切有部の関係については平岡 (2010, 2011) を参照。なお、梵文「*Avadānaśataka*」の中央アジア出土断片については Demoto (2006) を参照。

⁷⁷ 荻原 (forthc.b) で論じた「*Subhāṣitagaveśin-jātaka*」の物語について見れば、夜叉に化身したインドラ神によって語られる詩節が梵文「*Avadānaśataka*」のものと一致しており、漢訳『撰集百緣經』とは一致せず、根本説一切有部のものに近い伝承を伝えている。また、荻原 (2009a) で論じたように、トカラ語 A 文献には漢訳『雜阿含經』1283 經が引用されている。なお、Kizil 石窟第 110 窟に見られる仏伝に付されたトカラ語 B による caption の分析からも根本説一切有部との関係が指摘されている。この点については Schmidt (2010) を参照。

⁷⁸ トカラ語律典については Ogihara (2009b, 2011a 及び forthc.a) で体系的に扱った。

⁷⁹ トカラ語仏典において、本生譚や比喩譚が常にこのような改変を加えられるとは限らない。例えば、荻原 (2011b) で指摘したように、「*Udānavarga*」の注釈である「*Udānālankāra*」には「*Avadānaśataka*」の第 10 章である「*Rājā*」という題名で知られる比喩譚が引用されているが、この部分は全体が韻文で書かれている以外には、大きな改変は見られない。ただ、このような例はトカラ語仏典の中では少数であろうと思われる。

⁸⁰ この物語のフランス所蔵断片については Pinault (1988) を参照。

⁸¹ この物語の部派帰属については、荻原 (2010) で扱った。

⁸² イギリス所蔵トカラ語 B 断片には、Broomhead (1962 I: iv) によって二つの断片が「*Divyāvadāna*」に比定されているが、どの比喩譚に相当するかを明記していない。ここで、この二断片について述べると、H 149.312 (= IOL Toch 97) は「*Vīśoka-avadāna*」に相当し、出家した *Vīśoka* が *Asoka* 王に神通力を示す場面から始まり、*Vīśoka* の他国への遊行及び彼が大病を患い、*Asoka* 王が医薬品や看護人を派遣し世話をする場面、そして、その過程で *Asoka* 王の頭が禿げる部分までを含んでいる。なお、梵文や漢訳仏典のパラレルを利用すると、この断片の a4 は */// (mā) com campya śanmāssi tsālkau l(arañesa) ///* と再建する事が可能であるが、

これまで検討してきた『Avadāna 写本』の各話についても漢訳仏典や梵文との対応関係を確認すると、トカラ語 B の物語は非常に簡略化されている事が窺える。このような点を考慮に入ると、本稿で検討しているトカラ語 B の『Avadāna 写本』も上に挙げた写本と同様にインド語原典からの直訳ではなく、トカラ仏教の側で作成された adaptation であると考えの方が妥当であろうと思われる⁸³。例えば、先に指摘したように *Sāraṇa* 王子物語に対応する梵文「*Kalpanāmaṇḍitikā*」の写本は大部分が Kizil で発見されているだけでなく、この写本に用いられた *Brāhmī* 文字が *Schrifttyp I-II* に分類される事から、写本自体非常に古いと判断できる⁸⁴。この点から、この物語が早い段階でトカラ仏教に知られていた事が窺える。トカラ仏教は、このような梵文で伝えられた物語を基に改変を加えたものと考えられる⁸⁵。

また、前節で言及したように『Avadāna 写本』には梵文では異なった作品に収められている物語が一つの写本として纏められており、この点から『Avadāna 写本』はトカラ仏教の側で複数の梵文写本から抜粋された物語を集成して編纂されたか、或いは既に失われた梵文の *Avadāna* 集成に基づいて作成された可能性が指摘される⁸⁶。トカラ語仏典にはドイツ所蔵の「*Udānālankāra*」やフランス所蔵の「*Karmavibhaṅga*」及び仏教劇の写本或いはイギリス所蔵の「*Weber-Macartney manuscript*」と称される写本やドイツと中国に所蔵されるトカラ語 A の「*Maitreyasamiti-nāṣaka*」などと言った写本群が知られているが、『Avadāna 写本』と同種のものとしては「*Araṇemi-Handschrift*」として知られるドイツ所蔵の B71-106 (B86 を除く) を指摘する事が可能であろう。現在断片が残存している範囲内で見れば、この本生譚の集成であ

この箇所に含まれている hapax の *isālkau* について、Broomhead (1962 I: 115) は *sālk* 'to pull' の過去分詞 *sālkau* の書き誤りの可能性を指摘しており、また Malzahn (2010) でも *isālk*-という語根を設定していない。しかしながら、この部分は梵文「*Divyāvadāna*」: *ātmāyattasya śāntasya mahāsaṃketacārīṇaḥ / dhyānasya phalam etac ca rāgāndhair yan na dṛṣyate* (Vaidya 1959a: 277.06-07) 及び『阿育王經』「禪定有勝果 於身得自在 隨意之所行 一切無罣礙 為欲愛所盲 不能見此法」(T.50, no. 2043, 143b5-7)・『阿育王傳』「如此之果報 由心得自在 禪定之果報 愚闇盲不見」(T.50, no. 2042, 107b17-18) に対応する部分であると考えられる。この対応が確かであれば、*isālkau* は梵語 *andha*-'blind, dunkel' (SWTF I: 83b-84a) に相当する事となり、上記のトカラ語 B の部分は「愛情によって覆われた者は、この (禪定の果報) を立てる事ができなかった」と解釈される。その結果、このトカラ語 B の *isālk*-は「覆われる・塞がれる」を意味し、PIE の **delgʰ-* 'fest werden' (LIV²: 113) と関係づけられるものと推定される。

一方、H 149.add 134 (= IOL Toch 178) は「*Prātihārya-avadāna*」に相当し、*Prasenajit* 王が *Uttara* を仏陀の下に派遣する場面から始まり、仏陀の神通力による彼の帰還、仏陀と外道達との神変による勝負の場面までが描かれている。ただ、仏陀の下に派遣された *Uttara* が仏陀の三十二相を見て仏陀に帰依・出家するという場面が描かれている点が梵文 (op.cit.: 96.21-97.27) や漢訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷 26 (T.24, no. 1451, 331a15-b27) とは異なっており、仏陀の偉大さを強調したものとなっている。この部分はトカラ仏教の側の改変の可能性が指摘される。

⁸³ ただし、このような仏典がどのような人々を前提として作成されたかという点については、今後トカラ語仏典の体系的な研究が必要であり、現時点では判断する事が困難である。なお、トカラ語仏典における翻訳をめぐる諸問題については Thomas (1989) を参照。

⁸⁴ *SHT* I: 14-15 を参照。

⁸⁵ 梵文「*Kalpanāmaṇḍitikā*」の写本が Kizil で発見されている事は、梵文「*Kalpanāmaṇḍitikā*」所収の全ての物語がトカラ語に翻訳された事を意味するものではなく、いくつかの物語が選択された可能性も考えられる。また、トカラ語 B の *Sāraṇa* 王子物語は蔵文「*Karmaśataka*」との間に部分的な一致が認められる事から窺えるように、原典が梵文「*Kalpanāmaṇḍitikā*」である必要はなく、トカラ仏教に伝えられた別の *Avadāna* 集成である可能性も排除されない。なお、この点については、その他の物語も同様である。

⁸⁶ 梵文による *Avadāna* 集成が編纂されていた事は、Hinüber (1979: 342-344) で指摘されている Gilgit 写本に含まれる *Avadāna* 集成や Baums (2003) で扱われた Schøyen Collection 中の「*Jyotiṣka-avadāna*」断片からも知られる。なお、ガンダーラ語による *Avadāna* 集成については、Lenz (2010) を参照。

る《Araṇemi-Handschrift》には *Buddhastotra* + 《Araṇemi-jātaka》 + 《Subhāṣitagaveṣin-jātaka》といった内容が一つの写本に纏められている。本稿で明らかにした『Avadāna 写本』には少なくとも五つの *Avadāna* が収録されていた。現在までに知られている限り、トカラ語仏典には『Avadāna 写本』に匹敵する他の因縁譚や本生譚の集成は知られていないため、どのような基準に従ってこれらの物語を選択・配列したかを窺う事はできないが、筆者が推定するように、これらがトカラ仏教の側で編纂されたものであるならば、『Avadāna 写本』はトカラ仏教での仏典編纂のあり方の一端を窺わせる貴重な資料と言う事ができる⁸⁷。

10. 結論

本稿では、ドイツ所蔵トカラ語 B 断片の中から『Avadāna 写本』と筆者が称する写本に属すると推定される全断片を紹介すると同時に、断片相互の関係や物語の比定を行い、この『Avadāna 写本』の構成を再構した。特に THT1165・THT1166・THT1249・THT1285・THT1507・THT1548・THT1680・THT1681・THT2976・THT2981・THT3054 を中心として内容比定を行う事で、これまでトカラ語研究で指摘されていなかった語や語形をいくつか収集する事ができただけでなく、これまでに指摘されてはいたものの、文脈の解釈が困難な語についても、前後の文脈を明らかにする事ができた。トカラ語断片は一般的に状態が良くないものが多く、その点が研究に困難を齎してきた。本稿で見たように、異なる登録番号に分断された断片が互いに接合若しくは同一の folio に属するといった例は、ドイツ所蔵断片だけでなくイギリス・フランス・ロシアなど他国に所蔵されている資料中にも複数確認されている。このような断片相互の関係を明らかにすることは、内容比定だけでなく、その中に含まれている語形の言語学的解釈をより容易にする。

一方、断片の内容比定は、トカラ仏教がどのようにインドから伝えられた仏典を受容したかという点の理解にも貢献する。本稿で扱った『Avadāna 写本』について見れば、比定に成功した五つの物語はこれまでトカラ語仏典には知られていなかったものであり、トカラ語仏典の幅や興行を検討するための新たな資料が得られたと言える。また、パラレルとの比較から、『Avadāna 写本』はトカラ仏教の側で複数の仏典から比喩譚や本生譚を抜粋し、彼ら特有の文学作品として編纂されたものであった可能性も指摘された。各国に所蔵されるトカラ語断片からは、このような写本はこれだけに止まらず、他にも同様の写本が作成された事を窺う事ができる。そのため、本稿で紹介した『Avadāna 写本』は、トカラ仏教が梵文仏典をどのように受容したかという点の理解に手がかりを提供する。今後も、このような研究を続ける事でトカラ語文献学だけでなく、西域北道における仏典受容やこの地域での仏典編纂の実態の解明にも貢献して行きたい。

⁸⁷ トカラ語 A《*Puṇyavanta-jātaka*》写本中の A1a4-b6 に語られる物語は、1943 年に季漢林によって『大智度論』巻十二及び『大方便佛報恩經』巻四がパラレルとして指摘されているが、他にも『寶恩經』巻八「大施杼海品」(T.04, no. 202, 404b17-409b29) もパラレルとして指摘する事ができる。この点は従来指摘された事がないが、この物語は前述の『大智度論』巻十二 (T.25, no. 1509, 151a11-152a27) だけでなく、巻十六 (T.25, no. 1509, 174c11-16) においても「精進波羅蜜」(Skt. *vīrya-pāramitā*) を説明するための物語として語られている。トカラ語 A の物語の主人公の一人である *Vīryavāṇ* がこの物語を語っている事実は、この比喩譚の主題がこの写本を作成したトカラ仏教の側にも理解されていた事を示していると言えよう。

参考文献

- Adams, Douglas Q. (1999) *A Dictionary of Tocharian B*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi.
- Apte, V. S. (1957) *The Practical Sanskrit-English Dictionary*. Poona: Prasad Prakashan.
- Bailey, H. W. (1940) Rāma II. *BSOAS* 10-3: 559-598.
- Bailey, H. W. (1950) Irano-Indica III. *BSOAS* 13-2: 389-409.
- Baums, Stefan (2003) Jyotiṣkāvadāna. In: Jens Braarvig (ed.) *Buddhist Manuscripts, Volume II* (Manuscripts in the Schøyen Collection, III), 287-302. Oslo: Hermes Publishing.
- BHSD = Edgerton, Franklin (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 vols. New Haven: Yale University Press.
- Broomhead, J. W. (1962) *A Textual Edition of the British Hoernle, Stein and Weber Kuchean Manuscripts. With Transliteration, Translation, Grammatical Commentary and Vocabulary*, by J. W. Broomhead, Ph.D. Diss. Trinity College, Cambridge, 2 vols.
- Carling, Gerd (2009) *Dictionary and Thesaurus of Tocharian A*. Volume 1: A-J. In collaboration with Georges-Jean Pinaut and Werner Winter. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Chavannes, Édouard (1911) *Cinq cents contes et apologues: extraits du Tripiṭaka chinois, et traduits en français. Tome III*. Paris: Ernest Leroux.
- Das, S. Chandra (1902) *Tibetan-English Dictionary*. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot.
- DSCH, Hiän-lin 季 羨林 (1943) Parallelversionen zur tocharischen Rezension des Puṇyavanta-Jātaka. *ZDMG* 97: 284-324.
- 出本充代 (1998) 「Avadānaśataka に挿入された阿含經」『パーリ学仏教文化学』11: 31-40.
- 出本充代, Demoto Mitsuyo, (2006) Fragments of the Avadānaśataka. In: Jens Braarvig (ed.) *Manuscripts in the Schøyen Collection, Buddhist Manuscripts Volume III*, 207-244. Oslo: Hermes Publishing.
- Dutt, Nalinaksha (1984) *Gilgit Manuscripts* Vol. III Part-1. Delhi: Sri Satguru.
- Feer, M. L. (1901) Le Karma-ṣataka. *JA*, 9^e série, tome 17: 53-100, 257-315, 410-486.
- Gnoli, Raniero (1978) *The Gilgit manuscript of the Saṅghabhedavastu Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin. Part II*. Roma: Istituto italiano per il medio ed estremo oriente.
- Härtel, Herbert (1981) Die Geburt des Jyotiska: Anmerkungen zu einem neu erworbenen Gandhāra-Relief. In: Bruhn Klaus and Albrecht Wezler (eds.) *Studien zum Jainismus und Buddhismus. Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf* (Alt- und neu-indische Studien 23), 93-106. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Hartmann, Uwe-Jens (1985) Zur Frage der Schulzugehörigkeit des Avadānaśataka. In: Heinz Bechert (ed.) *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur. Erster Teil (Symposium zur Buddhismusforschung, III, 1)*, 219-224. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Hinüber, Oskar von (1979) *Die Erforschung der Gilgit-Handschriften*. Nachrichten der Akademie

- der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse, Jahrgang 1979, Nr.12.
Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Hiraoka Satoshi 平岡聡 (1991) The Relation between the *Divyāvadāna* and the *Mūla-sarvāstivādaśāstra*. 『印度學佛教學研究』 39-2: 1036-1038.
- 平岡聡 (1996) 「アヴァダーナ文献に見られる仏陀の誓願とその問題」 『印度學佛教學研究』 45-1: 401-405.
- 平岡聡 (1999) 「アヴァダーナ発生母胎としての根本説一切有部律葉事」 『印度學佛教學研究』 48-1: 473-479.
- 平岡聡 (2010) 「法華経の成立に関する新たな視点」 『印度學佛教學研究』 59-1: 382-390.
- 平岡聡 (2011) 「『佛説心明経』の成立」 『印度學佛教學研究』 60-1: 420-428.
- Huber, Édouard (1908) *Açvaghōṣa, Sūtrāṃkāra. Traduit en français sur la version chinoise de Kumārajīva*. Paris: Ernest Leroux.
- IEW = Pokorny, Julius (1959) *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch. I. Band*. Bern-München: Francke.
- 飯淵純子 (1995) 「*Karmaśakata* について—誓願を中心に—」 『印度学宗教学会論集』 22: 112-128.
- Krause, Wolfgang (1952) *Westtocharische Grammatik Band I: Das Verbum*. Heidelberg: Winter.
- Lenz, Timothy (2010) *Gandhāran Avadānas* (Gandhāran Buddhist Texts 6). Seattle: University of Washington Press.
- Lévi, Sylvain (1908) Açvaghōṣa, Le sūtrāṃkāra et ses sources. *JA*, 10^e séries, tome 12: 57-184.
- LIV² = Rix, Helmut (dir.) 2001, *Lexikon der indogermanischen Verben. Die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen*. 2., erweiterte und verbesserte Auflage bearbeitet von Martin Kümmel und Helmut Rix. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Lüders, Heinrich (1979) *Kleinere Sanskrit-Texte. Heft 1. Bruchstücke buddhistischer Dramen. Heft 2. Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta* (Monographien zur Indischen Archäologie, Kunst und Philologie, Bd. 1.) herausgegeben von Heinrich Lüders. Wiesbaden: Franz Steiner. Originally published in: Lüders, Heinrich (1926) *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta* (Kleinere Sanskrit-texte Heft II). Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft.
- Malzahn, Melanie (2003) Toch.B *yesti nāskoy* und der Narten-Charakter der idg. Wurzel **yes* '(Kleidung) anhaben'. *Die Sprache* Band 43, Heft 2 [2002-2003]: 212-220.
- Malzahn, Melanie (2007a) A Preliminary Survey of the Tocharian Glosses in the Berlin Turfan Collection. In: Melanie Malzahn (ed.) *Instrumenta Tocharica*, 301-319. Heidelberg: Winter.
- Malzahn, Melanie (2007b) The Most Archaic Manuscripts of Tocharian B and the Varieties of the Tocharian B Language. In: Melanie Malzahn (ed.) *Instrumenta Tocharica*, 255-297. Heidelberg: Winter.
- Malzahn, Melanie (2007c) Tocharian Desire. In: Alan J. Nussbaum (ed.) *Verba Docenti. Studies in*

- historical and Indo-European linguistics presented to Jay H. Jasanoff by students, colleagues, and friends*, 237-249. Ann Arbor/New York: Beech Stave Press.
- Malzahn, Melanie (2010) *The Tocharian verbal system*. Leiden: Brill.
- 松本純子 (2001) 『Karmaśataka の研究—チベット訳 Karmaśataka にみるアヴァダーナ文献の成立過程—』博士論文, 東北大学.
- MW = Monier-Williams, Monier (1899) *Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- 荻原裕敏 (2009a) 「トカラ語 A《Pun̄yavanta-Jātaka》に於ける阿含經典の引用について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 28: 133-171.
- 荻原裕敏, Ogihara Hirotoši (2009b) *Researches about Vinaya-texts in Tocharian A and B*. Unpublished doctoral dissertation, EPHE.
- 荻原裕敏 (2010) 「トカラ語 A《Bṛhaddhyuti-Jātaka》の部派帰属について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 30: 169-185.
- 荻原裕敏, Ogihara Hirotoši (2011a) Notes on some Tocharian Vinaya fragments in the London and Paris collections. *Tocharian and Indo-European Studies* 12: 111-144.
- 荻原裕敏 (2011b) 「トカラ語 B《Udānālankāra》に於ける Avadāna 利用について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 31: 213-233.
- 荻原裕敏, Ogihara Hirotoši (forthc.a) A fragment of the Bhikṣu-prātimokṣasūtra in Tocharian B. *Tocharian and Indo-European Studies* 13.
- 荻原裕敏 (forthc.b) 「利用漢譯佛經研究出土胡語佛教文獻—以龜茲語文獻中所見《求妙法王》故事為例」『中国人民大学国学院創立五周年紀念論文集』, 北京: 中国人民大学国学院.
- 荻原裕敏・慶昭蓉 (forthc.) 「大谷探検隊将来トカラ語資料をめぐって (1)」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』50.
- Panglung, Jampa Losang (1981) *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya. Analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung* (Studia Philologica Buddhica. Monograph Series III). Tokyo: The Reiyukai Library.
- Peyrot, Michaël (2008) *Variation and Change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- Peyrot, Michaël (2010) Notes on the Buddhastotra Fragment THT3597 in Tocharian B. 『内陸アジア言語の研究』(SIAL) XXV: 143-169.
- Pinault, Georges-Jean (1988) Révision des fragments en tokharien B de la légende de Mahāprabhāsa. In: Peter Kosta (ed.) *Studia Indogermanica et Slavica. Festgabe für Werner Thomas* (Specimina Philologiae Slavicae. Supplementband 26), 175-210. München: Verlag Otto Sagner.
- Pinault, Georges-Jean (2004) Zum Tocharischen in der Turfanforschung. In: Desmond Durkin-Meisterernst, Simone-Christiane Raschmann et al (eds.) *Turfan Revised – The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, 256-263. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Pinault, Georges-Jean (2008) *Chrestomathie tokharienne: Textes et grammaire*. Leuven-Paris: Peeters.

- Pinault, Georges-Jean (2010) Review of Xavier Tremblay (2003) *La déclinaison des noms de parenté indo-européens en -ter-*. *KRATYLOS* Jahrgang 54: 24-36. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- Schmidt, Klaus T. (1983) Vorläufige Bemerkungen zu den in der Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz in Berlin neu gefunden tocharischen Handschriftenfragmenten. In: Fritz Steppat (ed.) *XXI. Deutscher Orientalistentag vom 24. Bis 29. März 1980 in Berlin. Vorträge (ZDMG. Suppl. V)*, 271-279. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Schmidt, Klaus T. (1985) Zur Frage der Schulzugehörigkeit des in tocharischer Sprache überlieferten buddhistischen Schrifttums. In: Heinz Bechert (ed.) *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur. Erster Teil (Symposium zur Buddhismusforschung, III, 1)*, 275-284. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Schmidt, Klaus T. (1997) Liebe und Sexualität im Spiegel der tocharischen Sprachzeugnisse. In: Michaela Ofitsch (ed.) *Eros, Liebe und Zuneigung in der Indogermania. Akten des Symposiums zur indogermanischen Kultur- und Altertumskunde in Graz (29.-30. September 1994)*, 227-262. Graz: Leykam.
- Schmidt, Klaus T. (2001a) Entzifferung verschollener Schriften und Sprachen, Dargestellt am Beispiel der Kučā-Präkritis. *Göttinger Beiträge zur Asienforschung*. Heft I. (Göttingen: Peust & Gutschmidt Verlag, 2001): 7-27.
- Schmidt, Klaus T. (2001b) Die westtocharische Version des Araṇemi-Jātakas in deutscher Übersetzung. In: Louis Bazin and Peter Zieme (eds.) *Silk Road Studies V. De Dunhuang à Istanbul. Hommage à Lames Rissell Hamilton*, 299-327. Turnhout: Brepols.
- Schmidt, Klaus T. (2010) Die Entzifferung der westtocharischen Überschriften zu einem Bilderzyklus des Buddhalebens in der „Treppenhöhle“ (Höhle 110) in Kizil. In: Eri Franco and Monika Zin (eds.) *From Turfan to Ajanta, Festschrift for Dieter Schlingloff on the occasion of his Eightieth Birthday*. Vol. II, 835-866. Lumbini: Lumbini International Research Institute.
- 庄垣内正弘 (1978) 「古代ウイグル語」におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15: 79-110.
- SHT = *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil 1-4, Wiesbaden; Teil 5-10, Stuttgart: Franz Steiner, 1965-2008.
- Sieg, Emil (1944) *Übersetzungen aus dem Tocharischen I*. Berlin: Verlag der Akademie der Wissenschaften.
- Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 1. Die Udānālankāra-Fragmente, Texte, Übersetzung und Glossar*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1953) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 2. Fragmente Nr. 71-633*. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- SWTF = Waldschmidt, Ernst et al. 1973-: *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den*

- Turfan-Funden [und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule]*. Begonnen von Ernst Waldschmidt. Im Auftrage der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- T. = 『大正新脩大藏經』
- 玉井達士, Tamai Tatsushi (2011) *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- TEB I = Krause, Wolfgang and Werner Thomas (1960) *Tocharisches Elementarbuch*. Band I: Grammatik. Heidelberg: Winter.
- TEB II = Thomas, Werner (1964) *Tocharisches Elementarbuch*. Band II: Texte und Glossar. Heidelberg: Winter.
- Thomas, Werner (1958) Zum Gebrauch des prohibitiven *mar* bzw. *mā* im Tocharischen. *Central Asiatic Journal* 3: 289-308.
- Thomas, Werner (1968) Zur Verwendung von *toch. A oki / B ramt* und *A mämtne / B mäfte* in Vergleichen. *Orbis* 17: 198-231.
- Thomas, Werner (1977) Ein weiteres tocharisches Udānavarga-Fragment. *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung* 90: 104-113.
- Thomas, Werner (1989) *Probleme der Übertragung buddhistischer Texte ins Tocharische*. (Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Abhandlungen der Geistes- und Sozialwissenschaftlichen Klasse 1989, 10). Stuttgart: Franz Steiner.
- TochSprR(A) = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1921) *Tocharische Sprachreste. I. Band: Die Texte, A. Transkription; B. Tafeln*. Berlin und Leipzig: de Gruyter.
- TochSprR(B) = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949 and 1953).
- Vaidya, P. L. (1958) *Avadāna-śataka*. (Buddhist Sanskrit Texts, No. 1). Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Vaidya, P. L. (1959a) *Divyāvadāna* (Buddhist Sanskrit Texts, No. 20). Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Vaidya, P. L. (1959b) *Avadāna-kalpalatā*. [2 vols.] (Buddhist Sanskrit Texts, No. 22, 23). Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Waldschmidt, Ernst (1972) A contribution to our knowledge of Sthavira Śroṇa Koṭivimśa. In: R. C. Hazra and S. C. Banerji (eds.) *S.K.DE Memorial Volume*, 107-116. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.
- Waldschmidt, Ernst (1989) *Ausgewählte Kleine Schriften*. Herausgegeben von Heinz Bechert und Petra Kieffer-Pülz. Stuttgart: Franz Steiner.
- Winter, Werner (1989) Tocharian B *-aiñ* : B *-añ* / *-āñ* and related problems. *Tocharian and Indo-European Studies* 3: 111-120.
- Winter, Wener (2005) *Kleine Schriften/Selected Writings. In zwei Bänden. Festgabe aus Anlass des 80. Geburtstag*. Ausgewählt und herausgegeben von Olav Hackstein. Bremen: Hempen.

新疆龟兹石窟研究所編 (2000) 『克孜爾石窟内容総録』 烏魯木齊: 新疆美術攝影出版社。

Yuyama Akira (1977) Bemerkungen zur Sanskrit-Version des Kacchapa-Jātaka. In: Wolfgang Voigt (ed.) *XIX. Deutscher Orientalistentag vom 28. September bis 4. Oktober 1975. Vorträge* (ZDMG. Suppl. III-2), 1028-1036. Wiesbaden: Franz Steiner.

Yuyama Akira (1983) *Kacchapa-Jātaka: Eine Erzählung von der Schildkröte und dem Kranzwinder*. (Studia Philologica Buddhica Occasional Paper Series V). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

中国壁画全集編輯委員会 (1995) 『中国新疆壁画全集 第二卷 克孜爾』 烏魯木齊: 新疆美術攝影出版社。

中国壁画全集編輯委員会 (1995) 『中国新疆壁画全集 第五卷 森木賽姆・克孜爾尕哈』 烏魯木齊: 新疆美術攝影出版社。

ZusTreff. = Das Zusammentreffen mit Maitreya. Die ersten fünf kapitel der Hami-Version der Maitrisimit. – Teil I: Text, Übersetzung und Kommentar. – Teil II: Faksimiles und indices. (Asiatische Forschungen. Bd.103) In Zusammenarbeit mit Helmut Eimer und Jens Peter Laut, hrsg., übersetzt und kommentiert von Geng Shimin und Hans-Joachim Klimkeit. Wiesbaden: Harrassowitz 1988.

【追記】

筆者は、『東京大学言語学論集』31号に『阿蘭那經』に比定された SHT 所収梵語断片について」と題する論文を発表した。論文出版後、筆写が当該論文で扱った SHT1324 + 1331 + 1720 と同一の folio に属する断片として、SHT5151 が新たに比定された事を IDP のサイトの SHT1331, 1720, 5151 に付された記載で知った。なお、この新たに比定された SHT5151 の写真は IDP 上では公開されておらず、現在出版準備中との事である。

また、八尾史 (2010) 『『根本説一切有部律』「薬事」の研究—経典「引用」を中心に』(東京大学、博士論文) の56頁及び498-500頁によって、『阿蘭那經』が藏文『根本説一切有部律』「薬事」に引用されており、且つ SHT1324 + 1331 + 1720 並びにトカラ語 B 断片以外のパラレルも既に同氏によって指摘されていた事を知り得た。これらの文献との比較の結果、SHT1324 + 1331 + 1720 + 5151 は東トルキスタン有部所伝の阿含經典の断片ではなく、若干の相違は見られるものの、『根本説一切有部律』「薬事」に比定されるべき事が明らかになった。そのため、トカラ語 B の《Udānālankāra》に利用された因縁譚は、所謂根本説一切有部系の伝承に依拠していると言う事ができる。貴重な博士論文を提供して下さった八尾氏(日本学術振興会特別研究員)には特に記して感謝申し上げる。

[Tocharian B index]

ここでは、『*Avadāna* 写本』に属すると考えられる断片に在証される語のみ記載する。また、本稿で検討した断片は全てドイツ所蔵断片のため、断片の所蔵番号の THT は省略し、断片の欠落のため語形を確定できないものについては、在証される箇所の記載の後に*を付す事とする。なお、参照の便宜を考慮し、扱った断片の表記に際して各章を A~F で表示し、その中の各節で扱った断片毎に番号を割り当てるとする方法を採る。即ち、以下のような表記法となっている。

1. THT1165 + THT1548 = A1, THT1166 + THT2976 recto = A2
2. THT1166 + THT2976 verso = B1, THT1556 = B2
3. THT1253 + THT3056 = C1, THT1551 = C2, THT1683 = C3, THT3124 = C4
4. THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 = D1
THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 = D2
5. THT1168 + THT3034 = E1
6. THT1554 + THT3112 = F1
THT2996 + THT2999 = F2

[6-3.で扱った断片は THT を除いた所蔵番号で表記する。]

<i>akṣār</i>	‘syllable’	
	sg.obl.: <i>akṣār</i>	A1a1
<i>ajātaśatru</i>	‘Ajātaśatru’	
	nom.: <i>ajātaśatru</i>	B2b5
<i>ate</i>	‘away’	E1b4
<i>attsaik</i>	‘completely’	A1b1
<i>anaṅgaṇe</i>	‘Anaṅgaṇa’	
	nom.: <i>anaṅgaṇe</i>	A2a2
<i>anāthapiṇḍike</i>	‘Anāthapiṇḍika’	
	nom.: <i>anāthapiṇḍike</i>	E1a4, b4
<i>apadāṃ</i>	‘Avadāna’	
	sg.nom.: <i>apadāṃ</i>	A2a4
<i>apsar</i>	‘Apsaras’	
	pl.nom.: <i>apsarṃta</i>	1250a2
<i>apsarye*</i>	‘of Apsaras’	
	f.sg.nom.: <i>apsarya</i>	1245a1
<i>amiṣkāñṇe</i>	‘bad disposition’	
	sg.nom.: <i>amiṣkāñṇe</i>	409a1
<i>amplākātte</i>	‘without permission’	D1a3
<i>añmaṣṣe</i>	‘personal’	

	pl.nom.: <i>aymaṣṣi</i>	D1a4
<i>arwāre</i>	‘ready’	
	m.pl.obl.: <i>arwāreṃ</i>	409b1
<i>arhanteññe</i>	‘pertaining (infra ‘prtng’) to an Arhat’	
	m.sg.obl.: <i>arhanteṃñe</i>	C2a4
<i>arhānte</i>	‘Arhat’	
	sg.all.: <i>arhānteś</i>	D1b4
<i>artsa</i>	‘each’	B2b3
<i>allek</i>	‘other’	
	m.sg.nom.: <i>allek</i>	A1b1
	m.sg.nom./obl.: <i>alyek</i>	3237b2
	f.sg.obl.: <i>allok</i>	A1a3, B1b5, B2b2, C2b5, E1a1, F2a4
	f.pl.obl.: <i>alloṇna</i>	E1a2
<i>aṣanīke</i>	‘wothy, worthy one’	
	sg.nom.: <i>aṣanīke</i>	D1b5, D2b1, b3
	sg.voc.: <i>aṣanīka</i>	1513b2
	<i>aṣanika</i>	3237a2
<i>aṣāṃ</i>	‘worthy’	1611a2
<i>asaṣṣe*</i>	‘prtng to sand’	
	f.sg.obl.: <i>asaṣṣai</i>	A1a5
<i>asāṃ</i>	‘seat’	
	sg. abl.: <i>asāṃmeṃ</i>	C2b1
<i>ākl-</i>	‘to learn’	
	abstr.II: <i>aklyilñe</i>	C1a1*, C2b2*
	<i>aklyilñe</i>	C3b4*
	abstr.II loc.: <i>aklyilñene</i>	A1a1
	(K.) ‘to teach’ 1.sg.prs.act.: <i>āklāskaune</i>	D1a3
<i>āks-</i>	‘to proclaim’	
	3.sg.pt.act.: <i>ākṣa</i>	409b4
	<i>akṣāne</i>	D2a2
<i>āks-</i>	‘to waken’	
	3.sg.pt.act.: <i>ākṣa</i>	D2b4
<i>ānande</i>	‘Ānanda’	
	voc.: <i>ānanda</i>	3237a2
<i>ānte</i>	‘front’	
	sg.nom.obl.: <i>ānte</i>	D2b2*

	sg.com.: <i>āntempa</i>	D2b2
<i>āpattar</i>	‘?’	1167b2
<i>āyor</i>	‘gift, giving’	
	pl.nom./obl.: <i>āyornta</i>	3053a1
<i>ār-</i>	‘to cease’	
	3.sg.pt.act.: <i>āra</i>	A2a4, C3b3
	(K.) ‘to leave, abandon’	
	3.pl.prs.mid.: <i>arsentrā</i>	D1b2
<i>ārūpyāṣṣe</i> *	‘prtng to formlessness’	
	m.pl.nom.: <i>ārūpyāṣṣi</i>	1167a1
<i>ārkwī</i>	‘white’	
	f.sg.nom./obl.: <i>arkwina</i>	C2b4
<i>ārwer</i>	‘ready’	B2b2
<i>āś</i>	‘leave (?)’	
	sg.obl.: <i>āś</i>	B2a1
<i>i-</i>	‘to go’ ger.I: <i>yalle</i>	D1a1
	3.sg.impf.act.: <i>yai</i>	B2b3
	inf.: <i>yatsi</i>	A1a5
	2.sg.impr.act.: <i>paṣ</i>	A1b3, b4
<i>inte</i>	‘if’	C4b4, 1250b1, 3091b2
<i>iprer</i>	‘sky, air’	
	sg.loc.: <i>iprerne</i>	1167a1, C2a3
<i>istak</i>	‘suddenly’	B2a2, D1a1, 1250a5
<i>ṁpādhyāye</i>	‘master’	
	sg. nom.: <i>ṁpādhyāye</i>	D2b3
<i>uppāl</i>	‘blue lotus’	
	sg.obl.: <i>uppāl</i>	A1a1, E1a2, a3, a5, b5, b5
<i>ūwe</i>	‘learned’	
	pl.nom.: <i>uweñ</i>	1126b1
<i>eṃṣke</i>	‘up to, until’	
	<i>eṃṣke</i>	D1b4
	<i>eṣke</i>	1126b1
<i>ekaññe</i>	‘possession’	
	sg.obl.: <i>ekaññe</i>	A1a5
<i>ek</i>	‘eye’	
	sg.perl.: <i>eksa</i>	C2a1
<i>eñkwe</i>	‘man’	

	sg.nom.: <i>eñwe</i>	E1a1, b4
	sg.gen.: <i>eñwentse</i>	E1a3
<i>eñk-</i>	‘to seize, take’	
	3.sg.pt.mid.: <i>eñksate</i>	A1a1
	<i>eñsate</i>	D1a3
	<i>eñsateñ</i>	D2b2
<i>ette</i>	‘down’	A2a3, 1513a5
<i>en-</i>	‘to instruct’	
	prs.part.: <i>eñskemane</i>	D2a2
<i>eneññe*</i>	‘internal’	
	m.pl.nom.: <i>eneññi</i>	D1a1
<i>enepre</i>	‘before, in front of’	F2b1
<i>ente</i>	‘when, if’	F1b5
<i>entwetstse*</i>	‘remote, distant’	
	m.sg.obl.: <i>emtwecce</i>	B2b5
<i>enmelyaşşe*</i>	‘?’	
	f.pl.obl.: <i>enmelyaşšana</i>	D1a2
<i>epastye</i>	‘skillful’	
	m.sg.gen.: <i>epastiyepi</i>	A1b2
<i>epinkte</i>	‘for’	
	<i>epiñte</i>	1513b5
<i>epiyac</i>	‘memory’	
	<i>epiyac</i>	1513a1
<i>empele</i>	‘terrible’	
	sg.nom.: <i>empelye</i>	D1b3
<i>erkau*</i>	‘cemetery’	
	pl.perl.: <i>erkanmasa</i>	1126b2
<i>er-</i>	‘to evoke’	
	inf.: <i>ertsi</i>	A1a4
	3.pl.pt.mid.: <i>ersante</i>	C2a5
<i>etsūwai</i>	‘towards’	409a2
<i>ai-</i>	‘to give’	
	1.sg.prs.act.: <i>aiskau</i>	3110a3*
	ger.I: <i>aişle</i>	D1a1
	3.sg.pt.act.: <i>wasā</i>	A1b2, b3
	<i>wsāne</i>	A1a5
	absol.: <i>āyormem</i>	C3b1

	2.sg.impr.act.: <i>pete</i>	B2a1
<i>aik-</i>	‘to know’	
	1.sg.prs.mid.: <i>aikemar</i>	409a4
<i>aišai</i>	<i>aišai yām-</i> ‘to take care of’	409a2
<i>oko</i>	‘fruit, result’	
	sg.nom.: <i>oko</i>	A1a2
	sg.obl.: <i>oko</i>	C1a4, C2b3, D2a2
	sg.nom./obl.: <i>oko</i>	C3b1*
	sg.perl.: <i>okosa</i>	A2a3
	pl.nom./obl.: <i>okonta</i>	F2b1
<i>ot</i>	‘then’	A1b5, A2a2, F1b5, 1652.2b2
<i>onolme</i>	‘(living) being’	
	sg.nom.: <i>wnolme</i>	D1b3
	sg.obl.: <i>onolme</i>	D1a5
	pl.nom.: <i>onolmi</i>	D1b3*
	<i>wnolmi</i>	F1a4
<i>omp</i>	‘there’	
	<i>om</i>	B2b2, D2b5, D1a5, F1a3, b3, 1167b5
<i>omte</i>	‘there’	A1b4
<i>ompak</i>	‘there’	A2a3
<i>orotstse</i>	‘great, big’	
	m.sg.nom.: <i>orotstse</i>	A1a1
	m.sg.obl.: <i>orocce</i>	A1a3
	f.sg.obl.: <i>orotstsai</i>	B2a2
<i>orkamo</i>	‘dark’	
	m.sg.nom.: <i>orkamo</i>	D2a5
<i>orpoñk</i>	‘market place’	
	sg.nom.: <i>orpoñk</i>	A1b5
<i>olyapotstse</i>	‘more, very’	
	<i>olyapotstse</i>	1513b1
	<i>olyapotse</i>	B2a3
<i>ost</i>	‘house’	
	sg.abl.: <i>ostameñ</i>	A1b1, B1b4, C3a2
<i>osta šmeñca</i>	‘house-holder’	
	sg.nom.: <i>osta šmeñca</i>	A1a3, A2a2, b5, B2a2, 409a3,

		2995a1
	sg.obl.: <i>osta šmeñcai</i>	A1a4
	sg.gen.: <i>osta šmeñcantse</i>	A1a4, B2a1, C3b5, E1a4
<i>auki</i>	‘attention’	
	sg.nom.: <i>auki</i>	C2a2
<i>au-n-</i>	‘to begin’	
	3.pl.pt.mid.: <i>auntsante</i>	A1a5
	<i>auntsantene</i>	D1a4
<i>aume*</i>	‘misery’	
	sg.loc.: <i>aummene</i>	D1b2
<i>aušap</i>	‘more’	D1 b1
<i>ka</i>	emphasizing particle	3091b1
<i>kaṃtsakaršam</i>	name of a tune	
	loc.: <i>kaṃtsakaršanne</i>	A1a5
<i>kaccāp</i>	‘turtle’	
	sg.nom.: <i>kaccāp</i>	Fa1
<i>katkauñā/katkauño</i>	‘joy’	
	sg.obl.: <i>katkauñai</i>	B2a2
<i>kanti</i>	‘bread (?)’	
	sg.com.: <i>kantimpa</i>	B2b4
<i>karuṃ</i>	‘compassion’	
	obl.: <i>karuṃ</i>	D1b3
<i>kare</i>	‘worth, rank’	
	sg.nom.: <i>kare</i>	A1a2
<i>karep</i>	‘damage, harm’	
	sg.obl.: <i>karep</i>	1611b2
<i>karyor</i>	‘buying’	
	sg.obl.: <i>karyor</i>	A1a5
<i>kartse</i>	‘good’	
	m.sg.nom.: <i>kartse</i>	A1b4
	m.sg.obl.: <i>krent</i>	A1b2, b2
	m.pl.nom.: <i>kreñc</i>	3052a1
	m.pl.obl.: <i>krentām</i>	409b1
	f.pl.obl.: <i>krenta</i>	F2b2
<i>kalpās</i>	‘cotton’	
	sg.obl.: <i>kalpās</i>	A1b2
<i>kā</i>	‘why’	1513b2

<i>kātk-</i>	‘to rejoice’ prs.part.: <i>katkemanē</i>	E1a2
<i>kātyāyane</i>	‘Kātyāyana’ nom.: <i>kātyāyane</i>	D2a5, b4, b5
<i>kām-</i>	‘to carry’ 3.sg.pt.mid.: <i>kamātene</i>	A1a1
<i>kārp-</i>	‘to descend’ 3.sg.pt.act.: <i>kārpa</i> pt.part.m.sg.nom.: <i>kakkārpau</i>	A1a3, b5, b5 D1 b1
<i>kālp</i>	‘treatment’ sg.perl.: <i>kālpsa</i>	D1a3
<i>kālyśke</i>	‘boy, youth’ sg.obl.: <i>kālyśkeṃ</i>	A1a4
<i>kātso</i>	‘stomach’ sg.gen.: <i>katsāntse</i>	D1a1
<i>kātk-</i>	‘to pass’ abstr.II: <i>kātkālñe</i>	1513a3*
<i>kān-</i>	‘to come about, be fulfilled’ pt.part.f.pl.nom: <i>kekenuwa</i>	B2b2
<i>kām-</i>	‘to come’ 3.pl.prs.act.: <i>kānmaskem</i> 3.sg.pt.act.: <i>śem</i> <i>śemane</i> 3.pl.pt.act.: <i>kamem</i>	F2a5 C1b4, E1a3 409a2 F1a2, 1126b2
<i>kāry-</i>	‘to buy’ 1.sg.prs.mid.: <i>kārñāskemarne</i> 1.sg.subj.mid.: <i>kārñāmar</i> 3.pl.subj.mid.: <i>kārñāntrā</i> Inf.: <i>kārñātsi</i>	E1b2 E1a5 A1b3 E1b1
<i>kāryortaññe</i>	name of a tune loc.: <i>kāryortaññene</i>	3110b2
<i>kāryorttau</i>	‘trader, merchant’ sg.nom.: <i>kāryorttau</i> pl.nom.: <i>kāryorttañc</i>	F1a4 A1a5
<i>kārr-</i>	‘to scold’ 3.sg.pt.mid.: <i>kārrāte</i>	D1b5, 3128b2
<i>kārs-</i>	‘to know’	

	abstr.II: <i>karsalñe</i>	1652.2a2*
	3.sg.pt.act.: <i>šarsa</i>	1250a5
<i>kārsk-</i>	‘to shoot’	
	3.sg.pt.act.: <i>karšša</i>	B2b5
<i>kārst-</i>	‘to destroy’	
	inf.: <i>karstatsi</i>	3083b2
<i>kāl-</i>	‘to lead, bring’	
	3.sg.impf.act.: <i>klāšši</i>	B2b4
	3.sg.pt.mid.: <i>klāte</i>	A1b1, B1b4, 1513a1
<i>kālp-</i>	‘to obtain’	
	1.sg.subj.act.: <i>kallau</i>	F1b5
	3.sg.subj.act.: <i>kallaṃ</i>	C3b1
	3.pl.pt.act.: <i>kālpāre</i>	C2a4
<i>kāl(t)s-</i>	‘to pour’	
	pt.part.m.sg.nom: <i>kālsau</i>	409a1
<i>kālyp-</i>	‘to steal’	
	1.sg.pt.act.: <i>kālypiyawa</i>	1250b1
<i>kālymiññe*</i>	‘adjacent’	
	f.sg.nom.: <i>kālymiñña</i>	B1b3
<i>kāšṣī</i>	‘master’	
	sg.obl.: <i>kāšṣīm</i>	409b2
	sg.gen.: <i>kāšṣimntse</i>	409b4
<i>kindarña</i>	‘female Kiṃnara’	
	sg.nom.: <i>kindarña</i>	1245a2
<i>k_use</i>	‘who, which’ (interr.-rel.pron.)	
	nom.: <i>k_use</i>	D1a1, b3, D2a5
	obl.: <i>k_uce</i>	D1a2, F1b3, F2a4
	gen.: <i>kete</i>	E1b5
<i>k_utameṃ</i>	‘where’ (interr.pron.)	409b3
<i>kurp-</i>	‘to care (?)’	
	ger.I: <i>kurpelle</i>	C3a3,a4, C4a5
<i>k_ulobhake</i>	‘family associate’	
	sg./obl.: <i>k_ulobhakem</i>	A2a4*
<i>kuśalamūl</i>	‘root of merit’	
	pl.nom./obl.: <i>kuśalamūlnta</i>	409b3
<i>ke</i>	intensifier (?)	1126a2
<i>kektseṇe</i>	‘body’	

	sg.obl.: <i>kektseñ</i>	D1a4, F2a3
	sg.loc.: <i>kektseṃne</i>	1245b2
<i>keṃ</i>	‘earth, ground’	
	perl.: <i>kentsa</i>	D1a5, 1167a1, THT1652.2a1
<i>keni</i>	‘knees’ du.perl.: <i>kenisa</i>	1250a1
	<i>keñisa</i>	D1a2
<i>kenek</i>	‘cotton cloth’	
	sg.obl.: <i>kenek</i>	A1b2, b5, b5
	sg.gen.: <i>kenekāntse</i>	A1b3
	<i>kenekāmtse</i>	A1b5
<i>kerccī*</i>	‘palace’	
	pl.abl.: <i>kerceṃṃmem</i>	D1b2
	pl.loc.: <i>kerceṃṃne</i>	D1a3
<i>keś</i>	‘number’	
	obl.: <i>keś</i>	A1a4, a5, D1b1, E1a2
<i>koṭ/kor*</i>	‘ten million’ pl.perl.: <i>koṭanmasa</i>	1167b3
<i>koraññe*</i>	‘?’	
	f.sg.nom.: <i>korañña</i>	A2a5
<i>kos</i>	‘as long as’	D2a3
<i>kauk-</i>	‘to call’	
	3.sg.prs.act.: <i>śauśām</i>	C1b1, D1a1
	ger.l: <i>śauśalle</i>	C1a5
<i>kauc</i>	‘above’	A1a4, 1250a3
<i>kaum</i>	‘day’	
	sg.obl.: <i>kaum</i>	B2b3
	sg.gen.: <i>kaunantse</i>	D2a5
<i>kau-</i>	‘to destroy, kill’	
	2.sg.prs.act.: <i>kauṣtane</i>	D1b1
	inf.: <i>kautsi</i>	F1b4
<i>kr_ui</i>	‘if’	
	<i>kr_ui</i>	D2a4, 1652.2b2
	<i>kwri</i>	A1a1, b3, 1250b3
<i>krentauna</i>	‘virtues’	
	pl.obl.: <i>krentauna</i>	C3a4*, 1513b4
<i>kraup-</i>	‘to gather, assemble’	
	3.pl.pt.mid.: <i>kraupāntene</i>	D1b3
	pt.part.m.sg.nom.: <i>kakraupau</i>	1513b4

<i>klänts-</i>	‘to sleep’	
	3.sg.pt.act.: <i>klyantsa</i>	D2b1
<i>klānk-</i>	‘to go by wagon (?)’	
	3.sg.pt.act.: <i>klānka</i>	B2a1
<i>klāy-</i>	‘to fall’	
	1.sg.prs.mid.: <i>kloyomar</i>	D2b3
	3.sg.pt.act.: <i>klāya</i>	D1a5, b4, 1250a1
	pt.part.f.pl.nom.: <i>kaklāyauwa</i>	D1a5
<i>kliye</i>	‘woman’	
	sg.nom.: <i>klyiye</i>	1245a3
	pl.nom.: <i>klaina</i>	D1a5
<i>kleś</i>	‘affliction’	
	pl.obl.: <i>kleśanma</i>	1126a4
<i>klautk-</i>	‘to turn’	
	1.sg.prs.mid.: <i>klautkomar</i>	D2a3
	ger.I: <i>klautkalle</i>	D2a4
<i>klyaus-</i>	‘to hear’	
	3.sg.pt.act.: <i>klyauša</i>	C2b3
	absol.: <i>keklyaušormem</i>	C1b1
<i>kwamts</i>	‘firm’	E1b4
<i>ksa</i>	indefin. pron.	
	nom.: <i>ksa</i>	A1b4, E1a1, 1250b2
<i>kharjurşse*</i>	‘prtng to Phœnix sylvestris’	
	f.pl.obl.: <i>kharjurşšana</i>	D1a4
<i>gaṇika</i>	‘harlot’	
	sg.nom.: <i>gaṇika</i>	F2a3
<i>gandhārviññe</i>	‘prtng to gandharva’	
	f.sg.nom.: <i>gandhārviñña</i>	1245a1
<i>gautamāññe</i>	‘prtng to Gautama Buddha’	
	m.sg.nom.: <i>gautamāññe</i>	1126a2
<i>camel</i>	‘birth’	
	sg.loc.: <i>camelne</i>	C2a2
	pl.loc.: <i>cmelane</i>	C3b1
<i>campāy</i>	‘Campā’	
	obl.: <i>campāy</i>	A1b1
<i>caramabhavike</i>	‘Caramabhavika’	
	nom.: <i>caramabhavike</i>	B1b5

<i>cämp-</i>	‘be able to’	
	ger.ll: <i>cimpalyi</i>	F1b4
<i>cämpamo</i>	‘capable’	
	sg.nom.: <i>cämpamo</i>	E1b3
<i>jotiške</i>	‘Jyotiška’	
	obl.: <i>jotiškem</i>	A1a1, a4
	gen.: <i>jotiški</i>	A1a3
	perl.: <i>jotiškentsa</i>	A2a4
<i>ñake</i>	‘now’	
	<i>ñake</i>	D2a1, b2
<i>ñakte</i>	‘god’	
	sg.gen.: <i>ñäktentse</i>	3035a2
	sg.voc.: <i>ñakta</i>	409b4, 1245b4
	pl.nom.: <i>ñakti</i>	1167a1
	pl.obl.: <i>ñaktem</i>	1167a2, b4
<i>ñäkiye</i>	‘divine’	
	m.sg.nom.: <i>ñäkiye</i>	A1a2
	f.sg.nom: <i>ñäkcyä</i>	1245a2
	<i>ñikcyä</i>	1245a1
<i>ñäs</i>	‘I’ (personal pron.)	
	sg.nom.: <i>ñiś</i>	A2a1, D2a1, E1b1, F1b5, 409a4, b4, 1250b1, b3, 1611a2, 2995a2
	sg.obl.: <i>ñiś</i>	F1b4
	sg.nom./obl.: <i>ñiś</i>	3083b3
	sg.gen.: <i>ñī</i>	C1b3
	pl.gen.: <i>wesām</i>	1513b3
<i>ñäsk-</i>	‘to desire’	
	3.pl.prs.act.: <i>ñaskem</i>	E1b5
	3.sg.pt.act.: <i>ñasša</i>	1245b3, 3110a2
<i>ñem</i>	‘name’	
	sg.nom.: <i>ñem</i>	B1b3, B2a4
	sg.obl.: <i>ñem</i>	B2b4, C4b2
	sg.nom./obl.: <i>ñem</i>	1250b2
<i>ñem klawissu</i>	‘glorious’	
	sg.nom.: <i>ñem klavisu</i>	C1b3
	<i>ñem klavissu</i>	C1b1, b2

<i>ñkek</i>	‘just now’	D2a3
<i>ñyās</i>	‘desire’	
	sg.perl.: <i>ñāssa</i>	E1b5, b5
<i>takarṣke</i>	‘faithful’	
	m.sg.nom.: <i>takarṣke</i>	D1b5
<i>tane</i>	‘here’	
	<i>tane</i>	A1b4, b4, C1b5, D1a1, a2, D2a4
	<i>tne</i>	C1a5
<i>taśala</i>	‘?’	1126a3
<i>tā-</i>	‘to put, set’	
	prs.part.mid.: <i>tasemane</i>	A1a1
<i>tāk-</i>	‘to be’	
	2.sg.subj.act.: <i>tākat</i>	D2a4, 2995b1
	3.sg.subj.act.: <i>tākam</i>	D2a5
	3.sg./pl.subj.act.: <i>tākam</i>	1652.2b3
	1.sg.opt.act.: <i>tākoym</i>	2995a3, 3128a1
	1.sg.pt.act.: <i>takāwa</i>	D2b5
	3.sg.pt.act.: <i>tāka</i>	A1a1, a2, a2, D2a5, 1513b1
	<i>takāne</i>	1250b3
<i>tāp-</i>	‘proclaim’	
	2.sg.impr. act.: <i>pāccapa</i>	A1b4
<i>tārs-</i>	‘to revile (?)’	
	prs.part.mid.: <i>tarsāskemane</i>	D1b1
<i>tām-</i>	‘to be born’	
	3.sg.opt.mid.: <i>cmītār</i>	A2a3
	abstr.II: <i>cmelñe</i>	1652.2a1
	3.sg.pt.mid.: <i>temtsate</i>	B2a4, 1513a5
	(K.) ‘to beget’	
	pt.part.m.sg.nom.: <i>tetanmāṣṣu</i>	B2a2
<i>tārk-</i>	‘to dismiss, emit’	
	3.sg.opt.act.: <i>tarkoy</i>	C3a3
	1.sg.pt.act.: <i>cirkāwame</i>	A2a1
	3.sg.pt.act.: <i>cirkāne</i>	D2b1, 3035a1
<i>tāl-</i>	(K.) ‘to carry’	
	absol.: <i>ceccalormem</i>	D1b2
<i>tinār</i>	‘denarius’	

	sg.perl.: <i>tinārṛsa</i>	E1b5
	pl.obl.: <i>tinārānta</i>	E1b3*
	<i>tinārnta</i>	B2a3
	pl.perl.: <i>tinārntasa</i>	E1b2
<i>tumem</i>	‘thereupon’	A1a4, b1,b3, b5, C1b4, D1b2, b4, D2a5, E1a1, F1a1, 409a3, b3, b5, 1126b3, 1250a3
<i>tusa</i>	‘thus, thereby’	B2b1
<i>tusāksa</i>	‘thus’	C3b2, F1a3, 1167a5
<i>teki</i>	‘disease, illness’	
	sg.loc.: <i>tekine</i>	A1a3
<i>teri</i>	‘way, manner’	
	sg.nom.: <i>teri</i>	E1a4
<i>taisa</i>	‘thus, so’	B2a5, 1250a2, 1513a4, 1652.2b3
<i>tot</i>	‘so much’	D1b1, b4, E1b4, 1126b1
<i>totka</i>	‘few, little’	D1b2
<i>tmane</i>	‘ten thousand’	C3b1, E1b3
<i>trānk-</i>	‘to lament’	
	3.sg.pt.act.: <i>trāñcāneś</i>	D1b5
<i>trānko</i>	‘sin’	
	sg.obl.: <i>trānko</i>	D1a5
<i>trenk-</i>	‘to cling’	
	abstr.II perl.: <i>trenkālñesa</i>	1167a4
	pt.part.f.sg.nom.: <i>tetrenkusa</i>	1245b2
<i>tremi</i>	‘anger’	
	pl.loc.: <i>tremeṇne</i>	D1b1
<i>trai</i>	‘three’	
	f.: <i>tarya</i>	C2a5, 1513b5
<i>twe</i>	‘you’ (personal pron.)	
	sg.nom.: <i>twe</i>	A1b3, C4a4*, a5
	sg.perl.: <i>cisa</i>	D1b3
	pl.nom.: <i>yes</i>	F1a3, b4
	pl.nom./obl.: <i>yes</i>	F1b5
<i>drṣṭānt</i>	‘example, paragon’ sg.nom.: <i>drṣṭānt</i>	C3b3
<i>dhanike</i>	‘Dhanika’	

	obl.: <i>dhanikem</i>	C1a5
	gen.: <i>dhanikentse</i>	C1b2
<i>nano</i>	‘again’	D1a1, 1250a5
<i>nāki</i>	‘error, fault’	
	pl.obl.: <i>nakanma</i>	D2a2
<i>nāsk-</i>	‘to spin’	
	absol.: <i>nanāskarmem</i>	A1b2
<i>nāk-</i>	‘to disappear’	
	abstr.II: <i>nkelñe</i>	D2b1
<i>nete</i>	‘power’	
	sg.nom./obl.: <i>nete</i>	F1a1
<i>nemce</i>	‘certainly’	3128a1*
<i>nemceksa</i>	‘certainly’	1126a3
<i>nervām</i>	‘Nirvāṇa’	
	loc.: <i>nervāmne</i>	2998b2, 3091b1
<i>nes-</i>	‘to be’	
	1.sg.prs.act.: <i>nesau</i>	1611a2
	2.sg.prs.act.: <i>nes</i>	1250a4
	3.sg.prs.act.: <i>nesām</i>	A1b4, b4, C1a1, C2b2, C3b4
	1.pl.prs.act.: <i>nesem</i>	D1a2
	2.pl.prs.act.: <i>neścer</i>	F1b4
	3.sg.copula: <i>ste</i>	C1a2, a5, C4a5, D1a1, a2, 1126b4
	<i>starś</i>	D2b4
	ger.I: <i>nesalle</i>	D2a1
	1.sg.impf.act.: <i>šaiym</i>	1245a3
	3.sg.impf.act.: <i>šai</i>	B2b3, D1b3, E1a1, a4, 1167a3
	<i>šey</i>	409a1
	3.pl.impf.act.: <i>šeyemne</i>	1513a4
	Inf.: <i>nessi</i>	D1b5
<i>nai</i>	‘indeed’	D1b1, 3208b1
<i>no</i>	‘but’	A1b1, B1b1, b3, B2b2, C2a3, D1a5, b5, D2b5, F1a3, b3, F2a4, 1167b5, 2998a1*, 3091a2
<i>naunto*</i>	‘street’	
	pl.perl.: <i>nauntaintsa</i>	A1b4

<i>naumiye</i>	‘jewel’	
	sg.nom./obl.: <i>naumiye</i>	A1a1-2
<i>naus</i>	‘earlier’	1513b4
<i>nautsāske</i>	‘thread’	
	sg.obl.: <i>nautsāske</i>	A1b2
<i>nrai</i>	‘hell’	
	sg.loc.: <i>nraine</i>	D2a2, a3
<i>nraišše</i>	‘prtnng to hell’	
	pl.f.obl.: <i>nraiššana</i>	D2a3
<i>pañāktāññe</i>	‘prtnng to the Buddha’	
	m.sg.obl.: <i>pañāktāññe</i>	F1b5
<i>pañākte</i>	‘Buddha’	
	sg.nom.: <i>pañākte</i>	409b5*, 1167b5
	sg.obl.: <i>pañākte</i>	B2b3, E1a5*, 409b2, b4 1167b1, 1250b3*
	sg.gen.: <i>pañāktentse</i>	2998b3
<i>patāk</i>	‘division of a verse’	
	sg.obl.: <i>patāk</i>	1250b4
<i>patriweca</i>	‘?’	A2a5
<i>parki</i>	‘retribution (?)’	
	sg.obl.: <i>parki</i>	D2a3
<i>parccaukke</i>	‘astray (?)’	
	sg.nom.: <i>parccaukke</i>	D2b5
<i>palskalñešše</i>	‘prtnng to thought’	
	sg.obl.: <i>palskalñešše</i>	409a3
<i>palsko</i>	‘mind’	
	sg.nom.: <i>palsko</i>	D1a1
	sg.gen.: <i>pālkontse</i>	409a1
	sg.loc.: <i>palskone</i>	1250b3
	pl.obl.: <i>pālskonta</i>	D2b1
<i>pāke</i>	‘retribution’	
	sg.obl.: <i>pāke</i>	A2a1*
<i>pākri</i>	‘obvious’	A1a2
<i>pācer</i>	‘father’	
	sg.nom.: <i>pācer</i>	A1a3
	sg.obl.: <i>pātār</i>	B1b2
	sg.all.: <i>pātārs</i>	D1b5

<i>pāsk-</i>	‘to protect’	
	2.pl.impr.mid.: <i>pāṣṣatāñ</i>	F1a3
<i>pāk-</i>	‘to cook, ripen’	
	pt.part.f.sg.nom./obl.: <i>pepekwa</i>	409b3
	(K.) ‘to let cook (?)’	
	m.sg.obl.: <i>pepakṣoṣ</i>	B2b4
<i>pāk-</i>	‘to intend’	
	3.sg.impf.mid.: <i>pāknāṣṣītār</i>	F1b3
	1.sg.pt.mid.: <i>pkāmai</i>	E1b1
<i>pārk-</i>	‘to ask’	
	3.pl.prs.act.: <i>prekseṃne</i>	D1b3
<i>pārñāññe</i>	‘external’	
	m.sg.gen.: <i>pārñāññepi</i>	E1a3
<i>pāl-</i>	‘to praise’	
	3.sg.pt.mid.: <i>palāte</i>	D1b3, b4
<i>pālk-</i>	‘to see’	
	absol.: <i>pālkormeṃ</i>	A1b5, D1a1, 1126b4
<i>pālkamo</i>	‘luminous’	
	m.sg.obl.: <i>pālkamoṃ</i>	A1b2
<i>pālsk-</i>	‘to think’	
	3.sg.prs.act.: <i>pālskanam</i>	E1b4
	prs.part.: <i>pālskanamane</i>	D2b1
	3.sg./pl.subj.act.: <i>plāskam</i>	C3a5
<i>pāst</i>	‘away’	
	<i>pāst</i>	A1a4, D2a5, 3091b1
<i>pikwalaññe</i>	‘having [so-many] years’	
	m.sg.nom.: <i>pikwalaññe</i>	1513b1
<i>piṭak</i>	‘collection of Buddhist works’	
	pl.nom./obl.: <i>piṭakānta</i>	1513b5
<i>piṇḍipāl</i>	‘a kind of missile weapon’	
	sg.perl.: <i>piṇḍipāltsa</i>	B2b5
<i>pīto</i>	‘price, cost’	
	sg.nom.: <i>pīto</i>	A1b3
	sg.obl.: <i>pito</i>	A1b5
	sg.perl.: <i>pītoṣa</i>	A1b3
	<i>pītoṣa</i>	A1b3
<i>pintwāt</i>	‘alms’	

	sg.nom.: <i>pintwāt</i>	D1a1
<i>piś</i>	‘five’	1250a3
<i>puwar</i>	‘fire’	
	pl.perl.: <i>pwārasa</i>	D2a3
<i>perne</i>	‘stage, glory’	
	sg.obl.: <i>perne</i>	F1b5
	<i>pernem</i>	C2a4
<i>perne_u</i>	‘glorious’	
	m.sg.nom.: <i>perne_u</i>	B1b5
	f.sg.obl.: <i>pernauntsai</i>	A1b1
<i>pelaikne</i>	‘law’	
	sg.obl.: <i>pelaikne</i>	C1b2*, C2b3
	sg.nom./obl.: <i>pelaikne</i>	1250b4
	sg.perl.: <i>pelaiknesa</i>	D1b5
	sg.loc.: <i>pelaiknene</i>	C3a2, 1126a3
<i>pelkiñ</i>	‘for the sake of’	E1b5
<i>pets</i>	‘husband’	
	sg.gen.: <i>petsantse</i>	A1b3*
<i>paiyye</i>	‘foot’	
	du.all.: <i>paineś</i>	D1a5
	du.loc.: <i>painene</i>	D1b4, D2b3
	pl.perl.: <i>paintsa</i>	D2a4, a5
<i>po</i>	‘all’	C1a2, C2a5, C3a2*, a4, D1a2, b5, D2b2, E1b5, 409b4, b5
<i>potalake</i>	‘Potalaka’	
	nom.: <i>potalake</i>	B1b3
<i>poyśi</i>	‘the all-knowing’	
	sg.nom.: <i>poyśi</i>	409b2
	<i>poyśī</i>	3128a1
<i>poyśiññe</i>	‘prtnng to the Buddha’	
	sg.obl.: <i>poyśimñe</i>	C2a1
	sg.nom./obl.: <i>poyśimñe</i>	409a5
<i>postām</i>	‘afterwards’	A1a5
<i>pyāpyo</i>	‘flower’	
	pl.obl.: <i>pyapyaim</i>	E1a2
<i>pratim</i>	‘decision’	
	pl.obl.: <i>pratinta</i>	C4b1

<i>pradyote</i>	‘Pradyota’ nom.: <i>pradyote</i> obl.: <i>pradyotem</i>	D1b3, D2b1, b2, b2 D2a1
<i>prānk-</i>	‘to restrain oneself’ 3.pl.prs.mid.: <i>prānkenrā</i>	1126b3
<i>prutk-</i>	(K.) ‘to fill up’ pt.part.m.sg.nom.: <i>peprutku</i>	A1b3
<i>preke</i>	‘time’ sg.obl.: <i>preke</i>	A1a5, b1
<i>prešciya/prešciyo</i>	‘time’ sg.loc.: <i>prešciyaine</i> <i>prešciyaine</i> <i>prešyaine</i>	A1a3, C2b5 A2a2, E1a1 A1b1, B1b5, F2a4
<i>proskiye/prosko</i>	‘fear’ sg.perl.: <i>proskaisa</i> sg.loc.: <i>proskaine</i>	409a1 D2b3
<i>plānt-</i>	‘to rejoice’ prs.part.: <i>plontomane</i>	A1b2
<i>plānk-</i>	(K.) ‘to sale’ 2.sg.impr.act.: <i>peplyanke</i>	A1b3, b4
<i>ploriyo*</i>	‘a kind of musical wind-instrument’ pl.obl.: <i>ploryam</i>	1250a3
<i>plu-</i>	‘to fly’ 3.sg.pt.act.: <i>plyewsa</i>	C2a3
<i>bimbasāre</i>	‘Bimbasāra’ nom.: <i>bimbasāre</i>	A1a4
<i>bodhisatve</i>	‘Bodhisattva’ sg.nom.: <i>bodhisatve</i>	F1a2, a2, a3, b3
<i>brāhmaṇe</i>	‘Brāhmaṇa’ sg.nom.: <i>brāhmaṇe</i> sg.gen.: <i>brāhmaṇentse</i>	A1b1, b4, b5, C4a2, 2981.7b2 A1b1, b3
<i>mañiye</i>	‘servant’ sg.nom.: <i>mañiye</i>	E1a1
<i>manarko*</i>	‘bank (of a river)’ sg.perl.: <i>manarkaisa</i>	F1a2
<i>mant</i>	‘thus, so’ <i>mant</i> <i>maṃnt</i>	B2a4, b3, C3a1, a5 E1b2
<i>mante</i>	‘upwards’	1250a1

<i>mā</i>	‘not’	A1a3, b4, b4, C1a5, a5, C3a3, D1a3, b1, b5, D2a1, a3, a3, a4, F1b4, b4, 409a4, 1126b3, 1245a2, 1250b1, 1513b5, 1652. 2b2, 2995a2, a3, b3, 3128b2, 3208a2
<i>māka</i>	‘many, much’	
	<i>māka</i>	A1a4, C2a5, D1b3, D2a2, 3053b1
	<i>makā</i>	D1b5 (<i>makā yakne</i>)
<i>mānk-</i>	‘to be inferior’	
	1.sg.pt.act.: <i>mānkāwa</i>	D2b2
<i>mākte</i>	‘as, how’	A1a1, b1, B2a1, C1a1, C2b2, C3a5, b4, 3110a3
<i>māsk-</i>	‘to (ex)change’	
	inf.: <i>maskāssi</i>	C3a5
<i>māsk-</i>	‘to be’	
	3.sg.prs.mid.: <i>māsketār</i>	409a5
	3.pl.prs.mid.: <i>māskentār</i>	1513b3
	3.sg.impf.mid.: <i>māskūtār</i>	A1b1, B1b1
	ger.I: <i>māskelye</i>	C2b1*
<i>mit-</i>	‘to go’	
	3.pl.pt.act.: <i>maitar</i>	A1a5
<i>meñe</i>	‘month’	
	pl.gen.: <i>meñams</i>	1513a3
<i>maiyyo/maiyya</i>	‘power’	
	sg.obl.: <i>maiyya</i>	D1b3, b4
<i>maut- (?)</i>	‘to dedicate (?)’	
	3.sg.pt.act.: <i>mautāne</i>	E1a2
<i>maudgalyāyane</i>	‘Maudgalyāyana’	
	nom.: <i>maudgalyāyane</i>	1167b1
<i>mcuške</i>	‘prince’	
	sg.nom.: <i>mcuške</i>	B2b5
	sg.nom.: <i>māmcuške</i>	A1a3
<i>yaka</i>	‘still, nevertheless’	1513a2
<i>yakne</i>	‘way, manner’	
	sg.obl.: <i>yakne</i>	D1a1, 409a4*

	sg.obl.: <i>ykne</i>	D1b5 (<i>makā ykne</i>), D2a1 (<i>śtwarā ykne</i>)
	sg.perl.: <i>yaknesa</i> <i>yāknesa</i>	C3a1, a5, 3052a1* A2a3, 1250a3
<i>yakwe</i>	‘horse’	
	pl.obl.: <i>yakwempa</i>	409b1
<i>yarm</i>	‘measure’	
	sg.obl.: <i>yarm</i>	C3a3
	sg.loc.: <i>yärmne</i>	1250b4
<i>yaltse</i>	‘thousand’	
	sg.: <i>yaltse</i>	A1b5
	pl.perl.: <i>yältsenmasa</i>	A1a5
<i>yasar*</i>	‘blood’	
	sg.nom./obl.: <i>yasar</i>	C4b3
<i>yāt-</i>	‘to be (cap)able’	
	abstr.II: <i>yātalñe</i>	A2a3*
	3.sg.pt.act.: <i>yāta</i>	A1a3
	3.pl.pt.mid.: <i>yātante</i>	1250a2
<i>yām-</i>	‘to do’	
	3.pl.impf.act.: <i>yamaşşiyemne</i>	B2b2
	1.sg.pt.act.: <i>yamaşşawa</i>	D2b5
	3.sg.pt.mid.: <i>yamaşşate</i>	A1a4
	1.sg.subj.mid.: <i>yāmmar</i>	D2a3
	inf.: <i>yāmtsi</i>	A1b5, F1b3
	absol.: <i>yāmormem</i>	A1a1, C2b1, 409a2
<i>yāmor</i>	‘deed’	
	sg.nom./obl.: <i>yāmor</i>	C4a3
	sg.gen.: <i>yāmornitse</i>	A2a1, C1a4
	sg.perl.: <i>yāmorsa</i>	F2b2
<i>yāsk-</i>	‘to beg’	
	3.sg.pt.mid.: <i>yaşşāte</i>	B2a1
<i>yānm-</i>	‘to achieve’	
	3.pl.subj.mid.: <i>yānmāntrā</i>	409b5
<i>yāp-</i>	‘to enter, set’	
	ger.I: <i>yānmaşle</i>	D1a3
	absol.: <i>yaipormem</i>	D2a5
<i>yārpontaşşe</i>	‘prtng to merit’	

	sg.obl.: <i>yārpontaṣṣe</i>	A1a2
<i>yu-</i>	‘to ripen’	
	prs.part.: <i>yumāne</i>	A1a3
<i>yus</i>	‘soup’	
	sg.obl.: <i>yus</i>	B2b4
<i>yetwe</i>	‘decoration’	
	pl.obl.: <i>yetwem</i>	F2b3
<i>yenme*</i>	‘[city-]gate’	
	sg.loc.: <i>yenmene</i>	E1a3
<i>yār-</i>	(K.) ‘to bathe’	
	absol.: <i>yairormem</i>	A1b2
<i>yolo</i>	‘bad, evil’	
	m.sg.nom.: <i>yolo</i>	F1a4
<i>yolme</i>	‘pond, pool’	
	sg.abl.: <i>yolmemem</i>	A1a1
<i>yñaktem</i>	‘among gods’	
	<i>yñaktem</i>	1250b2
	<i>iñaktem</i>	1250a4
<i>ytārye</i>	‘road, way’	
	sg.perl.: <i>ytārisa</i>	A1a5
<i>yparwe</i>	‘first’	1513a4
<i>ylaiñākte</i>	‘Indra’	
	sg.gen.: <i>ylaiñāktentse</i>	3083a1
<i>yselmeṣṣe</i>	‘prtng to sexual pleasure’	
	f.pl.obl.: <i>yselmeṣṣana</i>	B1b4
<i>ysāṣṣe</i>	‘golden’	
	pl.obl.: <i>ysāṣṣana</i>	B2a3, E1b2, b3
<i>ysape</i>	‘near by’	D1b3
<i>ysomo</i>	‘completely’	C1a2
<i>ra</i>	‘also, like’	D1a5, a5, D2a4
<i>raktsi</i>	‘covering, mat’	
	pl.obl.: <i>rāktsanma</i>	B2b1
<i>raddhi</i>	‘magic’	
	sg.obl.: <i>raddhi</i>	1167a5
<i>rano</i>	‘also’	D2a2, 1245a2
<i>ramt</i>	‘like, as’ <i>ramt</i>	2995b2
	<i>ram</i>	C2a3, D1b5

<i>rāmer</i>	‘quickly’	1513b4
<i>rājagri*</i>	‘Rājagrha’	
	all.: <i>rājagriś</i>	B1b3
<i>rāk-</i>	(K.) ‘to extend (over)’	
	3.pl.impf.act.: <i>rākṣiyemne</i>	B2b1
<i>rānk-</i>	‘to ascend’	
	absol.: <i>rānkormem</i>	A1a2
<i>rām- (?)</i>	‘to be content with (?)’	
	prs.part. <i>rmemane</i>	D2b4* (<i>rmermane</i>)
<i>rāskare</i>	‘roughly’	D1a4
<i>riye</i>	‘city’	
	sg.nom.: <i>riye</i>	A1b4, B1b3
	sg.obl.: <i>rī</i>	C1b5
	sg.all.: <i>riś</i>	B2a1, 1167b2
	sg.loc.: <i>rīne</i>	A1b1
	<i>rīne</i>	B1b3, F2a4
<i>reki</i>	‘word’	
	sg.obl.: <i>reki</i>	A2a1
	pl.perl.: <i>rekaunasa</i>	D1b1
<i>retke</i>	‘army’	
	sg.com.: <i>retkempa</i>	D2a1
<i>rai</i>	strengthening particle	D1a1
<i>rohiṇi</i>	‘the constellation Taurus’	
	obl.: <i>rohiṇim</i>	2995b2* (<i>hiṇ</i>)
<i>lakle</i>	‘pain’	
	sg.obl.: <i>lakle</i>	C4b2, D1b5
	sg.nom./obl.: <i>lakle</i>	3035a2
<i>lantuññe</i>	‘royalty’	
	sg.obl.: <i>lantuññe</i>	B1b2
<i>lalaṃṣke</i>	‘tender, soft’	
	m.sg.nom.: <i>lalaṃṣke</i>	B2a3
	m.sg.obl.: <i>lalaṃṣkem</i>	D1b4
	f.sg.obl.: <i>lalaṃṣkai</i>	D1a4
<i>lāl-</i>	‘to make an effort’	
	2.pl.prs.act.: <i>lalaścer</i>	F1b4
	pt.part.m.sg.nom.: <i>lalālu</i>	F1a2
<i>lāk-</i>	‘to see’	

	2.pl.prs.act.: <i>lkāścerne</i>	D1a2
	inf.: <i>lkātsi</i>	B2b3, D2b1
	3.sg.pt.act.: <i>lyāka</i>	B2b4, E1a3
	<i>lyakāne</i>	1513a5
	absol.: <i>lyelyakormem</i>	B2a2, 3110b1
<i>lānk-</i>	(K.) ‘to hang up’	
	2.pl.impr.act.: <i>plānsone</i>	D1a3
<i>lā-n-t-</i>	‘to go out’	
	3.sg.pt.act.: <i>lac</i>	C3a2, D1b2
	pt.part.m.pl.nom.: <i>ltuweš</i>	F1a2
	(K.) ‘to let go out’	
	2.sg.impr.mid.: <i>plyatsarñ</i>	1250b5
<i>lām-</i>	‘to sit’	
	3.sg.pt.act.: <i>lyama</i>	D2b3
	pt.part.m.pl.nom.: <i>lmoš</i>	D1a2
<i>lu-</i>	‘to send’ 1.sg.pt.act.: <i>lywāwa</i>	F2b2
<i>lem</i>	‘monk’s cell’	
	sg.loc.: <i>lemne</i>	D2a5
<i>lyakwaññe</i>	‘brilliant’	
	m.sg.obl.: <i>lyakwaññe</i>	A1b2* (<i>lyakwañ</i>)
<i>vastraparikšake*</i>	‘examiner of cloth’	
	pl.obl.: <i>vastraparikšakem</i>	A1b3
<i>višvakarme*</i>	‘Višvakarman’	
	all.: <i>višvakarmemś</i>	1167b4
<i>veṇuvañ*</i>	‘Veṇuvana’	
	obl.: <i>veṇuvañ</i>	B1b1
	loc.: <i>veṇuvañne</i>	B2b3
<i>vairuḍiṣṣe*</i>	‘prtng to Lapis lazuli’	
	f.pl.nom./obl.: <i>vairuḍiṣṣana</i>	1167b5
<i>vaiśāliṣṣe*</i>	‘prtng to Vaiśālī’	
	m.sg.nom.: <i>vaiśālyiṣṣe</i>	C1a2*
	m.pl.nom.: <i>vaiśāliṣṣi</i>	C1b4
<i>wakūtstse</i>	‘distinguished, excellent’	
	sg.gen.: <i>wakicepi</i>	A1b2
<i>wat</i>	‘or’	1126a3, 1245a1, 1513a3, 2995a3
<i>wapāntsa</i>	‘weaver’	

<i>warkṣāl</i>	sg.gen.: <i>wapāṃntsantse</i>	A1b2
	‘power’	
	sg.nom./obl.: <i>warkṣāl</i>	F1a1
<i>walo</i>	sg.perl.: <i>warkṣāltsa</i>	B2b5
	‘king’	
	sg.nom.: <i>walo</i>	A1a4, B2b4, D1a1, a2, b1
	sg.obl.: <i>lāṃnt</i>	B1b2, B2b5
	<i>lāntä</i>	D2b2
	sg.gen.: <i>lānte</i>	D1a3, a5, D2b1, 1250b1
	<i>lānti</i>	D1b4
	sg.all.: <i>lāntās</i>	1245b4
	sg.abl.: <i>lantameṃ</i>	B2a1
<i>walke</i>	pl.obl.: <i>lāntām</i>	C2a2
	‘long [of time]’	1513b5
<i>waṣamo</i>	‘friend’	
	pl.gen.: <i>wāṣmoṃts</i>	D2a4
<i>waste</i>	‘refuge’	
	sg.voc.: <i>wāsta</i>	1250b5
<i>wastsī</i>	‘clothes’	
	pl.obl.: <i>wāssanma</i>	D1a3, b2
<i>wāp-</i>	‘to weave’	
	absol.: <i>wawāpameṃ</i>	A1b2
<i>wātk-</i>	(K.) ‘to command’	
	3.sg.pt.act.: <i>yātka</i>	A1b5
	<i>yātkane</i>	B2a3, 3110a2*
<i>wāntare</i>	‘thing, affair’	
	sg.loc.: <i>wāntarene</i>	C1a5
	pl.nom.: <i>wāntarwa</i>	409b5
<i>wārp-</i>	‘to enjoy, receive’	
	3.pl.prs.mid.: <i>wārpnantrā</i>	C1a4
	pt.part.m.sg.obl.: <i>wārpoṣ</i>	1167b1
<i>wās-</i>	‘to dwell’	
	1.sg.subj.act.: <i>wṣiyau</i>	D2a5
<i>wik-</i>	(K.) ‘to drive away’	
	3.sg.prs.act.: <i>wikāṣṣām</i>	1126a3
<i>we-</i>	‘to speak’	
	3.sg.prs.act.: <i>weṣṣām</i>	A1b5, D1a2, b1, D2b3, b4,

		F1b3, 2981.7b2
	<i>weṣṣamneś</i>	A1b3, D2a4
	3.pl.prs.act.: <i>weskeṃ</i>	D1a2, a5
	3.sg.pt.act.: <i>weña</i>	D1b5, F2a5, 409a4, b4, 1245b4, 1513b2
	<i>weñāne</i>	D2b5*
	<i>weñāneś</i>	409b3
	3.pl.pt.act.: <i>weñāreneś</i>	1250a4
<i>weta*</i>	‘battle’	
	sg.obl.: <i>weta</i>	D2a2
	sg.loc.: <i>wetane</i>	D2b2
<i>wer*</i>	‘hatred’	
	sg.obl.: <i>wer</i>	D2a2
<i>were</i>	‘smell’	
	sg.com.: <i>werempa</i>	A1b2
<i>werpiṣkatstse</i>	‘gardener’	
	sg.nom.: <i>werpiṣkatstse</i>	E1a1
	sg.gen.: <i>werpiṣkacepi</i>	E1a1
<i>wertsiya/wertsiyo</i>	‘assembly’	
	sg.nom.: <i>wertsīyo</i>	2995b2
	sg.obl.: <i>wertsīyai</i>	C2a5
<i>weṣeñña</i>	‘voice’	
	sg.nom.: <i>weṣeṇṇa</i>	3052b1
<i>waipecce</i>	‘possession(s)’	
	sg.perl.: <i>waipeccesa</i>	A1a5
	pl.obl.: <i>waipeccenta</i>	1250b1
<i>waipecceṣṣe</i>	‘prtng to possessions’	
	sg.obl.: <i>waipecceṣṣe</i>	A1a4
<i>waipeccetstse*</i>	‘having possessions’	
	sg.nom.: <i>waipeccetstse</i>	B2a4
<i>waipṭār</i>	‘separately’	A1a5
<i>waipṭesa</i>	‘separately’	C1a5
<i>wratṭsai</i>	‘against’	E1a3, D2b3
<i>wraṣṣe*</i>	‘prtng to water’	
	f.sg.obl.: <i>wraṣṣai</i>	A1a5
<i>śak</i>	‘ten’	C3b1, E1b3
<i>śakāto*</i>	‘stick’	

	pl.perl.: <i>śakātantsa</i>	D1a2, a4
<i>śakkeññe</i>	‘belonging to the Śākya family’	
	m.sg.nom.: <i>śakkeññe</i>	1126a2
<i>śana</i>	‘wife’	
	sg.nom.: <i>śana</i>	A1b2, C1a3
	sg.obl.: <i>śano</i>	A1b1, B1b4
<i>śamaśke</i>	‘boy’	
	sg.nom.: <i>śamaśke</i>	B2a3
	sg.obl.: <i>śamaśkeṃ</i>	B2a2
<i>śarāk*</i>	‘undergarment’	
	sg.obl.: <i>śarāk</i>	D1a4
<i>śariye</i>	‘upper-, over’	
	sg.obl.: <i>śariye</i>	A1a2
	sg.obl.: <i>śarīye</i>	B2b4*
<i>śale</i>	‘likewise, with’	
	<i>śale</i>	C4a4, 1167a5
	<i>śle</i>	C2a2, 1167b4
<i>śāmñe</i>	‘human’	
	m.sg.nom.: <i>śāmñe</i>	A1a2
<i>śāriputre</i>	‘Śāriputra’	
	nom.: <i>śāriputre</i>	1513a1
	all.: <i>śāriputreṃś</i>	1513b2
<i>śāstār</i>	‘(sacred) book’	
	sg.loc.: <i>śāstārne</i>	C1a1, C2b2, C3b4
<i>śānm-</i>	‘to bind’	
	3.pl.pt.act.: <i>śānmyarne</i>	D1a4
<i>śaiṣṣe</i>	‘world, people’	
	sg.obl.: <i>śaiṣṣe</i>	2995a2
<i>śaumo</i>	‘person, man’	
	sg.gen.: <i>śommontse</i>	1250b2
	pl.obl.: <i>śāmna</i>	1167a1
<i>śaulaṣṣe*</i>	‘prtng to life’	
	f.sg.obl.: <i>śaulaṣṣai</i>	D2b3
<i>śaulatse*</i>	‘living’ sg.nom.: <i>śaulatse</i>	D1b2
<i>śke</i>	‘close by’	1513b2
<i>ścire</i>	‘harsh, hard’	
	m.sg.obl.: <i>ścireṃ</i>	A2a1

	f.pl.obl.: <i>ścirona</i>	D1b1
<i>śtwer</i>	‘four’	
	f. <i>śtwarā</i>	D2a1 (<i>śtwarā ykne</i>)
<i>śtwarātse</i>	‘fourfold’	
	f.sg.obl.: <i>śtwarātsai</i>	409b2
<i>śpālmę</i>	‘excellent’	A1a4, b2,b3, E1b4
<i>śrāvasti</i>	‘Śrāvastī’	
	nom./obl.: <i>śrāvasti</i>	2998b1*, 3091a1*
<i>śreṣṭhi</i>	‘(chief) merchant’	
	sg.nom.: <i>śreṣṭhi</i>	C3a1
<i>śroṇakoṭivimśe</i>	‘Śroṇakoṭivimśa’	
	nom.: <i>śroṇakoṭivimśe</i>	B2a4
<i>ślek</i>	‘likewise, with’	C1a3
<i>śwātsi</i>	‘food’ sg.obl.: <i>śwātsi</i>	B2b4
	<i>śwāssi</i>	C1b1
<i>ṣaṇ</i>	‘own’	409a3, A1a1a2, b3, D2a5, C2b1, B2a1, b3
<i>ṣanmīrśke*</i>	‘young novice’	
	pl.perl.: <i>ṣanmīrśkaṃntsa</i>	C3b3
<i>ṣamāñṇe</i>	‘monkhood’	
	sg.gen.: <i>ṣamāñṇentse</i>	D1a1
<i>ṣamāne</i>	‘monk’	
	sg.nom.: <i>ṣamāne</i>	D1b2, 1126a2, b1
	pl.gen.: <i>ṣamāneṃts</i>	3053b1
<i>ṣar</i>	‘hand’	
	du.nom./obl.: <i>ṣarne</i>	2995b1
	du.obl.: <i>ṣarne</i>	3083b3*, 3110a2
<i>ṣukt</i>	‘seven’	
	<i>ṣukt</i>	1652.2a1
<i>ṣe</i>	‘one’	
	f.sg.obl.: <i>sanai</i>	E1b5
<i>ṣertwe*</i>	‘instigation’	
	pl.perl.: <i>ṣertwentisa</i>	B1b2
<i>ṣesa</i>	‘together’	A1b1, C1b3
<i>ṣeske</i>	‘alone, only’	
	m.pl.nom.: <i>ṣeski</i>	1513b2
<i>ṣkas</i>	‘six’	

	<i>ṣkāss</i>	1126b1
<i>ṣpane</i>	‘sleep’	
	sg.nom.: <i>ṣpane</i>	D2b4
	sg.obl.: <i>ṣpane</i>	D2b1, b1, 3035a1
<i>ṣpā</i>	‘and’	
	<i>ṣpā</i>	A1a4
	<i>ṣp</i>	A1a3, C1a3, 1126a3
	<i>ṣapā</i>	D1a1
	<i>ṣ</i>	C3a2, C4a4, D1a3, b1, b2, D2a1, a4, E1a2, F1b4, 3091b1
<i>sakwä</i>	‘happiness’	
	sg.nom.: <i>sakwä</i>	D1b5
<i>saksartse</i>	‘be in a dream’	
	m.sg.nom.: <i>saksartse</i>	D2b1
<i>saṅkrām</i>	‘monastery’	
	sg.loc.: <i>saṅkrāmne</i>	B1b1, C2b5, D1b4
<i>saññāt</i>	‘controlled’	
	<i>saṃññāt</i>	2995a2
<i>sanuññe</i>	‘enmity’	
	sg.obl.: <i>sanuññe</i>	D2a2
<i>sabrahmacāri*</i>	‘fellow-student’	
	pl.obl.: <i>sabrahmacārinta</i>	D2a4
<i>samp</i>	dem.pron. ‘that’	
	n.sg.obl.: <i>tam</i>	A2a3
<i>sark*</i>	‘back (of the body)’	
	sg.abl.: <i>sārkameṃ</i>	D1a3
<i>saswe</i>	‘lord’	
	sg.voc.: <i>saswa</i>	D1a2, a5, D2b4, 3083a2
<i>sākre*</i>	‘blissful, happy’	
	sg.obl.: <i>sākre</i>	F2b2
<i>sāṅk</i>	‘Buddhist community’	
	sg.nom.: <i>sāṅk</i>	C3a4
	sg.com.: <i>sāṅkāmpa</i>	C1b3
	sg.loc.: <i>sāṅne</i>	C3b2
<i>sāṃtke</i>	‘medicine’	
	sg.gen.: <i>sāṃkentse</i>	B2a3

	pl.perl.: <i>saṃtkentasa</i>	A1a3
<i>sāmp-</i>	‘to take away’	
	3.pl.pt.mid.: <i>sampānteñ</i>	1513a2
<i>sāraṇe</i>	‘Sāraṇa’	
	nom.: <i>sāraṇe</i>	D1b2, D2b4
	obl.: <i>sāraṇeṃ</i>	D2a2*
<i>sāl-</i>	(K.) ‘to throw’	
	pt.part.m.sg.nom.: <i>šeṣṣalu</i>	B2b3
<i>s_asuwersśke</i>	‘little boy’	
	sg.nom.: <i>s_asuwersśke</i>	D1b5
<i>su</i>	dem.pron. (anaphoric)	
	m.sg.nom.: <i>su</i>	A1b1, B2a3, C3a1, a3, a4, C4a2, D1b4, 409a5, 1513b5, 3091a2
	<i>sū</i>	A1a2, b1, B1b4, 1126a2, 1250a3
	m.sg.obl.: <i>ce_u</i>	1250a2
	<i>cew</i>	A1b1
	<i>cau</i>	A1a4, b5, C1a5, C2b5, D1 b5, b5, D2a5, F2b2, 409a2, 1126b4
	m.sg.gen. <i>cwi</i>	A1a2, a3, a5, b3, C3b1, F1b2, 1126a5, 1611b2
	m.sg.all.: <i>cauś</i>	D1b5
	m.pl.nom.: <i>cai</i>	F1b3, 1126b3, 1513b3
	m.pl.obl.: <i>ceṃ</i>	1652.2a1
	f.sg.nom.: <i>sā_u</i>	A1b1, C2a5, F2a5, 1513a3
	f.sg.obl.: <i>tā_u</i>	A2a2, E1a3, F2a4
	<i>tāw</i>	A1a5, B1b1, b3
	f.sg.gen.: <i>tāy</i>	1245b3
	f.sg.com.: <i>tāwāmpa</i>	A1b1, B1b4
	n.sg.nom.: <i>tū</i>	C2b2, C3b4
	n.sg.obl.: <i>tu</i>	A1b3, b3, 1513a4
	n.sg.nom./obl.: <i>tuk</i>	B2a5
	n.sg.obl.: <i>tuk</i>	C2a5
	n.sg.com.: <i>tumpa</i>	A1a1
<i>subhādre</i>	‘Subhadra’	

	nom.: <i>subhādre</i>	A 1a3
	gen.: <i>subhādri</i>	A 1a4
<i>suwo</i>	‘pig’	
	sg.loc.: <i>suwane</i>	1513a1
<i>se</i>	dem.pron. ‘this’	
	m.sg.nom.: <i>se</i>	D1b3, b3, D2b4, E1b4
	m.sg.obl.: <i>ce</i>	B2b1, C2a1, E1a3
	m.sg.gen. <i>cwī</i>	A1b1, b3, A2a1, C1a3, D2a3, E1a1
	f.pl.nom./obl.: <i>toy</i>	F2b2
	n.sg.nom.: <i>te</i>	B2a4, C3a1, E1b2, a5
	n.sg.obl.: <i>te</i>	C1b1, 409b4
	n.sg.gen.: <i>tentse</i>	D2a3
<i>sekwe</i>	‘pus’	
	sg.nom./obl.: <i>sekwe</i>	C4b3*
<i>sem</i>	dem.pron. ‘this’	
	n.sg.obl.: <i>tem</i>	E1b1
<i>saim</i>	‘refuge’	
	sg.voc.: <i>saim</i>	1250b5
<i>soṃśke</i>	‘[dear] son’	
	sg.voc.: <i>soṃśka</i>	D2b4
<i>soy</i>	‘son’	
	sg.nom.: <i>soy</i>	C1a3
	sg.perl.: <i>soysa</i>	D1b4
<i>sorromp</i>	‘down’	
	<i>sorrom</i>	D1b4
<i>skai-</i>	‘to strive’	
	prs.part.: <i>skaināmane</i>	A 1a3
	ger.l.: <i>skainālle</i>	C3b2
<i>sklok</i>	‘doubt’	
	sg.obl.: <i>sklok</i>	409a1
<i>skwaṣṣe</i>	‘prtng to good fortune’	
	sg.m.obl.: <i>skwaṣṣe</i>	C2a3
<i>stānk*</i>	‘palace’	
	sg.perl.: <i>stānsa</i>	A 1a2
<i>stām-</i>	‘to stand’	
	pt.part.m.pl.nom.: <i>stmoṣ</i>	1167a1

<i>snai</i>	‘without’	A1a4, a5, C2a3, D1a5, a5, b1, b3, E1a2, b3, 2981.1a2
<i>snaitstse</i>	‘poor’	
	m.sg.nom.: <i>snaitse</i>	A1b1
<i>spaktanīke</i> *	‘servant’	
	pl.nom.: <i>spaktanīki</i>	1513b3
<i>spärk-</i>	‘to disappear’	
	abstr.II: <i>spärkālñe</i>	409b5
<i>sphariräṣṣe</i> *	‘crystalline’	
	f.pl.nom./obl.: <i>sphariräṣṣana</i>	1167b5
<i>sruk-</i>	‘to die’	
	3.sg.pt.act.: <i>sruka</i>	A1a4
	absol.: <i>srukormem</i>	A1a4
<i>tsa</i>	emphasizing particle	D2a4
<i>tsāk-</i>	‘to glow’	
	3.sg.opt.mid.: <i>tsāṣitār</i>	3052b1
<i>tsäk-</i>	‘to burn’	
	1.sg.subj.mid.: <i>tskemar</i>	D2a3
<i>tsänk-</i>	‘to (a)rise’	
	1.sg.prs.mid.: <i>tseṅkemar</i>	D2a1
	3.sg.pt.act.: <i>tsaṅka</i>	C2b1
	pt.part.f.sg.nom.: <i>tsänkause</i>	2998a2
<i>tsäm-</i>	(K.) ‘to cause to grow’	
	inf.: <i>tsamtsi</i>	F2b2
<i>tsuwai</i>	‘towards, up to’	B1b2, b2
<i>tsere-ññ-</i>	‘to deceive’	
	3.pl.prs.mid.: <i>tseremñentārñ</i>	1250a5

〔動詞表〕*

本稿で扱った『Avadāna 写本』断片には Malzahn (2010: 517-1000) で指摘されていない語形や訂正を要する語形が確認された。既にこれらについては説明済みであるが、読者の便宜を考慮し以下に列挙する。なお、断片の表示方法は先の Index と同様である。ただし、語根の語義や形態の解釈が暫定的な場合、疑問符を付している。

ār- ‘to leave, give up, abandon’

3.pl.prs.mid.: *arsentrā* D1b2

ākl- (K.) ‘to teach’

1.sg.prs.act.: *āklāskaune* D1a3

kāry- ‘to buy’

1.sg.prs.mid.: *kārñāskemarne* E1b2

3.pl.subj.mid.: *kārñāntrā* A1b3

kau- ‘to destroy, kill’

2.sg.prs.act.: *kaṣṭane* D1b1

tām- (K.) ‘to beget’

pt.part.m.sg.nom.: *tetanmāṣṣu* B2a2

tārḱ- ‘to dismiss’

1.sg.pt.act.: *cirkāwame* A2a1

3.sg.pt.act.: *cirkāne* D2a1

tārs- ‘to revile (?)’

prs.part.mid.: *tarsāskemane* D1b1

trenḱ- ‘to cling’

abstr.II: *trenḱālñesa* 1167a4

nāsk- ‘to spin’

absol.: *nanāskarmem* A1b2

pāsk- ‘to protect’

2.pl.impr.mid.: *pāṣṣatāñ* F1a3

pāk- ‘to intend’

3.sg.impf.mid.: *pāknāṣṣītār* F1b3

1.sg.pt.mid.: *pkāmai* E1b1

maut- (?) ‘to dedicate (?)’

3.sg.pt.act.: *mautāne* E1a2

yāt- ‘to be (cap)able’

3.sg.pt.act.: *yāta* A1a3

3.pl.pt.mid.: *yātante* 1250a2

yār- (K.) ‘to bathe’

absol.: *yairormem* A1b2

rāk- (K.) ‘to extend’

3.pl.impf.act.: *rākṣiyemne* B2b1

rām- ‘to be content with (?)’

prs.part.mid.: *rmemane* (?) D2b4

lā-n-t- (K.) ‘to let go out’

2.sg.impr.mid.: *plyatsarñ* 1250b5

wāp- ‘to weave’

absol.: *wawāparmem* A1b2

sāl- (K.) ‘to throw’

pt.part.m.sg.nom.: *ṣeṣṣalu* B2b3

tsānk- ‘to (a)rise’

1.sg.prs.mid.: *tseṅkemar* D2a1

tsere-ññ- ‘to deceive’

3.pl.prs.mid.: *tsereṃñentārñ* 1250a5

tsāk- ‘to glow’

3.sg.opt.mid.: *tsāsītār* 3052b1

* Malzahn による動詞リストの目的が全ての語形を列挙する事にはない点は、リストに対する説明に指摘されている通りである。



図 1: THT1165 + THT1548 recto/verso

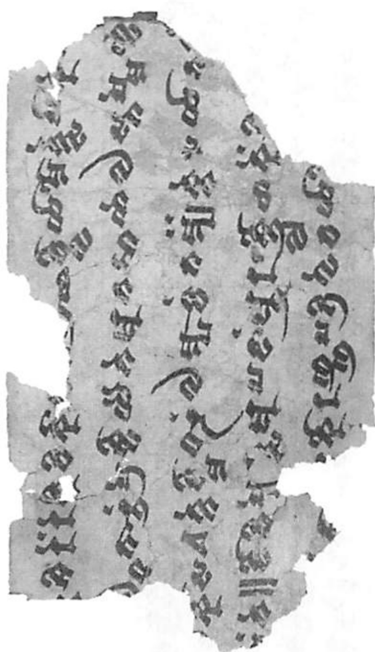
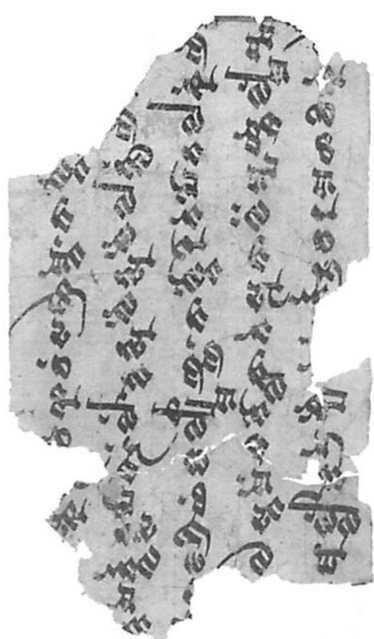


図 2: THT1166 + THT2976 recto/verso

図 3: THT1253 + THT3056 recto/verso



図 4: THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.

fig.1 + THT3054 recto/verso

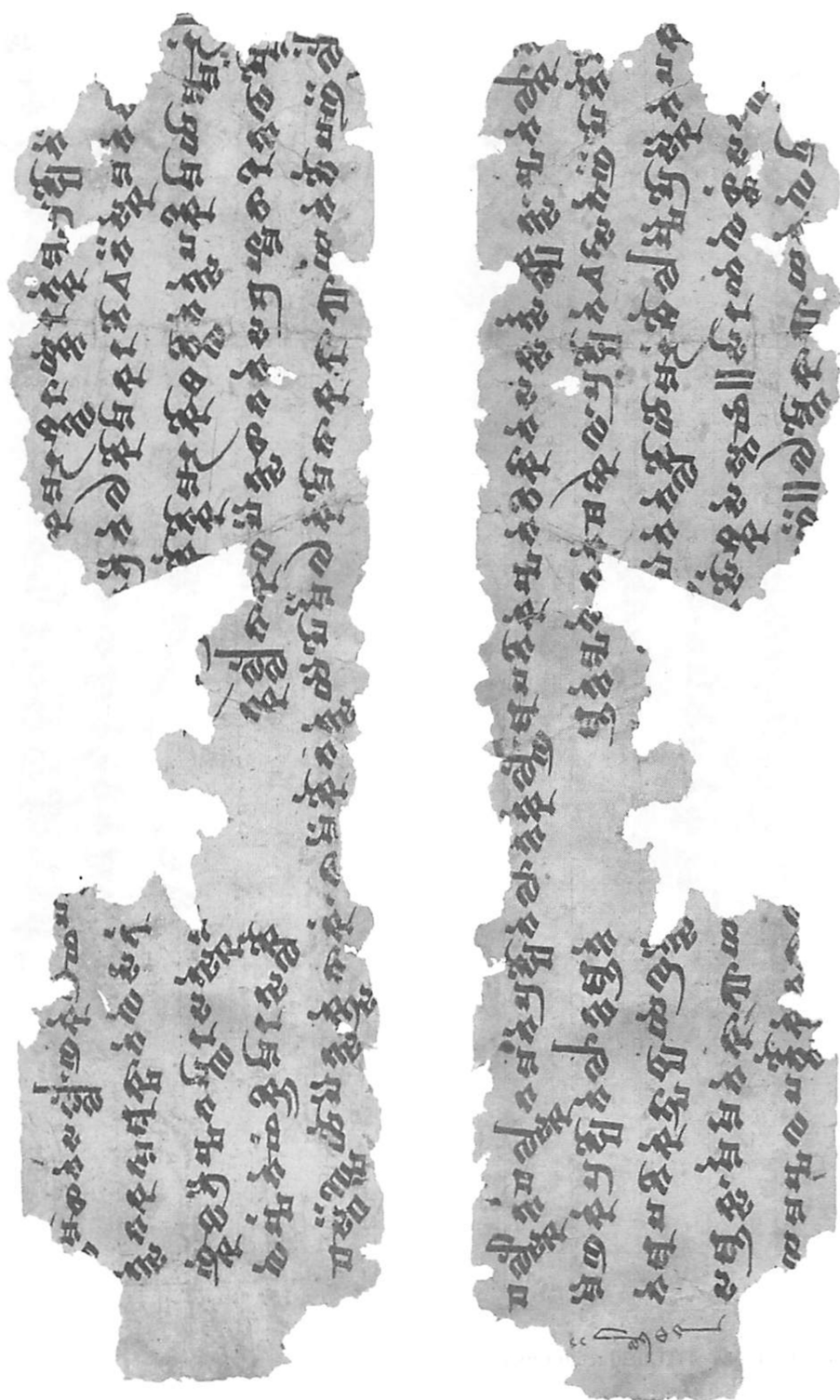


図 5: THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6

recto/verso

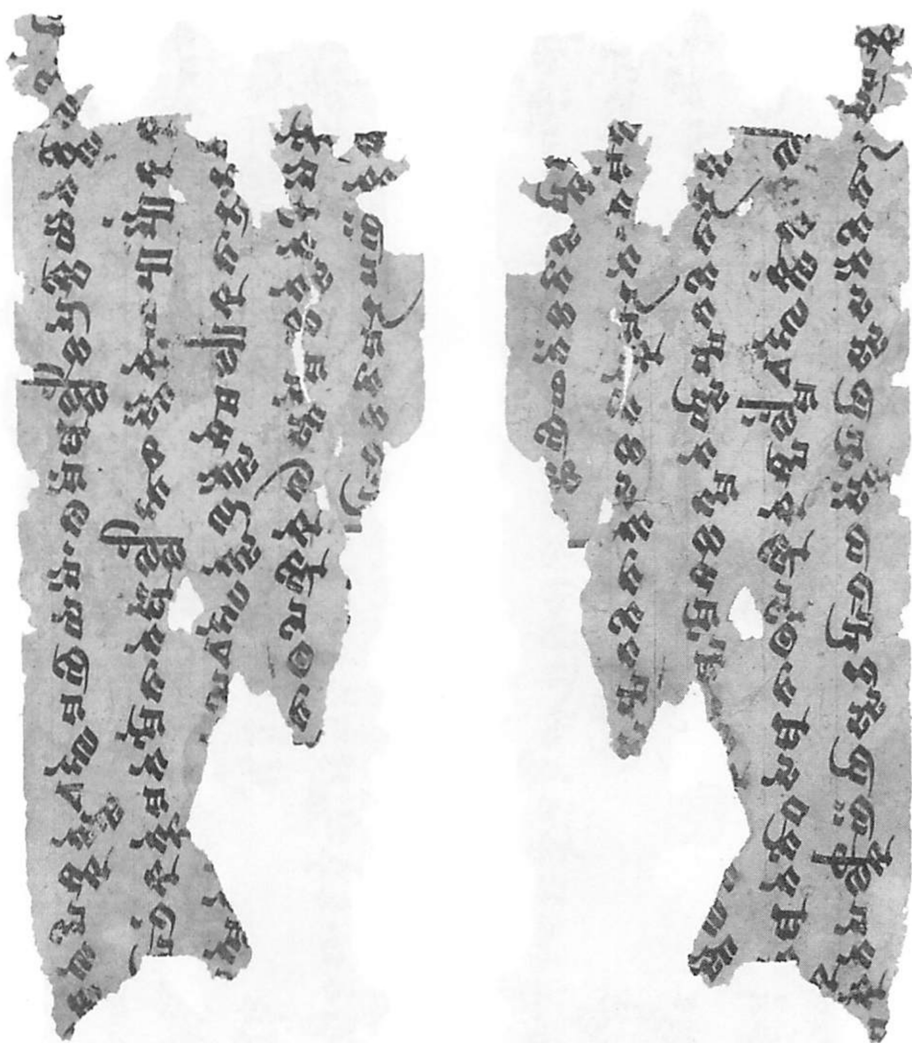


図 6: THT1168 + THT3034 recto/verso

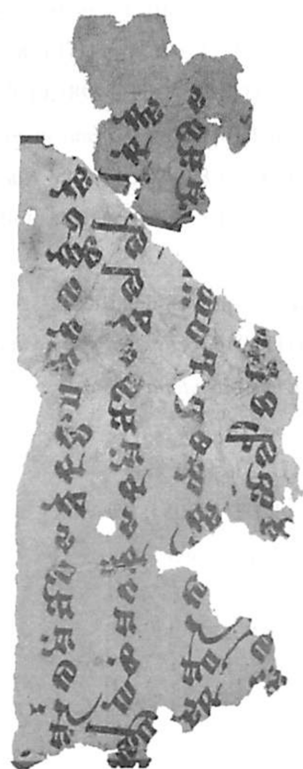


図 7: THT1554 + THT3112 recto/verso

図 8: THT2996 + THT2999 recto/verso

The “Avadāna manuscript” in Tocharian B

OGIHARA Hirotoshi

Keywords: Tocharian B, the “Avadāna manuscript”, *Jyotiṣka-avadāna*, *Sāraṇa*

Abstract

In this paper I introduce those Tocharian B fragments kept in the Berlin collection that could belong to one and the same manuscript. Except for the quotation of some verbal forms, most of them have been left unpublished. Given that these fragments give *avadānas* or *jātakas*, this manuscript will be called the “Avadāna manuscript” here. The following criteria will be used to decide which fragments should belong to this manuscript:

[1]: Paleography of the Brāhmī script

[2]: the size, the usage of horizontal rules, and the spacing between them

The main focus will be given to THT1165, THT1166, THT1249, THT1285, THT1507, THT1548, THT1680, THT1681, THT2976, THT2981 and THT3054. On the basis of my research, they can be joined to each other directly, and it is possible to reconstruct four folios of the same manuscript, namely [a] THT1165 + THT1548 and THT1166 + THT2976, [b] THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054 and THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6. The join of them enables us to identify [a] as the *Jyotiṣka-avadāna* and [b] as the *Sāraṇa* given as the 65th chapter of the *Kalpanāmaṇḍitikā* in Chinese and Sanskrit or the 89th story of the *Karmaśataka* in Tibetan. As far as I could identify, the “Avadāna manuscript” can be reconstructed as follows:

[Fragments of which content or the position in the manuscript was identified]

- THT1165 + THT1548 [folio <43>], THT1166 + THT2976 recto: *Jyotiṣka-avadāna*
- THT1166 + THT2976 verso, THT1556: *Śroṇakoṭivimśa-avadāna*
- THT1253 + THT3056: *Dhanika-avadāna*
- THT1551 [folio<187>], THT1683 [folio<190>], THT3124 (?): (?)
- THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054: *Sāraṇa*
- THT1249 + THT1681 + THT2981.frg.6 [folio <287>]: *Sāraṇa*
- THT1168 + THT3034: *Padmaḥ*
- THT1554 + THT3112: *Kacchapa-jātaka* (?)
- THT2996 + THT2999: (?)

[Unidentified]

THT409, THT1126, THT1167, THT1245, THT1250, THT1513, THT1611, THT1652.frg.2,
THT2981.frg.7, THT2995, THT2998, THT3035, THT3052, THT3053, THT3083, THT3091,
THT3110, THT3128, THT3208, THT3237

However, the style of the Tocharian B version indicates that they should be an adaptation of these stories in the Tocharian Buddhism. It is also worthy of notice that no compilation in Sanskrit of *avadānas* or *jātakas* is known which has the same stories as the “Avadāna manuscript” in Tocharian B, a fact which suggests the possibility that the “Avadāna manuscript” was compiled within Tocharian Buddhism or was based on a lost compilation in Sanskrit. The “Avadāna manuscript” could reflect how Tocharian Buddhism accepted the Buddhist literature transmitted from India.

(おぎはら・ひろとし 中国人民大学国学院)